

トレセン用務員のおっ ちゃん

魔女っ子アルト姫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本ウマ娘トレーニングセンター学園スクール、通称トレセン学園には様々な不思議がある。その内の一つ——ウマ娘でもないのにウマ娘並の身体能力を誇る用務員がいる事。

「鍛えてますからっ」

最近になって漸く初めたウマ娘でタマモクロスが来たのでその勢いで。

目次

第12話
第11話
第10話
第9話
第8話
第7話
第6話
第5話
第4話
第3話
第2話
第1話

74 67 61 55 48 42 35 29 22 15 8 1

第25話
第24話
第23話
第22話
第21話
第20話
第19話
第18話
第17話
第16話
第15話
第14話
第13話

161 155 148 139 132 125 118 111 105 99 93 86 80

第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話

260 254 245 237 230 223 216 208 200 192 185 177 169

第51話 第50話 第49話 第48話 第47話 第46話 第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話

347 340 334 326 318 313 305 299 292 286 279 273 267

第64話 第63話 第62話 第61話 第60話 第59話 第58話 第57話 第56話 第55話 第54話 第53話 第52話

431 424 417 412 405 399 393 386 379 373 365 359 353

第76話 第75話 第74話 第73話 第72話 第71話 第70話 第69話 第68話 第67話 第66話 第65話

505 499 493 487 480 474 468 462 456 450 443 437

第1話

「鍛えろ身体、腕をつ脚を……磨けよ自分、男前……!!」

まだ日も昇り切っていない朝方に一人の男が逆立ちをしながら石段を下りている姿があった。腕力だけで自分の身体を支えながらもキツい傾斜の階段を下りながら、歌を口遊んでいる。まだ肌寒い時間帯だと言うのにタンクトップ一枚に居る姿には寒気を覚えるが、当人は寒気など感じていないように動き続けている。

「うしっ……ほいほいほいっ」

一番下まで降り切ると普通に立ち直しながらも準備してあったリュックへと次々と石を詰め込んでいく。パンパンに詰まったりユック、その重さは20キロを優に超える。それを軽々と背負い直すと逆立ちで何往復をした石段へと走り出していく。

「走つれよ山を、谷を海を。鍛えよ身体っキツチリと」

独特なりズムで歌を口遊みながらも軽い足取りで走り続けていく男、キツい階段を楽々と登ったと思つたら今度は下りていきまた登っていく。それを幾度も繰り返していくと今度は大きく左右にジャンプしながら前に進んでいく。脚力のみで3メートル以上も跳躍しながら前に進んでいく姿は並の人間にはない力強さ、そして最後の仕上げ

と言わんばかりに立ち幅跳びのようにジャンプすると石段を纏めて10段を跳び越えてしまった。

「うしっ今日もいい調子、さて今日は何段にしようかな……昨日が5段だったから今日は7段かな」

これだけの事をしていても平然としている人外じみたスタミナ、次のメニューを考えていると携帯が鳴った。

「はいっもしもし」

『あつすいません起きてます?!』

「おゝ如何したの?」

『荷物の運び込み手伝って貰えませんか?!リフトが故障しちやつて……』

軽く返しながらもメニューは中断する。確かこの時間だと食材系である、そのタイミングでフォークリフトが使えないのは確かに不味い。仕込んでいるのもあるだろうがそれだけで乗り切れる程此処の食事は甘くはない。故に毎日新鮮な食材の搬入が不可欠。調理場のヘルプで入る自分としても見逃す事が出来ない。

「あらら……うんいいよ、というか手伝わないと仕込みにも影響出るでしょ、俺がやつとくから」

『本当に有難う御座います〜!!本当にヒビキさんってば頼りになりますね』

「はいはい〜」

電話を切りながらも軽く汗を拭いながらもリュックを置きながら颯爽と走り出した。そして僅かな時間で搬入口へと到着すると自分を待っていたかと言わんばかりに連絡をくれた作業員から声を掛けられる。

「すいませんこんな朝早くに!!」

「いいよいよ、どうせ何時もの日課の時間だったし」

「有難う御座います!!じゃあお願いします!!」

「はい畏まりました」

と受け答えをしつつもトラックの荷台へと軽く飛び乗るとそこにある荷物を次々と持ち上げていく。40キロはくだらない荷物を担ぎ上げて降ろしていく、本来はフォークリフトなどを用いる筈だったがその代用を人が行うという奇妙な現場が30分ほど続くとそこへフォークが参上した。

「あれっ故障してなかったの?」

「エンジン蹴つたらなんか動いた!!」

「ロシア式って奴?」

「いやなんか違うと思いますよ!?!いやでもこれで確りとした搬入が出来るう〜」

と胸を撫で下ろしているのを見つつも手伝いは終了する事になった、本来やるべき人員にバトンタッチする。

「それにしても……ヒビキさんってウマ娘でもないのにどうやったらあんな重い荷物を持てるんですか……?」

怪訝そうな瞳を向けられてもヒビキと言われた男は敬礼のような手を作りながらもスナツプを利かせながらシユツつと言いながらその秘密を語る。

「鍛えてますからっシユツ」

そんな答えになつていいのか分からないような事を大真面目な顔で答える男はトレセン学園で用務員をしており、ヒビキさんの愛称でお馴染みになっている雷電 響鬼。

用務員と言われてどんな仕事なのかと想像しにくいだろう、ウマ娘が通うトレセン学園の用務員となれば余計にそうだろう。基本的には一般的な用務員とは変わらないのだが……通っているのがウマ娘たちなのでそこに関係する仕事も加わる事になる。例えば——思わず強く踏みしめてしまったが故に蹄鉄の痕がついてしまった地面やらの修復作業なども含まれる。

「元気なのは良い事だよね」

コンクリートに見事に残っている蹄鉄の痕を見ながらもその修復作業に掛かる、こ

んな事の修復作業は日常茶判事何時もの事過ぎる事なのである。手早く済ませて一息を入れてみると――

「おいこのの修理も頼むわあ!!」

「こりやまた大物だなあ、流石は黄金の船の錨ともなるとこれだけ立派になるんだな」

ついでに頼むと休憩中に置かれたのは船舶などが停泊中に降ろされる錨であった。そんな物が如何して此処にあるのかとツツコミを入れたくなるのだが――彼女にそんな物を入れるのも野暮という物だろう。ゴールドシップ、トレセン学園が誇る奇人。どうしてこんな物を持っているのかと以前聞いたが

「おいおいこのゴルシちゃんを誰だと思ってるんだ？船がアンカー持つてるのは当然だろ」

と真顔で返された。いやまあ名前からしたらそうだろうが、お前ウマ娘だろつというツツコミは機能しない。したとしてもまともな返答は期待出来ない。

「それじゃ預かつとくよ」

「んじゃ頼むな、それはマックイーンの収穫には不可欠だからな!!」

そう返しながらセグウェイに乗って去っていく、本当に破天荒を絵に描いた娘だと笑みを零す。それで済ませられる自分は可笑しいと周囲からは言われるのだが、このトレセンでは驚く事ばかり起こるので何というか……慣れて達観してしまった。七色に発

光するトレーナーとか担当の子に甘やかされているトレーナーとか。

「おおっヒビキのおっちゃん何やつとるん、休憩中——つてその隣の奴、何……?」
「何つて……見て分からない? 錨」

「いやそうじやあれへんやろ!! なんでそれがあのかつて事を聞いとんねんウチは!!」

ズビシイツ!! という音が聞こえてきそうな程に見事なツツコミをしてくるウマ娘、タマモクロス。人呼んで白いイナズマ、そんな彼女は自分の名字が同じ! という事でちよくちよく絡んでくるようになって今では仲良くやっている。

「修理依頼つて所かな……何かこれを使って収穫作業するらしいよ」

「はっ〜ほんまに人がええなヒビキのおっちゃんは!! そないなモン断ればええのに、つちゆうか錨の修理つて用務員の仕事やないやん」

「タマちゃん、此処はトレセンだよ。無いなんてあり得ないんだよ」

「ひ、否定出来ひん……いやいやいや確りしいや自分!! 普通出来ひんのが可笑しいやろがい!!」

連続的に事実にはショックを受け、それを受け入れそうになっている自分にツツコミを入れたりと中々に忙しいタマモクロスに笑みを作る。彼女程見ていて面白くて楽しくて可愛いウマ娘もいないだろう。

「あれっそろそろお昼だな、タマちゃんも一緒に行くかい?」

「ええな!!折角だからヒビキのおっちゃん、苦勞話でも聞いてあげんで」

「そりやどうも、その前にこの錨は片づけておかなきゃ」

そう言いながら錨を担ぎ上げるヒビキ、タマモクロスは呆れたような目でそれを見る。

「相変わらずとんでもない怪力や……如何なつとるんやおっちゃん」

「んっ?鍛えてますからっシユッ」

第2話

「ヒビキさんおはよっ〜!!」

「はいおはよう、今日も元気だね」

「用務員のお兄さんおっは〜!!」

「そこはおじさんで良いんだぞ〜」

トレセンの用務員というのは忙しい。トレセンの生徒数が多いというのもあるが、ウマ娘が通う学校という特性が本場に強い為に壊れる物は多かったり修繕する箇所が尋常ではなかったりと基本的多忙——の筈なのだが……

「おはようヒビキさん、今日もいい朝だ」

「うんおはよう。昨日も生徒会で徹夜してたね、美容に悪いつて言ってるのに」

「おっとこれはくぎを刺されてしまったのか、余りの早さにヒツという声を出して吃驚してしまいそんな気持ちになってしまったよ」

「ヒビキだけに？ちよつとギャグとしては長いなあ30点」

「ウウム……私としては良いと思うのだが……」

余裕を持った態度で対応する、やって来たウマ娘がウマ娘なのでそのような体勢を

作っているとも言えなくはないがそれが一般的な用務員ならばの話。彼ならば彫脳に余裕を作り出す事など容易いのである。

「しかしいつもながら見事な御手前……貴方が直した後の芝は走り抜けて非常に気持ちいいと好評です」

「そう言われると直す甲斐があるねえ……おじさんが出来るのは皆が気持ちよく走る為のお手伝いでしかないからね、景気よく荒らしてくれて嬉しい限りだよ」

「そんな風に言えるのは貴方だけですよヒビキさん」

語り掛けている相手はウマ娘界において知らぬ者はいない皇帝、皆の憧れの完全無欠の生徒会長、シンボリルドルフ。あらゆる面において完璧すぎる実力を備え人気も桁外れな最強バ——尚、やたらと連発するダジャレのレベルはかなり低い。

「それで如何したの」

「いやっ以前頂けたアドバイスのお礼を言いに来た。お陰で快調だよ」

「会長だけにてか、20点」

「ムウツ……ヒビキさんは優しいのに其方は厳しい」

彼の鍛錬癖はトレセン学園周知の事実。毎朝日が昇る前に始めるトレーニング、それはウマ娘でなければまともに出来ないであろう密度、それを平然とこなし続けているヒビキ。常日頃から鍛えてますからっという、それが彼の凄さの秘訣らしくそれに肖ろう

と一部のウマ娘はヒビキのメニューを真似てみたりしている。

「お礼って言うならさつもとおじさんを頼りなさいな、生徒会のやる事が多いなら言ってくれば手伝うから」

「いやしかし、それは……私達がすべき事、それを放棄するに等しい」

「うら若き乙女が何を遠慮してるのよ、子供はもつと大人を頼りなさいって」

真剣な顔で悩んでいる皇帝の額を軽く小突く、普通なら恐れ多くやる者などいない事を平然とする。それをされて少しばかり不服そうな顔を浮かべる。

「子供というのはやめて頂きたい、子供というのは何方かと言えばテイオー辺りの事を言うと思うのだが……」

「おじさんからしてみれば皆子供も子供、そこに区別はないよ。だから皇帝様ちゃんも大人を頼りなさい」

「——ハハハツギヤグ以外で笑いを取られるとは思わなかったな」

常に凜としているシンボルドルフもこの時は破顔して年相応の笑みを浮かべた、ウマ娘誰もが幸福になれる時代を目指しているが故に皇帝は苦勞する。自らの身体を酷使して幸せになれる時代を作ろうとする、ならばその為にももつと自分達を利用すればいい。そうしろと進言するヒビキに肩の荷が下りる。

「ではこれからは出来るだけ寄つ掛からせて貰うとしよう、一度そうすると決めたら私

は意地でも利用させて貰うから覚悟して欲しいな」

「望む所だよ、何せっ『鍛えてますからっ』シユツ」

「だろう？」

「そゆこと♪」

決め台詞に被せるシンボリドルフ、それに対して笑顔で肯定するヒビキ。トレーナーと担当ウマ娘という関係という訳ではないのに確固とした信頼関係が構築されている、これもヒビキという男の持つ雰囲気のをなせる業なのかもしれない。

「あつ居たあ!!ヒビキさんすいませんっゴールドシツプが芝を大変な事にい!!」

「あいよっ直ぐ行くよ、それじゃまたね生徒会長のシンちゃん」

「ああつ有難う用務員でヒビキのおじさん」

「修復完了!!」

『いやなんであんな短時間で出来るんだよ……!?!』

「鍛えてますからっシユツ」

ゴールドシツプのせいでコースの芝の一部がまるで爆撃にもあつたかのような事態に陥つてしまいこの後予定されていたスケジュールが崩壊する一步手前だった。それを修復したヒビキへは畏怖と驚愕の視線が注がれている。いい仕事したなあ……と額

の汗を拭っていると自分に向けてドリンクが差し向けられた。

「はいっお疲れ様」

「ありやダスカちゃんじゃない」

「その呼び方やめてよ、可愛くない」

やや不機嫌ですと言いたげな態度を取る豊満な髪質のツインテールが特徴的な少女、ダイワスカーレット。彼女に謝罪しつつも差し入れを受け取りつつ飲む、適度に冷えていて飲みやすい。渡す相手の事をよく考えられていると心遣いには感心する。

「良く短時間であんなに酷い有様だった芝を直せるわね……如何なってるの?」

「鍛えてますからっシユッ」

「あのメニューに付き合ってるから知ってるわよ」

ダイワスカーレットは時々、夜にヒビキが行っているトレーニングに混ざっている。彼女は負けず嫌いで一番に拘りがある、その為の努力を惜しまない。そんな彼女が夜に寮を抜け出してトレーニングしている際にヒビキに出くわした。本来は門限を破つての夜間外出は言語道断、トレセンの職員としての対応をするのが当然。彼女も最初にもう思っていた。

『あらっ夜なのに頑張ってるね。これさつき買ったココア、これで身体を冷やさないよ
うにね。それじゃ応援してるよ』

『えっ……？ああはい、有難う……』

咎める所か自分の応援をして去っていった、そしてこっそりと寮に戻ると見つかったしまったのだが……ヒビキの手によって外出手続きが成されていた為に怒られる事はなかった、それでも夜は気を付けろと注意は受けたがその程度で済んだ。礼を兼ねて作業中の所を訪ねて、聞いた。如何してと。

『だって頑張る子って応援したいじゃない』

極めて単純な理由に呆気に取られたが、彼女は笑った。その日からヒビキのお世話になるようになっていった。時間さえあれば早朝の鍛錬も参加している、その為もあったか彼女の記録は伸び続けているらしく時折自慢げにその成果を語っている。

「この後のレースで私走るから見ていってよね」

「おおっそうなんだ、じゃあきつと君の1位かな？」

「そうに決まってるじゃない、何せヒビキさんと一緒に」

「鍛えてますからっシユツ!!」

悪戯っぽい笑みを浮かべながらそう告げるダイワスカーレット。言いたい事は言った、だからレースは見ていってねと示すと去っていく姿を見送った。

「やっぱりウマ娘は笑顔が一番だよね」

そして、その後のレースではダイワスカーレットは見事1位を取って満面の笑みを見

ていたヒビキへと捧げた。

第3話

「感謝ッ！改めて先日の模擬レース前に手早い芝修復誠に感謝！」

「気にしないでくださいよ理事長、それが俺の仕事なんだから」

その日、ヒビキの姿が理事長室にあった。何か問題を起こしたという訳ではなく、寧ろ労いの言葉を掛ける為に呼び出されたというのが正しい。

「それでも大助かり何だったんですよ、だって他の用務員さんからは直ぐには直せないから模擬レース中止しないとダメだって言われてしまつて。それで藁にも縋る気持ちでヒビキさんに相談したんですから」

「頼られるのは悪い気しないし頼られたら素直に頑張るのが俺の仕事だから、これからも気にしないでガンガン声掛けちゃっていいからねたづなちゃん、勿論理事長も」

「無論ッ!!これからも全力で頼つていく!!」

大きな椅子に座りながら無論!!と大きく書かれた扇子を広げる小柄な少女、こんな事だがこのトレセン学園の理事長なのである。ウマ娘をこよなく愛し、ウマ娘のために私財を投じて支援をするような人でヒビキも結構好きタイプの人。そしてそんな理事長の秘書をする駿川 たづな、色んな意味飛び抜けているヒビキには頼りっぱなしな

二人である。

「疑問、他の用務員が匙を投げる程なのに何故あれほど手早く……」

「鍛えてますからっシユツ」

「困惑、答えになつていない!？」

「いやでもヒビキさんの場合、本当に鍛えまくつてますから否定も出来ないんですよ……」

一部では名前に因んで鍛錬の鬼とも言われている響鬼、謙遜でもなく誤魔化しでもなく本当にその通りなのだから困った物なのである。そんな事をやっていると窓の外が光を放つと共に大きな雷が落ちる。

「霹靂!!今日の予報では快晴の筈だったのだが……」

「ゲリラ豪雨って奴ですかね」

などと言っている内に一気に曇り始めていく空、加えて色は酷く黒い物となっている。

「こりや直ぐに降っちゃうな……」

「ヒビキさんお仕事は大丈夫ですか?」

「大丈夫大丈夫、今日は虫の知らせがあったから朝早くから仕事してもう今日の分終わらせてるから」

「驚愕?!?相変わらずそのバイタリテイには驚きを隠せない!!」

というのも早朝に石段を10個程重ねて行っていたレッグプレス中に雨のような気配がしたので早めに切り上げて仕事に取り掛かっていた。その為にもう深夜の校内巡回位しか仕事は残ってないのである。

「まあ俺は用務員室に居ますんで何かあつたら声かけてください」

「了承!!」

「はいっそれじゃあお疲れ様です」

挨拶をしながらも理事長を出たヒビキは校舎から少し離れた場所にある用務員室へと戻った。レースコースにも近く何かあれば此処に修繕要求なども来るので基本的に暇があれば此処にいるようにしている。

「そう言えばお昼だったな……何か作るかなあ」

理事長に呼び出されたタイミングがお昼を食べようとする少し前だったのでこれから何か作ろうかと思いつながら用務員室へと入った時に、一際大きな稲光と音と共に雨が降り始めてしまった。しかも相当に勢いと雨量が強い雨である。

「ありやりや……こりや凄いな」

窓から見えるトレセンが忽ち雨に染め上げられて行く、雨で視界が利かなくなる程の豪雨。場合によってはこの中で仕事をしなければならないというのが用務員の辛さで

ある。それを回避した自分の直感を褒めつつもお昼の準備に取り掛かっていくのだが

——直後に玄関扉が凄い音と共に開け放たれる。

「おじさん雨宿りさせてえ〜!!」

「すみませんがっお願いしますっ……!!」

フライパンを持った其方を見てみると、そこにはトレセン指定のジャージごと酷いびしょ濡れになっている二人がいた。一人はシンボリドルフに憧れている身体は小さいが独特なステップで他を圧倒するトウカイテイオー、もう一人は名門メジロの御令嬢にして天皇賞獲得を目標にするメジロマックイーン。互いにライバルと公言しつつも仲が良く共に練習もしている。

「あららっこりゃ一大事だ、ほらタオル。シャワーも使っついでいいよ、身体冷やして風邪ひくのが一番まずい」

「有難うおじさん〜!!」

「申し訳ありませんがお借りします……!!」

と受け取ったバスタオルで身体を拭きつつも奥にあるバスルームへと入っていく。練習熱心な二人もこの雨には敵わない、寧ろ用務員としてはこんな時にコンディションを崩さないような配慮をしてあげるこそだと思いつつながらケトルに水を入れてスイッチを入れながら食事の準備を進める。

「おじさんこの服借りちゃつていいの〜?」

「いいのいいの、寧ろ新しく買った奴はそれしかないからさ。まあ年頃の娘さんにそんなのでごめんね」

「そのような事御座いませんわ、お風呂を借りただけではなくご洋服まで……この御恩は必ずお返しいたしますわ」

お風呂から上がった二人には新品のジャージを用意した。元々は汚れや破けて着れなくなつた物の代わりなのだが、自分が既に着てしまつた物を女性に着させる訳に行かないので新品を出した。

「にしてもひどい雨だなあ……止む迄居ていいからね、ほいあつたかいお茶」

「わ〜いおじさんありがと〜!!」

「有難う御座います、あらつ良い香り」

天真爛漫で元気いっぱいなテイオーと落ち着いた淑女的な物腰と気品を感じさせるマックイーン、かなり対照的な二人はある意味ライバルになって当然なのかもしれない。

「これから俺はお昼にしちゃうけどどうする、二人も食べる?」

「しかし既にこれ程までにお世話になっておりますのに……」

ねえと横目で同意をテイオーへと求めようとするのだが――

「食べる食べる!!おじさんってば料理も上手いからご飯も美味しいんだよねっ!!ねえねえなに作るの?」

「この前仕込んだローストビーフ使った丼にしようと思ってる、そこに味付け卵を乗せてって如何よ」

「何それ美味しそ〜!!マックイーンも食べるよね!」

「……頂きます」

目を輝かせてながら準備されていく料理の香りに胸を高鳴らせるテイオー、そしてそれに呆れる前にその本能を貫くようないい匂いに我慢出来ずにマックイーンも昼食を取る事になった。

「おいひいいいい!!!」

「お代わりもあるからじゃんじゃん食べていいからね」

「ううっしかしこれではっ折角のプランが……!!」

「美味しく!あれマックイーンはお代わりしないの?まだお肉も卵も残ってるって」

「ううっく……頂きますわ!!」

「はいはいっちよつと待ってね」

ヒビキが夕食分も含めて炊いていたお米は全てテイオーとマックイーンによって消費され、仕込んであったローストビーフと味付け卵も全て平らげられてしまった。だが

ヒビキは嬉しそうにしながら笑っている二人を見て満足気に食器を洗っていると雨が上がって虹が空に掛かっているのを見て猶更笑みを深めた。

「あのっヒビキさん……早朝のトレーニングにご一緒させて頂く事は出来ないでしょうか……」

「いいけどどうしたの」

「聞かないでくださいませ……」

第4話

「よしつこれで終わりつと」

今日も今日とて用務員として腕を振るうヒビキ。本日が一番の大きな仕事が終わると額に流れる汗を拭って満足気な笑みを浮かべる。それもその筈、何故ならばその仕事というのは――

「にしてもこれで今週何度目かな、壁に穴開くなんて」

ウマ娘の身体能力は基本的に通常の間人以上である、走れば時速70キロは出ると言われている程の身体能力があるのだから建物の壁などその気になれば容易くブツ壊れるのも当然の事。まあ本音を言えば壊さないでほしいのだが……まあ色々ストレスが溜まったり精神的に不安定になっていけば暴力的な気分になってしまうのも致し方ない。寧ろ人にそれを向けなかった、と褒めるべきだろうか。

「それだけ溜め込んじゃってる子が居るつてかもな……俺の方でも注意しておくかな」

そんな世界で勝負するウマ娘、彼女らに共通して言える事でもあるが彼女らは闘争心が高い。本能的に走るという事を欲している彼女ら、そんな走るといふ事で勝負する故かそれに対するモチベーションは基本的に異常に高いのだが、それを上手くコントロール

ル出来ずに持て余して感情を制御出来ない事がある。これをやってしまったのもそんな娘かも知れないと思うと強く言えない。理解は示すが容認はしない。してはいけない事をしたのだから注意は必要、何れは自分をそこで甘やかし続けて駄目にしてしまおう。その辺りの線引きは確りとしなければいけない。

「さてつと……」

一番大きな仕事も片付いて今日はもう終わり、この後は何をしようかと思っていると肩を叩かれて其方を向くと笑顔のゴールドシップに頬を突かれた。

「いよおうおっちゃん！今日も今日とて精が出るつて奴だな」

「あらゴルちゃんじゃない、今日も今日とて元気で羨ましいねえ〜元氣100倍で世界は平和つて所かな」

「当然だろう、ゴルゴル星からゴルシちゃんがいるからこそ世界は回るんだぜ」

腹立たしくならないレベルに最高にイケメンなサムズアップと歯を光らせての笑みに肩を竦める。

「多分違うだろうけど一応聞いとくね、これつてゴルちゃんがやった？」

「いんやアタシじゃないぞ。やるならやるでそんな壁の一部なんてけち臭い言わずにそこから一带ぶつ飛ばす」

「だよね〜ゴルちゃんがこんなピンポイントでやるなんてないもんね〜」

「だろく流石おっちゃんアタシの事分かってんなあ!!」

この壁を見た瞬間に犯人は誰なんだろうと思いはしたが、その中にゴールドシップは含まれる事はない。確かに破天荒で滅茶苦茶やる彼女だが、彼女は絶対にこんな事はない。やるなら壁を纏めて消し飛ばすだろう。それに良識も確りと携えている子なのだから壊したら素直に自分に言いに来るだろう。

「エアグルーヴとかひでえんだぜ、いきなりこれお前だろ!! っつて決めつけて来やがってよおつたく……お陰でマックイーンの収穫が滞つたじゃねえか!!」

「あららっ……まあゴルちゃんドンマイドンマイ。んじや代わりに元気が出る話題を……ゴルちゃんの錨の修理終わってるよ、俺の用務員室にあるから持つて行っていいよ」

「おつマジで?! よっしやああの錨さえあれば収穫が出来る!! サンキュなおっちゃん愛してるぜ!!」

「あいよっ何時でもどうぞ」

そう返すとゴールドシップは颯爽と駆け抜けて——行かずにセグウェイに乗ってそのまま去っていった。そして姿が見えなくなった辺りで誰かに怒られながら走り去る音が聞こえて来た。

「マックイーンの収穫って……メイクイーンの言い間違い……とかじゃないよなゴル

ちやんだし……」

荷物を片付けながらもこの後の時間を如何するかと考えながらも廊下を歩くヒビキ。その途中で何度も生徒達に話しかけられる、簡単な雑談からトレーナーとの関係についての質問など……それに一つ一つ丁寧に対応していく、そんな所も彼が人気の理由の一つなのかもしれない。

「失礼しまゝす」

「おやつ」

ヒビキがやって来たのは生徒会室、入った先では会長席で仕事をこなしている生徒会長のシンボリドルフと「女帝」と呼ばれる生徒会の副会長であるエアグルーブが仕事をこなしていた。

「ヒビキさんじゃないか、なんだ何か用かな」

「根を詰めすぎてないかって見に来たんだよ、ほらっ差し入れ持ってきたよ」

そう言いながらも大きめの水筒を3つほど持ってきたヒビキ、それぞれが3ℓは入るサイズなのでかなり重い筈なのだがそれを軽々と肩に掛けてここまで来たかと思うと相変わらず凄い鍛え方だと笑みを作る。

「ほらっエアちゃんも一息入れないともたないよ」

「……すみません、ですがエアちゃんはやめてください。流石に子供っぽ過ぎる」

「無駄だよエアグルーヴ、彼は私も子供だというのだからそんな言葉なんて意味を成さないさ」

「その通り。まあ子ども扱いされるうちはそれに甘えちゃいなさいや、その代わり差し入れは良い物にしておいたから」

「良い物……?」

そう言いながらエアグルーヴが水筒の蓋を開ける、蓋が器となるタイプなのでそこへと中身を注いでみると淡い人参色をしたトロミのある物が流れ出してきた。その色と香ってくる匂いは彼女らウマ娘の本能を直撃する。

「これはもしかして」

「そつ人参のポタージユ、3人分も用意してたから遅くなっちゃったよ。というかなりちゃんは如何したのいないけど」

「サボりだよ、それでエアグルーヴが連れ戻そうと飛び出そうとしていたタイミングだったんだよ」

「ありやそりや悪かったねタイミング」

「いえっ気にする事ではないです、会長どうぞ」

確かにこれがあれば留める事は出来たかもしれないと僅かながら思ってしまった、が

それは御門違いという物だと自分を抑えながらシンボルドルフの分のポタージュを用意する。水筒にはスプーンが備え付けられていたのでそれを取って口へと運ぶ。

「んっこれは……濃厚なニンジンの味が広がるが口当たりは酷く良いな、のど越しもすつきりとしている」

「これは確かに美味しい……」

「喜んでもらえて何より、気合入れて裏漉しした甲斐があつたよ」

折角作るんだから思いつきり美味しくしようと思つて丹念に調理した。特にニンジンはウマ娘たちの大好物なのだから、ポタージュにすると決めてから裏漉し舌触りを最高のものにする為に丹念に行った。

「まさか此処までのものを差し入れて貰えるとは……やる気も上がるという物だ、有難うヒビキさん」

「いやいやいや気にしなくていいよ」

「私からも感謝します」

「良いつて良いつて」

そろそろ夕暮れ、日が落ちれば必然的に気温は下がる。そんな時は暖かい物が恋しくなる、ポタージュを選んだのも時間が掛かるからである。だがその分、美味しさは高い筈。

「ああそうだ、壁直したけどあれ誰が開けたか分かった？ゴルちゃんではなかったけど、
というかゴルちゃんなら壁丸ごとぶっ飛ばすって言ってたし」

「まあ確かに……よくよく考えれば納得出来る……今の所不明、名乗りもありません」

「そっかあ……ストレス溜め込んでる子だと心配だね」

「うむ。私達も出来るだけ気を掛けるように心掛ける、その為にもこのポタージュは有
難くいただきます」

「しかしこの量を良く準備出来た物だ……」

「鍛えてますからっシユッ」

第5話

「鍛くえろ身体、腕をつ脚を。磨けよ自分、男前く」

「申告!!既に男前であると!!」

「おつ嬉しい事言ってくれますね理事長、この後ニンジンパウンドケーキでも如何ですかね」

「感謝!!」

ヒビキの鍛え癖、ほぼ毎日行っているトレーニングは基本的にウマ娘でないと実践出来ないほどに馬鹿げている。数十キロの重りを背負ったまま階段ダツシユやそのまま跳躍のみで石段を登っていくなどなど……常人では到底出来ない物ばかり、ヒビキ自身はウマ娘などではないし普通の人間。唯単純に昔から鍛え続けて着た結果らしいが……それだけでコースの整地用ローラーを転がすなんて事が出来るだろうか。しかも理事長を肩に担いだまま。

「謝罪、普段ならば専用重機を扱う所なのだが……故障してしまうとはなんという不覚っ!!」

「だから俺が緊急時用のこのローラーを引っ張ってる訳ですからね、まあ生徒に引かせ

る訳にはいきませんもんね。練習に影響出たら大変だし」

「同意、しかし済まないこのような事をさせてしまい……」

「いえいえいい鍛えになりますよ、何ならみんなが走る前にこれ引つ張つていいですかね?」

「驚愕、気に入ったのか!?!」

「良い感じの重さですからね」

額に汗を流しながらもローラーを引つ張るヒビキ、コースの整地用のローラーの重さは相当な物なのに平然としながら転がしていく。肩に載っている理事長はそこまで重くないにしてもとんでもない光景に前準備に来たトレーナーは呆然とする。

「えっ何、あれ……」

「あんな馬鹿でつかいローラーを、引つ張つてる……!?!」

「しかも理事長を乗せたまま、あんな平然としながら……!?!」

「何だ新人か、あの位で驚いてたらトレセンじゃやっていけないぜ」

「ああ。お前達も絶対にヒビキさんに頼る日が来る、今のうちに見ておけ」

「そうそう、ヒビキさんはウマ娘並の肉体を持っている用務員さんなんだから」

ヒビキのとんでもない加減に驚愕する新人トレーナーという図は最早毎年の恒例行事、そしてそれを見て自分もあんな時があったなあと懐かしむトレーナーがいるのも何時

もの事。

「うええええ!!おじさん何やってるの!？」

「まあ何をやってるかって言われたら……ねえ理事長」

「ウムツ!!一目瞭然!!」

コースへとやって来たテイオーが走っているヒビキと理事長の姿を見て声を上げた。ドヤ顔をしながら扇子を広げた理事長にテイオーは何故か頬を膨らませた。

「理事長ずるいよ〜おじさんに肩車して貰うなんて〜!!僕もして貰いたいよ〜!!」

「あれそつちななの?アマちゃんは引つ張るのやらせてほしいって言われたんだけど」

「僕は肩車の方がいい〜」

「了承!!ではトウカイテイオーと交代だな!!」

「あつ俺の了承は取らないのね、まあいいけどさ」

何だか良く分からない方向に話が進んできたが、理事長を降ろしながらもテイオーは自らの象徴的なステップを踏みながらも見事なジャンプをしながらもヒビキの肩の上に着地する。

「よしっおじさん出発進行〜!!」

「よ〜し行くぞお〜」

と今度はテイオーを乗せたヒビキは先程よりも速度を上げてローラーを転がしてい

く。理事長の場合は体格と帽子の上の猫の事を考えてゆっくりめだったのだが、テイオーの場合は確りと身体が出来ているしレース経験もあるのでそこまで気にしなくても問題はない、寧ろ彼女が望んでいるのはこういうスリル的な物なのだろうと理解している。

「わっく結構早〜い!!背が高いって言うのもすご〜い!!おじさんってどのぐらいあるだっけ?」

「195cmだったかな」

「凄〜いもう巨人だね!!」

そんな風にはしゃぐテイオーを乗せたままローラーを走らせ続けたヒビキ、30分もしたらコースの整地は完了して走れる状態へと変わったのであった。

「はい〜コース周回響鬼号にご乗車ありがとうございます〜」

「楽しかった〜!!背が大きい景色って凄いな!!」

「楽しんでもらえたようで何より、ほれっ下りな」

「は〜い」

存分に巨人気分を楽しんだテイオーはルンルン気分で響鬼号から下車すると改めてお礼を言ってからトレーニングへと入っていく。そんな姿を見送っていると理事長からドリンクが差し出される。

「称賛!!ヒビキ用務員、君は本当に素晴らしい。ウマ娘への対応も用務員としても!!」
「大袈裟だなあ俺は俺が出来る事をやってるだけですよ」

そうは言うが年頃の娘を肩車して顔色一つ変えないのは尊敬の視線を向けるしかないだろう、ウマ娘達は基本的に見目麗しい。故にトレーナーを志望する者の中にはそう言った方面を期待する者がいない訳ではない、そんな人間にヒビキを見習って貰いたいというのが素直な思いである。

「確かに皆可愛い子だけどそう言った目じゃ見ませんよ、というか俺今年で32ですよ」

「否定!私の中から見てもヒビキ用務員はイケメンだしイケていると保証しよう!!」

「ハハハツ誉め言葉として受け取って置きますよ」

本人曰く、流石に10歳も年齢を下回るウマ娘達をそういう目で見ると見る事は出来ないしこんなおじさんにそういう目で見られるのは嫌だろうからしないようにしているとの事。実際はヒビキは顔もいいし人気は高いので理事長的にはそっち方面に行っても可笑しくはないと思っている、まあ行って貰わない方が助かるのだが……。

「さてと理事長、ニンジンケーキでも食べますか?」

「提案、たづなも共に食べるといふ事も出来るだろうか」

「勿論出来ますよ、んじゃ理事長室行きますか」

「ウムツ!!再度提案、私を乗せて貰う事は可能か?」

「気に入りましたか響鬼号」

「肯定!!」

後日、度々ヒビキに肩車される理事長が目撃されるようになった。

第6話

あくる日、とあるウマ娘のトレーナーから代理として食事を届けてあげてほしいとお願いを受けた為にお手製のお弁当を持つてそのウマ娘がいるトレセンの実験室へと入った。何故そこにウマ娘がいるのかと事情を知らないものからしたら疑問に思うだろうが、そのウマ娘がそういう子だからとしか言いようがないのである。ノックしてから扉を開けるとむせ返りそうになりほどに充満した薬品の臭いが鼻を衝く。

「相変わらずだねえ……」

溜息交じりにヒビキは準備したお弁当を机の上に置くと実験室の大きな窓を掛けて換気を行う、此の位はしてもいいだろうとは思うがそれすら億劫になる程度には自分のやりたい事に没頭している。らしいといえづらいが、用務員としては体調が気になる。窓から頬を撫でる風が入ってきたのを感じたのか、実験室の奥でモゾモゾと蠢くものが声を上げた。

「やあっ待っていたよ用務員君」

「お待たせタキちゃん、本当に相変わらずだねえ君は」

この実験室の主といっても差し付けない程に此処に入り浸っているウマ娘、良くも悪

くも研究者気質な所がありそれをトレーナーで実践するアグネスタキオン。マッドサイエントティストという評価も間違っていない、というか正解だろう。そのせいで彼女のトレーナーは発光したりしているのだから。そんなタキオンは自信有り気に緑色の液体が入った試験管を取り出してヒビキへと渡す。それを何よこれと言いたげな目で見つめるヒビキに向かってタキオンは言い放つ。

「早速だがそれを飲んでくれたまえ」

「はいダバア〜」

「あああああつなんて事をするんだもつたないじゃないかあ!!!」

ほぼノータイムで近くにあつたシンクへと中身を無造作にぶちまけた、それを見たタキオンは大慌てでシンクを覗き込むのだが更なる追い打ちとして水道を開けて薬を一気に流してしまう。覗き込みながらああつ〜……と膝をついてへこたれてしまったタキオンはヒビキを見ながらポカポカと叩き始める。

「酷いじゃないか用務員君!!あれを作るのにどれだけ苦労したのか分かっているのかい!?!」

「分からないけどまた変な薬なんでしょ、この前だつて疲労回復薬だつて言われておじさん喜んで飲んだらなんかアメコミヒーローみたいになつただけど」

「それはそれでいいじゃないか人類の革新だよ更なる飛躍を君は体験出来たんだから

さあ!!」

「おじさんは普通のままでいいかなあ……というか君のトレーナーが既に革新だと思ふよ、流石にあそこまではなりたくないかな」

別名ゲーミングトレーナー、それが彼女のトレーナー。彼女の作る薬の実験やらを引き受けており、モルモット君とも呼ばれている。その結果、七色に輝くようになっており表情を読み取る事が出来なくなっている。が、最近になってバイザー型のサングラスを装着するようになった。タキオン曰くトレーナーの発光は感情やらで微妙な変化が起きるらしく、それを読み取るデバイスを制作したらしい。

そのバイザーは発光を読み取って絵文字やら文字を浮かべることが可能らしく、今回も頼まれた時にはバイザーにはオネガイm()mシマースという文字が電光掲示板のように流れていた。まあそれ以前は表情がわからなかったので意思を読み取れるという意味ではかなり便利ではあるのだが……それを作るよりも発光しないようにした方が早いのでは……と思つたのはヒビキだけではなかった。

「兎も角ハイお弁当、ヒビキスペシャルだよ」

「有難う、トレーナー君のお弁当も大好物だが用務員君のお弁当も大好きだからね。時折食べたくなるんだ」

「そりやどうも、お弁当頼む位だったら食堂行つたらいいのに。美味しいじゃん」

「行くまでが手間なんだ、そんな時間があるなら実験や研究に使いたいじゃないか、いただきます」

そう言いながらお手製のサンドイッチに齧り付いたタキオンはまるでピザのように伸びるチーズを巻き取るように食べながらも笑みを溢している、こんな笑みを見れば普通の年頃の娘なんだけどなあ……と内心で苦笑いするヒビキは彼女に水筒に入れてきた紅茶を差し出す。

「ふむつやはり美味しい……それに私に美味しいを教えてくださいましたのはトレーナー君と君なんだ、責任ぐらい取ってくれたまえよ……」

「はいはい頼まれれば作りますよ、ほらっ口周りがケチャップ塗れ。ほら拭くからじつとして」

「あんまり子ども扱いしないでくれないかな、ほら拭いてくれ」

「言動と行動が矛盾してるよ」

まるで雛鳥に餌をやる親鳥になったような気分だとタキオンに食事を届けるたびにそう思う。まあそこが可愛い所ではあるのだが。そんなヒビキへと再度試験管が見せられた。

「そんなおいしいご飯をくれる用務員君へ贈り物だよ、何とても良いものだから」

「一応聞いておくけど何これ」

「惚れ薬……つて待つて待つて捨てるなら返してくれ!!」

無造作に再び流しへと突っ込まれそうになる薬を慌てて回収するタキオン、ヒビキも若干呆れながら見つめる。

「あのねえ……如何して惚れ薬なんて渡そうと思うのかな」

「だつて用務員君だつていい歳だろう、それなのに色恋沙汰は一切聞かない。ならば食事のお礼においしい思いをさせてあげようと思うのは可笑しくはないと思うけど」

「それならせめてタキちゃんの手料理で美味しい思いさせてよ、というか色恋沙汰を聞かないのは当然でしょ。トレセンの子達に手を出すような人間じゃないからねおじさん」

「本当かなあ〜?」

薬を捨てた仕返しと言わんばかりに何やら強気に攻めてくるタキオン、まあ毎回毎回薬を拒否したり捨てたりしていれば意地でも使わせてやる!!という気持ちにもなる……なるのだろうか。だがヒビキから帰ってきたのは驚きの返答だった。

「おじさんにだつて恋人はいたからね、それでもういいやつてなっちゃったかな」

「……えっ」

「いや何よその反応」

予想外すぎた答えにタキオンは硬直し、食べかけのサンドイッチを弁当へと落として

しまった。あのヒビキに恋人がいた……という事実には驚きすぎて言葉が出ない。

「(こ)こ(こ)こ恋人がいたのかい!!?あのウマ娘に抱き着かれたり肩車したりしても無反応で不能やらそつち系という噂すらある君に!!!」

「いや歳が10も下な子に手出す訳無いじゃん、何当たり前なこと言ってるの。というかそんな噂あるのか……なんかショック。誠実にウマ娘と接してるだけなのに……」

「どどどどどどどんな人だったんだ!!?」

「知りたい?」

珍しく悪戯つ子のような笑みを浮かべたヒビキにタキオンは好奇心を刺激されているのか全力で頷いた、トレセンの中でも屈指の人気を誇る男性職員ヒビキ用務員の恋人、それがどんな人物なのか……聞きたいに決まっている!!という顔をする……が

「やっぱり教えてあげない」

「えっく!!?なんでなんだい用務員君!!?」

「フフフツ大人って奴は自分の過去をそう簡単には明かさないので、聞きたかったら聞き出してごらん。じゃあね」

「ああつ待って!!」

と実験室から出ていくヒビキをタキオンは引き留めようとするのだが、それをあつさりと回避しながら立ち去っていく。それを見送りしかなかったタキオンは驚愕に顔を

染め上げながらならばやってやると言わんばかりにあることを実行した。

後日――

「あつあのヒビキさん!!ヒビキさんがバツイチだっていうのは本当なんですか!!?」

「誰から聞いたのよそれ、バツイチではないよ」

「結論!!ならばこっつ恋人がいたというのは本当なのか!!?」

「マジですけど」

ヒビキに恋人がいた、もしくはバツイチだったという話がトレセン中に出回ったのであった。女性職員や女性トレーナー、そしてウマ娘達からその真相を確かめる為に詰め寄られる羽目になったのであった。

第7話

「やれやれっそんなにみんな俺に元カノがいた事が可笑しいのかねえ……そんなに俺つてモテなさそうに見えるのか」

夜、トレ―ニングを終えたヒビキは見回りを兼ねてトレセンの敷地内を巡っている。先日の元カノ発覚からほぼ全校生徒及び職員から元カノは本当なのか、それともバツイチなのかと聞かれ続けている。聞かれる事については別に気にしていないし隠すつもりも無かった、だが其処まで驚かれるような事なのだろうかと内心では若干シヨックを受けていた。

「やれやれ……マクちゃんとダスカちゃんにも凄く聞かれたしなあ」

『ヒビヒビヒビヒビキさん元カノが居るって本当なの!!?』

『いついえ私は奥方がいらっしやるとお聞きいたしました!!?』

『元カノはいるよ、でも籍は入れてないし勿論結婚もしてないからバツは付いてないね』
早朝のトレ―ニングでもかなりしつこく聞かれた。どんな人なのか、何故別れてしまったのかと、矢張り年頃の乙女という奴は他人の恋バナには敏感なのだろう、それが元カノ云々にも通用するとは思わなかったが……。そんな事を想いながらウマ娘たち

の寮である栗東寮へとやって来た時、その入り口で声を出しながら閉ざされている玄関を叩いている娘を発見する。

「開けてください〜い!! スペシャルウィークです〜!!」

自分の名前を言いながら開けて欲しいと懇願するが、そんな生徒の名前は聞いた覚えがない。用務員故に学園に通っている生徒達の事は熟知しているが初めて見る、転入生だろうかと思いついながらも近づいていく。

「こんばんわ、門限を忘れちゃったかい?」

「ウヒヤツ!!?」

おっかなびつくり振り返る、すると大きく頭を下げながら騒がしくすいませんと謝り倒す。

「すいませんすいませんすいません!! 私今日転入してきましたんですけど途中でレースを見てて門限の事をすっかり忘れて入れなくなっちゃって……!!」

「成程ね、転入生だったのか。そりゃ俺も知らない訳だ」

「えっあの、もしかして職員さんなんですか!?!」

「まあそうだね、職員のおじさんだね」

その時、彼女の目に一筋の光が差し込んだ。もしかしたら開けてくれるかもしれない、という希望に溢れている目である。

「初日から重役出勤だねえ、それともそのレースで見惚れちゃったかい？」

「あっはい!!そのレースで走ってたサイレンススズカさんの走りが本当に凄くて!!」

「そうか今日はスズちゃんの出走日だったか。まあそれはそれとして……転入初日って事はまだ部屋割りもまだかもしれないか……ってなると仮眠室かもしれないな……でも確か今日沢山荷物来てたからそっちに回ってた気がする……」

此処には海外出身のウマ娘も在籍している、ファインモーションやタイキシヤトルなどが該当するが彼女らの実家から時折凄じ量の贈り物が届く事がある。特にファインモーションの実家は名家な上に箱入り娘な彼女を心配して贈り物が流れ込んでくる……丁度それが重なって仮眠室を物置にしなければいけない状態になっている筈。なので少しだけ待つて貰い寮長に連絡を取る。

『やあっヒビキさん、元カノがいるというニュースには驚かせて貰ったよ』

「いきなりそれかいフジちゃん、まあそれはまた今度。今さっ転入する娘と一緒になんだけどさ、スズちゃんのレースに感動して門限忘れちゃったんだって』

『おやおやおやつ転入初日から随分と重役なポニーちゃんだね』

此処の寮長を務めているのはフジキセキ、抜群のプロポーションと時折見せる甘い言動で数多くのウマ娘たちを虜にするエンターテイナー。

「それで部屋割りも多分まだで仮眠室使えないよね？」

『ああっそうだね……仮眠室は埋まっているね。もう少し早く来てくれれば何とか都合も付けられたんだが……他にも門限破りがいてね、其方で埋まっている。貴方からも注意してやってくれ』

「分かった、それじゃあ俺の方で何とかしようか」

『そうしてくれると有難いよ。ヒビキさんなら送り狼になる事も無いだろうからね』

「それは沖君に言つてやってよ、じゃあね」

電話を切りながらも此方に期待の視線を向け続けてくる子へと声をかける。

「ちよつと今は入るのキツいつてさ、もう少し早く来れば何とかなつたけどつて言つてた」

「そ、そんなあ……」

「だからさ、今日は用務員室で寝ていいよ。取り敢えずふかふかの布団は保証するよ」

「ほつ本当ですか!!?」

「勿論、こつちだよ」

「有難う御座います!!」

大きく頭を下げながら感謝する、かなり素直でいい子だというのがこれだけで汲み取れる。素直さ故に目の前の事に夢中になってしまったと言つた所だろう。それに転入初日なのだから大目に見てやらないといけないだろう。

「あつあの自己紹介が遅れました!! 私スペシャルウィークと言います、お世話になります!!」

「スペシャルウィークちゃんか、良い名前を貰ったね。文字通りの特別な名前だ。俺はヒビキだよ、雷電 響鬼」

「はいっ宜しくお願ひします雷電さん!!」

「ヒビキでいいよ、なんならおじさんでいいから」

そんな風に言いながらも到着した用務員室、初めての所ゆえか緊張しているのか部屋の中をキョロキョロと見回している。がそこでキュウ……と可愛らしい音が鳴った。その出所は彼女の腹の虫だった。

「すっすいません……何か急に……」

「ハハハツいいよいよ、お腹が空くつていうのは健康で元気な証だよ。ちよつと夜も遅いけどご飯食べるかい」

「良いんですか!!?」

煌びやかな笑みを浮かべるスペシャルウィークに笑顔で頷いた。野菜炒めに味噌汁、作り置き味の付け卵に鶏ハムを出した所、笑顔でそれらを平らげていく。それも凄いスピードで。

「こりやいい食べっぷりだな、お代わりするかい?」

「良いんですか!!?お願いします!!」

「はいよ」

と夜中にも関わらずに用務員室には明るい光が灯り続けながら賑やかな笑い声が絶えなかった。

「ようこそスペシャルウィーク、此処で君は何を成すか俺は楽しみにさせて貰う。そして君が望むなら俺はそれを支えよう、存分に此処で君の望む事を目指して実現するとい
い」

「ヒビキさんっ……ハイっ私頑張りますっ!!よろしければるべ〜!!」

「あつ北海道出身なのねスぺちゃん」

「分かるんですか!?!」

そして用務員室で一夜を明かしたスペシャルウィークは改めてトレセン学園での生活に身を置く事になったのであった。

「えっヒビキさんってトレーナーさんじゃなかったんですかあ!!?」

「あれ言っただけ、俺用務員だよ」

第8話

「だって支えてくれるって言うてくれましたし、だからトレーナーさんだっと思って……」

「あくそりや悪かったけどね、でも用務員室の鍵持っててそこで調理とか布団迄敷いてあげたんだからそこで気付いてたと思ってたよ」

翌日、放課後に再び顔を合わせたスペシャルウィークからは非トレーナーになつて欲しいと頭を下げられるヒビキ。如何やら用務員であつた事に気付いていなかつたらしい。

「純粹に親切にしてくれたと思つたので……というか夜は如何してたんですか？」

「外で寝てたよ」

「それじゃあ私ヒビキさんの寝る場所取っちゃつてたんですか!!？」

あわわわわつと震える彼女にヒビキは気にしない気にしないと笑いかける。

「年頃の娘さんと小さな屋根の下で一緒なんて親御さんが不安になるでしょ、その位の事は考えるよ」

「ううっ……でも私がちよつと起きた時なんて用務員室にいたじゃないですか」

「ちよつと鍵を取りに入っただけだよ、早朝のトレーニングに必要なだったからね」

「あの時つて4時だったと思うんですけど……何時起きだったんですかヒビキさん」

それから一緒に歩きながら話をするスペシャルウィーク、彼女からしたらトレセンに来てから初めて頼りに出来ると思定できる大人故かどんどんトレセンの感想などを述べていく。北海道との違いやお昼が美味しかったなどなど微笑ましい話ばかりが出てくる。

「でも本当に残念……スズカさんのチーム選考に行けばよかつたかなあ……」

「あくなんかごめんね……俺の方からお願ひしてみようか、スズちゃんのチームリギルには顔利くから」

学園内のチームでも最強と名高いリギル。そこにスズちゃんこと、サイレンススズカは所属している。自分が原因で選考に行く道を選択しなかつたのであれば話を通せば出来ない事はないだろう、だがそれに首を横に振った。

「それだと不公平だと思ひます、お昼の時にウララさんとかエルさんがリギルに入るつて言つてましたし……」

肩を落としながらも誠実な言葉を口にするスペシャルウィーク、それを聞いてヒビキは益々申し訳なくなつてきた。素直に申告しておけばよかつたと心から思ひ、なので詫びにはならないかもしれないがある提案をする。

「それならば、俺が走りを見ようか。これでも俺色んな子とトレーニングしてるから自信あるし」

「でもご迷惑に……」

「それにさ——トレーナーの資格は一応持つてるから」

「えっ——えええっく!!?!」

その時上げた彼女の驚愕の声は周囲のウマ娘達からしても衝撃的な一言であつたらしく、呆然とした顔で見つめていた。

「さてとつやろうか」

「はっはいっ……あのやつぱりヒビキさんトレーナーさんじゃないんですか!!?!」

「違うよ?俺はトレセン学園の用務員のおじさんです」

練習場に出て準備運動をしながらもヒビキへと非難のような声をぶつけているスペシャルウィークに対してしれっと用務員のおじさんという事を貫き通そうとしている。

「資格は一応取ったんだよ、あつたらあつたでウマ娘関連の就職で便利だし」

「そ、そういう物なんですか……なんかもつとこう……エリートっていうか、専門的な感じがあつたんですけど」

「そ〜いうもんなんです」

何だか釈然としないが、取り敢えず走りを見て貰える事になった事は嬉しい。勘違いしていた時から見て貰うならこの人が良いと思っていた、それ程までにヒビキには既に多大な信頼を寄せている。

「と言つても俺はスペちゃん的事全然知らないんだよな、なんか目標とかある?」

「はいっ私日本一のウマ娘になりたいです!!」

日本一とは随分と大きな物を掲げる、それを周囲でヒビキが教えるので興味が引かれたので見に来ていた子達は少々笑いを浮かべたりしている。三冠を掲げると言つた目標を持つ子は多いが日本一という事を言うのは少ない。漠然としたものだからだろうか、それとも無謀な挑戦だと思つているからだろうか。気持ちは分からなくもない、がっ——ヒビキは笑う。

「いいねえっ日本一、夢はでっかく日ノ本一。うんうんっ夢はでっかい方が遣り甲斐あるもんな、それじゃあその第一歩としてまず一周走つて貰つてもいいかな。流石にそれを見ないと俺も何とも言えないから」

「っ分かりましたあ!!」

とヒビキの反応を見て益々目を輝かせるスベ、張り切つてやるぞ!!と腕を振り上げながらコースへと入っていく。丁度まだ誰も走っていない、都合がいい。そして合図とともに走り出していく彼女を見つめるヒビキへと一人の影が近寄つて声をかける。

「よっヒビキのとつつあん」

「同年代なんだからとつつあんはやめてくれないかな沖君」

「そっちこそ君付けやめてくれよ、お互い様だ」

やって来たのはトレセンのトレーナーである沖野。彼はチームスピカを率いる立場にあるトレーナー、そのチームにはヒビキ的には仲良しなゴールドシップやダイワスカーレットが名を連ねている。

「聞いたぜ実はトレーナーだったなんてな、何で言わないだよ水臭いな」

「別にいいかなあ〜って思ってたさ、用務員で十分だよ俺は」

「そうかい、にしてもアンタが見てるのがスペシャルウィークとはな……」

「あらっ知ってるの？」

話を聞いてみると先日サイレンススズカが出たレースを観戦していた時に知り合ったと言っているのだが……沖野が言う知り合ったは余り信用ならない。何故ならば……この沖野トレーナーにはある種の悪癖がある。

「どうせまた勝手に腿触ったんでしょ。好い加減にしないと通報されるよ、というか今此処で俺がしても良いんだよ」

「やめてくれ、もうスペシャルウィークに蹴られてるんだ」

「それ位されて当然、理事長にチクって嚴重注意でもされるかい？」

「善処する」

溜息混じりに改めてストツプウオツチに目を落としながら走りを見るが、かなりいいタイムが出ている。スタートがもたついていた筈だがそれでこのタイム……中々の逸材だと思う。それは沖野も同意なのかその瞳は鋭い、こんな変質者だが観察眼などはかなり優れている。

「いや本当に良いな……うちに来てくれねえかな、とつつあんも一緒に如何よ。ゴルシも喜ぶぜ」

「まあスぺちやんの道をリギル入りを潰しちやった責任もあるからねえ……」

「なんだあいつリギルの申し込みしなかったのか？」

「俺がトレーナーだと思ってしなかったんだって、スズちゃんと一緒にチームに入りたかっただろうに……」

「スズカなら今はスピカに居るぞ」

「えっ何スズちゃんスピカに移籍したの？」

あのスズカが最強のリギルからスピカに移籍した、初耳だったので思わず聞き返してしまっただ。それを聞いてある事を考えながらゴールしたスぺのタイムを沖野と共に見て、沖野は益々口角を持ち上げた。

「ヒビキさん如何でしたか!？」

「いやはや、これは中々に磨けば光るタイプだなスペちゃん。普通に凄いや」

「えへへっく有難う御座いますってあれ隣の人は……」

「よっ昨日振り」

と挨拶をする沖野に対してスペは思い出そうとする、眉間にしわを寄せながら考え込む。そして――

「ああ、昨日の痴漢の人!!」

「ああいや違う違う違う勘違いだつてば、トレーナーって言ってくれよ!!」

「何が勘違いよ常習犯じゃん……」

第9話

「改めましてようこそトレセンへ、俺は沖野だ。チームスピカのトレーナーをやってる」

「ほっ本当にトレーナーさんなんですかヒビキさん……」

「本当だよスペちゃん、まあ変質者のな悪癖はあるけどね」

「おいおいとつつあんそういう言い方はないだろ……といふかなんでとつつあんに確認するんだよ」

走り終えたスペシャルウィークにスポーツドリンクを渡すが即座にヒビキの後ろに隠れられて頭を掻く沖野。まあファーストコンタクトがいきなり腿を触られたという事なのだからそりや警戒もするだろう。

「それでチームスピカって……」

「沖君が率いてるチームだよ、流石にリギルと比べたら見劣りはするけど実力派揃いな子で構成されてるチーム」

「そうほめるなよとつつあん」

「いやチームに所属している子達を褒めてるのであって君を褒めてる気はミリ、いやミクロレベルでない」

「そこまで言わなくてもよくね……?」

肩を落としながらガツクリと項垂れる沖野トレーナー。兎も角本当にトレーナーである事が分かってスベも僅かに警戒心を解く。

「んでまあいいかも……んでスペシャルウィーク、話は来たけどとつつあんを担当になって貰うつもりでリギルの選考に行かなかつたらしいな」

「ええ、まあ……」

「んでだ、スズカのレースを見てた時に思ったがスズカに憧れてんならスピカに来いよ。今あいつはウチにいるぜ」

サムズアップしながらいい笑顔を作って告げる、中々に良いイケメンな笑みではあるのだが……スベからの信頼は皆無に近しい為か疑いの目が向けられ続けている。

「嘘です、スズカさんはリギルに居るってエルさんやグラスさんが言っていましたもん」

「昨日までは確かにそうだった、だがあいつは今日付でスピカに移籍したんだ」

「ぶつちやけそれってマジなの? ハナちゃんがスズちゃんを手放すつていうのはちよつと考えにくいんだけど」

トレセン学園最強と評価されるチームリギルを指導する辣腕トレーナー、東条ハナ。彼女もスズカの才覚と実力は高く評価している、それ程までにスズカのポテンシャルは高いし将来性も圧倒的。そんな逸材を放出するというのは考えにくい。

「事情があつたんだよ、おハナさんの方針にスズカが反して逃げを打った」

「スズちゃん的にはハナちゃんの指導はあつて無かつたんだねやっぱり、身体は良くてもメンタルが悪くなつてたのちよくちよく俺の所に来てたし」

「ああ聞いてる、それで話聞いて貰えて嬉しかったつて言つてたぞ」

その話を近くで聞きながら改めてヒビキという人間の器の大きさというか、このトレセン学園において彼はどれ程までに大きな影響力を持っているのかという事を思い知る。

「んでまあ今は俺のチームスピカに居るつて訳だ」

「スズカさんがいるチーム……」

「後、俺に是非お前を磨かせてほしい。お前の夢、日本一のウマ娘つて奴の手伝いをさせて欲しい」

それを聞いてスぺの目の色が変わる、日本一のウマ娘になる。それが彼女の夢だがそれを聞いても誰かが笑つていた、それなのに目の前の人はそれを真剣に聞いて応援してくれている。ヒビキと同じように。

「それに今ならヒビキのとつつあんも付いてくるぞ、お前を応援する為にな」

「ちよつと沖君何を勝手に……」

「私つ入りますチームスピカ!!」

「よし交渉成立」

「お〜い俺の意見は〜?」

とんとん拍子でチームスピカへの加入を決めたスペシャルウィーク、そして沖野は笑顔でしてやったりと言わんばかりの笑みを浮かべて宜しくの握手をスぺとする。

「んじやとつつあんもこれから宜しくな」

「はいっヒビキさん宜しくお願いします!!私、トレーナーさんよりヒビキさんに見て欲しいですし!」

「ええっ……まあいいか、取り敢えずスピカの部室まで案内するから」

「はいっ!!」

「いやだからさ、何で俺もやる事決定してんの……?」

歩き出していつてしまう二人、なんとというかお詫びのつもりで走りを見るだけだった筈なのにえらい事になって来てしまった……。呆然としていると沖野が早く来いよと急かしてくるしスぺも行きましようよと笑顔で誘ってくる、溜息混じりにそれに続きながら沖野を睨みつける。

「どういうつもりだい、俺は用務員でトレーナーをやるつもりはないよ」

「俺の台詞だよとつつあん。トレーナーが足りてないのが問題ってのは知ってんだろ?」

ハッキリ言つてトレーナーの資格を取るのは極めて難しい。簡潔に言うなれば某T大の試験よりも難しく合格者がいないという時もある程、故か此処中央とも呼ばれるトレセンでもトレーナー不足は深刻な問題とされている。そんな資格を取る事が出来たヒビキは狭き門を潜つた紛れもないエリートという事になる。

「持つてるならやればいい、俺はそう思うけどね」

「俺は唯の用務員だよ。それ以上でもそれ以下でもない、後俺が用務員からトレーナーをやるとしたら他の用務員に俺の仕事が押し掛かつて君が恨まれるよ」

「うっ……!!」

忘れていたのか今更顔を青くし始めた沖野、ヒビキは毎回毎回あつという間に仕事を終わらせてしまつてゐる為か感じにくいだろうがトレセンの用務員もかなり重要な仕事に入る。ヒビキだからこそ素早く多量の仕事をこなせるのであつて他の人間にこれを代用する事は難しい。

「いやでもさつサブトレみたいな感じで付き合つてくれる時間ぐらいはあるだろ?」

「スぺちゃんに限りだつたら考えてもいいけどチームに入るんだつたら他のもやつてあげないと不公平でしょ、俺の逃げ道を断とうとしているのが見え見え。もう少し考えなきゃだつたね沖君」

「……面目ねえ。でもとつつあん、なんでトレーナーをやらないんだ」

誰もかそれを気にしていた、彼がトレーナーをやると言えば担当になって欲しいと名乗りを上げるウマ娘は多い事だろう。正しく選り取り見取り、しかも仕事の合間にトレーニングの指導や相談を受けている事を考えたらトレーナーとしての手腕もかなりいい物だと沖野は見ている。ならなんでそれを活かさないのか疑問だった。

「さてどうしてだろうね、まあチームに顔を出す程度はしてあげるよ」

沖野はそれを聞いて、一先ずはそれで妥協するかと思ひ直す。だが益々興味が沸いた、必ず聞き出してみると決意しながらスペシャルウィークをスピカへと引き入れる事が出来た今に満足する。

第10話

「よしスペちゃん、あと5回で休憩ね」

「はいっけつぱるべえ!!」

なし崩し的にチームスピカに顔を出す事になってしまったヒビキ、その後スピカの部屋に顔を出したのだがそこにいたゴールドシップやダイワスカーレット、そのライバルでもあるウオツカ、そして本当に移籍していたサイレンススズカも驚いたような顔で此方を見つめていた。がそれは本当に僅かな間で次の瞬間には本当に嬉しそうにしながら絡んできた。好ましく思われているのは良いのだが……何とも面倒な事になったなあと思いながらもスペシャルウィークのトレーニングを行っていた。

「やっぱり朝の空気って気持ちいいですね!!キリっとしてて目も覚めますし」

「そうだよね、これが好きで俺も早起きしてるようなもんだからね」

嬉しそうな顔をしながらヒビキの指導を受けているスペ。初日の触れ合いや優しき、器の大きさなどを感じてこの人に担当になって貰いたいと思う程度には惚れこんだからだろう。そんな響鬼はスペにはリギルの選考レースの邪魔をしてしまった負い目もあるのでトレーニングを見ている……が、この先はスピカの面々も見なければいけない

という事を考えると少しばかりため息が出る。

「んじや次は……仕上げのランニングだね、朝ごはんの前に最後の汗をかこうか」

「はいっ!!これだけ動いた後だときっとすごい美味しいんですよねご飯!!」

「その意気その意気、んじや行こうか」

「ほらほらつ足が乱れてるよく疲れてるのは分かるけどペースは一定」

「はっはいっ!!」

スペシャルウィークは嬉しかった。トレセンに入つてこの人に見て貰いたいと思つていた物の矛先であつたヒビキに指導をして貰える事が、チームスピカの皆も凄く喜んでた。その時に聞いたがヒビキはトレセン内では凄い人気を誇る用務員であると。用務員としても優秀だがそれだけでは人気にはならない。

トレーナーとの関係に悩んだ時に気軽に相談出来る相手、落ち込んで居る時に声をかけてくれて有難かつた、休日なのに遊びに付き合つてくれた、苦手だつたダンスの特訓に付き合つてくれたなどウマ娘たちからすればこれ程心強く有難い存在は中々ない。そして器が大きい上に大人の魅力に溢れていてイケメンという年頃の乙女ならばときめく要素だらけの用務員。それが人気の秘密だと言う。

「はいラスト」

「頑張りますう!!」

「頑張るのはいいけどペース一定ね〜おじさんついて行けないから」

「すつすいません!!」

確かにそれには同意するが……それ以上に凄いのはヒビキの身体能力ではないだろうか。自分は本気で走っている訳ではない、あくまでランニング。だがその速度は普通の人からすればかなりきついランニングに入って走り続けるのは辛い筈なのに、平気な顔をしたまま自分の後ろについている。

「鍛えてますからっシユツ」

「何も言つてませんけど!」

「聞きたそうな雰囲気してたから」

「(お母ちゃんヒビキさんって本当に凄いです、やっぱり私ヒビキさんにトレーナーになつて欲しいです!!)」

そんな思いと共にゴールを切った。流石に疲れたのか多少なりとも息が荒くなっているのだがヒビキは全くそんな事はなくふう……と一息つくともう何ともなかったかのようにお茶を飲み始めた。如何言うスタミナをしているのだろうか……。

「あのヒビキさんは何で大丈夫そうなんですか、全然苦しそうじゃないですけど」

「まあ単純に言えばメンタルと経験の差だね。慣れているのとまだまだ行けるなつて

思っただけ身体もそうなるんだよ、ほら病は気からって言うじゃん。それと同じだよ」
「そうなんですわね……よしっ私も気持ちを鍛えます!!そして今度のデビュー戦、絶対に勝ちます!!」

「応援してるよ」

それじゃあ失礼します、つと朝ご飯を食べる為に去っていくスペシャルウィークを送る。しかし、まさか6日後にはデビュー戦が控えてしまっているとは難儀と言うべきかそれとも沖野がそれだけ彼女のポテンシャルを信じているというべきなのか……これは迂闊に手を抜けないなと思いつつも用務員室で簡単な朝食を済ませると早速仕事に入るのであった。

「んっ……やっぱり視線増えたなあ」

仕事も一段落したので身体を伸ばしていると矢張り思う事を口にする。元カノ云々で騒がれていたのにそこに自分が実はトレーナーもやれるという事が伝わっているのかあからさまに自分を見るウマ娘たちの視線が増えた。まあしようがないでしょうがないのかもしれないが……。

「ヒビキさん今暇っ!?!」

「あらっダスカちゃん」

「だからそれやめてっって言ってるでしょ」

のんびりしていると突然目の前に二つの影が走り込んできた、一つはダイワスカールレット、そしてもう一つは——彼女のライバルのウオツカだった。

「ヒビキのおつちゃんちよつと俺達に付き合ってくんねえか!?!ちよつと勝負すんだよ、その審判してくれよ!!」

「あららつまた勝負? 相変わらず元気だね」

カツコよく生きること第一に掲げる、ボーイツシユなウマ娘。優等生なスカールレットとは対照的な性格もあつて二人はぶつかり合う事が多い、というかしよつちゆうぶつかり合っている。

「それじゃあどんな勝負をするんだい?」

「いやそれはまだ決めてねえんだけどさ、折角だからおつちゃんに決めて貰おうぜつて話になったんだよ」

「折角スピカに入ったんだからいいでしょヒビキさん、ほらつチームの管理つて事で」
「やれやれ……その辺りは沖君のせいなんだけどなあ……」

ハッキリ言つてトレーナーをやる気は皆無、だが状況はそれを許してはくれないらしい。スペを見るつもりが、彼女はチームスピカに入つてしまったので彼女だけを見るとするのは不公平を呼ぶので全員を見ろという事にもなる。用務員でいたいヒビキとしては中々に辛い今が広がっている、だがそれは顔に出さない。何故ならば——ヒビキ

はウマ娘の笑顔が好きだからだ。

「それじゃあ二人はご飯食べたの？」

「まだよ」

「それじゃあまずはお飯の勝負と行こうか、どっちが多く食べられるかっつのは如何だ
い？」

「おおっそれ良いじゃん!!丁度最高に腹減ってたんだよ!!」

「よしっそれじゃあ食堂に行くわよ、ほらヒビキさんも早く!!」

と彼女らはそれぞれ手を引つ張つてヒビキを急かしながら食堂へと向かつて行く。
その姿はまだ遊び盛りな娘二人に振り回されているお父さんのようだった。

第11話

「さてと……一応顔は出しておこな……」

用務員室でヘルプに備えて待機していたヒビキは不意に時計を見つめてそんな事を呟いた、授業はもう終わっている頃でトレーニングをする子達が動き出す時間帯になっていた。余り気は進まないがスペシャルウィークの事は見てあげないといけないう。

「理事長には無理にやらなくていいとは言われたけどそうは行けないからなあ……」

『傾聴!!此方としてはその意志が無い者にトレーナーをさせるつもりはないので安心して欲しい。だがヒビキ用務員、同時に君を慕うウマ娘達は大勢いるという事は分かっている。故に時間が許す限りでいいので見てやって欲しいというのが私の本音だ!!』

「やれやれ……まあトレーナー不足を理由に兼任する事って言われなかつただけよかつたかな」

トレーナーは極めて狭き門、漸くその門を潜つたとしてもトレーナーの数に比べてウマ娘たちの方が数が多いので指導の手は足りない。理想的なのはトレーナーがチームを立ち上げてより多くの指導を受け持つ事だが……現実的にそれは難しい。加えて今

トレセンには極めて有望なウマ娘が多い、生徒会長のシンボリルドルフなどはその筆頭とも言える。彼女に憧れてトレレーニングに励む者も多く、その分コースなどや設備のメンテを受け持つ用務員の仕事も増えている。

理想的なのはヒビキにトレナーを兼任して貰う事、だがそれを理由に辞められると困るので学園は無理強いしてこないというのが実情だろう。

「やつほ顔を出しに来た、んだけど……何っ親睦を深めてるの?」

「いや普通にトレレーニングだよつつあん」

チームスピカの練習に顔を出したヒビキが目にしたのはコースで走るなどのトレレーニングなどではなく、所謂ツイスターゲームをやっているウオツカとスペシャルウイークの姿であった。ツイスターがトレレーニングにならないとは言わないが……。

「なあおつちゃんつ次はアタシとやろうぜこれ、なあなあ!!」

「いやトレレーニングだったら俺がやる必要はないでしょ」

「ヒツヒビキさんどうもおお……!!」

「ああうん、今はそっちに集中していいからねスペちゃん」

沖野曰く、レースは格闘技に近い。相手が体当たりしてくる事もある、それに備える為に体幹トレレーニングとしてツイスターゲームを行っているとの事。

「意図は分かっただけど」

「ニググググウ……」

「ハツ恥ずかしいんだよこれえ……!!おっちゃんも何とか言ってくれよ!!」

「あのさつ沖君、年頃の娘さんが相手つて事を考えなさいよ。普段から変質者のな行動してるから思考までそつちに染まってるじゃないの」

「おいおい酷い言い草だなとつつあん、だつたら代わりに代案でも出してくれよ」

不服そうな顔をしながらも此方を見てくるのだが、その瞳には打算的な物が多量に含まれていた。この男は何があつても自分と同じ側に引き入れようとしているらしい、悪いが自分はそちら側に行くつもりもないし興味も無い。だが笑顔を作る為の手伝い程度ならばやるつもりはある。

「んじやまあ俺が良くやつてる体幹トレーニングでもいいかな」

「ああそれで良いぜ、よしそこまで!!んじやこつからはस्पेमお待ちかねのとつつあんプロデュースだ」

「はっはいいいいいっ……!」

「やれやれ……」

如何にもかなり懐かれてしまっている、下手に手を抜けばそれを曇らせる事になる。それはしたくはない、やる分には手を抜かない。それが鍛錬における根本的な常識でもある。

「それじゃあハイリバーズプランクから行こうか、後沖君もやりな」

「えっ何で俺まで!？」

「俺を巻き込んだ罰、後教え子がやる事を自分でやる事で実感出来て理解度も深まるよ。俺もやるから文句言わない」

「マジかあ……」

仕返しと言わんばかりにヒビキ式のトレーニングには沖野も巻き込まれる事となったのであった。主にヒビキが行うのは肉体面の強化、これならばもう何年もウマ娘と一緒にやっているし教える事は出来る。

「ほらっ沖君真つすぐを維持する」

「んな事言つたつてこれすげえキツイぞ……!？」

「ゴルちゃんの良い感じ、そのまま後2分」

「あいよ〜」

一番ケロツとしているのはゴールドシップ。肉体面での強度は矢張り一番優れていると言つていいだろう、沖野は苦しそうにしているメニューも平気な顔をしている。

「ダイちゃんとウオちゃん、呼吸は止めない様に」

「はっはい……!!」「おっおう……!!」

ダイワスカーレットとウオツカは互いが互いを刺激し合っている、こういつたトレー

ニングで一番来るのが精神的に弱くなって自分を甘やかす事。だがこの二人はこいつには負けたくないという対抗心があるので自分を甘やかす事がない、ある意味では自分との相性が一番いいかもしれない。

「スズちゃんはまだ少しお腹を上げて」

「はいっ………！」

サイレンススズカも中々自分のペースを守りながら落ち着いて出来ている、彼女の場合はマイペースな所もあるからか揺らぎが少ないのもプラスに働いている。そして最後に……

「うぐぐぐぐつ………!!」

「スぺちゃん頑張れ、後1分。空を真っ直ぐ見るような感じだよ」

「分かりましたっヒビキさん………!!」

スペシャルウィークはこういったトレーニングに慣れていないのか苦戦しているように見えるが、根性で身体を支えながら保っている。数をこなしていけばスズカのように冷静を保ちながらやっていけるようになるだろう。

「よしっ終わりっつと」

「フツッこれ良いな、ちよつと気に入った」

「そりゃ良かった。ほらっダイちゃん達もストップ、これは我慢勝負じゃないんだから」

「ダアアア……」

ヒビキに言われて崩れ落ちるように倒れこむ子もいればゴルシのように平気な顔をする者もいる。特に彼女たちにはウマ娘用に上げる為には負荷を上げた物をやるように伝えたのだが……流石に人間とのポテンシャルの差が如実に出ています。沖野は普通の物なのに酷く息を荒げている。

「ちよつと沖君情けないんじゃない?」

「ゼエゼエゼエ……慣れてるとつつあんと一緒にしないでくれよ……初めてやるんだぞ……プランク」

「何言ってるの普通の奴でゼエゼエ言ってる、俺はスペちゃん達と同じメニューだったよ」
「嘘だろ……」

愕然とする沖野を他所に真顔なままのヒビキ、ウマ娘達と同じ負荷でやっていたがその程度は全く応えない。スズカも同じだが矢張りスズカはまだ辛そうにしているがその顔は何処か明るく次の指示を待ちわびているようにも見える。

「これを基本的に毎日5セットね、この後は腿上げとか諸々をやるよ、俺流だけどね」
「やっぱりヒビキさんのトレーニングの方がいいです!!鍛えてるって感じがして!!」

「俺のは不満って事か……」

「はいっ沖君は30秒後にもう1セットね」

「マジで勘弁してくれ」

この時ばかりは沖野は後悔しそうになったが、これもヒビキを此方側トレーナーに引き入れる為
と思いつつながら最後の1セットに望んだ。そして翌日、見事に筋肉痛に悩まされる事
になった。

「普段から鍛えないからだよ」

「とつつあんと一緒にしないでくれ頼むから……」

第12話

「ヒビキ君、リギルの練習にも顔出せないかしら」

「出来るけどヤダ」

新しい花壇を作る為のレンガ積みをしている時に唐突に話しかけられた、例え振り向かなくても相手は断定できる程度には親しい相手。チームリギルを率いるトレーナーである東条 ハナ。そんな彼女は最近自分がスピカの練習に顔を出してはサブトレーナー的な役目をしている事に関連付けて自分のチームにも顔を出せないかと交渉してきた。だが当然答えなんて決まっている、NOである。

「ヤダって子供じゃないんだから……スピカには出してるんでしょ」

「そもそも俺は用務員だよ、自主練なら兎も角チームの練習に口出しする事自体が可笑しいんだよ」

「苦情は沖野トレーナーにとって事かしら」

「そゆこと。俺はスペちゃんへのお詫びとして参加してるだけ、その関係性でスピカの皆も見えないと平等って事で見てるだけ」

一切此方を見る事はなく黙々とレンガを積み続けているヒビキにテコでも動きそう

にない事を察する、下手な交渉は通用しない。だから素直に理由を話すのが一番手っ取り早い。

「貴方に見て欲しいって子はウチにもいるのよ、トレセンで人気No.1用務員の貴方に。貴方がいるだけでモチベーションは全然違うわ」

「それを如何にかするのがトレーナーの役目でしょ。俺に迷惑が掛からないようにできるでしょハナちゃんなら」

「出来るけど貴方が来た方が楽なのよヒビキ君」

「……顔出すだけなら考えてあげるよ」

「十分よ、それじゃあ邪魔したわね」

妥協点ではあるがそれだけでも大分な進展だと納得しながら引き下がっていく。遠ざかっていく気配を感じながら溜息を吐く。

「これでリギルに行ったら行ったで黒沼君とか南ちゃんのを要請にも応えないといけなくなるからなあ……気楽に練習見に行けなくなっただけ言うのは結構な問題だな……」

既に他のトレーナーからも自分達のチームや担当の練習にも顔を出して欲しいという話は来ている、以前までは休み時間に好き勝手に見学をしていたり時折差し入れをしたりしていたのだが……それでは気軽にそれが出来なくなってしまう。下手にそれを自分が主張した不平等になり、トレーナー兼任も現実味を帯びて来てしまう事にな

る。

「しようがない……差し入れする時はたづなちゃんに名前を伏せて持つて行って貰おうかな」

何とも面倒な事になった……と思いつつも結局それは自分の行いのせいなんだよなと若干の自己嫌悪をしつつも仕事を続ける。彼女らの笑顔の為なら自分の犠牲はやむを得ないとは思っているが、それでも自分の時間は作りたいとは思っている。それさえも無くなってくるというのは少々狭苦しく思える。

「よしつ花壇はこれで良しつと……花はどんな風に植えるかな……」

「おじさま〜お待たせしました〜」

「おじちゃん〜んお花持つてきたよ〜!!」

兎も角何かは考えるのは後回し、やる事をしつかりやらなければならない。花を持つて来てくれた子達を出迎えるでしょう。

「ふへえつ〜……」

「今日は随分とお疲れだねスぺちゃん」

「はいい〜……あと少してデビュー戦だと思おうと緊張しちゃって……やっぱりヒビキさんの言うとおり病は気からって本当です〜……」

この日は練習には顔を出さなかった。ヘルプで出された仕事を行っていて終わった頃にはスピカの練習は終わっていたのである、そして用務員室へと戻ると丁度スペが訪ねて来て話がしたいらしい。お茶を差し出すと少しづつ話し出した、如何やら後僅かでデビュー戦という所なので緊張して何時も以上に疲れてしまっているらしい。

「私確りやれるかな……デビュー戦」

「まあ大勢の前で走るからね、緊張して当然。しないのなんてゴルちゃん辺りだよ」

「あゝ確かに……」

「ゴールドシツプ辺りは全く緊張もストレスも感じずに欠伸でもしながらレースに望めそうなイメージがある。今だけはこの滅茶苦茶な彼女が心から羨ましいと思う程にスペは緊張しきっていた。」

「……あのヒビキさんって如何して用務員さんになったんですか？」

「んっおじさんの事気になるかい？」

「ヒビキさんはおじさんじゃないですって!!えつと、私からしたらお兄ちゃんとかお父ちゃんみたいな感じって言うか……!!それ位ヒビキさんは心強いんです!!」

「ハハハッお兄ちゃんかお父ちゃんか、まあ俺にとつてトレセンのウマ娘達は娘か妹って感じはするね。まっ家族って印象かな」

スペの聞き方が良かったのか、普段は笑顔のままですて上手くはぐらかされて終わってし

まうのだがその時は話が続いた。

「そうだな……支えてあげたいって思ったからかな」

「支えるってウマ娘をですか？」

「いやっトレーナーもさ、あんな輝いてる舞台でウマ娘を輝けるように導くトレーナーも立派な主役だと思ったんだよ」

「主役……」

「レースって言うのは一人で走る訳じゃない、トレーナーと二人三脚、チームの皆と一緒に走る舞台だと思ってるよ俺は」

レースそごに至る間、君は一人で努力したのかと言葉の外で言われたような気分になった。これから挑むデビュー戦の舞台はたった一人で孤独な戦いだとスベは無意識で思っていたのかもしれない。故に緊張していた、スベはトレセンに来るまで他のウマ娘と顔を合わせた事も無く孤独だった。それが強く心に残っていたのかもしれない。そして——感じていたストレスが消えて身体の震えが全く別の武者震いへと変わっていた事に気付いた。

「だからさっ君は一人で走るんじゃない、隣にゴルちゃんでもダイちゃんでもウオちゃんでもスズちゃんでもいい。一緒に居るって思っ走ってごらん、そう思えばきつと緊張なんて消えるさ」

「——ヒビキさんでもいいですか？」

恥ずかしそうにしながら問いかけるスぺにキョトンとするが、直ぐに破顔してヒビキは自分の頭を暖かく撫でてくれた。

「ああっ君が望むなら俺はその隣で走ろう。そしてこれからの舞台では君の想いと望みを形にする場所だ、好きなように走りなさい」

「——はいっ!!私、ヒビキさんと一緒に走ります!!よくしけっばるべく!!ヒビキさんこれから一緒に走りませんか!?!」

「おっやる気十分だねえ〜よし行こうか、ちよつと待つてね今連絡するから」

チームの皆と一緒に走る、ヒビキの言葉が決定打となつてスぺはデビュー戦に万全な精神状態で臨む事が出来た。そしてレースでは——堂々の一位、デビュー戦を最高の形で迎える事が出来たのであった。

「あくあ……ダンス教えとけばよかつたかな……見事な棒立ち……」

ヒビキはレース後のウイニングライブでまともにダンスが出来ずに棒立ちしているスぺを見て、酷く申し訳なく思った。

第13話

コンコンコンツ

「あらつ何方でしょう、予定はないですが……」

「許可!! 入りたまえ!!」

ノックがされたのは理事長室、中で仕事をしていた理事長は迷う事も無く入室許可を出した。これがウマ娘であつて何か相談事ならば快く乗るしトレーナーや職員であつても話を確り聞くつもりである。自分の仕事だつてあるが、理事長は何よりウマ娘達の事を考えている、それ故の行動だろうとたづなは笑いながら入つて来る人を待った。そして扉が開くと――

「失礼しまゝす」

「あらつヒビキさん」

「どうもたづなちゃん」

入つてきたのはヒビキであつた。此方から呼び出すならまだしも自主的にやつて来る事は余りないのだが、理事長は思わずヒビキの持つていた包みを見て喉を鳴らしてしまつた。

「はいっこれ差し入れのニンジンケーキ、たづなちゃんの分もあるから休憩中に食べて」
「わあっ有難う御座います。ヒビキさんのケーキは美味しいんですよ」

「ウムツ!!誠に感謝!!してヒビキ用務員、御足労はこの為かな?」

「いえ本題があります」

包みを渡したヒビキ、差し入れも来た理由の一つではあるが本当の理由がある。

「実はちよつとお願いがあるんですよ」

「まあっヒビキさんからのお願いなんて珍しいですね」

「稀少!!どんな願いなのか興味がある、是非行つてくれ。賃上げ要求でもヒビキ用務員ならば容認しよう!!」

「いや給金には満足してるから、実は用務員室の増築を許可して欲しいんだ」

「説明、如何言つた理由なのかを聞きたい」

用務員室は殆どヒビキの専用室になっている。彼が一番仕事を行つていゝというのもあるが、何かヘルプがあつた時に直ぐに対応して貰う為に常駐して貰う為に専用化していると言つてもいい。実際ヒビキでないと即座に対応出来ない事例というのは何度も起きているので他の用務員からは納得と賛同を得ている。

「まあ私用事で申し訳ないんですけど……実は実家から荷物が来る事になったんだけど、俺の部屋にそれを置けないんだよね。それは是非受け取つて置きたくて」

「という事はそれなりに大きいという事ですか？」

「うんっ俺の数少ない趣味……みたいなもんだけども、ウマ娘達のトレーニングにも使える物ではあるからさっお願い出来ないかな」

頼んでくるヒビキの視線を受けて理事長は僅かに考える。本来は職員一人の私的な理由で敷地内にそう言った物を建てる事は許可できないのだが……ヒビキには度々助けられている上に下手に断つて心象を悪くするのも悪手。それにウマ娘達の為にもなるならば否認する理由などはない。

「許諾!!だがそのガレージには職務に必要な物も確りと置く事!!完全な私的所有物のみを置く事は厳禁とする!」

「有難う御座います理事長、断れたら倉庫を探さないといけない所だった」

「そんなに大きいんですかその荷物って」

「まあ大きいと言えば大きいかな……三日もあれば建てられる規模にはするつもりだから」

そうなるまで大きいガレージになるのではないのだろうか……と二人は一瞬思うのだが、ヒビキがその気になつて作るガレージで三日と考えるとそれなりの大きさになるのではないだろうかと思ひ始める。そして許可を得たヒビキは待機時間をガレージ建造の時間へと当てるのだが——三日後、そこにあつたのは……

「うんつまあまあな出来かな」

「いや……かなり立派なガレージに見えるのだが」

用務員と見事に一体化しているミニバン位ならば簡単に収容出来るほどに立派なガレージが作り出されていた。これをたった一人で、しかも三日で作り上げたというのだから本当にどうなっているのだろうかと思わず様子を見に来たシンボリドルフは呆れてしまった。

「あれっシンちゃん如何したの」

「今日荷物が来るのだろう、丁度私にも暇が出来たので見物させて貰いに来た。ヒビキさんの趣味と言われたら気にもなるさ」

「おじさんのプライベートが気になるねえ……物好きだねシンちゃん」

「フフフツツ気になるさ」

そんな風に話しているとヒビキは懐から何かを取り出した、それは金と銀で装飾された懐中時計だった。腕時計や携帯がある今、滅多に見る事が出来なくなっているそれを見たドルフは思わず興味深そうな目で見つめてしまう。腕時計などに比べて手入れなどにも必要になってくるそれを使っているは意外だが、妙に似合っているなど思っていると、ヒビキの顔つきが柔らかくなっていた。

「もうすぐ時間だね。正門に行くかうか」

「ああつ見学させて貰おう」

ルドルフを連れたまま正門へと向かう、その最中で彼女はどんな趣味なのだろうと思案を巡らせてしまった。身体を鍛える事が趣味だと思っていたが、それ以外となると如何にも思いつかない。料理だろうか、それとも全く別の物だろうか……そう思っていると正門に到着する、まだ来ていないようだが———と思っていると何かが見えて来た。それは———巨大な荷物を背負った一人の少女であった。

「もしかして、あれなのか……？」

「ああつ時間通り………だけどまさか一人で来るとは………成程、そりやそういう日数指定するよなあ………」

と何やら事情を察したか、呆れたような声を上げてしまったヒビキ。そんなヒビキに向こうに気付いたのか、少女は一気に加速した。巨大な荷物を背負っているとは思えない程に見事な走り、重さを感じていない様なブレの無さ、エネルギーを逃がさぬように振られている腕、理想的なランニングフォームだと思わずルドルフも感心してしまう程。そんな走りを見せたのは———一人のウマ娘だった。

「響鬼おじ様〜!!」

艶やかな腰まで届く程に長い黒髪の中に紛れる前髪の白髪はチャームポイント、まだ幼さが残るその表情は何処かテイオーに似ているとルドルフは思った。赤い色の瞳も

美しいが幼げな表情と相まって愛らしさへと変わっている。

「響鬼おじ様お久しぶりです!! 嬉し恥ずかしながらお届けに参りました!!」

「よしつご苦労様、しつかし……態々届けに来なくても良かったんじゃないの?」

「えへへ私の手でお渡ししたかったので!!」

しょうがない子だなくと言いながらもヒビキは笑みを浮かべたまま少女の頭を撫でる、少女はキヤキヤ言いながらも久しく感じる感触に喜びを感じているのか顔が蕩けている。そんな少女はルドルフの目がある事に気付いたのか、ハツとしながら咳払いしながらも今更ながらピシツとした。

「初めましてっ響鬼おじ様の姪っ子、雷電あきら輝と申します!!」

少女、輝は満面の笑みを作りながらルドルフへと挨拶をするのであった。

第14話

「ライデンアキラか……良い名だな、シンボリドルフだ」

「シンボリドルフ……凄いカッコいい名前ですね!!」

「フフフツ有難う」

「輝、ウマ娘界の皇帝様にその反応はないでしょ」

「えっ皇帝、エンペラー……ああっ!!?」

あの皇帝!?シンボリドルフ!?と漸く気付いたのかオーバーリアクション気味にひえええっ!!と声を上げて驚く少女にルドルフは思わず笑みを作った、何とも新鮮な反応だからだ。自惚れではなく、自分の名前はそこまで有名だからである。それなのに指摘されるまで気付かなかったというのは中々に嬉しい気がした。

「すいませんすいませんっ私、そういうのに全然興味なくて……!!偶にテレビに映ってるのを見た事がある程度で……!!」

「気にしていないから顔を上げてくれ」

「ううっ……何か恥ずかしい……」

輝自身、ヒビキに会えるという事でかなり舞い上がっていたのもあったが彼女自身が

有名なウマ娘に興味などが引かれないタイプだったのもあつたらしい。そう言うタイプにはルドルフ自身も覚えがあるので余り不快には感じていないので気にしていない。

「ライデンアキラちゃんと呼んだ方がいいかな」

「輝で結構ですよ、皆にそう呼ばれてますので」

「そうか。ではそのように……アキラはヒビキさんに何を届けに来たのだ？」

「フフンツとつてもいい物です!!」

胸を張つてそう断言する輝、兎も角それを降ろす為にも用務員室へと案内する事にした。初めて来るトレセンに興味津々と言わんばかりに瞳を輝かせている輝にルドルフは先輩として声をかける。

「中央は興味深いか、アキラは何処から来たんだ？」

「奈良県から来ました。そこで普通の中学に通ってます」

「何つ奈良のトレセンには通っていないのか？」

「ええ、学費もバ鹿になりませんから」

それを聞いて納得した、ウマ娘として活躍する為の養成学校であるトレセンは良くも悪くも学費としてかなりのお金が掛かってしまう。それを考慮して支援制度もかなり充実しているがそれでも家庭の事情で通う事が難しいウマ娘も少なくない。なので高等部からトレセンに入るつというのもよくある話でアキラもその類だろうと納得する。

「よし此処に置いて」

「はくい、よつこらせパレート」

「おやつさんの口調移ってるよ」

ギャグめいた言い回しに思わずドゥルフは口元を抑えて込み上げる笑いを抑えた、このようなギャグもあるのかと思いつつも参考にさせて貰おうと内心で思っていた。そして後日、生徒会室で似たような事を言つて副会長のやる気が下がった。降ろされた荷物の包みなどが剥がされていき中身が露わになった、そこにあつたのは——太鼓であつた。

「これは和太鼓……か」

「そつ俺の趣味つて言うのは太鼓なんだよ」

運ばれてきた太鼓は二つ、3尺サイズ1尺は30.303cmでもう一つは1尺と3寸1寸は3.0303cmと言つた所だろう。小さなものでも一般的に想像される太鼓のサイズだが、3尺の物はそれ以上の存在感を放っている。1尺の方は何処か初々しいというか酷く新しいという印象を受ける。

「ありつこの太鼓は？こつちのは俺のだけど……」

「そつちは私が作つた太鼓なんです、記念すべき第一号!!」

「えつマジで？凄いなばつちゃんが認めたんだ」

「大まけだつて言われちゃいましたけどね」

てへつと言いなから舌を出す輝、ルドルフはそれに驚いた。素人目には見事な太鼓にしか見えないこれを作ったのがこの少女だというのだから、それをヒビキは優しく触りながら感触を確かめている。その瞳は酷く真剣で見た事がないような物だった、そして太鼓の面を磨ると……輝の頭を優しく撫でた。

「うんっ上出来上出来。輝ならもつと凄くなるさ」

「えへへ〜おじ様ならそう言ってくれと思います、なのでこれは私からのプレゼントです!!ぜひ使ってください」

「いいのかい輝、自分の合格一発目を」

「一発目だからおじさまに使って欲しいんですよ、私の目標である響鬼さんに」

何処か真剣な瞳を向ける輝、目標という言葉にもルドルフは興味を惹かれた。常に敬意を払っているのかそれは呼び方にも表れている、唯のおじと姪という関係ではないように思えるがプライベートに関わる事だと思ったので追及はしなかった。

「アキラ、折角来たのだから此処で走っていかないか?先程の走りは見事だった、是非君の全力を見たいのだが……」

「アハハッそうしたいのは山々なんですけど……奈良から此処まで走ってきたのもうくたくたなんです」

「——何っ!？」

「あく……やっぱりか」

呆れたような声を上げるヒビキ、如何やら自分の予想通りだったのか……と溜息混じりに強く輝の頭をぐしやぐしやと撫でまわす。余りに強い力に輝は悲鳴を上げる。

「うみやああああ!!？」

「このおバ鹿」

「やめてくださいおじ様あああっ!!?背がっ背が縮むうううう!!」

「三日も駆けて此処までくるおバ鹿なんて縮んでしまえい!!」

「いいいいやああああああ私はナイスバディになりたいんだああああ!!!」

目の前で行われる寸劇には意識が行かず先程の言葉の意味にルドルフは驚いた、考えがあつていたのであればアキラは奈良県から此処まで和太鼓を背負つて走つてきた事になる。奈良から此処、東京の府中にあるトレセン中央校は直線距離で結んでも300キロ以上はある筈。普通ならばそんな事をしようなんて考えもしない、加えてこんな大荷物を背負つてである……そこから考えると彼女のポテンシャルはとんでもない事になる。

「良くもそんな無茶を……」

呆れるヒビキとは対照的に素直に感嘆してしまうルドルフに輝は頭を押さえながら

も尊敬するおじの真似をした。

「私も結構鍛えてますからっしゅっ」

「だからってそういう事は二度としない事、約束しろ。それで今日はこの後どうするの」「分かってますって……ホテルで一泊してから新幹線で帰るつもりです、というかこの後すぐにホテルを取って寝ます」

「ならば良し。会いに来てくれたのは嬉しいけど今度は普通に会いに来なさい」

「は……い……」

輝は若干落ち込んでいるようにも見えた、此処まで文字通り自分の力だけでやって来たのだからそれだけ自分の身体は鍛え込まれている。それを褒めてくれることを期待したのかもしれない。がっぴビキは肩を疎めながら今度は優しく頭を撫でる。

「でも凄いで、流石は俺の姪っ子だ。今度来た時は一緒に太鼓の合わせをやるうな」

「うんっよろしくお願ひします響鬼おじ様!!」

完全に心が通じ合っているやりとりをルドルフは少し羨ましそうに見つめていた。自分もあんな風に撫でられたい……と思う中、輝を正門まで送っていき、そこで輝はタクシーを拾ってそのままホテルへと向かって行ったのであった。

「何ともパワフルな姪が居たんだなヒビキさん」

「よく一緒に鍛えてたからね、ここんところ帰れてないから見てあげれてないけど、あの

様子だと俺のメモとか使つてずっと鍛え続けてたな。だからと言っても此処まで走つて来るとか完全にバ鹿の所業だけど」

「ハハハッ……しかし素晴らしい逸材だな……」

と何処か瞳を輝かせているルドルフ、何を考えているのか敢えて言及はしないでおく。

「それでヒビキさん、あの太鼓は何に使うんだ。趣味の他にウマ娘の鍛錬にも使えると理事長に言っていたらしいが」

「ああ、ほらっスピカのダンス特訓の足しにでもなればいいと思つてさ。ウイニングライブでダンスが酷かったじゃない」

「ああ……あれは本当に酷かった。学園の恥だ」

ルドルフもそれには同意していた、スぺだけに言えた事ではないがスズカ以外のスピカのウイニングライブはかなりひどい有様だった。故に彼女からもテイオーにダンスの特訓をスピカにするようにと指示を出しているらしい。

「少なくともリズム感覚とかは俺でもなんとかなると思うから」

「そうしてくれると助かります、因みにヒビキさんは踊れるんですか?」

「踊れるよ。何なら試すかいシンちゃん、Shall We Dance?」

「機会があれば是非お願いしよう」

第15話

「さて今日もダンスの特訓をやるぞ、その後には走るがな」

「つてあのっテイオーさんいませんけど……」

チームスピカの部室、そこで本日の子定を聞かされるのだがそれを聞いたスベは思わず聞き直した。歌とダンスの先生として生徒会長であるシンボリドルフから遣わされているテイオーの姿が見えないのである。昨日のカラオケのように姿が見えると思つたら全く見えないのである。

「まあいないつつつたらおっちゃんもいねえけどな」

「ヒビキさんはしようがないと思ひますけどね、そもそもが無理矢理トレーナーが巻き込んだもんだし」

「だよな〜トレーナーは罰として俺達と同じメニューさせられるのは爆笑したけどな」

「うるせえ……さて、テイオーには勿論ダンスの先生として参加して貰うが……先に行つてるんだ、ホラッ行くぞ」

トレーナーに連れられて外へと出て歩いて行く、てつきりまたカラオケかと思つたが如何やら違ふらしい。学園の外に向かうのではなく敷地内を歩いて行く、だがウマ娘達

は歩いて行く内にその優れた聴力で何かを聞き取った。重低音が連続して響いている。

「何かしらこの音……」

「わかんね」

「でも良いなこれっこの重低音超カッコいいぜ!!」

バイク趣味があるウオツカはこの重低音が既にお気に召しているらしい、そして見えてきた先が漸く分かった。そこには用務員室であった、それを見てウマ娘達の耳がピクピクと動いて尻尾も嬉しそうに揺れ動いている。それを見て沖野はヒビキの慕われ度を改めて思い知るのであった、そして到着したそこでは——増設されたガレージから出された大きな和太鼓を叩いているヒビキとそれに合わせて踊っているテイオーの姿があった。

「おおっおっちゃんが出来たのかこれ、アタシもやりてえな!!」

とゴルシは別の方向でやる気を出してしまっているが、別に太鼓をやらせる為に連れて来たのではない。

「ハッ!!ハッハッハッ!!」

時折入る勇ましい掛け声、それと共に唸る剛腕によって高速で振るわれるバチは凄まじい速度で太鼓を打ち鳴らしている。そして重低音に混ざるように入れられる歯切れのよいカッ!!という音、それを入れつつも鼓面を叩く。それに合わせて踊るテイオーも

かなり凄い、太鼓の音のみだが曲として成立しているが太鼓のみで踊るのがかなり難しい筈——だが確りと踊っている。加えてボーカルまでやっている。

「……フウツ……おじさんこれ最高!!ねえねえねえ僕のウイニングライブでもこれやってよ絶対に盛り上がるって!!」

「あのね、ウイニングライブは走り切ったウマ娘達が主役でお客さんもそれを見に来てるの、そこにおじさんが紛れ込む訳にはいかないでしょう。というかうまびよい伝説って意外とむずいね……時折ミスったよ……んっ皆来たか」

「皆遅いよ」

首掛けていたタオルで汗を拭きながらも此方を見たヒビキとテイオー。

「もしかして此処で特訓するんですか?」

「そう言う事だ、カラオケの割引券が毎回ある訳じゃないし時間の制限もあるからな。いやあとつつあんから提案されて助かったわ、俺の財布にも限界はあるからな」

「普段から金欠の癖に何言ってるんだか、そういう自覚あるならハナちゃんに集めるのやめなさい。まあそういう事だから俺もダンスの特訓に協力する事になったから、流石にライブのあれはまずいからねえ……」

ヒビキに言われて改めてそれを自覚する一同、まあ原因はダンスの練習を疎かにしたトレーナー側にもあるのだが……此処は追及しないでさっさと練習を行う事にしよう。

「それじゃあ僕がまずは手本を見せるからね、おじさんもう一回お願い〜」

「せめてもう一回楽譜見せてくれないかな、まだ覚えきれてないんだけど」

「え〜!? 僕おじさんの太鼓で踊りたいのに……それじゃあ軽くみんなでやってみようか」

渋々だがラジカセの電源を入れて先日の復習と題して踊り出すテイオーに慌てて続くスペ達、それを見つめながらもヒビキはライブで使われる曲の楽譜へと目を通して行く。そんなヒビキへと沖野は改めて感謝の言葉を送る。

「あんがとなとつつあん、お陰でみんなのやる気も爆上がりだ」

「お礼を言うつもりがあるなら他のトレーナーさんに事情の説明しといてね、来てるんだから顔出してくれって奴」

「あ〜……しなきやダメ?」

「駄目に決まってるでしょ」

ヒビキにとつて今の所一番の問題が他のトレーナーからの誘いなのである、時折上手く丸め込んで誘い込みを行おうとするトレーナーもいるので困っている。なのでそもそも原因なのである沖野に文句を言えと言う風に最近は言うようにしている。

「もう面倒臭いからやっちゃまえよトレーナー」

「……」

「お、おいとつつあんなんかすげえ悪い顔してるぞ何考えてんだ!? おいちよつと待ってくれマジで何を考えてるのか教えてくれ!!」

流石の沖野もやばいと思つたか大慌てになつたが、その時にはもう遅い。

「お〜い皆、沖君が皆の成長振りと頑張りに感動したからうまぴよい伝説やつて見せてくれるってさ」

「はあああああああああ!!?」

皆はマジで?! みたいな顔をしているが、普段からの行いが災いしたのか、それともヒビキと通じ合っているのか即座に悪い顔になつていく。

「マジかトレーナー!! よしつアタシカメラ回すぞ永久保存版だな!!」

「やめろゴルシイ!! ぜつてえやらねえからな!?!」

「逃がさないわよ」

「覚悟しろ、踊るまで帰さねえからな」

「か、勘弁してくれよ!!? おっおいだつたらとつつあんも踊れよ!!」

「あつ俺は太鼓やるから、安心していいよ全力で魂込めるから」

「そういう事じゃねええええええ!!」

「後真面目にやらないと何度でもやらせるから」

「ぎゃあああああああ!!」

「えっえっと……スズカさん如何しましょう……?」

「うくん……でもちよつと見てみたいかも」

「僕もく!!」

この後、やけくそ気味に沖野トレーナーはうまびよい伝説をやる事になった。やって
いる最中、ウマ娘達は爆笑していたり必死にそれを抑えていたりと様々だった。

「なんて羞恥プレイだ……」

「あつゴルちゃん、映像こっちにも回してね」

「フフフツおっちゃんも悪よのおく」

「いえいえゴルちゃん様こそく」

「好い加減にしろやそこ二人い!!!」

第16話

「スペシャルウィーク、弥生賞大勝利を祝して乾杯!!」

『かんぱーい!!』

その日、事務員室のガレージは賑わっていた。ガレージには雨よけの屋根もあるのでその下にテーブルや椅子を準備してそこでパーティを開いていた。今日は見事に弥生賞の大勝利をもぎ取ったスペのお祝いなのでヒビキも場所を貸してくれた。

「さあどんどん作るよ、ニンジンタップリ焼きそばいる人」

『はーい!!』

「全員ね了解」

本来は部室でこういった事をするべきなのだが、沖野曰く響鬼もチームスピカの一員なので一緒にやらなければ意味がないと力説しそれに珍しくチーム全員が賛同したので此処でやる事になった。

「プツハ〜!!このニンジンジュース最高!!どこで買えるのよこれ!?凄く美味しいわ!!」

「いやマジで美味しいなこれ!!俺お代わりっ」と!!」

「ああつちよつとアンタそれで何杯目よ!?私まだ2杯しか飲んでないのよ!?」

「俺だってまだこれで3杯だけだったの!! ああおい注ぎ過ぎだったの!!」

相変わらず簡単な事でも争いごとになるダスカとウオツカ、それほどまでにジュースが気に入ってくれたらしい。

「はいはいっジュースは沢山準備してあるから大丈夫だよ、はいヒビキ特製ニンジンジュース」

「えっヒビキさんのお手製なんですか!？」

「とうかここに^{ある}料理全部俺が仕込んだものだよ?」

「嘘だろおっちゃんどんだけ万能なんだよ!？」

「鍛えてますからっシユっ」

母親から料理を仕込まれているウオツカはテーブルの上を埋め尽くすように並べられている料理の数々をたった一人で作ったというヒビキに驚く、ニンジンハンバーグにローストチキンにニンジンポタージュ、ニンジンが練り込まれた特製餃子……どれもこれも手が込みまくっている。

「おっちゃんっ焼きそばお代わり〜」

「私もお願いします!!」

「はいはいっそんなに気に入ったのかい」

「だって美味しいんだもん、なっスベ」

「はいっすっごい美味しいです!!」

満面の笑みでそんな事を告げてくるスベ、今日の主役の意見を無視は出来ないとお代わりを出して上げるが……もう既に随分と食べているように見える。なんだか傍から見たら妊婦のように見える程度にはお腹が膨れているのにまだ食べられるのだからウマ娘という奴には驚かされる。

「おじさん僕にもジュースお代わり頂戴〜!!」

「やれやれ折角作ったジュース全部飲まれちゃうなこりや、しかしテイちゃんもよく教え込んだもんだね。弥生賞だとかなり良くなつたもんねスベちゃん」

「うんっ頑張ったもん!!」

TVで観戦したが、最後のウイニングライブは最初と比べると大幅に進歩しているスベの姿がそこにあつた。まだ何処かぎこちなく、まだ周囲からは遅れているようではあつたが棒立ちに比べたら圧倒的な成長と言えるだろう。

「あつそうだ、僕スピカに入る事にしたから宜しくね!!」

「へえっそりや良かったじゃないか」

『えっく!!?』

「えっ何その反応」

ヒビキからしたらスピカの面々はそれを知っていると思つていたが、如何やら今のこ

の場で初めて言った事らしい。と言つてもヒビキ的にはもう既にスピカのメンバー的な印象があったので何とも言い難いのが正直な反応。だが彼女が尊敬し憧れているルドルフがいるリギルではなくていいのかとは思うが。

「僕会長に追いつく、だからスピカで力を付けて会長とレースに出て見せる!!」

「良い目標じゃないか。どうせだから皇帝を越える帝王になつちやえなつちやえ」

「あつそれカッコいい!!よくし最高に凄い帝王になるぞ!!」

祝いの席に新たにチームメンバーとなつたテイオー、彼女の夢もスぺの日本一のウマ娘になると同じ位に大きな目標。あの皇帝に並び立つ、それは極めて困難な道筋、だがこの子ならばきつとそれは出来るだろう。皇帝という大きな星を目指して進む新たなしい光……こういうのを見るとどうしても応援したくなるのは歳だからだろうか。

「ねっおじさんっスぺちゃんのお祝いだし太鼓やつてよ!!」

「今かい、夜もいい時間だから不味くないかな」

「えっくいいじゃんいいじゃん」

トレセンの敷地内とはいえ周囲には一般の人が住んでいるのだからこの時間に余り煩くしてしまうと迷惑が掛かる、昼間ならまだしもこの時間は流石に……と渋るヒビキだがテイオーを援護するようにダス力達も続いた。

「良いじゃないヒビキさんっ折角のお祝いなんだから派手に行かなきゃ!!」

「そうそうっ俺もおっちゃんの太鼓聞きてえよ!!」

「ケチケチ言わずにやっちゃまえよおっちゃん」

「好き勝手言ってくれるなあ……スズちゃんも何か言っただけよ」

「今日ぐらいいいじゃないんですか?」

「ええっ……」

どうにも逃げ場がないような気がしてきた。沖野に目をやってみると大丈夫だろ、やっちゃまえとサムズアップが帰ってきた。溜息を吐いているとスベが笑顔を向けてくる。

「お願いしますヒビキさん、私ヒビキさんの太鼓聞きたいです!!だって聞いてると凄く爽やかな気分になるんですもん!!」

そんな風に自分へと思いをぶつけてくるスペシャルウィーク、その笑顔はヒビキが好きな類の物だった。如何にも自分はこういう物に弱い、何時弱くなったのか……いや元々自分は弱いかと思いつつも如何やらやるしかなさそうなので菜箸を置きながらバチを握る。

「よしっそれじゃあやったるか、苦情が来ても沖君の責任って事で♪」

「ええっ俺のせいだよ!?!」

「だってスピカのトレーナーなんだからチーム内で起きた問題は君が責任を持たなきゃ

いけないでしょ」

「ぐっ……とつつあん、最近なんか黒くなってきてねえか!？」

「お陰様でね♪」

沖野の曇った声と引き換えにウマ娘達からは歓声が上がる、ヒビキは太鼓をセットしながらとある事を考えそうになった。そして呼吸を整えながら、スぺのこれからの躍進とテイオーのスピカ参入を祝う為に太鼓を叩く。

「ではご照覧あれ、雷電 響鬼が見せますは豪火連舞の型による演奏で御座い!!」

「やれやれ〜!!」

「カツコいいぞおじさ〜ん!!」

「あつりクエストは？」

『ズコ〜!!!』

第17話

「えつとつこんな感じ、かなあ……?」

「そうそう上手上手。やっぱりこういうのは女の子の手を借りるのが一番かな」

「そ、そんなに褒めないでよお……」

普段通りに仕事をしているヒビキ、要望のあった花壇の仕上げである花を植える作業を行っていたのだがそんな彼を手伝う一つの影があった。男としてもかなりの大柄であるヒビキの隣にいとその小柄な体が余計に際立っている。少々影があるが、精一杯に笑顔を浮かべようと努力している姿が見えている。臆病で弱気だがとても優しい心を持つなウマ娘、ライスシャワー。

「にしても悪いねライちゃん、手伝って貰っちゃって」

「いいいいのライスがしたくてしてる事だから……邪魔じゃなかったらつもつとお手伝いしたい……」

「有難い位だよ、如何してもこういう花を植えるセンスは女の子の方がいいからね」

パンジーを植えながらもライスの頬は少しだけ赤く染まっていた。素直に自分の事を褒めてくれたり、話しかけてくれたりしているヒビキに彼女も懐いていた。特に

朝食などは姿を見れば隣に座つて食事を取らうと誘つてくれるほどに仲良しだとヒビキは思っている。

「よしっこんなもんか、ライちゃんはこの後どうする?」

「え、えつと……おじさまと一緒にご飯食べたいかな……?」

「ありやもうお昼の時間随分オーバーしてるな……ごめんねライちゃん、長く付き合わせちゃつて」

ライスシャワーはヒビキの事をおじさまと呼ぶ。ヒビキ自身はおじさんで良いというのだが、曰く彼女自身が好きな本の中に出てきて主人公を支える素敵なおじさまにヒビキは似ているらしい。正直輝が呼ぶおじさまとはまた意味合いが変わつてくるし気分も悪くないので好きなように呼ばせている。なので自分は素敵な用務員のヒビキおじさまという事らしい。

「んじや俺がご飯作つてあげるよ、丁度ハンバーグのタネを作つてあるからニンジンハンバーグなんて如何だい?」

「うんっライス大好き……!!」

「あとニンジンポタージュがまだ残つてたはず……後はニンジンサラダも作ろうかな。ハンバーグにはチーズと目玉焼きも付けるかい?」

「美味しそう……!!」

キラキラと目を輝かせるライス、彼女は見た目は中学生のように見えるがかなりの健啖家。その身体の何処に入っていくんだという量を平気で食べる、以前も一緒にラーメン屋に行った時はウマ娘用のサイズでの特盛でトッピング全乗せを普通に頼んで平らげていた。

「んじや行こうかお姫様」

「ふえっ!? ラ、ライスはお姫様なんかじゃないよ?」

「女の子は皆お姫様になる権利があるんだよ、このおじさまにお姫様を守る騎士をさせて貰えないかな?」

「え、えとえと……それじゃあ……私を連れて行つてね騎士おじ様」

「畏まりましたライス姫」

そんな寸劇を咄嗟にするのだが、お互いに耐えられなくなつたのか思わず吹き出してしまつて一緒に笑いながら用務員室へと向けて歩き出した。ライスは早く行こつ♪と手を引つ張る姿は本当に可愛らしかったとヒビキは語る。こんな笑顔を作れるんだから不幸なんて起こる訳がないよつと内心で彼女に向けた言葉を放つ。

「さて出来たぞ〜お腹も膨れて足が速くなるご飯だよ〜」

「おっ美味しそう……!!」

思わず生睡を飲み込みながらテーブルの上に広げられたニンジンハンバーグにサラ

ダ、ポタージュ、野菜スティックと見事にニンジン尽くし。特大のハンバーグには目玉焼きが二つが乗っかっており、傍にはチーズの入った容器がスタンバイされている。

「ごめんねサイズ大きくしちゃったから時間掛かった」

「ううんっ大丈夫だよおじさま」

「その代わりご飯も含めてお代わりも焼ける間に準備したからたんとお食べ」

「うっうん!!」

「それじゃあ手を合わせて——」

『いただきます!』

礼儀正しく挨拶をしてから食事に手を付ける、ヒビキも量こそ違うがライスと同じメニュー。但しハンバーグに刺さっているニンジンも箸でも割れる程に柔らかくなるように丹念に調理をこなした物。その影響か甘さがかなり凄い事になっているが、デミグラスソースとの相性は最高でパクパク行ける。

「おじさまおいひいよ……!!」

「ハハッそりや良かった」

破顔しながらも溢れ出る幸せが分かる程に耳と尻尾が揺れ動く、どの料理も美味しい為に次はどれを食べようかと迷う程。折角なので卵の黄身を破って中身をソースへと融合させる。それを絡めたハンバーグの上にニンジンを乗せながらそこへ更にチーズ

を掛ける。出来る限り最高の組み合わせに思わず喉を鳴らしながらライスはその口へと運ぶ。

「おいひい〜!!」

「ハハハツそんな風に笑われるとこっちが嬉しくなっちゃうな」

如何やら渾身の出来だったらしい、彼女の顔を見れば一目瞭然。矢張りウマ娘は笑顔でなければいけない、ライスは周りで起きる不幸は全て自分のせいと思い込んでいる。実際は間が悪いだけなのだが起き過ぎてジんクスのようになってしまい、彼女は常に暗い。だがこれを見るがいい、こんないい笑顔を浮かべるライスが不幸を呼ぶわけがない。

「おじさまっお代わり貰ってもいい……かな？」

「おういいよいいよ、どんどん食べな。ライちゃんてばちよつと線が細すぎるからね、食べて英気を養って運動すればもつともつと綺麗な人になれるよ」

「ほっ本当？おじさまが言うんだからそうなのかな……じゃっじゃあいつぱい食べるね」

「食べなさい食べなさい」

うんっ♪笑顔を浮かべたまま自分でお代わりを取りに行くライスは酷く愛らしい。小さい頃の輝を思い出す、ヒビキはリモコンでTVを付ける。するとそこにあったのは

——スpegが今日出ているレースが映っていたがそれはもう終わった場面だった。遅かったと思うが——そこにあつたのは1着でゴールしたセイウンスカイが客席へと向けて手を振っている姿。そして……3着でゴールし疲れからか動けなくなっているスペシャルウィークが映った。

「……そうか」

「如何したのおじさま?」

「うんっ? いやなんでもないよ、やつぱりライちゃんは笑顔が似合う子って思ってたさ。

そのままいつもニコニコしたら幸せいっぱい来るよ、笑う門には福来るってね」

「そうかな……? と戸惑っているライスを見ながらTVを消した。

「……似てたな、あいつに」

「ふえ?」

第18話

「やっぱりいると思つたよっスぺちゃん」

「ヒビツキさん……」

夜、すっかり日も落ちて辺りは暗闇に閉ざされてそれに反抗する街灯の光が少々頼りなさげに照らしている様はまるで今の彼女の内心を現しているように見えた。大粒の涙を流しながらも内部が空頭になっており、そこに向かって様々な思いを吐き出す場にもなっている大樹のウロへと悔しさを爆発させていた。

「これから付き合わないかい、ニンジンジュースは出すよ」

「はっはい……」

軽く背中を叩いて用務員室へと歩き出す中で背後にある気配に気づいたのか、ワインクをして任せて欲しいと合図を送るとそこから気配は消えていた。

「はいっヒビキおじさん特製ニンジンジュース」

「有難うっ御座います……」

用務員室へと上げられたスぺは差し出されたジュースを受け取って少しだけ口に含む、ほんの少しだけのつもりだったが以前飲んだものよりも更に美味しくなっているも

のなので驚きながら一気に飲み干してしまう。

「凄い美味しいです!!この前のお祝いの時よりもおいしいです!!」

「そりや良かった。知り合いから美味しいリングォを貰ってね、それを使ったんだよ。ニンジンオンリーじゃなくて他にもリングォとかバナナとか入ってるんだよ、はいお代わり」

「だから美味しいんですねっ有難う御座います」

先程の涙が嘘のように美味しそうにジュースを飲むスぺに同じように珈琲を啜る。矢張りコストリカコーヒーは美味しい、この香りが堪らなく好きだとそれを堪能しているとスぺが此方を見ているのに気づく。その視線は珈琲に注がれている。

「気になるかい?」

「あつすいませんヒビキさんが凄い美味しいそうに飲んでるからその、美味しいのかなあ
くって……」

「うん美味しいよ、試すかい?」

「はいっちよつと挑戦したいです」

という事なのでスぺにも珈琲を入れてあげる事にした。砂糖やミルクもあるのだが、ブラックで試してみたいとの事なのでそのまま差し出す。それを受け取りながらもコップの暖かさを感じつつも息を吹き替えて少し冷ましてから口へと運ぶ。

「につ苦い……」

「砂糖いるかい？」

「いえつ大丈夫です苦いですけど……今はこれが美味しく思えるんです……」

苦い経験、それがいま彼女が味わった物の正体、それがどんな物かまだ抽象的で形にしきれていない。故に珈琲の苦さでそれを無理矢理形にしてのみ込んでいる。彼女が飲んでいるのは珈琲ではなく今回のレースで味わった全て、自分の不甲斐無さだけではない、今日のレースを応援してくれた母の想いに応えられなかったという悲しさや悔しさ……それを少しづつ自分に取り込んでいく。

「ヒビキさんっ……私、一緒に走ってたのに負けちゃいました……精一杯、やったのに……」

「ああ知ってる、だけど君が懸命に努力している時と同じように皆も同じように努力してたのさ」

安易に慰めはしない。此処で慰めれば彼女はそれに溺れてしまう、だがギリギリのラインを見極める。

「例えどんなに才能があるアスリートでも、例えどれだけの鍛錬を積んだ人間でも一度勝負つという場に出れば絶対なんてなくなる。その場の環境、周囲の空気、相手のオーラ、様々な物が自分に影響を与えてくる。それを受け止めて力を発揮するのか、それと

も自分も負けないと周囲を喰らうようにするのか……それが勝負の分かれ目さ」

淡々と語られるのは勝負というシビアな世界における法則、ルール、流れの一つ。如何に自分が鍛錬を積んだとしてもそれが100%発揮出来るのかは分からない、自信が慢心に化けるかもしれない、煽られた不安が絶対的な自信へと化けるかもしれない、それ程までに勝負を取り巻く環境は残酷なのだ。

「じゃあっ……如何したらいいんですか……う？私はず……」

此処まで勝っていたスベが感じた本気の悔しさによる重圧が弱くなった精神を殺そうと迫っている。まるで縄の様な声、迷子になった子供が近くに居た大人に道を尋ねるような姿が——そこまでもが似ていた、あいつに。

「鍛えるしかないでしょっ」

「へっ……う？」

望んでいた救いの言葉、それは普段からヒビキが口にしてている鍛えるという物だった。思わぬ言葉にポカンとしてしまうが、それに笑いながら冷蔵庫からミルクを取り出す。

「負けない自分、勝てる自分、譲れない自分、それになる為に鍛えまくるしかない。その悔しさだつて鍛える為には必要な物なのさ」

「悔しさがつが……う？」

「そうさ」

そう言いながらスペのカップにミルクを入れる、スペはいらないと言いたかったがヒビキの顔がそれを言わせてくれなかった。

「確かに悔しさは苦しさ、だけどさその苦さは自分の努力次第でどんな風にも形を変えていく。ちよつと考え方や方向を変えるだけで良い、飲んでみな」

「はいっ……あつ」

ミルクが足されて飲んだ珈琲は強い苦さを感じなかった、牛乳によつて苦みが和らげられていたが先程まで顔を歪める程の苦味が旨味へと変わつていた。先程まで感じられなかった珈琲のkokも強く感じられて牛乳の仄かな甘みで凄く美味しくなつていた。

「スペちゃん、君はさつきの珈琲と同じだよ。そこに入れる牛乳はこれからの君の経験だ、努力だ」

「さつきの私……」

「そう、そして目指す君が今の珈琲だ。そこに入れる物は君が決めなさい、どんな経験をしてもいいし努力をしてもいいんだ。強くなれっスペシャルウィーク、君はスペシャルだ、その名に相応しい特別な存在になれる」

「——っはいっ私もつと強くなります、その為に鍛えますっ……!!!」

「それでいい、その笑顔こそが君だ」

漸く自分の知っているスペシャルウィークへと戻った。矢張り彼女はこうじゃないと。

「あの珈琲のお代わり貰ってもいいですか？」

「この後寝られなくなるかもよ？」

「飲みたいんです！」

「はいはい分かったよ、ミルクもね」

少しばかりの我儘、この位は聞いてあげるのが大人の役目だろう。そう思いながらある事が脳裏を過る、そう言えば……あの時もこんな感じだったなど。

「懐かしいな……」

「何がですか？」

「いやねっ……昔にもこうやって慰めた事があつたんだよね、スペちゃんの姿が余りにもその時の姿にそっくりだったからなんかさ放っておけなかつたんだよね」

「へっく……どんな方だったんですか？」

「そうだな……」

改めて思うとどれだけ彼女とスペが似ていたんだと思える。本当に一致していた笑ってしまう、あの時は自分がいたインスタントコーヒーだったか……ミルクだけではなくはちみつやらも入れていた覚えがある。

「負けず嫌いでしたっ……俺以上に鍛えまくってオーバーワーク寸前までやる大バカ者。でもっ笑顔が綺麗な奴だったよ」

「へっく……ヒビキさんは仲が良かったんですか？」

「いや——唯の腐れ縁の幼馴染だったよ」

第19話

「ヒビキさんお願いしますトレーナーになって下さい!!」

「いやっだからさスペちゃん俺は……」

「違うんです、ダイエツトトレーナーになって下さい!!」

「——はえ?」

「ああなんだっトレーナーってダイエツトの事だったのか」

スピカの部室へとやってきたヒビキ、そこへ突然スペは最早土下座のような超低姿勢で頭を下げて懇願してきた。それが担当トレーナーという事なら断るのだが、まさか内容がダイエツト関連だとは思いつかなかった。体重がかなり増えてしまったらしく、その影響か臍月賞では勝負服のホックが止まらない程だったらしくそれが原因で負けてしまったかもしれないとかなり思い詰めているらしい。なので体重を落とす為にも皆で協力する事になった。

「んでまずは鍛錬のスペシャリストであるヒビキさんの応援を頼もうって訳」

「そうそうっ毎日毎日あんなメニュー普通はこなせねえもん!! スペシャリストの名こそ相応しいぜ」

「大袈裟だなあ……まあ確かに女の子にとって体重は大問題だもんね」

「そうそうっ!! やっぱりおじさんは乙女心が分かってるよね、それに比べて……」

と一斉に沖野へと向けられる怪訝な瞳。

「なっなんだよ」

「皆の前でスベが何キロ増えたのか言いやがった上でまた勝手に足触ったんだよ」

「沖君さ……本気で理事長に通報しようか。流石に君の品性を疑うよ俺」

「いやっ悪いとは思ってるよ……」

だがまあ実際ダイエットは必要だろう、体重が増えすぎるのも問題だ。まあダイエットメニューを組んであげる事ぐらいならば良いだろう、乙女にとっては死活問題だろう。

「まあいいよその位なら」

「ほっ本当ですか!!?」

「勿論。後一応言っておくと俺のメニューはやってると体重は増えるから」

「それじゃあダイエットの意味があ!!?」

「大丈夫だって増えるのは筋肉だから」

此処で訂正しておくのと筋肉というのは脂肪に比べて重い、ヒビキが組むメニューは基本的に身体を大きく動かして脂肪を燃焼して筋肉を作る為の物。なので結果的に体重

は増加するのである。

「よしっそれじゃあ早速やるかい？」

「はいっ!!」

という訳で早速ヒビキ監督のダイエットメニューが開始される事になったのであった。と言っても必ず守る事は早朝の自分の鍛錬に参加する事、制限こそつけるが好きな物を食べてもいい。これに驚いたのはダスカ、ダイエットに必要なのはハングリー精神だと思っており協力を当たってまずはスぺのニンジン断ちから始めようと思っただらしい。

「下手に好きな物を禁止しちゃうと何処かで爆発しちゃうからね、時折ガス抜きは必要だよ。ダイエット中に甘い物断ちすると猛烈に食べたくなるし別の物で発散しようとするでしょ、逆にそれで太っちゃうんだ」

「成程……だからあの時は失敗したのね……」

「お前、そんな失敗してたのかよ……」

サラツと失言するダスカにウオツカは呆れたような目を向ける。

「というか基本的にウマ娘達は運動量も基礎代謝も凄いから下手に食事制限をすると栄養失調になる可能性が高い、オグちゃんが減量の為にえらい事になってたからねえ

……」

「ああつあの時か……」

「そうそう、あの時は本当にやばかった……」

思わず遠い目をするヒビキと沖野、一体何が起きたのか聞きたいが余りにも遠い目に聞く事が出来ない。何かを察したのかゴルシは二人の肩を優しく叩いた。

「なので行うべきは取るべき食事の変更だね。脂肪の燃焼と代謝促進系だね、俺の方で食堂の人にお願いでしておくからよ」

「そういえばオグリの時のあれも結局そうやって解決したんだつたな」

「有難う御座いますヒビキさん！これで痩せられるんだ……!!」

如何やらかなり気にしていたらしい……これでダイエツトに光明が差すと酷く安心している。まあ体重の問題は女性にとって永遠に付き纏う大問題、気にするのも致し方ないという物だろう。

「目指すは無駄の肉が無いシャープなお腹周り、誰もが羨むようなパーフェクトナイスボディ!!だよ」

「シャープで誰もが羨む……ナイスボディ……!!よくしけつぱるべく!!」

「……ヒビキさん、アタシもそれ参加する」

「俺も……俺はどっちかと言ったら筋肉付けてえ」

「あゝじゃあ僕もやる!!」

思わずそれを聞いてやっちまった……と言いたげな瞳を作ってしまった。スベを奮い立たせるつもりで言ったのだが、如何やら他のメンバーの乙女心も奮い立たせてしまったらしく、ダスカ、ウオツカ、テイオーまでもが参加する事になってしまった。これではもうトレーナーとしてメニューを組んだのと同じではないか……これを理由に他のチームの子まで参加させてくれと言われたら如何しよう……と不安になってきた。

「大丈夫ですかヒビキさん、顔が疲れてますけど……」

「大丈夫だよスズちゃん、ちよつとやっちまったかなあと思ってるだけだから」

「まあとつつあんの朝練に熱心な奴が参加してるで押し通せるだろ、とつつあんの朝練はトレセンじゃあ有名だし」

「だと良いんだけどねえ……」

他のトレーナーから何言われなかなあ……と思っていると携帯が鳴り響いた。仕事用ではなくプライベートの方だ、しかもこの着メロは……と外に出ながら通話に出る。

「はいつもしもし」

『響鬼おじ様ですか、私です輝です』

「おおっ如何したの?」

電話してきたのは姪の輝だった、一体どんな事で電話をかけたのだろうか。

『実はまた其方にお邪魔する事になりましたので前以てお電話しようと思ひまして』
「またつて今度は何で？」

『いや〜……なんか中央のトレセン学園からスカウト来ちゃいました』

トレセン学園からのスカウト、ウマ娘の業界は基本的に常に新しいスターを求めて続けている。常にスターは全国各地で探されており、今回そのスカウトの目に輝が捉えられてしまったらしい。

「は〜凄いじゃん。トレセンのスカウトの目は確かだしお世辞とかは絶対に言わないから実力が評価されたって事だよ」

『フフンっこれもおじさまと鍛えまくった成果です!!』

「んでっスカウト受けるの？」

『受けるかどうか答える前にスカウトさんの圧が凄いのと先生が勝手に盛り上がりつつちやつて……妥協案として見学してから決めるって事になりました』

輝的には如何でもいいようだがスカウトと先生が凄い迫り方をしたので、見学してからという事を受け入れたのだろう。スカウト的には今すぐにもトレセンに転入してその実力を発揮してほしいという所だろうか。だが強制する事は出来ない、何せ輝の人生なのだから。

『それで当日はおじ様に案内をお願いしたいんです、というかそれが出来ないと行きま

せんって言いましたから』

「おいおいおい……にしてもなんか面倒な事になっちゃったな」

『まあ東京見物するいい機会だと思いますよ、この前行った時はお土産も買いませんでしたからね。という訳でその時はお願いします、三日後に行きますので!!』

「えっ三日後って随分急だなんておいちよつと!? もしもし!? き、切れてる……」

既に切れている通話、随分と元気が良かったがあれは絶対に東京で遊ぶ事に舞い上がっている。鍛える事も好きだが同じ位に遊びも好きなのが輝、きつと三日後のトレセンは更に騒がしくなるんだろうなあ……と思いつつも、ある事を想う。

「……そう言えば何でうちのスカウトが何で輝の中学に行ったんだ?」

不意に思った疑問。普通の中学と奈良のトレセンなら真つ先に後者へと行く筈、中央のスカウトならば猶更其方に行く筈。在野から新しい才覚を見出そうとした、とかならうか。

「まあいいか……何方にしろ、輝なら進路は確りと考えるだろうしな」

第20話

「おはようたづなさ〜ん!!」

「おはよう御座います」

トレセン学園の朝はたづななどの挨拶で始まるといっても過言ではない、理事長秘書である彼女は朝校門に立ちやつてくる生徒たちを笑顔で出迎える。それがウマ娘たちにとって最初の元気の源になるのである。

「おはようたづなさんってあれっヒビキさん!？」

「おっはっ」

「今日はヒビキ兄さんも一緒なんだ珍しい〜」

「偶にはね〜あとおじさんでいいぞ〜」

そんな校門には今日はヒビキの姿もあつた。今日は何時も以上に早起きして何時もの時間までに仕事を行い、その後自分の朝練に付き合うスピカの面々に付き合った後に朝食を流し込んでその後仕事をこなってここにきている。中々に身体に来る物があった、だがこれはこれで鍛錬になると思う辺り自分も結構あれなタイプの間人だったのかと思えてきて来た……。

「それにしてもヒビキさんとご一緒するなんて思いませんでした」

「調子狂うかい」

「いいえ、ちよつと嬉しいかもしれません。私がお声掛けするときはお仕事なさつているときが多いですからですかね」

「たづなちゃんと一緒なのつてご飯食べに行く時が多いもんね」

ヒビキとたづなは基本的に仲がよい。同僚というだけではなくたづな自身理事長の行動に振り回されたりする事もある為のそのフォローに付き合ったり、独断で購入してしまったウマ娘のトレーニング機材の管理など……それらの一部をヒビキが代わった事もあつたりした関係もあるからか関係はかなり良好。

「それで今日は、ああそうでしたね」

「そういう事。あとは夕方ちよろつと仕事する程度になるようにめちやくちや早起きして頑張りました」

「でもヒビキさんつて基本4時起きですよ、それで普段の朝練が5時頃から……そんなると何時起きだったんですか？」

「3時に起きるつもりだったけど2時半に目覚めてた、因みに夜は10時に寝た」

「それつて4時間位になるんじゃない……」

本当にそれで身体を休める事が出来ているのか甚だ疑問だが、逆に鍛えまくっている

が故にスタミナも尋常じゃないのでそのあたりも大丈夫ということなのだろう。そんな話をしているとこちらへ迫ってくる小さな人影が見えてきた、たづなはタマモクロスかなっと思っただけが違った。見えてきたのは――

「おじ様々お待ちたせしました〜!!!」

「あの方が」

「ええ、うちの姪っ子です」

参上した輝、タマモクロスのようななかなか小柄な体には不相応なほどに大きな登山用バックを背負いながら登場した。が、輝は自分を迎えに来てくれたおじの隣にきれいな人がいることに声をあげながらアニメのようなポーズをとりながら驚愕した。

「どひゃあああああつおじ様の隣にすごい美人なお姉さんがいるううっ!?まさかおじ様の職場にこれほどまでにお美しい方がいるなんてエ!？」

「まあお上手ですね」

「しかも微笑み方も凄いですっ嫌味とかも全然感じないほどに清楚で僅かな妖艶さを感じさせる大人の色気……これです、これが輝が目指すべきパーフェクトナイスバディなお姉さんの理想形……!!」

勝手に何やらテンションMAXになっている姪、ヒビキは本当にタマモクロスに会わせてみても良いかとも思いはじめた。絶対にこの二人の組み合わせはドンパチどんな感

じで賑やかで楽しい事になるだろう。

「お姉さんっどうかおじ様をよろしくお願いいたします、お姉さんならおじさまもきつと幸せになれると思います!!」

「大丈夫ですよ、もうヒビキさんとは仲良し宜しくやっていますので」

「にやんですとお!!おじさまと仲良しよろしくやっておりますとなあ!!まさか、そうかそうだったのかこれが伝説に聞いたあのうまぴよ——」

「輝いい加減にしなさい」

いい加減に暴走する姪っ子を止める為に以前もやったように力を込めて頭を撫でまわすという身長縮ませの刑に処す。

「うみやああああおじ様お止めくださいいいいいいいいいいつつ!!」

「突然来るって言っておいて次はこれかなバカ姪っ子、一体おじさんにどれだけ迷惑をかけるつもりなのかなあ? ねえあ・き・ら・ちゃん?」

「ごめんなさいいいいいいい!!これ以上はおやめください、私のナイスバディへの夢がああああ!!!私の身長があああ身長そのものがあああああ!!!」

「ヒビキさんそのあたりにしてあげたらどうですか、私は気にしてませんので」

たづなの言葉も輝への制裁はこの辺りにしてあげる事にした、手を離すと息を荒くしながらもへたれこんでしまった。

「た、助かった……唯でさえ背が小さいのにこれ以上小さくなったらたまったもんじゃありませんからね……って誰がオチビですかア!!!輝はオチビじゃなくてこれから成長期を迎えるんです!!」

「何も言っていないのに自分でポケとツッコミやってたら世話ないな」

「ハツつい大阪出身のお母ちゃんの血が……うづく実にくそ……!!」

「たづなちゃん京都市行きの新幹線って次何時だっけ」

「えっと確か15分後ですけど流石に難しいですね、1時間半後だと如何でしょう」

「すいません調子こきましたせめてお土産買ってから帰らせてくださいお願いします」

心の底から尊敬しているおじと憧れの具体例と言えるほどに完璧お姉さんに目の前で自分を奈良へと返す為のチケット獲得の為に携帯を取り出してマジで話し合っている姿に流石にやりすぎたと本気で反省する。

「全く……ゴメンねたづなちゃん、うちの姪っ子が失礼なことを」

「大丈夫ですよ、寧ろ嬉しい位です。憧れのお姉さんなんて言われて」

「気を悪くしてなくて良かったよ、全く漫画に影響されすぎ」

「だってカツコいいじゃないですか!!輝だって漫画とかアニメとか特撮とかゲームの登場人物みたいに輝きを放てる人になるんです!!」

「色が混ざりすぎて見れたもんじゃない輝きになってるから現状」

元氣よく空に指を指しながらもノリノリでポーズを取る輝を呆れたような目で見つめるヒビキ。そんな様子に二人の信頼関係が見て取れる、心の底から信頼しあっている、それは家族だからだろうかという問題ではなく、ヒビキという個人と輝という個人がそれぞれ結びついて出来た絆があるとたづなは感じている。

「改めまして本日はトレセン学園中央校にようこそいらっしゃいました、私は理事長秘書をしております駿川 たづなと申します」

「理事長の秘書?! ひゃあああああつ綺麗でナイスバディでお仕事も出来るとか完璧超人すぎるう!! 流石は私が憧れと見込んだ人、ぜひ師匠と呼ばせてください!!」

「うふふつ考えておきますね、それまではたづなと呼んでくださいね」

「はいたづな師匠じゃなくてたづなさん!!」

「いや本当に騒がしくてごめんね……?」

確かに賑やかだと思うがノリが良いだけで本質的にはかなりいい子だということを見抜いている、この元氣は確かにスカウトも注目するはずだ。そこに居るだけで空気を明るくしてモチベーションの向上につながる天性のムードメイカー、これで実力も確からしいので将来有望のスーパースター候補と言う所だろう。

「それじゃあ行きましようか、本日は私もご案内する事になってますので」

「おじ様だけではなくて!?! おおっこれはテンションMAXでイッテイーヨ!! つて事で

「すかい!!？」

「いい加減にしないともう一回やるよ」

「マジすんませんでしたおじ様」

第21話

「という訳でして校内の施設は以上となります」

「いやあつ着替え持つて来て正解でした。まあ普段の山籠もりのノリで着替え突っ込んだだけなんですけど」

「だと思つたよ」

プールの施設を案内した事で漸くコース以外の施設の案内が終了した。が、最後の最後で飛び込みをしたサクラバクシンオーの水飛沫を諸に被つた輝は全身びしょ濡れになつてしまった。着替えがあつたのは幸いだった……と言えるかは微妙だが。尚、たづなはヒビキが手を引いて一緒に下がつたので濡れなかつた。

「アキラさんは普段から山に行つてゐるんですか？」

「はい。うちの御爺ちゃんが山を持つてまして、それが私の遊び場で鍛錬場になつてゐるんです。子供の時からそりや文字通り山野を駆けまわつてましたよ。夏は虫を捕つたりしたり、秋は焼き芋をしたり、冬はカマクラを作つてその中でキャンプしたりつて誰が子供やねん!!」

「まだ何も言つてないつつの」

最近そういうキャラが出てくる漫画でも読んだのか随分と一人のボケとツツコミが多い、これで下がるとしたら自分の評価なのだからそこは気にした方が良いとは思うのだが……いや下手に取り繕うよりも自然体である事を見せた方が印象としては良いのだろうか……。

「それではこれからレース場にご案内しますね」

「おおっ!! 実はちよつとこういう所で走つてみたいとは思つてたんですよねえ」

「輝もそういう事は考えるのか」

「何ですかその発言、おじさまちよつと酷くないですか」

そんなやり取りをしているとたづなが微笑んだ。本当にこの二人は仲が良い、おじと姪という関係なのだろうか余りにも仲良しな姿は父と娘、いや兄と妹にも見える。

「んで如何よ実家の方は皆元氣してる?」

「はいモチのロンです、最近では伊吹さんがお弟子さんを取つたんですよ」

「へえっあの伊吹が……教え方上手いしなあゝあいつ」

時折聞こえてくる実家の話、如何やらヒビキの実家は何を脈々と継承させる事をする家柄らしくそこで役職についていると思われる人が弟子を取つて次代を育て居るという話が聞こえる、興味が沸く話題ではあるのだが間もなくコースに到着する。折角だからトレセンでのレースを見て欲しいと今日模擬レース行われるウツドチップのコース

へと連れて来た。

「此処がトレセン学園のコースです、此処はウッドチップのコースで今丁度模擬レースを……やつてた筈なんですけど終わっちゃったみたいですね」

今日は此処でチームリギルが誇る短距離最強ウマ娘のタイキシヤトルとチームスピカのスペシャルウィークの模擬レースが行われていた。それを見せたかったのだが……如何やら丁度終わってしまった所らしい。勝敗はタイキシヤトルの勝ちだと聞かえてくる、そして目の前では沖野とハナが話している。矢張りと言うべきか今回は沖野が頼み込んで組んでもらった模擬レースのようだ。

「今回は有難うなオハナさん、マジで速いなタイキシヤトル」

「当たり前でしょ。次はウチが得をするレースを組みなさい」

「言うねえハナちゃん」

「あらっ意外な人と会ったわね」

そこへ声をかけるヒビキにハナは意外な顔をする。下手に顔を出せば他のチームにも顔を出さなければいけない、という名分が出来るので来ることを避けていたヒビキのご登場。しかもたづなと見た事も無いウマ娘を連れてくるならば余計に気になる。

「おっなんだとつつあん来たのか。来るならもつと来いよな、そうすりやスベだつて元気出たのによ」

「それは悪かったね、でもこちとらスカウトされて見学に来た姪っ子の案内係って仕事があつてね。別に俺が来たくて来た訳じゃないから」

「あつ姪っ子？」

視線を逸らすとそこにいた酷く小柄なウマ娘がいた、彼女は視線に気付いて無い胸B71と大して変わらない背伸び身長141cmをして自己紹介をする。

「初めまして、奈良から見学に来ました雷電 輝です。ヒビキおじ様の姪です、気軽に輝と呼んでください」

「とつつあんの姪か!!というか姪っ子なんていたのかよ、全然話してくれなかったじゃねえか」

「自分の家の家族構成とかべらべら話す事でもないでしょ」

それでもそうかと笑いながらも沖野は咳払いをしつつ挨拶をする。

「俺はチームスピカの沖野トレーナーだ。とつつあん、いやヒビキのおじさんとはまあ……同僚で世話になつてるかな」

「迷惑かけまくつてるが正しいでしょ貴方の場合は。ようこそトレセン学園へ、私はチームリギルの東条 ハナよ」

「宜しくお願ひします！いやあつ東条さんってばこりやまた美人な上にやれるカリスマ上司感が溢れ出てますね!!」

「とっ突然褒めるわね……」

開口直ぐにこんな誉め言葉を受けるとは思っていないなかつたハナは少しばかり照れる。こんな事をサラツツと言えてしまうのが輝の長所かも知れない。そんな空気を打ち破ろうと咳払いをしようとするハナだが、それは遮られた。奇しくも自分のチームメンバーであつた皇帝、シンボリルドルフによって。

「やあつアキラ、見学に来たのか。生徒会長として歓迎するよ」

「あつ会長さんじゃないですか!! いやあなんかウチの中学にスカウトが来ちゃつて……それで取り敢えず見学にした次第です」

「そうなのか。兎も角遠い所よく来てくれたな」

ルドルフは柔らかな笑みで応えながら手を差し出す、輝もそれに気付いて握手を返す。この中では唯一輝の事を知っているウマ娘、そしてそれを聞いたハナはスカウトの目に叶つたという彼女の實力が気になった。それを代弁するように沖野が尋ねた。

「とつつあんの姪かあ……んじややつぱり——鍛えてたりするのか?」

「ええ勿論、おじ様の鍛錬ノートを参考にしながら毎日毎日山で鍛えてますからつしゅっ」

「随分とつつあんの事慕つてるじゃないか」

「当然です!! 響鬼おじ様は私にとっての憧れ、私が目指すべき人なのですから!!」

一度回転しながら、腕を勢いよく天目掛けて掲げる。妙に洗練された動作と意気込みに周囲からおおつ……と声が漏れる程に自信に満ち溢れている。ならば、期待の新人の自信が一体どれ程の物であり、それに裏付けされる程の実力があるのか気になるのがアスリートの性。

「だったら一度走ってみないかアキラ。私も万全且つ全力の君の走りをぜひ見たい」

「いやあつゝ照れますなあゝ♪それじゃあ私も走ってみたいですからいいですよ、でも出来れば芝が良いです。ウッドチップでしたっけ、走った事無いので」

「たづなちゃん大丈夫かな」

「はい大丈夫ですよ、それではご案内しますね」

とたづなの後に続いていく輝、そして来たい人は着いて来なと言いたげなヒビキ。それにつられてハナはチームに声を掛けてからルドルフを連れて後に続いていく。沖野はいい刺激になるかもしれないとスピカの面々に声を掛ける。

「お〜いとおつあんの姪っ子が走るってよ」

「えっヒビキさん!?!つとつか姪っ子!?!」

「えっヒビキさんに姪っっていたの!?!」

「しかも走る!?!」

「なんか面白そうじゃん!!」

「いっいっ!!」

見に来るのはチームリギルのハナにルドルフ、そしてチームスピカの全員。芝のコースへと移動する最中にハナは面識があるらしいルドルフに軽く話を聞く。

「貴方が見たい程のもの、だったのかしら」

「百聞一見、見た方が早いと思います。ですが、彼女は奈良からトレセンまで響鬼さんの太鼓を背負って走って来れる程に身体を鍛えているらしいです」

「奈良から……それは是非見たいわね」

様々な方向から注目を集められる輝、スカウトが見初めた才能、そしてルドルフの言葉……ハナの中で輝に対する興味が著しく大きくなつていく瞬間であった。

「そんなに私の走りって気になるんですかねたづなさん」

「それはもう。スカウトされている訳ですから気になるのは当然ですよ」

「プロ野球でスカウトされて来たバッターのバッティングとか見たいに決まってるじゃん」

「確かに」

第22話

「えっと……それで結局私って何メートル走ればいいのかな」

「アキラ、こちらの都合は気にしなくていい。君の走りたい距離を自分の走りで走ればいいんだ」

「は、はあ……やってみます」

ウォーミングアップを終えて十二分に身体が温まっている輝は聞いた。短距離、マイル、中距離、長距離に区分されるレースの距離。この中で走るとしたらどれを走ればいいのか全く分からないというのが素直な輝の本音。ルドルフのアドバイスもハッキリ言ってピンとこないし指定してくれた方が気が楽になるといったレベルである。

「おじ様マジで如何したらいいんですか……？」

「取り敢えず普段何キロ走ってる」

「えっと……早朝に10キロに夕方に10キロです」

「それだったらマイルで如何だろ。大体1600位だけど行ける？」

「えっ1600キロ……？」

「メートルに決まってるでしょうが……」

「何を話しているのかしら……」

素直に何を話しているのか気になる、アキラの方からヒビキのように寄ったように見えるが……何かアドバイスを貰おうというのだろうか。そこにたづなが意見を出す。

「資料ではウマ娘向けのレースにも殆ど出場した事ないみたいです、何でもダンスが大の苦手だと」

「成程、それで避けていたのか……ならばライバルなどが皆無の状態、矢張りヒビキさんと同じように鍛錬し続けただけで今がある訳か……だとすればあのフォームは天性のものなのか」

ウイニングライブを毛嫌いするウマ娘は少なからずいる、しかし大きな大会でより強い相手に走れる事などの高揚感がそれを打ち消す場合が大半、自分を応援してくれるファンのためならば……とダンスは努力する機会が多い。なのでそこは自分の努力次第で何とかはなるとは思う……まあ前提条件としてダンスが大っ嫌いとなるとハードルは高いだろうが。

「その鍛錬の結果が奈良から此処まで来る事……か、にわかには信じられないわね」

やろうと思えばウマ娘は出来るだろう、だが普通はやろうなんて思わない。自分も見た事があるが、ヒビキのあの大きな太鼓を抱えたままで……それはたった三日で東京ま

でやって来るといってもない。身体能力だけではなく精神力も相当な化物という事になる。

「でもヒビキ君が嘘を言うとは思えないし……これが其方が言ったなら嘘だと思うけど」

「おいおいおいひでえな、俺でもこういう時は確りいうぞ」

「普段の行い」

『確かにない』

「うおい」

ハナの言葉に納得するようにスピカの面々も頷いた。人格面は悪くはないが勝手に足を触るといふ部分が余りにもマイナスポイント過ぎるのである。

「それにして一人で走らせちゃっていいの、何なら私も一緒に走るけど」

「あつ俺も走りてえな」

「まあ距離にもよるしな……あくまで実力を見るだけだから大丈夫だろ」

ダスカとウオツカが名乗りを上げるが、あくまでこれは確認する為だけの走り。それならば相手は必要ない、逆に今までまともにレースがした事がないなら集中を削ぐ恐れがある。今は実力が知りたい、例え後に削がれると分かったとしても後で幾らでも矯正は聞くのだから。

「んじや1600行きます」

「あいよつゴルちゃんゴールお願いしてもいいく？」

「あいよ〜」

と頼まれたゴルシは即答で赤いゴールフラッグを受け取って小走りでゴールへと向かって行く。そして位置に付いたのを確認するとヒビキは懐へと手を入れて何かを取り出して輝に見せた。

「んじや輝いいな、こいつが鳴った時が合図だ」

「うんっそれが合図だと思ってた」

ヒビキがその手に握っていたのは音叉だった、輝にとつては馴染みの物なのかそれを見て笑顔を作ってから腰を落としてスタートに備えた。間もなく始まる、それはスカウトに見初められた輝が力を見せ付ける時、それを見た時皆はどう思うのか、そしてどんな感想を漏らすのか——ヒビキもそれは気になっていた。故に落ち着いて声を出す。

「位置について、よ〜い……」

キイイインツ……酷く涼やかで清らかな音が開始の合図となつてそれによつて解き放たれた輝きがコースを駆ける閃光となる。開始とほぼ同時に駆け出した輝はコースを力強く踏みしめていく、これがレースを殆ど知らぬ少女の走りなのかと思う程に力強さに溢れていた。彼女が踏みしめた地面は芝が抉れるように穴が開いている。とん

でもない馬鹿力だが、それを生み出す頑強な肉体。それは少女が作り上げた物。

「脚質的には……先行だな。速いがまだ余裕を残してると顔してるな」

沖野から見た輝の脚質は先行、走り方はかなり粗さがあるが速い。流石はヒビキの姪というだけあるという所だろうか、身長は低いからか足の回転を重視したピッチ走法を使用している……いやストライド走法との中間辺りだろうか。そしてそのままの速度でコーナーへと突っ込んでいくが、コーナーギリギリを攻めていく。

「近っ!？」

ウオツカが声を上げてしまう程に輝は内ラチを攻めている。ウマ娘の走行速度では擦っただけでも怪我はほぼ確実、それなのに顔色一つ変えずに内側を抉り続けていく。内ラチとの距離は5センチ程度、それを維持したままで駆け抜けていく。

「山を駆け回った結果だね、木々の間を駆け抜けてるから慣れたんだろうなあ……」

「いやそれで慣れるのか……?」

感覚的には近い物はあるだろう、だがそれで慣れるような物ではない。それによって培われた精神力が輝を支えている、この程度で自分は揺らがないと宣言するかのよう直線へと入ると更に加速していく。

「速いですねスズカさん!!」

「速いわね」

その速度はスズカも素直に褒めざるを得ない程に速い。実際のレースであれが出せるのであれば相当な逸材、そして何より直線に入ってから常に加速し続けているような印象を受ける。そこまでの速度を維持したままで更に加速、ヒビキ譲りのスタミナなどと思うと不思議と納得できた。

「よお〜しそのまま来い!!ゴルシちゃんに気持ちよく旗を振らせろよお〜!!」

「つ——だああああありやあああああ!!」

最後にラストスパートに一気に最高速度へと到達してゴールへと到達する。勢い良く振られた旗がはためく中、輝はブレーキを掛けながら後ろを見ると少しばかり頬を掻いた。

「こんな感じで良いのかな……」

ストツプした輝は直ぐに呼吸が整いながらもそんな疑問の声を浮かべた、やれる限りの全力を尽くしたがこれで中央の人達は満足する結果なのだろうか。そう思っている。とゴルシが輝を確保する。

「お前中々やるじゃねえか、ゴルシちゃんシールを贈呈してやるぞ!!」

「ゴルシちゃんシールですと!?!何だかよく分からないけど集めたくなくなるような不思議な魅力を感じます!!」

「分かってるじゃねえか、10個集めるとなんと……!!」

「なんと!？」

「ゴルシちゃん釣ったマグロをプレゼントだ」

「凄いけどなんで釣ったのマグロ!？」

褒められる輝だが素直に喜んでいいのか分からない、輝はそのままゴルシが頑張ったご褒美と称して肩車をしたままヒビキの下へと連れて行く。

「ゴルシちゃん号到着」

「おかえりゴルシちゃん。如何だった輝の走り」

「いやあくこのゴルシちゃんには敵わねえけど良かったと思うぜ、根性とスタミナあるからスピードも出し放題なんだな」

輝は速い事は速いが正直な所、スピードは中の上が精々。しかし、持ち前の精神力と鍛錬によって磨かれた体力によってほぼ無尽蔵に加速させられる。普通ならばそれをすれば身体に無理が掛かり過ぎるが、長年の鍛錬で頑強になった身体はそれを許容出来ているし、走るフォームも崩れないのも理想的。そして何よりあの内ラチへの攻め方、正しく強い心が実現する走りである。

「如何だった沖君におハナちゃん」

「いやっすげえと思つたわ、色々と荒い部分あるけど逆にそれがいい味出してると思つた。根性で二段階加速か……いやいいなあ」

「殆ど同意見。これは是非模擬レースも見たいわ、技術があるのかないのか……いや無いにしても磨く価値がある原石よ」

トレーナー二人からは高評価を貰えて輝は満足気にしながら胸を張る。

「如何ですか、これがおじ様直伝の鍛錬によつて磨き続けた輝の輝きです!!」

「別に直伝じゃないし人のノート盗み見てやつてるだけじゃん」

「おじ様……分かつて無いなあ細かい事は良いんですよ細かい事は……あのすいません圧縮の刑はご勘弁を……!!」

たづなのようなナイスバディになる為にも絶対に避けたいのだろう、頭に置かれた手に本気で戦慄する輝。そんなやり取りを知っているたづなは微笑み、走りを見たルドルフは素直に称賛した。

「素晴らしい走りだったよライデンアキラ、あれが君の走りなんだな」

「そうだと思います、良く分からないですけど……というか何でフルネームで呼ぶんです?」

「何故と言われてもな……これが君の名なのだろう、ならばそう呼ぶのが君への走りへの敬意だと思つたまでだ」

純粹に称賛と敬意を込めているルドルフ、ウマ娘としての走りは彼女から見ても良い物だった。ならばそれをした彼女には相応の物を向けるべきだろうと思つていた。し

かし首を傾げた輝はポンツと手を叩きながら輝は告げた。

「雷電 輝はライデンアキラじゃないです。カガヤキホコル、それが僕のウマ娘としての名前です。輝っていうのはそこから貰った私の名前です」

第23話

「カガヤキホコル……では其方が本名なのか」

「いや本名というかなんと言いますか……私的にはやっぱり雷電 輝の方が真名ですかね、正直カガヤキホコルを名乗ろうとはもう思いませんでしたから」

「どういう事なのかと動揺が走っていく。その名前は異世界で活躍した存在の魂と名前を引き継いでいるというのが有力な説とされている。なかウマ娘にとって名前というのは魂に刻まれている物でありそれが以外を名乗ると言う事は全くない。それなのに輝という名を名乗っている輝は、自己の存在を否定しているに等しく、正しく異端中の異端という事になる。」

「でもどうしてなんですか？あつ私スペシャルウィークつて言います、私はこの名前を変えたいとも思ってませんしこの名前が大好きです」

「これはご丁寧に……いや私も嫌いって訳じゃないんですけどだつて嫌じゃないですか、私は雷電家に生まれたのに雷電を名乗れないつて」

「単純な理由、輝にとつては家族同じ姓を名乗れないというのが余りにも嫌だった。確かにウマ娘によつて家族と名前が違う事に疑問を覚えるという事はあるだろうが……」

それで名前を変えてしまうというのは聞いた事がない。

「だから私は輝です、カガヤキホコルは封印してるに近いかな僕としては」

「なんか一人称違くてね？」

「輝はそうなのよ、明確にウマ娘としての自分を分けてる」

ある種封印していると言ってもいい、ウマ娘としての本能は彼女の中では区別化されて切り離されている。時折繋げてはいるらしいが……一人称を変えるのもその一環らしい。

「というか大っ嫌いなら輝なんて名乗りませんって、カガヤキホコルっていう名前だつて私ですから誇りに思ってますよ」

「カガヤキ……輝き、輝、そういう事か」

「えっ如何いう事？」

「漢字の読み、輝きはあきらとも読めるからな」

嫌っているどころかその名の通りに誇りに思っている、だが自分はそれ以上に誇りに思っている物がある。だが周囲はウマ娘なのに可笑しいという目で見るのだ。

「太鼓奏者に憧れたらそんなに可笑しいのかよって感じなんですよ、全くやってらんねえですよ」

「太鼓奏者!? 貴方っレースとかに興味ないわけ!？」

「いや無い訳じゃないですけど、私からしたら完全に気分転換の領域ですからね走ってます。私の目標は雷電一家に伝わる称号、鬼を継ぐ事ですから」

「鬼……？」

鬼という単語を聞いて思わず全員がヒビキを見た。ヒビキも名前に鬼を持つ者、何か関係があるのかと説明を求められると頷いた。

「ウチだと資格アリだと思われると鬼という名前を与えられるんだよ、俺の名前も元々は響輝って名前だったんだけど俺が鬼を襲名したから輝の部分が鬼に代わって、そっちは輝に上げたって事」

「上げたって……名前ってそういう物じゃないと思いますけど……」

「だって輝が気に入っちゃったんだもん」

曰く、鬼という名前を一生の物として引き継ぐか、それとも鬼という名を背負うのかで改名するかは変わるらしい。事実として伊吹という青年がいるが、彼は鬼という名前を加えていない。但し、鬼としての名前はあり其方は威吹鬼となっている。

「名前を変えるか……ウマ娘達としては理解出来ない考えかもな」

「そう言う意味でも輝は異常者だからね、まあ赤ん坊の時からずっと太鼓の音とか聞き続けて来たからねこの子」

「因みにとつつあんは何時名前変えたんだ？」

「16の時だよ」

「高1で変えたのかよ」

「まあそういう事です、私は何れ輝鬼になるつもりなんです。ですから名前を戻す時が来たとしたらその時ですかね」

決して嫌いではない、寧ろ誇りに思っている。だからこそカガヤキの名前を自分が本当に誇れるようになった時に名乗りたい、自分の憧れた鬼の名前と共にそこに立つ事が輝にとつて夢なのである。

「そう……じゃあトレセンには来ないっという事なのかしら」

「マジかあ……期待の大新人現ると思つてただけだなあ……」

明らかに落胆するハナと沖野。それ程までに輝のポテンシャルは高い、山が遊び場且つ鍛錬場というだけあつて荒地や坂路にも強いのではと想像が出来る上にマイルを走つた後でも殆ど息を切らしていない、だから適性距離は長距離までカバー出来る筈。磨ぎ方によつて輝き方を何処までも変えられる、万能さを伸ばすかそれとも特化にさせてもいい、本当に育ててみたいと思えるような存在。

「いやでもちよつと楽しかつたなあ……私もウマ娘つて事かあ……こつちでも太鼓の練習とか勉強が出来るなら考えるんだけどなあ……」

「ならヒビキくんに見て貰えばいいんじゃないかしら」

「えっ現状トレーナーになれって迫られてるのに輝の指導まで押し付ける気」

今ですら色々と忙しくなってきたのにさらに忙しくする気なのだろうか、トレーナーやら何時まで経っても練習に顔を出さない事への当てつけだろうか。

「おじ様のマンツーマン……それならありか？」

「おい進路決めてたんじゃないのかお前」

この影響受けやすい姪っ子は……いや教えてもいいのだが、現状でも結構忙しいのにそれに輝の指導まで啜えられるのは割かしキツくなってくるのだが……。

「ああでも中央ってなると学費がなあ……一回中央の学費見たけどハアツ!? って思う位に高かった記憶が……」

「スカウトだったら大丈夫じゃねえか？奨学金の対象にはなるだろうし返済制度もウチは充実させてるし、というかレースに勝ったらその賞金とかも入るから勝ちさえすれば直ぐに返済できるぞ。それに一人で鍛錬じゃ飽きないか？強敵と戦いたいとかないのか」

「……」

自分の夢を叶えたいというのもあるが、ウマ娘としての本能が擽られるのか此処で自分の知らない強者との戦えるという未知の魅力、憧れでもあるヒビキに太鼓を教わる。様々な物が此処にあつて少々惹かれてしまう。

「どうか何で太鼓奏者に憧れてんだ？おっちゃんの影響か？」

「まあ生まれてこの方ずっと太鼓の音を聞いてきたのもありますしおじ様が憧れなものありますが——鬼って称号にして名前ってカツコよくないですか」

「超分かるわ」

「——師匠と呼んでもいいですか」

「おう、このゴルシ師匠を崇めろ」

何故か通じ合う輝とゴルシ。というかこれで影響を受けてゴルシみたいになったら、もう輝の両親になんて侘びたらいいのか分からないから勘弁してほしい。下手したら鬼の名前を返上するレベルの謝罪を求められるかもしれない。

「いやでも、将来の安定を考えたらトレセンも選択かなあ……ちよつと真剣に検討します」

「おう、それで来てくれたら俺は嬉しいな」

「私もトレーナーとしては嬉しいわね」

そんな風に輝への勧誘は中止、あくまで彼女の自主性に委ねる方向性へと舵を切った二人を見ながらもヒビキは隣にいたルドルフへと目をやった。

「……なああシンちゃん、もしかしてスカウトが輝の中学行つたのって……」

「すまないヒビキさん……スカウトに意見を求められた時にうっかり口が滑って……」

「まあどつちにしろ、輝ならその内目を付けられてただろうし……早いか遅いの違いかなあ……」

第24話

輝へのスカウトがルドルフがその一端を担ってしまつた事が判明した所で一先ずこれで見学は終了となつた。折角なので参考にと輝はハナと沖野からどんなことを教えたりしているかを聞いたりしている。

「へえ〜……そんなんですね」

「嬢ちゃんはどうな風に鍛えてるんだ？うちでもとつつあんの朝練に付き合う子が多いんだ」

「最近は特に増えたらしいじゃない、特にスピカのメンバーが参加してゐるって聞いたわ」「ありやダイエツトの為だよ」

瞳を鋭くしながら沖野を睨みつける、此方はヒビキから拒絶され続けているのに其方は上手く丸め込んだ上でダイエツトという名の体調管理メニューを任せているに等しい状況。全く以て腹立たしい限りである。それを聞きながらやつぱりおじは此処でも人気なんだなあと思う。

「それで嬢ちゃんはどんな風に？」

「どつちを言えばいいんだらう……休日ですか、それとも平日？」

「じゃあ平日から」

「早朝は4時に起きてそこから10キロのランニング、近くの神社の石段ダッシュ30本と腹筋背筋腕立て腿上げを300回。それで学校終わって帰ってきたらまた10キロ走ってから同じ事します、その後は太鼓の練習ありますし」

シレつと語る輝のメニューに驚愕する二人、ウマ娘ではあるがまだ中学生のするようなメニューでは決してないからだ。しかも平日という言い方をしている事から毎日行っている事になる。

「マジかよ……」

「遊んだりしないの、友達と」

「ウマ娘なのにレースに興味の無い奴なんて異端児扱いで気持ち悪がられて相手にされませんよ、まあ多分先生もそれを察して見学行けって言ったんでしょうけど……」

彼女はもう気にしていないが、矢張り彼女は異端扱い。他にもウマ娘はいるがそれでもレースには一定の興味を示すしトレセンを目指したりなどなどをしたりする。だが輝はそれが一切ないので相手にされないと、ウマ娘の同級生はいるが矢張り反りが合わず積極的には接しない。それでもレースの仮想敵としては誘われたりはする。なので基本的に孤独でいる。

「それで休日は山を駆け回ってますね、食事以外の時は基本的に鍛えまくってますね」

「おいおいおい、それじゃあ身体が休まらねえだろう。ちよつと身体っていうか筋肉触らせてくれないか、消耗度具合とか見たい」

「貴方ねっ一言言えばいいって訳じゃ——「いいですよ」いいの!?!」

「モチのロンです!!寧ろ、鍛え抜かれた身体を御披露しましょう!!」

そう言いながら上着の肩口を掴むとそのまま一気に引き剥がすかのように脱ぎ捨てた。

「フフンッ遂に成功した、これぞ極道だけが極められるという極脱ぎ……!!」

「もう何を目指してんだよお前」

と呆れたヒビキの言葉とアハハッ……と乾いた笑いを浮かべるたづなの声が木霊する中で輝の身体が露わになった。身長こそ酷く低いがそこにあつたのは極めて堅牢に築け上げられた肉の要塞。無駄な脂肪など一切無くガツチリと鍛え込まれている、沖野が一言断つてから足に触れるが、その硬さに驚く。

「おいおい何だこれ、筋肉を触ってる感じしねえぞこれ……」

「伊達に5歳の時から鍛えてませんから!!」

「しかしこれは凄いな……」

そこにあるのは完璧なアスリートとしての肉体、いやそれすら超えていると言ってもいいかもしれない強靱にして柔軟な肉。そして驚くべきなのは消耗が一切見られない

所だった。

「サンキュな、いや凄い回復力だな……そんな時からやってたから回復力が増強されたのかもな」

「エツヘン!!」

「ああでも、もしかして成長する分がそっちいったかもな。小さい頃から鍛えると背が伸びないって聞いた事あるし」

「——えっ……」

沖野の何気ない言葉が輝の心を粉々に砕いてしまった。先程までの力強さが消え失せて膝をついてしまう。

「まさかっ私の今までの鍛錬が私の夢を阻んでいた……!? 鍛錬をしなければ今頃ったづなさんのようなナイスバディは夢ではなかった……!? ウゾダドンドコードーン!!!」

手について顔を真っ青にしながらも震えたまま、慟哭の叫びをあげてしまう輝。低身長に悩まされ続けて来た輝にとってナイスバディになるというのはそれ程までに大切な夢だった。だが、その原因が自らの原因だった。という事に信じたくない叫びが感情となつて爆発した。

「沖野君訂正しなさい!!今すぐにッ!!!」

「いやだつてこういう事はちゃんとと言わないとダメじゃねえかっておハナさん首つ締

まってる締まってるう!!」

同じ女性として分かるからか、それとも将来有望なウマ娘の姿に見ていられなくなつたのか沖野に迫りながら訂正しろと叫ぶ。

「お、おいおつちゃんなんか言つてやれよ。すげえ叫んでるぞ」

「身長を望む気持ち……分かるわね」

「ああ、デカい方がカッコいいもんな」

「ヒビキさん、あの何かフォローを」

「してあげてください」

スピカメンバーから色々せつつかれるヒビキ、隣のたづなをチラリと見てみるとたづなが耳元である事を囁いた。きっとこれなら元気になるよ、ヒビキもそれに賛成して聞き取りにくい言葉を連発している輝に声を掛ける。

「輝その辺りにしとけて、大丈夫だとその内大きくなるよ。ダスカちゃん見てみなよ、少し前までランドセル背負ってたんだよ?」

「ウェイ……つてあのツンデレヒロイン要素を全部混ぜ込んだような人ですか……?」

「いやなんだよそれ……」

視線の先ではえつアタシ?と困惑するダイワスカーレットがいる。実際彼女は中等部で少し前まではランドセルを背負う立場にあったのである。それがウマ娘の成長期

の凄まじさを物語っている。

「まあ兎に角、ウマ娘の成長期がまだ来てないだけだろ。寧ろ来たらババンとたづなちやんみたいになれるかもな」

チラリとたづなの方を見るとそこではニコやかに微笑みながら頷いている、それに元気づけられたのか、それともやっぱり自分が主張していた成長期がまだ来ていない説が有力化した事が嬉しくなったのか元通りになった。

「そう、ですよねっ!!私の鍛錬が私の夢を阻む事なんてありえない!!鍛錬とはつ自身の夢に向かう為の開拓の心を具現化させるための手段である!!敢えて言おう、私は鍛え続けると!!」

「ハアツ………本当にこの姪っ子は………」

第25話

「モムモムモムモムツ……プツハアツ美味しい!!」

あの後立ち直った輝は鼻を鳴らした、如何やら急に走った事で腹が空いたらしい。他のメンバーは練習などがあるのでヒビキが食堂へと案内する事になった。見学では食堂の体験もさせる事になっている、なのでそこで食事にした。トレセンの舌鼓をする輝を隣できんぴらごぼうを食べるヒビキ。

「おじ様もズルいなあ〜毎日こんな豪勢でおいしいご飯を食べられるなんて」

「俺は基本自炊、此処はあまり使用しない」

「相変わらずだなあ」

「此処はウマ娘達の為場所、俺は用務員。その違いは分かるだろ」

「うんつつ分かるよ」

静か食べ続けるヒビキ、その言わんとしている事を確りとしている輝はカツを咀嚼しながら質問する。

「ねえっおじ様」

「んっ〜」

「——トレセンの日々って、楽しい？」

そう問いかけて来た輝の瞳は何も映さない、何処までも何もない瞳がそこにあつた。しかしそれを意味しているのは彼女の心情などではない、随分当たり前な事を聞いてくる物だとヒビキはお茶を啜る。

「……毎日毎日大変な事も多いさ、年頃の娘の中におじさんが入るんだからね」

「でもモテるじゃんおじ様」

「茶化さない」

「は〜い」

改めてご飯を掻き込んでいく輝、彼女に自分からも問いを投げる。

「お前は如何するんだ、進路」

「——真面目な話、トレセンに来るのも良いと思ってる」

そこにあつたのは輝としての顔ではない、カガヤキホコルとしての、ウマ娘としての顔があつた。

「僕は如何しても一人だった、子供の頃から聞いてきた太鼓の音色が好きだったし雷電一家の清めの音も好きだよ」

雷電一家は嘗て神としても崇められた大蛇の怒りを鎮めた一族の末裔であり、その血筋は脈々と受け継がれている。毎年毎年神へと捧げられる清めの儀式では鬼を襲名し

た者が集つて魂と命を懸けた最高の演奏を奏でる。それに強く憧れていた、自分の家族は何てカッコいいんだと思つていた。それが異端の始まりだった。

年頃の娘が興味を示す音楽よりも太鼓の演奏や演歌などの方が好きだった。周囲と話が合わない、故に自分の領域に入る。ウマ娘としての意欲は少なく、一人で鍛錬するヒビキに憧れてその背中を追つた。そんな彼女の中でもあつた、ウマ娘としての本能が。

「僕……初めて思った、負けて強くなりたいてって」

「そうか」

負けてもいい、そこから強くなりたいたい、勝つための鍛錬を積みたいたい、孤独の中で自らを磨き研磨し鍛え続けて来た輝と誰かに負けてそこからの巻き返しを望むカガヤキホコル。初めて二つが一つになって一人として言葉と話しているとヒビキは感じる。

「二人で鍛え続けるのも限界があると思うし……でも私は輝鬼になる事を諦めない、響鬼さんみたくになるのが私の目標だから」

「んで如何するつもり」

「——やる、やりたい事全部やる」

「そつか……んじゃ好きにするといい。俺だつて好きにしてるんだ、お前だつて好きにすればいい、それが生きるって事だ」

姪っ子の進む道を感じ取ったが敢えてそれには何も言わない、本当に考えた結果ならば此方が口を挟む事は許されない。間違えて助けを求められたら助けてやる、それが自分の役目だ。輝は頷いた。

「それじゃあ好きにする——ねえっおじ様は本当に好きにしているの」
「してるじゃん、鬼を襲名しているのに用務員をやってるんだから」

「……それは好きにしているからじゃないでしょう」

そんな事を言う輝は瞳を反らしながら味噌汁を啜る、彼女は知っている、ヒビキの過去を全て。故に分かるのだ、如何して此処にいるのかも……鬼を襲名しながらも此処にいる理由も、雷電一家もそれを認めるのかも全てを彼に一任している。

「自分はそれなのに私に好きにしろって言う、反面教師のつもりですかおじ様」

「俺が望んだ事だ、それ以上もそれ以下も無い」

「……分かった何も言わない」

ほんの一瞬自分にだけ見せたヒビキの鬼、それが自分を強く睨みつけた。それ以上踏み込むなと言いたいのか、それとも……自分の好きにさせると自分へと忠告しているようなそれに輝も言葉が過ぎたと言葉を仕舞ったのであった。

「おおっ誰ぞと思うたらおっちゃんやん、如何したんや食堂におるなんて」

「んっ誰かと思つたらタマちゃんじゃない、オグちゃんもやつほ」

「やつほっヒビキさん」

此方へとやってきたのはタママクロス、そしてその友人でもあるオグリキャップ。相変わらずとんでもない量のご飯を盛っている、これで確りと食べ切ってお代わりまでして走る前には確りと消化しきって普段のスタイルに戻っているのだからとんでもない消化能力である。

「ってなんや隣の子、ハツまさかおっちゃん……ほんまに結婚してたうえに、こんな子供まで……つまり、何歳やったんや!？」

「違う違う、姪っ子だよ」

「姪っ子かいつ紛らわしいわ!!」

「なんか賑やかな子が来ましたね」

「お前が言うか輝」

オグリは既にマイペースに前の席に着いて食事を始めた。タママも遅れながらも席に着いて食事を始める。

「はあくスカウト、そりやごっついな。つちゆう事も中々に強いつて事やろつて自己紹介が遅れたな、ウチはタママクロスや。こっちはオグリキャップや」

「オグリキャップだ。ヒビキさんの姪ならばオグちゃんでもいい」

「雷電 輝です、それにしても……」

前に座ったタマモクロスへと視線を投げる、何故見られているのか分からないのか首を傾げるタマに輝は悔しそうな顔をする。

「こんな小さな子も此処にいるとは……」

「つて誰がちんまいや!!ワレだつて人の事言われへん位にはチビやろがい!!」

「チビじゃないツ!!私はまだっ成長期に入つてないだけだし!!」

「それがチビつて事やろがい!!」

食堂だと言うのに喧嘩一歩手前な言い合いが始まつてしまった。正直な所、身体的な特徴で言えば二人は完全に団栗の背比べ。最早双子言えるレベルで体型が一致していると言つてもいい。

「うるさいんですよこのおバカさん!!本当におバカさん!!そんな許容の気持ちも皆無だから胸も大きくならないんですよおくだ!!」

「バカ言う方がアホやつちゆくねん!!それやつたらお前の方が許容の心が無いつて事の証明にもなるんやでべろべろばあ〜!!」

「そういう事を平然とやれるそつちは私以上のガキつて事なんですよ!!幼稚園児のコスプレを勝負服にしたらいかがあ〜じやりん子ちやあああん!!!?」

「あ〜くん!!誰がじやりん子やねん!!」

「じやりん子でしよ〜そういう態度が〜」

「何やあくやる気か!!」

もう完全に言い合いが子供の喧嘩に移行し始めた。それに完全に我関せずまま食事をして続けていくオグリ、そしてヒビキ。山のように積み上げたご飯とおかずを次々と平らげていくオグリはヒビキと同時に食べ終わると手を合わせた。

「上等だつてコラアアア!!こつちがこんだけヒートアップしてるのに黙々と食べ続ける奴があるか!!」

「ヒビキさん、以前頂いた角煮は大変美味だった。また食べたいのだが」

「いいよ。丁度今日辺りまた作ろうと思つてたから食べたければおいで」

「そうか!!思ひ出すだけでも涎が……むっ腹が鳴つてしまった、お代わりを取ってくる」
「あんだだけ食べてまだ食べる気かい!!」

とツツコミをしあう二人だが、途中で何か感じるものがあつたのか互いに見つめ合いながらも瞳を煌かせながらもガツチリと熱い握手を結んだ。

「中々にキレがあるいいツツコミやつたで……!!」

「其方こそ、只者ではないと思つてました」

「それはこつちもや。此方こそアンタみたいに賑やかで楽しい奴は大歓迎や、もうウチらは友達やな、改めてタマモクロスやで。タマでええで輝」

そんな風に笑い合つたタマと輝だが、輝は涙を流した。ギョツとしたタマは輝の背中

を摩つて必死に励まそうとする。だが輝の意志で泣いている訳ではないのか、頬に流れている涙に触れて、漸く泣いている事に気付いた。そしてその涙は全く止まらない。

「え” えっ!?! ちよつどないしたん!?! どつか痛いんか!?!」

「タマ、泣かせたら駄目だぞ」

「いやいやいやウチ何もしとらんつて!?! おつちゃんせやろ、ウチ何にもしてないやろ!?!」

「その筈だけど……輝、如何したの」

「お” じぎま” あ””……初めて、ウマ娘のつ……友達が出来たと思つたら、急に眼から汗が……!! 嬉しい筈なのに……!!」

「つてそれ汗じゃなくて涙や!! 完全にお約束やないかい!!」

咄嗟にタマはツツコミを叩きこんだ、それを受けた輝は確かにそうですねと泣きながらも笑っていた。タマは輝とは初対面で今までどんな風に生きて来たかなんて分からない、だが分かるのである。彼女が如何して欲しいのかが。輝も初めて出来たウマ娘の友達に心が震えたのだろう、孤独で居続けた少女が初めて掴んだ友達の手。それは本当に暖かったのだろう。

「良かったなヒビキさん、とても嬉しそうだぞ」

「んっそう見えるかい?」

「ああつ満開の桜のような笑みだ」

第26話

「という訳で輝は多分トレセンに行きたいって言うと思う」

『そっか……うんっ私達はそれを応援してあげたいと思います』

「へえっ意外だね、子煩悩のお前さんからそんな言葉が聞けるとは」

電話の先で話を聞くのは輝の父親である煌、同じく鬼の称号を襲名している雷電一家の一人でもある。鬼としての名前は煌鬼。

『子供の頃から輝は俺達の世界のせいであらしい事を出来てなかったと思ってましたから……だから自分からそれに進みたいと思うなら応援するのが親つてもんですよ』

「自分の後を継いでほしいっていうのも親心じゃない？」

『まあ其れはそうですね……ぶっちゃけ、それは俺や鬼咲みたいになりたいって言われなかった時点で諦めました』

愛娘が生まれ持った能力を活かしたい、自分が培った全てを使ってみたいと決めた。だったらそれを見たいと煌は素直に思っている、自分達のせいであの子を孤独へと誘ってしまったと思いがながらも本気でそう成りたいと思うならいいとも思っていた。だが……友達が出来たと電話をして来た時には此方も泣く程に嬉しかった。それ程までに

孤独だったあの子に友達が……。

「もう直ぐ京都に着くと思う、輝は輝鬼になる事も諦めてない」

『それは嬉しいですね、なら何時かは鬼に至って貰いましょう。我らが継承した鬼は極限まで鍛えし人が更に鍛え抜いたその先へと辿り着く称号。トレセンはその糧にするつもりで』

「此処を糧にか」

此処に勤めている以上何とも嬉しいような複雑な心境だ、だが確かに此処での体験は他では味わえない物ばかりだしそう考えると結構的確かもしれない。清めの儀式ではそれまでの人生で得た経験、魂が感じたものを全て使って神への貢ぎを行う。その為に、鬼達は毎日在必死に生きて神に相応しい物を作り上げていく。

「まあいいんじゃないかな、鬼になるに遅いも早いもないし。相応しいと認められた時に鬼となる」

『それを過去最速で鬼となった響鬼兄さんが言っても何とも説得力が……』

「あつ無い？」

自分の場合はまあ……確かに色々特殊なケースだったなと我ながら思う。今まで一番早かったのは3代前の25歳、それを大幅に更新しているのだから当然と言えば当然だろう。というか人間でありながらウマ娘が行うメニューを鬼でもない者が行おう

とする事自体が既に狂気だとよく言われたりもした。

「いやあ俺の場合はあれだし」

『ですねえ……幸せ者ですよね響鬼さんは。それじゃあ輝がそっち行つたら宜しくお願
いしますね』

「あいあゝい」

電源を切りながら不意に空を見る、月が満天の星空を更に煌びやかに染め上げる光景
が広がっている。良い月夜だと思ふ傍らで声が聞こえて来た、その声に惹かれてつい――
隣を見てしまった。

――いい月よね……清き夜……素晴らしいと思わない、響鬼さん。

「さん付けはやめてって……これじゃあ輝の言葉が否定出来ないな……反面教師か
……」

その日の夜、珍しい事に太鼓の音色がトレセンに木霊した。

「タアツ!!」

それは何を意味するのか、ウマ娘達にもトレーナーたちにも分からない。何故叩かれ
るのか、分からぬ太鼓の音。

「ヤアツ!!」

誰に向けての演奏か、誰に向けての清めの音か、この時ばかりはヒビキは――響鬼

となった。

「ハアツ!!」

響鬼か奏でる太鼓の音色は酷く力強く優しい、聞く者を魅了する清らかな音色。それを奏でる姿は——正しく清めの音を響かせる鬼。

「ハアアアアアアアアツ……ハアツ!!」

「ホラホラホラツ確りと腿上げる〜」

早朝、ヒビキの下に集ったゴルシとスズカを除いたチームスピカの面々。ダイエツトメニユーをこなすという名目の下で行われている早朝トレーニング、今日も今日とて運動が行われている。

「朝っぱらこれは利くぜえ〜……!!」

「何よもうギブツ……私はまだまだ行けるわよ!!」

「ならっ俺だつてええ〜!!」

行われているのは腿上げトレーニングだが、10キロランニングを終えた後に様々なトレーニングをこなった後のそれは相当に身体に利く。既に疲れている故に脚は重くなっておりなかなか上がらないが、ヒビキはもつと上げるようにと声を出している。それに触発されたのか、ダスカはウオツカと共に競い合うかのように腿を上げていく。

「ふええっくお腹ペコペコで僕倒れちゃうかも!!」

「確かもうキツいかも……でもつもつと頑張るうく!!」

泣き言を漏らしながらも確りで行うテイオーと気合を入れ直して腿を上げるスペ。もう7時前、これが最後のトレーニングだが……5時から行っているトレーニングは本当にきつい、主に空腹的な意味で。

「頑張れ頑張れこの後は俺がご飯用意してあげるから」

最後の追い込みと言わんばかりに皆の士気が一気に上がっていく、現金だとは思うがこの位分かりやすい方が此方としてはやりやすい。自分は指定回数を終えているのでガレージにテーブルや椅子を用意しはじめておくとタイマーが鳴り響いた。それと同時に皆が倒れこんだ。

「おつ終わったああああっ……」

「や、やっぱりヒビキさんとの朝練は響くぜ……」

「お腹空いたよお……」

「つつ疲れたあ……」

正しく死屍累々といった光景である。スペは間もなく日本ダービーを控えているのでそれに合わせて多少などともキツくはしたが、矢張りこの時間の食事前だと相当に辛いらしい。

「皆ご苦労様、直ぐに配膳済ませちゃうから。それとも先にシャワーでも浴びてくるか
ん？」

「それもいいけど、こつから寮に戻るのもなあ……」

「用務員室のシャワー使っちゃ駄目なおじさくん……」

「あのね……年頃の乙女がおじさんが使うお風呂を軽々しく使おうなんて言うんじゃありません。ほれっ」

こつから寮まで戻りたくないと思えるテイオーに向けてヒビキは鍵を放った。そこには仮設シャワールームと書かれていた。

「理事長がプールの備え付けの他に新しく作ってくれたんだってさ、あつちにあるから浴びておいで」

「わ〜い!!」

「あつちよつと待つてくださいいよテイオーさくん!!」

「アタシたちも行くつてば!!」

「置いてくよお!!」

先程の元気の無さが何処に行ったのやら、早速シャワーへと向かつて行くウマ娘達を見送りながらも準備していた料理など炊飯器をガレージの近くまで引つ張ってくる。朝食前にあれだけ運動したのだから沢山食べるだろう、当然栄養バランスの計算も確り

とした。今日は薬膳をテーマにして消化や代謝促進効果のあるスパイスを使った物を準備してみた。尚、ウマ娘達の体調管理の為という事で理事長から経費として認められたのは素直に有難かった。

「おはようヒビキ君、ダイエットだけじゃなくて食事による体調管理も始めたのかしら？」

「おはようハナちゃん。だってダイエットの為に来てるんだから、下手に食堂行かせて爆食いされたら俺の指導が意味なきないし、食堂の皆さんの負担が豪いことになるよ」

「それは……確かにそうね。オグリキャップに近い食欲のウマ娘が数人増えると考えると地獄ね」

「んで何の用？」

彼女とは同僚、そして友人関係だが用も無いにこんな所に来る訳がない。当然理由がある。

「リギルのメンバーもダイエットしたいって子がいるのよ、預けても良いかしら」

「……それ本当だろうね」

「本当よ」

「……それならせめて個人としてくるように言ってくれるかな、チーム通すと流石に他の子も面倒見なきやいけないしマジでトレーナーやらなきやいけなくなるから」

「分かったわ」

こうなるとは思っていたが、思っていた以上に早かったなあ……と溜息をつく。これ
でリギルのメンバーも朝練入り……となると流石に全員分の食事の準備は無理、勝負形
式のを盛り込んで人数制限を掛ける事を考えておこう。

「それと輝さんはウチに来るのかしら？」

「らしいよ、やりたい事を全部やるんだってさ」

「そう——じゃあ来たらスカウトね」

と、何だか色んな意味で厄介事が増えたなあと思いつつ戻って来た皆の為に配膳を
続けるのであった。

第27話

「ホラホラホラツスぺちゃんペース落ちてるよ〜!!」

「はっはい〜!!」

減量は順調に成功、寧ろ筋肉量は増してきている影響で顔を青くしながら自分に相談に来るほどにスペシャルウィークのダイエツトと並行して行っていた肉体強化は順調に行われている。

「はいっ5本ね」

「はい!!もつともつとつ頑張ります!!」

元氣よくトレーニングへと邁進するスぺを見ながらも手元のストップウォッチを見て沖野は素直に驚いた。そこにあつたのは40.37. という記録、以前のスぺなら42秒台が精々だと思っていたが……今日はヒビキもトレーニングに同行してくれている影響かやる気も何時も以上に出している。トレーニングの為にトレセンから行ける距離にある神社への石段での坂路特訓、坂道での失速を抑える為にはピッチ走法を完璧にするしかない。そしてこれを行う前に徹底的に体力を使わせる特訓を囁ませる事下次にスぺが挑む日本ダービーのコースを疑似的に再現する。

「如何だい沖君、スぺちちゃんの調子は」

「上々だな。あと少して40を切る、ダービーでやるならせめて40は切らせたい。その為にはスタミナ強化は不可欠だ」

「やれやれっだからって俺にランニングコース決めさせるのは意地悪でしょ、ほらっ」
後ろを指差せばそこには疲れて倒れこんでしまっているスピカのメンバーの面々があつた。

「疲れたあ……」

「お前っこんなので疲れてる、のかよ……」

「今日も、なんか凄いスパルタだよねえ……」

「アタシも疲れた……」

「ほら皆バテバテ」

「つうか何でウマ娘でもねえとつつあんがびんびんしてんだよ、それが一番納得いかなえよ」

「鍛えてますからっシユツ」

毎朝と夜に走っているヒビキ、ひとつ前のランニングでそのコースを任せた。スタミナ増強と対ダービーの長距離対応の為だっただが……そのコースが当たり前のよう山を越えたり、アップダウンのキツイ道ばかり。当然体力はガリガリと削られていくし

何時終わるのかも分からない故に精神も揺さぶつてくる。故か、皆疲れて切っている。ヒビキを除いて。

「スペもスペでよくへばらねえな……」

「ダービーで勝つって気持ちがいい方向に向いてるよ、精神は肉体を越えるってよく黒沼君言ってるでしょ。それと同じさね」

「まあそれしか言いようがないだろうな、とつつあんが全然へばってねえのもそれが理由か」

「まあね」

「だああああああ!!!」

そんな事を話している間にスペがラスト一本まで来た。そこで沖野は小休止を入れた後、ラスト一本はスズカと一緒に走る事を指示する、これで何処まで力を付けたかを確かめる為。スズカと走れる事に嬉しそうにしながら階段を下りていくスペを見ながらも隣に立っているマックイーンも中々にいい顔をしている。

「にしても……マクちゃんかスピカに来るとはね」

「私も少々あれかと思いましたが……まあ結果的には良いと思っております、ヒビキさんがいらっしやるのであれば有益な事でしょうし」

「俺を正式カウントしないでくれると助かるかなあ……」

マックイーンは何故かゴルシに懐かれている……というか一方的に絡まれていると言った方が良さだろうか、色々ちよっかいを出されている立場なのだがテイオー経由でスカウトが成された。入る気はなかったらしいが……ゴルシの泣き落としに見事に引つかかつて入る事になった。案外単純な所が露呈した瞬間でもあった。

「そ、それに小耳に挟みましたが、今スピカはヒビキさんの下でダイエツトメニューを實施しているとか……無駄の肉が無いシャープなお腹周り、誰もが羨むようなパーフェクトナイスバディを実現させる！という噂をお聞きしましたわ。ですので皆さん如何にかしてそれに参加できないかとざわついてますわ」

「いやまあ確かに言ったけど、あくまでそれを目指そうってだけでそれを確約してる訳じゃ……」

スベにやる気を出させる為に言っただけで確約している訳ではない、なのだがそれが何処からか漏れてしまったらしい。完全に尾ひれがついているのだが、その中心にいるのが常に鍛えているヒビキなので信憑性も抜群という事もあつてか、ダイエツトを考えているウマ娘達の間で熱い噂となっているらしい。

「あつちやあ……」

「そ、それですな私も是非、それに加えて頂きたいのです……メジロ家として恥じない身体作りをするのも私の義務だと思っておりますので……!!」

と尤もらしい理由を上げているが、彼女、メジロマックイーンは太りやすい体質にある。そして甘い物好きであるという事もあつて減量に悩まされてしまっているらしい。以前も朝練に混ぜて欲しいというのもそれ関連だろう、だがそれを敢えて口に出す程ヒビキは野暮つたくはない。

「それならまず、間食を控える事かな」

「ううう……矢張り、そうです、わよね……」

分かりやすい程に耳は垂れて尻尾は元気を失つていく。甘い物好きに取つて間食は日頃の楽しみを失うも同義、そして何よりヒビキが提唱する我慢しないダイエットには合わない。ならまずそれを証明する所からつと背負つていたバックから袋を取り出す。

「ほい沖君、君も休止しときな」

「おつサンキュ。中身なんだ？」

「俺が焼いたので悪いけどクッキー、ホラッスぺちやんとスズちゃんもく!!」

と下にいる二人へと向けて袋を投げる、したでは上手くキャッチできたのか有難うという声が聞こえてくる。そして倒れている面々にも投げ渡す。

「それ食べて元氣出して帰ろうね」

「おじさん有難うく!!わっこのクッキー凄い美味しい!!」

「ホントツこのニンジン味が堪らない!疲れた身体に利くわ!」

「おっちゃんサンキュ!!此奴のお陰で頑張つて帰れそうだぜ!!」

「流石ゴルシちゃんの焼きそば弁当のおまけでお菓子作つてくれたおっちゃんだな」

と好評なヒビクツッキーにマックイーンも興味が沸いてしまった、目の前でこれ程までに美味しいと言われたら気にならない方が可笑しい。しかいダイエツトメニューへの参加を表明しているのにこんな所で誘惑に負けてなんて――

「マクちゃんも食べるかい、はい」

「頂きますわ」

目の前に差し出されたクツキーを見て、決意は刹那に決壊した。

「(大丈夫ですわ、これから頑張つていけばいいのですからクツキー位なら……)あらつこのクツキー……」

思わず齧つたクツキーは普段食べている物よりもずつとしつとりとした舌ざわり、だが同時に香ってくる香ばしい香りと優しい甘さが舌を刺激する。だがサクサク感も損なわれておらず、顎に伝わる振動が楽しい。そして口に広がるニンジンの味と甘みが堪らない、気付けばあつという間にクツキーを完食してしまった。

「すつ凄く美味しいですわっ!!」

「そりゃ良かった、ダイエツトメニュー中だから太らないように作つたクツキーだから安心してね」

「何、ですって……!!?」

太らない、太らないと言ったのだろうか。自分の耳は可笑しくなったのだろうか、確りとした甘みは市販品などのそれと変わらないのにカロリーは少なく太らないというのだろうか。何だその全ウマ娘、いや女性が熱望するような夢のようなクッキーは……!!? そんな視線に苦笑しつつも説明するヒビキ。

「これはおからと豆乳がメインだからね、そこに砂糖の代わりにオリゴ糖とニンジンを加えてる。普通ののに比べてカロリーも糖質も少なくなってる、下手に甘さが控えめだと満足感薄くて余計にパクパク行っちゃうのでしょ。だから満足できる様に頑張ってみました」

「流石ヒビキさん、乙女心が分かっている素敵なおじさんね!!」

「んっどしたマックイーン、なんか泣いてねえか?」

ゴルシが見た先では涙を流しながらもまるでヒビキを崇めるかのように膝をついて祈りを捧げているようなマックイーンの姿があった。その表情からは救世主見たり……!!と言いたげな物が伝わってくる、完全に大袈裟である。

「あああつヒビキさん……貴方との出会いに感謝を……!!」

「言い過ぎ言い過ぎ……それだけ苦心してただね……今度、同じようなパウンドケーキ作ってあげるから元氣出して」

「ああつ貴方こそメシア……」

「おっちゃんの場合は飯アだな」

「ゴルちゃん誰ウマ」

この日、マックイーンはトレセン学園に着て一番の嬉しさを噛み締めていた。

第28話

「俺も応援に行きたかったな……」

ダービー開催日となった日、そんな愚痴を零しながらもヒビキは仕事をこなし続けた。休みさえ合うのであれば全力で応援しに行ったのだが、生憎当日は休みなどではなかった。見送り自体はしたが、スぺ自身は見に来て欲しそうにしていたが此方にも事情がある、なので代わりにダービー後に自分が何かを作つてあげる事で勘弁して貰つた。

「ヒビキさん、お疲れ様です。もう間もなくお時間ですよ」

「はいよつ今行くよたづなちゃん」

呼びにやつて来たたづなを労いながらも共に歩き出す、自分がしなければいけない仕事という物は本来ない。ヒビキと言えど一介の用務員なので他の用務員でも事足りぬ仕事、まあその仕事のペースなどは他の者では出来ない物ばかりだが……もしもの時のヘルプがあつた時には、ヒビキの力があつた方がトレセンとしては色んな意味で都合がいいのである。良いように使われているとも言いが、その分給料もいいので文句はない。

「ヒビキさん、最近は益々人気になりましたね」

「人気というか純粹に欲しいだけでしょ、俺印のニンジンクッキー」

ヒビキの人気は現在、更に高まっている。何故ならばここ最近、マックイーンが笑顔で居続けている。それを同じくメジロ家の令嬢であるメジロライアン、メジロドーベル、メジロパーマーが尋ねてみると笑顔でこう答えたらしい。

『ヒビキさんが私の為にニンジンクッキーを作って下さったのです、しかもつカロリーはとても低いのです。フフフツこれでとても美味なのです♪』

試しにそれを貰った令嬢らは自分も作って貰おうと自分の下にやって来た、そして自分のおやつ用に残していた物を渡したのだが……それがいけなかったらしい。それが原因でトレセン中に波及してしまった……既にダイエツトの話題が凄かったのにそこに油を注ぐ事になってしまった。なので、食堂にレシピを渡して作って貰う事になり、色々策を行使する羽目になった。

「なんか、良かれと思つてやった事で俺が一番苦労してない？ いや皆が嬉しそうにするのはいいけどさ……流石に詰め寄ってくるのは困る」

「それ程皆さん嬉しいんですよ、ダイエツトの強い味方のお菓子なんて欲しさに決まっていますもの」

「たづなちゃんもかい？」

「フフフツツ勿論」

「はいはいはい、今度理事長の分と一緒にもっていくよ」

ニンジンクッキーは基本的にウマ娘達に人気が高い、カロリーも糖質も低いのは勿論だがニンジン味だからゆえだ。が、たづなや理事長も好んでいる。まあその辺りは人の好みなので深くは言及しなくておくとしよう……。そしてたづなと二人で校門へとやって来た。何故かと言えば――

「ようこそトレセン学園へ――ライデンアキラさん」

「お世話になりますったづなさん!!そしておじさま、嬉し恥ずかしながら転入しますー!」
「はいはい」

今日から雷電 輝こと、ライデンアキラとしてトレセン学園へと転入する事になった。随分と早く転入が出来た事に驚いたが、此方側からスカウトしたのに加えて輝の中学校の担任の先生が手続きを進めていたのも理由の一つとの事。

『輝、お前はもつと世界を見るべきだ。お前はまだまだ狭い世界しか知らねえんだ、だからお前は広い世界を見て見聞を広めるんだ。将来を決めるなんざそれからでもいいんだ……胸張つてドオンと生きろ!!俺は応援してるぜ、ライデンアキラのファン第一号としてな!後、トレセン学園には俺の親友がいるんだ、何かあったらそいつを頼れ』

という事らしい。随分と熱い上に生徒の事を考えてくれる先生だと感心した、そして

その親友だと言うのが——自分も知っている黒沼トレーナーだと分かった時は更にとまげたものだ。

「それにしても、ライデンアキラでいいのか登録名」

「うんそれが良いんだ。目指してる輝鬼はカガヤキじゃないから、それまでは輝アキラでいたっていうくだらない意地を張ってるだけだけどね」

「くだらなくても押し通せば立派な物だよ」

「それではまず理事長室へお連れしますね」

「おおつ我が目標であるプワアフェクトツナイスバディのたづなお姉様!! 今日も今日とて何と眩しい笑顔……そうかこんな笑みが良い女の秘訣なのか……そして了解しましたたづな師匠、じゃなくてたづなさんお願いします!!」

たづなの後に続いていく輝、いやアキラの姿を見送る。本当に姪っ子が此処に入るのは少し驚きだが、それがやりたい事なのだから致し方ないだろう。

「よおつヒビキのおやつさん」

「おやつさんって……年上扱いは慣れてるけど君のそれは随分違う気はするよ黒沼君」

振り向いた先に居る黒沼トレーナー、相変わずサングラスが良く似合う強面っぷりだ。これにて指導方針もそれにそぐわぬスパルタっぷり、彼のチームに入ったウマ娘達はその厳しさに涙を流すのだが、強くなる実感を確かに感じる故に彼に深い感謝と畏

敬の念を抱くのさという。

「俺としてはアンタはどうしても年上な気がしてならなくてな、実際人間の器はアンタの方が上だ。おやつさんが妥当だろ」

「んな事だから君はヤクザみたいだつて言われるんだよ」

「致し方ねえだろうなそれは、慣れて気にしてねえよ」

「そこは気にしようよ、世間に顔を出すトレーナーとして」

年齢的には黒沼の方が余裕で年上、それなのに自分を年上扱いしてくる黒沼には困っている。そしてこちらが年上扱いして敬語で話す事を嫌う、本人的には格が違うとの事だが……如何にも分からない。

「んでおやつさん、アンタの姪はもう来てるのか」

「たづなちゃんか理事長室に連れて行つたよ」

「そうか、後で顔を出すとしよう。彰アキラ、いや錦から頼まれてるからな」

如何やら錦というのがアキラの担任の先生の名前らしい。名前まで一緒だとは……偶然にしては良く出来過ぎだと思ふ。

「錦さんっていうのかい？」

「ああ。錦山、俺とは兄弟同然の親友だ。あいつは随分と輝を目に掛けて心配してたらつこ」

「そっか……良い人なんだね」

「ああ、処世術に長けてる上に俺と違って人の心って奴を良く分かつてる上に人を見る目がある」

『兄弟、悪いがスカウトを俺の中学に回す事って出来るか。一人推薦してえ奴がいる』
『突然電話してきたと思えば何だ、幾ら俺が中央のトレーナーだとしても、一介のトレーナーだぞ。流石に難しい。そいつに才能や実力が無きや無理だな』

『そいつは俺が保証するから頼む兄弟……あいつは此処にいるべきじゃねえ、此処の環境はあいつにとって毒だ』

『……分かった、名前を覚えてくれ。何とかねじ込んでみる』

「それがまさかおやつさんの姪って分かった時には驚いたもんだ、ついでにシンボリルドルフがスカウトにそいつの事を言ってたからとんとん拍子だ」

「成程ね……シンちゃんの話だけで随分迅速なスカウト派遣だと思っただけ、そういう裏があったのね」

「だったら錦山先生には本当に感謝しなければならない、その環境が如何だったかは自分は見えていないので分からない。だが、見学に来た事で輝には友達が出来たのだ。それは彼女にとって生涯の宝になる。」

「黒沼君、昼飯はまだかな。俺が作るよ」

「ブルボンの奴も一緒でいいか」

「勿論、俺を飴扱いかい？少しは褒めてあげな」

「どうも苦手でな、俺は鞭で良い。飴は他に頼む」

「やれやれ不器用です事」

そして昼食を食べている時、TVを付けると——スペが日本ダービーにてチームリギル所属のエルコンドルパサーと同着で1位になったというニュースを見にして思わず笑顔を作った。

第29話

輝が正式にライデンアキラとしてウマ娘としてトレセン学園へとやって来た、ヒビキの姪っ子が転入してきたというのは優れた話題性であった為にあつたという間にトレセン学園中に広まっていった。初日は転入の手続きや寮へと入る為の作業で潰れてしまったので走れなかった、なので後日、アキラは見学時にお世話になった人達の前で再びウマ娘として脚を振るっていた。

「A A A A L a L a L a L a L a L a i e !!」

「またなんかに影響されてんなあれ……」

何処かで聞いた事があるような声を上げながらも爆走していくアキラに丁度仕事で通りがかつたヒビキが呆れた声を出す、元氣があるのは良い事だがもう少し抑えてくれたら自分としては嬉しいのだが……と言わざるを得ない。だが、その走りに注目する観客達。

「流石兄弟が見込んだ奴だ、良い走りしやがる」

「いや如何いうスタミナをしてるんだ……全くスピードが落ちてないぞ」

「矢張りと言うべきか走り方はかなり粗い……でもそこに安心してる自分がいるってい

うのがかなり複雑だわ……」

初めてアキラの走りを目の当たりにしているトレーナーたちは驚いていた、何故ならば目の前で走っている少女は少し前まで一般校に通っていた中学生なのだから。それゆえの粗さはあるのだが、それ以外は一級品なのだから。

「おやつヒビキさんじゃないか、アキラの応援かな」

「違うよ、仕事だよ仕事。姪っ子鼻肩する程暇じゃないんでね、今日も芝の修繕だよ」
「いつもありがとう、貴方のお陰で何時も気分良く走れている」

「そりやどうも、んで今あいつは如何よ」

話を振って来たルドルフへと話を聞いてみる事にした、周りを見てみればチームリギルのメンバーだけではなくスピカ、当然黒沼の姿もあった。あわよくばスカウトしようというのだろう、実際アキラの走りは魅力的なのだ、育ててみたいという欲が掻き立てられる。

「今は芝2000mを走らせている所だ、以前マイルをあれだけ快走してくれたから中距離でも見たいと思ってね」

「まあ基本マイル行けるなら中も行けるからねえ……それで感想は？」

「——万《font:ul40》馬《font》奔騰、それに尽きるな」

今、最後のコーナーを過ぎる所だが以前のように内ラチをギリギリを一切スピードを

落とすことなく突っ込んでいく異常な精神力。スタートから一切スピードを落としていないのにも拘らず、直線に入った途端に加速出来る程のスタミナと精神力。直線に入ってから数段階に分けての加速、最早どんな根性なのかと言いたくなる程のそれに皆が圧倒される。そしてゴールフラッグをヒシアマゾンが振り下ろすと急ブレーキをかけて停止する——が、息が全く上がっていない。多少乱れていても直ぐに元に戻ってしまう。

「爆発は平均より少し上程度だが、スタミナと精神力が桁違いだ。加えて坂路では逆に速度が上がる、とんでもない存在だよ」

「ずっと山籠りしてたようなもんだからなああいつ」

文字通り山が遊び場であったアキラ、しかもそこは神社こそへと続く道以外は一切整備が成されていない自然の山。文字通り、大自然を相手に鍛錬をし続けていた彼女の肉体は驚く程に頑強で力強いのである。ヒビキはトレーナー陣へと声を掛ける。

「どうもつトレーナーの皆さま方、うちの姪っ子は如何ですかね」

「とつつあんじゃねえか、いや中距離でもこれって改めてすげえって思うぞ」

「正しく原石よ、あのスタミナと根性ならどんな戦法を取らせてもありだわ」

「鍛えがいがあるに尽きるな、擽られるな」

驚きと確信、そして高揚感が全員を包んでいると言つていいだろう。特筆すべきはス

タミナと精神力とパワー、力強さに加えて根性によって加速していく走りを見せる。その力強い走りは山野によって鍛えられた故。悪路や坂路にはめっぼう強いのでダートだろうが適応出来る。

だが、その走り方はまだまだぎこちなく走り方が分かっていない様な印象を受ける。走り方、つまり脚質も彼女が自分に合っているかも理解せずに走っているだけなので指導次第で追い込みだろうが差しだろうが逃げにだって出来る。そして距離もそうかも知れない……トレーナー次第で如何様にも姿を変える事が出来るウマ娘、それが今のアキラ。故か三人の瞳は輝いていた。是非育ててみたい……そんな色をしている。

「参考までに、皆はどんな風に育てる？」

「そうだなあ……自然にやっつてる先行で様子を見つつ他のも勉強させるかな、あのスタミナだからステイヤーにもなれるだろうからそっち方面を目指させるのも良いなあ……」

「あの度胸を活かすのもいいわね……逃げで進ませながらもあの内ラチ攻めを活かして後ろのウマ娘達のペースを乱す……それも面白いわ」

「速度を抑えての差し。あの速度を維持させられるなら、体力を保って最後に数段階のスパートを強化する、俺ならそうする」

元のアキラを活かしながら当人の考えを重視する沖野、クソ度胸のそれを活かして他

のペースを崩す逃げを考えるハナ、スタミナの使い道を変える事でラストにスパートを仕掛けさせる考えの黒沼。見事なまでに別れた指導方針の違い。どれも違つてどれも面白そうと素直に思つてしまつていた。

「ヒビキ君だつたらどうするのよ、参考までに聞いても良いかしら」

「そうだな……俺だつたら——追い込みかな」

ヒビキの選択は追い込みだつた。言うなればゴールドシップのようなスタイルの走り方という事になる。

「ちよつとズルいかもしいけれど、俺はあいつとは付き合ひも長い。あいつ負けん気が強いんだよ、俺の鍛錬にも体力が尽きてるのに根性だけで喰らいついてくるし。自分が負け続けるのを許せないタイプ、良くも悪くも精神が肉体に影響を与えるタイプだよあいつは」

アキラが鬼の称号を欲しているのは憧れだけではない、自分に勝ちたいから。自分に勝利するための最低条件、それが輝鬼になる事。そしてそれが最低限のライン、そこから自分を鍛えまくつて自分に勝つた響鬼に勝つと思つている憧れこそが最大のライバル、とでも言うべきだろう。そこまで言い切つた時、不意に三人からの目が変わった。

「随分と良いご意見を言うねえとつっあん」

「野暮からも知れないけどヒビキ君、貴方良い目してたわよ」

「ああ。唯資格を取っただけ……って奴の目じゃなかったな」

「何年用務員やってると思ってるのさ、資格だけじゃない事にもなるよ」

第一線で活躍するウマ娘達と鍛錬したり、時たまアドバイスもしたりしてきたのだ。この位は当然だと毅然とした態度で返す、それに揺さぶる失敗かと肩を竦められる、この程度の揺さぶりなんて揺さぶりにも入らないと言われたような気がしたのだ。

「はあいつヒビキ君、お元氣♪」

「あらっマルちゃんじゃない、元氣も元氣よ」

背後から弾むような声と共に肩を叩いてきたのはある意味ヒビキと最も距離が近い言ってもいい存在のウマ娘だった。艶やかな長い髪を靡かせながらも柔らかな物腰と気品のある優しいお姉様ウマ娘、だがその走りからスパーカーとも呼ばれる程の実力者のマルゼンスキーであった。

「あの子よね、噂のヒビキ君の姪っ子ちゃんって」

「ああそうだよ、如何だいマルちゃんから見たら」

「うくんそうね……今のところ元氣いっぱいいなウマ娘ちゃん、としか言えないかしら。でもいい顔してるわね、走るのを楽しんでる」

まだまだ走り方はなっていない、だが走る事を楽しめている事は満点だった。自分のやっている事に楽しさを見出せるものは強い、楽しい物の為なら人は努力を容易く積み

重ねていける。楽しめるといえるのは上達の最短コースでもある。

「フフツ何だかあの子と走りたくなっちゃったわ、良いかしらヒビキ君」

「アキラが良いって言えば良いと思うよ。寧ろ君のレースはあいつにとつてチョベリグな筈だよ」

「まあっお上手ね相変わらず♪それじゃあブイブイ言わせて来るわね〜♪」

ウインクと共に投げキッスをしてから走っていくマルゼンスキーへと手を振るヒビキ、そして何やらアキラの驚く声と共に早速併走が決定したらしい。

「とつつあん、前から思ってたんだが……なんでマルゼンスキーとあんなに仲良いんだ？」

「さあ？なんか落ち着くからだと思うよ」

「分からなくはないけど……良く平然と死語使えるわね」

「流石おやつさんだな、そういう所も尊敬するぜ俺は」

「うひゃああああっ!!!こんなにゲキマブなチャンネー様が学園にいるとは……しかも先程のおじ様とのやり取り、トレンディな香りを感じます!」

「あら御上手ね、フフフツヒビキ君の事は好きよ私。でも何処までかは秘密よ、あんまり強く聞かないでね、まいっちんぐだから♪」

「グフツ……何だこのたづなさんとは別路線な大人の色気は……私は、どっちを目指せばいいんだ……何だこれは、如何すればいいのだ!？」

アキラは早速影響を受けた。

第30話

「んで結局どこにするのか決めたのか」

「全然」

「おい、リギルのハナちゃんに目を掛けられるなんて中々ないんだから」

「へっくやっぱりリグルって凄いんだ」

「リギルだっつの」

朝練を終えたヒビキとアキラは汗を流した後、軽く歓談していた。現在アキラは三人のトレーナーからのスカウトを受けている身、しかもその全員が優れたトレーナーであるという事。本当ならばこんなスカウトを受けたなら焦ったり戸惑ったりするものだが……ウマ娘としての世界に全く触れてこなかった殻か、その凄さが全然分かっていないようである。

「だから今はトレーナー交代交代で見て貰ってるよ、チャンスは公平に欲しいし私に判断してほしいって」

「贅沢だなあ……」

スカウトされたウマ娘が専門的な事をしてこなかった場合、そういった処置が取られ

る事があると言う事は聞いたが事があるのだが、それを実際に姪っ子に適応されるというのは誇らしいと思う反面大丈夫なのかという不安もある。

「それでこの前がリギルで今は黒沼トレーナー、錦先生の話もあるし親身になってくれていい人だよ」

「まあ見た目は完全にヤーさんだけど普通に良い人だからね黒沼君。飴が上手く上げられないタイプ」

「うん、チームの先輩たちも毎日毎日ヒューヒュー言いながら練習してる。ブルボンさんは全然大丈夫そうだったけど」

黒沼が監督するチームの中で最も抜きんでている存在と言えば矢張りミホノブルボンだろう。常に無表情で無感情、サイボーグとも揶揄されるレベルのそれであり、機械的に黒沼のスパルタ指導にも従い続けている。

「ブルちゃんなあ……三冠を目指して頑張ってるんだよ」

「それは分かる、今も私と一緒に滅茶苦茶坂路トレーニングしてるよ。後すつげえ喋り方癖がある」

「超分かる」

『ヒビキ用務員、おはようございます。マスターの指示に従い、明日から早朝及び夜間トレーニングを行う前の挨拶をする為に待機しておりました。宜しくお願い致します』

『ああうん、一先ず……お昼、一緒に食べるかい?』

『……バットステータス：空腹を検知、食事を希望します』

『お、おう……黒沼君も随分と癖が強い子を担当してるな……』

これがミホノブルボンとのファーストコンタクトだった事はよく覚えている。本当にサイボーグなんじゃないかと思う位には感情が希薄、だが目標に向かってひたむきに努力出来る心はある意味黒沼との相性の良さが滲み出ていた。

「いやあ初対面ですげえビビったよ、アンドロイドか何かと思つたもん。何あれ、更に機械的になつた綾波 レイ?」

「何だろう分かつてしまう自分がいる……」

最初こそ驚いたが、今では普通に顔見知りで恐らくだが……懐かれている、と思う。以前黒沼が事情があつて出張に出た際に自分が預かつた事があつた、その際に自分ななかで悪いねと謝つた時に

『否定、私はヒビキ用務員にステータス：好意及び尊敬を抱いております。共に居れる事が喜ばしい事と思っております』

ハッキリ言われた事があつて驚いた。この後、好意は好意でもマスターである黒沼が尊敬している程の人物を踏まえて好意的に思つているという事、つまり所懐いているという事が分かつて素直にホツとしたのは内緒だった。流石に学生にそんな風に言われ

たらビックリする物である。

「ヒビキさんっ!!良かった居てくれたか」

「あらっシンちゃん……ってどうしたのよその恰好」

話し込んでいるとルドルフが駆け込んできた、一体何かと思いきや何故か彼女は見慣れた制服ではなく燕尾服を着用していた。凛としていて宝塚的なカツコよさが出ている。

「おおっ会長さんかっけえ!!宝塚デビューですか!?!」

「宝塚記念は出ているからデビューではないな」

「いやそういう意味じゃないと思う……んでどったのよ」

「すまないヒビキさん——執事長になってくれ」

「——はへっ?」

「いやさ……なんで?」

ルドルフから受けたヘルプはまさか過ぎていた、何故ならば今日はトレセン学園のファン感謝祭。様々な催し物が出る事になっており、ヒビキも用務員として出店を設計から組み立て、出店指示などを出したりした。当日はのんびりと巡ろうと考えていたのだが——まさかこんなヘルプを頼まれるなんて予想外過ぎた。

「どうぞお嬢様、ロイヤルアールグレイで御座います」

『キヤアアアツ!!』

「夢のようなひと時を楽しもう♪」

チームリギルが行っている執事喫茶、フジキセキにテイエムオペラオー、エアグルーヴにシンボリドルフと凛として女性人気も高い彼女らが燕尾服に身を包んで接客を行っている、彼方此方でスマホのシャッター音が聞こえまくっているのだが……何故かヒビキはその執事達を取り纏める執事長役として抜擢されてしまった。極めて謎である。

「お嬢様方、リギルの執事喫茶へとようこそ。当店の執事長を務めておりますヒビキと申します、どうぞ心行くまでお楽しみください」

『キヤアアアアアツ!!』

「ねえっシンちゃん、これってウマ娘の執事喫茶なのにおっさんがいるっていう意味での悲鳴じゃないよね」

「断じて違う。自信を持ってくれヒビキさん、貴方はイケメンだ」

何でも、ハナに執事長役を頼むつもりだったらしいのだが……断固拒否された模様。曰く、これはウマ娘達がファンたちへと感謝を伝える物、自分が出てもしようがないという事らしいが絶対にやりたくないからそれらしい言い訳を並べたとヒビキは感じて

いる。

「あつあのっ……執事長さんにお写真をお願いしても宜しいでしょうか!」

「勿論に御座います、お好きなポーズがあるのでしたらお申し付けください。お嬢様の願いを叶える事こそが執事たる私の願いに御座います」

「凄いなヒビキさん……私はまだ慣れないのにあれほど完璧に」

「ああつ流石の適応力だ」

少し裏に引つ込みながら頬をマッサージしているエアグルーヴにフジキセキは同意していた。正直言つて此処にいるメンバーだけでは方向性が全員似ているタイプだったので変化球が欲しかった、なのでヒビキをスカウトしたのだが……自分達とは違った経験豊富な大人の魅力に溢れた物腰柔らかな執事というのは、ウマ娘の執事喫茶なのにルドルフのそれとツートップで人気になっていた。ウマ娘の執事喫茶なのに。

「あ、あのそれじゃあシンボリルドルフさんを抱っこして貰つてもいいですか!」

「えっわつ私を?」

「畏まりました、ではっ——」

「ヒツヒビキさん!」

執事喫茶のサービスで条件を満たすと好きな執事との写真を取れるというのがある、だがまさかの変化球。お客と執事、ではなく執事と執事のツーショット要望だった。し

がルドルフの執事姿と共にトレンドに上がったとか、ヒビキ個人のファンが出来たとか……。

「しかしどんな事で返せばいいんだろうか……」

「そうだな……俺が辞める時が来たら止めないとか？」

『えっ!!!?』

「ギャグよギャグ……なんでそんなマジ顔するのよ」

第31話

木々の葉の色が赤く色づき始めた頃、アキラが最後の体験先であるスピカでの練習に励んでいる時の事だった。それは突然に言われた事であった。15時に正門付近に集合を掛けられたスピカメンバーとヒビキ。そこでは車に乗車している沖野から地図が手渡され、ゴールまで来いと指示が出る。

「ゴール、たつて……何処だよこれ……」

「沖君……君、地図書くセンス皆無だね」

「るっさいぞとつつあん。だからアンタを付けるんだろ」

渡された地図……いや、紙にはニヨロニヨロと伸びた道と思われる線が山を登っていきさまが分かる程度の物しかない。そして山には旅館と書かれており、そこがゴール!! という文字だけがある。つまり、山を登って旅館まで来いと言う事になるのだが……この地図で来いと言うのはきつ過ぎる。なので今回はヒビキが同伴する事になった。

「随分と山奥にありますわね……」

「何時間かかるの、これ……」

「良いかこれは体力と坂の特訓だ、これを越えて秋のG1で勝つ為だ。ウチに来たばか

りのアキラには悪いがまあ我慢してくれ」

「山登りとか毎日やってたから苦じやないよ僕」

真顔で返事を返す姿に流石はヒビキの姪……と全員から思われるのであった。

「そしてそこはとつつあんの馴染みがやつてる旅館だ。夕食は豪華にしてくれるようにとつつあんが掛け合ってくれた」

「ほっ本当おじさん!？」

「勿論。山と海の幸のフルコース、ついでにデザート付き」

「フルコース!!？」「デザート!!？」

やや食い付く部分が違うような気がするが、お陰でスピカのやる気は鰻登りであった。これが終われば美味しいご飯が待っていると分かるとやる気も出るという物、これが飴ならば——次は鞭である。

「但しつ!! 18時までには旅館に来れなかったら飯抜きな」

『えっく!!?』

「安心しろ、とつつあんの分はあるから」

「いやそれはあんまりでしょ、俺もなしで良いから」

んじや頑張れよく適当な声援を送りながら沖野は車を発進させて一足先に旅館へと向かって行く。本当にあれはトレーナーなのかとマックイーンが愚痴を零すがそれに

は大体同意なメンバー。

「にしても道なき道を走れって……」

「最早トレーニングじゃなくて修行のそれだな……」

「全くだわ、ごめんなさいアキラ先輩。折角の体験なのに」

「全然大丈夫、山登りとかマジで毎日やってたから。んでさ——スズカさん先に行っちゃったけどいいの？」

『えっ?』

たつたつた……と軽やかな足音と共に去っていくスズカ。気付けばゴルシが持っていた地図が彼女の手にあつた、このままでは自分達が迷子になると大急ぎで皆はそれを追いかけていく。最後に残されたヒビキにアキラが問う。

「おじ様バイクじゃなくていいの?」

「俺だけ走らないのは不公平を感じちゃうでしょ、久々の長距離マラソンだ。さあつ鍛えるぞアキラ」

「ラーサ!!」

と二人揃って皆を追いかけていく。幸いなことに信号で止まっていたのですぐに追いついて、ヒビキは最後尾に付きながらナビゲートを行っていく。

「ヒツヒビキさん本当にこつちで良いんですね……もう日も沈んで怖いんですけど

……」

「大丈夫大丈夫、おじさんが付いてるから。あと少しだよ皆フアイトゥ」

出発から4時間、既に辺りは日が沈んで夜の帳が辺りを支配する時間帯になりつつある。時計は付けていないがもう明確に夕食は期待出来ない時間……以上に無事に旅館に行けるかどうかもう不安になってきている。

「おじさん、もう無理くおぶつてよ……!!」

「テイちゃん頑張れ、あと少し」

「暗いわ、怖いわ……!!」

「ダイちゃん大丈夫、何か出て来てもおじさんが何とかしてあげるから」

幾ら身体能力が優れるウマ娘とは言え、精神的にはまだまだ幼い学生らである彼女たち。それを支えているのは頼りになるヒビキであった事は明らか。

「つというか……如何してヒビキさんはそこまで平気そうなんですの……!?!」

「鍛えてますからつシュツ」

「それを言ったらアキラもだろう……アタシももう無理く」

「私も鍛えてますからつしゅつ」

最後尾だったヒビキは何時の間にか先頭を張つて皆を先導している、そして一番後ろにはアキラが付いている。ウマ娘達でも根を上げるような長距離を走りながらも平気

そんな顔をしているヒビキとアキラ。これが鍛え方が違うという奴だろうか……毎日山登りをしていたと語るアキラのそれは真実であるという事、そしてヒビキの鍛え方も生半可ではないと改めて知った瞬間であった。

「おっ見えて来たよほら」

ヒビキの声に導かれて前を見ると唯一明かりがついている建物と街灯が見えて来た、あれが目的の旅館だ!!と皆の顔が明るくなるのだが……その街灯の下では浴衣を着て座って待っている沖野の姿があった。

「おせえよお前ら、18時までに来いって言ったのにもう19時だぞ」

「無茶を言うもんじゃないよ沖君、此処まで走って来いって言うのは俺でもきついんだから」

「いや、一番ケロツとしているとつつあんが言っても説得力ねえから」

「これでも疲れてるんだよ、顔に出してないだけ」

思わず倒れこんでしまう程に疲れ切ってしまったている皆々、アキラは倒れこんではないが……それでもかなり疲れているのか膝に手をつけて息を吐いている。何せ沖野が指定したコースは普通の道よりも数段キツイコース、ヒビキが自分が何かあって入院したなどで鍛えられなかった際、自分を鍛え直す為のコースなのだから。

「良いからお前ら風呂行って汗流してこい」

「言われなくても行かせて貰うわ!!」

軽くキレているウオツカ、そりや自分達があれだけ苦勞して此処までやって来たのに自分一人だけ湯に浸かってのんびりとしていた姿を見せられたら腹が立つという物。だがその前に……とマックイーンが立ち上がった沖野の前に立った。

「宜しいですわねヒビキさん……?」

「俺が許可する。マックイーンさん、懲らしめておやりなさい」

「ええでは存分に——トレーナーさん、たつぷりとお礼をさせて頂きますわ……!!」

「えっぐわああああああああああ!!!!」

名門メジロ家の御令嬢、メジロマックイーン。まさかのプロレス技でトレーナーを攻撃である。しかもまさかのリバス・パロ・スペシャルウオーズマン式パロ・スペシャルである。ギリギリと決められる両腕、辺りに沖野の悲鳴が木霊する。まあ自業自得である。そんな叫び声が木霊する中で旅館の入り口が引かれると、そこから着物に身を包んだ女性が登場した。

「あらあら普通なら止めた方が良いんだらうけど、状況からして其方が悪いらしいわね。だから止めないでおくわね」

「いやいやいや助けてくれ女将さつきやああああああ!!!!」

女将さんと呼ばれた人へと視線が注がれると、その人はヒビキの姿を見て手を振っ

た。

「お久しぶり響鬼さん、相変わらず鍛えてるみたいね」

「よっお久しぶり。時間遅れてるけど飯の用意とか大丈夫かな、駄目なら俺が出すから作ってあげてくれないかな」

「大丈夫よ。コースを聞きだしたけど、こりや3時間程度じゃ無理だつて分かったから」
流石はヒビキの馴染みだけあつてその辺りの事情にも精通している!!と皆が感動してしまった、もうお腹もペコペコな状態で夕食抜きなんて言われたら本当に動けなくなってしまう。だが、ヒビキがお腹を切るから出してあげるとい言葉にも本当に感動してしまった。もう沖野なんかよりもずっとトレーナーらしいんじゃないかと全員が思った。

「改めまして、ようこそ旅館たちばなへ。私は女将の立花 香須実と申します。本日は遠い所の御越し頂きました、誠心誠意お出迎えさせて頂きますので心行くまで当旅館をお楽しみください。つと堅苦しい御挨拶は此処まで、さあさあ皆さんまずは自慢の温泉で汗を流してらっしゃい。源泉かけ流しの自慢の温泉よ、疲れを癒したら——お腹一杯ご飯を食べなさいな」

『有難う御座います!!』

マックイーンも漸く沖野を開放して感謝を述べながら旅館へと入っていく、女将であ

る香須実は最後に入っていったアキラを見て少しばかり目を鋭くした。

「あの子が響鬼さんの姪っ子ね、まだ子供なのに鍛え込まれてるわね」

「分かるかい」

「ええっ貴方の馴染みだもん」

響鬼へと笑いながらも本当に懐かしむような表情を作る。

「今日はゆつくりして行ってね、精一杯もてなすから」

「ああっ有難う。ほらっ沖君何時まで寝てるの、起きな」

「だ……だったら助けてくれよ……」

「君の罪じゃない、どれだけバカやって来たと思ってるのさ。これまでの罪を数えな」

第32話

「にしてもとつつあんの馴染みがこんな旅館経営してるって聞いた時は驚いたな、しかも結構有名どころでっつと」

「まあ、これでも人脈はある方なもんでねっつと」

温泉で汗を流したヒビキは浴衣に着替えてまだ温泉を楽しんでいると思われるウマ娘達を待ちながら将棋を打っていた。

「つうかマジでとつつあんどどうなってんだよ、何でピンピンしてんだよ」

「精神的な負担でしょ。知ってる道を走ってるのと知らない道を案内がいるとはいえ走ってるのと同じや精神的な疲労は段違いさ、だから言ってるじゃんメニューをやるなら自分でも体験するべきだっつて」

「こんな道、俺が走れる訳ねえだろ」

そもそも響鬼と一緒に走ると言うのも想定外、免許がある上にバイクを持っていると聞いていたので普通にバイクに乗るとばかり思っていたのに……平然と一緒に走ってきて戦慄したのは此方の方である。

「鍛えが足りないね、君も黒沼君みたいに鍛えなさいよ」

「おいおい一緒にしないでくれよ……」

「まあ黒沼君は俺と殴り合えるぐらいには強いからね」

「えっ……」

思わず手が止まる、このヒビキと殴り合える……それは黒沼トレーナーも相当に鍛え込んでいるという事になるのではないのだろうか……。

「因みに黒沼君は特別なトレーニングなんてした事無いらしいよ。曰く、生きることそのものがトレーニングだって」

「カツコ良過ぎだろ……というか、それでとつつあんと同格の強さっておかしくね？」

「さあねっはいっ王手飛車取り」

「ゲッ!？」

まああくまで肉体的なレベルが同じというだけなので、強さ自体は分からないというのが正しい。そして最早詰みの状況である王手飛車取りへと沖野を追い込んだ。

「まつ待った!!」

「これで5回目なんだけどなあ……いい加減観念したら、見苦しいよ」

「トレーナーにならねえとつつあんに言われたくねえよ!!」

「それとこれは話が別。それとも此処の食事代とか全部自分で立て替えるかい、俺の紹介抜きで」

「ぐぬう……」

この旅館、たちばなは普通に有名処である高級な部類に入る。故にかなりお値段もお高め、そこをヒビキが馴染みという事で割引して貰っているのである。それが無くなるとかかなりきつい……故に負けを認めようとした所——

「響鬼さん、他の皆が上がってご飯の支度も出来たわよ」

「おっ出来たかい。それじゃあ今回はこれで御開きつと」

「くそお……なんでそんなに将棋強いんだよ……」

という訳でお待ちかねの夕食タイムに入る。汗も流してスッキリさっぱりした一同、そして待っているのは——超豪華な料理の山々、海の幸山の幸のてんこ盛り特上コースである。

『いただきま〜す!!』

「トレーナーさん!!私をジャンカップに出してください!!」

「ちよつと待てよ何だこの料理の山あ!?!てんこ盛り特上コースって……ゲツ!?!」

割引されているにしても自分の給料の殆どが消し飛ぶレベルの額、割引されていると言つても流石は高級旅館と言つた所である。

「この寿司美味しいなあ!!おっちゃん追加していいか!?!」

「私はニンジンの天ぷら!」

「いいよ。香須実ちゃん、特上寿司とニンジン天ぶらの盛り合わせ追加ね」

「畏まり〜」

「とつつあんマジで待って!!俺の貯金が消し飛ぶわ!!?」

スベがジャパンカップに出たいという思いを伝えるのだが、それ以上に料理の追加オーダーに汗をだらだらと流していく。このままだとマジで素寒貧になってしまうと焦る。

「大丈夫だよ、俺が奢るから」

「えっマジで!?!」

「此処を紹介したのは俺だしね、その責任は取るつもり。しかも、此処素寒貧になったらハナちゃんに集るでしょ。それ防止」

助かったと思ったが、それ以上にきつい言葉が飛んできて素直に喜ばなくなってきた。だが、それを聞いて皆は食べる速度を落していく。沖野が如何したと尋ねると申し訳なさそうにしていた。

「いやだつてなあ……トレーナーの支払いなら喰えるけどなあ……」

「此処まで一緒に走ってきたヒビキさんの払いとなると……」

「流石に遠慮いたしますわ……」

「そうよね……」

「何気にしてんだよ、おっちゃんが気前よく奢ってくれて言うんだから食っちゃまえて」

「そうですよ、おじ様は結構気前良い人なんですから」

「いやだからって……」

バクバク食べているのはゴルシとアキラ、この場合は二人のように食べてくれた方が個人的には有難い。トレーナーと違って用務員だからと心配してくれているようだが、その辺りの事は問題ない。

「大丈夫だよ。ぶっちゃけ俺の給料沖君より高いから」

「えっマジかよとつつあん。トレーナーって割と高給なんだぞ」

「俺が普段ごんだけ仕事こなしてると思ってるの？ 自惚れじゃないけど、俺が辞めたらトレセンは困るから辞められないように囲まれてんの」

それを言われて納得する、実際問題ヒビキがこなす仕事の量や質は他の用務員とは比べ物にならない。校舎やコースの修繕に点検、花壇の手入れに搬入の手伝い、草刈にそれぞれのコースの調整なども含まれている。そして他の用務員が出来ないと思われる仕事の代行やヘルプ……本来は用務員も不足している筈だが、不足分をたった一人で補っている。故にだからヒビキにやめられない為に給料も高い。理事長は更に出してもいいとの事。

「ぶつちやけハナちゃんより高給取りよ俺」

「うっそだろ!？」

「という訳で安心して飲み食いしていいよ」

『有難う御座います!!』

「無視しないでくれとつつあん!!」

「それはトレーナーさんもです!!」

そう言いながらも確りと天ぶらに被り付いているスペ、説得力がない。

「一応聞いてたよ、ジャパンカップか……チーム的にはどっちかが負ける事になるから避けたいんだけど……お前さんは前からスズカと走りたいって言ってたしな、分かった」

「有難う御座います!!」

「スペちゃん対スズちゃんか、フツ面白いカードだね」

「まあその前にスズカが天皇賞で勝つ事が前提になるけどな」

そしてスズカには決めた事があつた、海外への挑戦。前々から考えていたらしくジャパンカップ後に挑もうと考えているらしい、となると必然的にジャパンカップがスズカに挑む最後のチャンスという事になってしまう。満足するまで挑戦する、つまり何時帰ってくるのかも分からない。だがそれを応援するのも自分達大人の役目という物。

「じゃあまずはずちゃん、の天皇賞制覇を祈って——どんどん食べなさい、沖君もね」
「そうだな、よし俺も食うか!! ってああっ俺の分もう殆どねえじゃねえか!?! ゴルシお前ええ!!!」

「喰うのが遅いのがいけないのさっ♪」

そんな大騒ぎな夕食も楽しんだ後、流石に食休みを挟んでからトレセンに戻る事になった一同。ヒビキは外に出ながら冷たい空気を肌で感じていた。そして——

「響鬼さん、此処にいたのね」

「ああっ久しぶりのたちばなだからね……此処の空気はやっぱりいいね」

「そうね……貴方達は此処が好きだったものね」

「——ああ、だから俺も此処が好きになったんだと思う」

第33話

「さてと……おいお前らつそろそろ戻るぞ」

「ンだよ折角旅館に来たのに、泊まらねえのかよ」

「ンな訳ねえだろ……そこまでとつつあんに頼めるかよ」

そろそろ時間も良い頃合になつて来たので皆に元のジャージに着替えるように言つて、帰る支度を済ませるように言つておく。外泊の許可は取つていないので確りと帰らないといけない……というよりも此処に泊まると幾ら掛かるか寒気がしてならないのである。

「さてと後はとつつあんだけだが……あれつ何処行つたんだ？」

ヒビキとアキラの事も考えてワゴンに乗つて来ている、ヒビキならこつから走つてもいけるからと言ひ出しかねないが……無理を言つてついてきてもらつているのだからこの位はしないと申し訳が立たない。だが肝心のヒビキは何処にいるのだろうかと探している、スペが袖を引つ張つた。

「あそこですよトレーナーさん、なんか女将さんと話してます」

高い山にある故に遠くまで景色が見える場所に二人で立っているヒビキと女将さん

である香須実がいた。声を掛けようとするスベを止める、何だかいい雰囲気じゃないか。

「もしかして……とつつあんの元カノだったりして」

「えっヒビキさんって彼女さん居たんですか!？」

「何だスベ知らなかったのか、とつつあんに元カノがいたって話はトレセンじゃ沸騰中なんだぞ」

「しっ知らなかった……!!」

それを聞くと本当に気になって来た、なので――

「此処はとつつあんの事を知りたい、故に――全力で聞き耳を立てる、異議のある者は」

「異議ありですわ、淑女としてそのような行いは」

『異議なし』

「皆さん!？」

「よしじゃあマックイーンだけ先に車内で待機で」

「ああもうっ私も気になりますから一人にしないでくださいませ!」

「それにしても、昔から大人っぽかったのに歳を取って余計にそれが増したわね」

「そのせいで馴染みの皆からさん付けがデフォだったしねえ」

缶コーヒーを飲みながらも雑談に興じる、昔老け顔というよりも貫禄と包容力があつた為か基本的に同世代であつても同じ年扱いされる事は無かつた。年上扱いとさん付けがデフォルト。

「昔から年上扱いだったのが今じゃ立派なおじさんだからね」

「何言つてるのよ、十二分若い癖に。寧ろ色気増したんじゃない?」

「そつちこそ随分と色つぽくなつたじゃない」

「女の花は30歳からよ、これでも見合いの申し込みが凄く来てて大変なのよ」

「どつちかと言えはこの旅館目当てじゃない?」

「あり得るからいやね」

中々に良い雰囲気、互いに久しぶりに会つたが故の身の上話もあるがこれこそ大人の恋愛の雰囲気と年頃の乙女たちは喉を鳴らしていた。中でもウオツカは既に刺激が強いのか顔をかなり赤くし始めている。これでキスでもしたらどうなってしまうのだろうか……。

「今は用務員だつて、如何大変?」

「まあ忙しいね。今日直しても明日も同じ所を直さないといけなかつたり、校舎の壁に平気で穴をあけるお姫様がいたりとかで」

「流石ウマ娘ね……よくもそんな仕事を続けられるわね」

「良い鍛えになるからね」

何も変わらない響鬼に肩を竦める。昔から鍛え続けていた彼、僅か16歳で鬼の称号を継承し響鬼となった。ウマ娘ではない筈なのに、ウマ娘でもない限り耐えられない様な鍛錬をし続ける一種の狂人、いや魔物扱いされている彼が鬼へと至ったのはある意味当然の成り行きかも知れない。

「ウマ娘と体力勝負出来る人間なんて貴方ぐらいでしょうね」

「いや、鬼の皆なら出来るでしょ」

「……忘れてたわ、鬼になれる人間ってそう言う領域に脚突っ込む処か全身入ってる人間だったわ」

それを聞いてヒビキのような人間が他にもいるのかと驚愕する面々、そして同時にアキラへと目を向けるのだが肯定を示すように頷くのであった。

「でも16で至るなんて正直唯のバカでしょ。幾らあのこの為だからって——愛の力って奴かしらね」

「そんなんじゃないさ、俺は唯あいつを支えたかっただけだよ」

これだと全員が聞き耳を立てるが、そつとアキラはその場を離れた。彼女は全てを知っているしそれ以上を聞くつもりはないので先で車で待機していると言い残す。だ

が、皆は聞き耳に集中してしまっている。それ程までにヒビキの元カノというのは興味をそそられる話題なのである。

「俺も若かったからなあ……まあ同時にトレーナー資格を取る為の勉強も始めたのはやり過ぎたと思う」

「良く身体壊さなかったわよね当時の貴方、睡眠時間週に何時間だったかしら？」

「えつと……21時間？」

「週で一日も寝てないって異常よ」

パツと聞くと21時間は長いと思うかもしれない、だが一週間で21時間しか寝ていないと考えると異常でしかない。単純計算で一日3時間しか寝ていないことになるのである。一日程度なら大丈夫かもしれないがそれを続けるなんて事は絶対に出来ない、身体が壊れる。

「まあ、それだけ貴方の想いが強かったって事よね」

「あんまり言わないでよ、若気の至りだよ」

照れるようにしながら一気に珈琲を流し込むとスチール缶である筈のそれを片手で握り潰してゴミ箱へと投げ捨てる。この力もたった一人の為だけに付けたと思うと凄いと云うしかない。

「それで今年は参加するの、清めの儀式」

「今年は参加しようと思ってるよ。その為に今の内から休暇申請出して、確実に行く為に仕事こなししてるところ」

「そう、あの子も会いたがってると思うわよ、自分の専属トレーナーに」

「だと良いんだけどね」

矢張り元カノはウマ娘である事が確定、という事はヒビキがトレーナーをやりたがらないのは資格自体が彼女の為だけだったという事になる。だが別れて尚、その資格保持し続けたり、専属トレーナーという言葉を否定しなかったり不可解な点が多いと沖野は感じる。

「響鬼さんの事だから中央でもトレーナーやれるでしょ、そういう話来てるんじゃないの？」

「うっかり資格持つてるって漏らしちゃってね、お陰で逆スカウトが多くて困るさ」

「あらっ良い事じゃない。やってあげなさいよあの子お喜ぶわね」

「さて如何かな——俺に出来ると思ukai」

その時見た、常に笑顔を浮かべて明るいヒビキの顔が曇った瞬間を。あんな顔は初めて見たと沖野は思う程のものだった。そんなヒビキに香須実は手を取って言う。

「出来るわよ、その為に鍛えてるんですよ。試しにサブトレーナーでも始めて復帰しなさいよ」

「……考えておくよ」

それから二人は自然と会話が途切れていた、沖野達はこれ以上は聞く事は出来ないとその場を立ち去った。そして先に車で待っていたアキラへと問いかけてみる。

「なあアキラ……とつつあんはなんでトレーナーになったんだ」

「さて、それを私から聞くのは筋違いだと思いますよ——でも、何時か話してくれると思いますよ、私の時もそうでしたから」

第34話

来たる11月1日、天皇賞秋。本日天気晴天なれども波高し、此度のレースに臨む者達の士気旺盛。最高の天皇賞となる事は確実、この一戦を見れずしてウマ娘ファンを語る事なかれ。サイレンススズカが臨む天皇賞秋——どんなレースになるのかと皆が楽しみにしている、そう楽しみにしてたのである。

「申し訳ありませんヒビキさん、私がこのような事をしてしまったばかりお休みを潰してしまい……!!」

「いいよいよよ、こういう時の為に俺が入るんだからさ。にしても今回は随分派手にやったなあ」

休みだった筈、だが緊急で入った仕事、校舎の修繕である。修繕なんて用務員からしたら何時もの事な筈……なのだが今回は桁が違う。何と突き当りとなっている壁が丸ごと消し飛んでいる。そんな犯人は顔を真っ青にしながらその場で深々と頭を下げ続けていた。

「こりや元々少し弱くなつてたな……それで姫ちゃんの一撃でメキヤ、バラバラバラ……つて事だね」

「ううううう……」

如何やら基礎の部分がやや弱くなっていった所があったらしく、それをピンポイントで蹴ってしまった影響で壁が丸ごと崩れてしまったらしい。よくもまあそこを上手い事蹴れたもんだと言わざるを得ない。それをやってしまった犯人、本当の姫になる事を夢見るロマンチストなウマ娘。カワカミプリンセスであった。

「だけどもあ……こりゃ一回校舎のあちこちチェックした方が良いかもしれないな、何かあったら大変だし」

「そうですね、此方で手配しておきますね」

「お願いたづなちゃん。にしても突き当りで良かったな、廊下とかだともっと危ないし」
たづなと共に崩壊部分を見ながらもこれからの予定を決めていく。突き当りだった事は幸運だが、危険な事には変わりないので直ぐに塞がなければならない、だからこそヒビキが呼ばれたのだろう。他の用務員では当日中に修繕は絶対に無理。

「いや今回は寧ろ良く穴をあけてくれたよ、これで纏めて直せるし他の部分を見るきっかけになった。でもまあこれからは気を付けようね」

「はいっ申し訳ございませんでした……」

「それではカワカミプリンセスさん、後ほど反省文の提出お願いしますね」

「はい……失礼いたします」

すつかり気を落して去っていくカワカミプリンセス、可哀そうではあるが彼女の行いでこうなったのだ。致し方ない、小さな穴だったら直ぐに塞ぐ事は出来るのだが、流石に突き当りの壁の殆どを修繕するとなると時間がかかる。今から取り掛からないといけない。

「やれやれ、致し方ないとはいえ天皇賞秋はお預けだな。スズちゃんにはごめんの品物持って行かないと」

「サイレンススズカが出走予定ですね、他にもウイニングチケットさんやヒシアマゾンさん、他にもメジロライアンさんやエルコンドルパサーさんも出走しますね」

「うわあ流石天皇賞、強い面子ばかりだなあ……個人的に誰を応援するか迷うよなあ………だけど皆を応援するっていうのが妥当かな。一人だけだと皆怒りそうだし」

「でしたら、皆さんの分必要ですね」

確かに、と同意しながらも作業を始める事にする。早い所済ませてお詫びの品を買って向かおうと心に誓うと作業用のウエストバッグへと手を伸ばすのだが——その時大きな音を立てながらポーチが落ちた。

「あつヒビキさんポーチが」

「うわっ」

たづなが落ちましたよっ取ろうとするが、見せてくれたのは金具の部分が外れてい

た。

「経年劣化かな……買ってかなり使い込んでるからなあ……」

「まあ物持ちが良いんですね」

「まあ作業用だからこの位持つよ、にしても随分と縁起が悪いな……」

道具が壊れてしまう事自体には別に何とも思わない、このポーチ自体かなり長い年月使っているし壊れても可笑しくない。故に感謝を述べたいと思った——だがそれ以上に何かを感じた、何か胸を過る不穏な気持ちがあった。以前にも体験した事があったそれにヒビキはどうしようもないほどに不安な思いを抱いてしまった。

「……」

「ヒビキさん？あの如何かなさいました？」

「たづなちゃん、東京競《font:ul40》馬《font》場に連絡って取れるかい」

「えっはい取れると思いますけど……」

「だったら今直ぐで連絡して貰えるかな——救護班は直ぐに出勤出来る態勢を取って置くようにって」

突然すぎる言葉だった。何故そんな言葉をヒビキが言い放ったのか、その時のたづなは困惑で受け止めるしかなかった。だが、余りにも真剣な表情を浮かべているヒビキに

たづなも顔を引き締めて頷くと連絡してきますと駆け出して行く。

「ふざけるなよ、同じなんて……まるで、まるで——あの時の再現じゃないか」

金具ごと握り込んだ拳、金具が掌の皮膚に食い込み血が流れだして床へと垂れていくがそれを気にする余裕など言わんばかりにヒビキは空を見つめた。快晴、あの時とは全く違う空模様が広がっているがどうしてもダブっている。余りにも似すぎている、状況が。

「大丈夫だよな……」

大きくなり続けている不安の気持ちを抑えつけながら、ポーチを床に広げようとした時に漸く手から血が流れている事に気付いた。だが痛みなどは感じない、ハンカチで応急処置をしておきながらその上から手袋をはめて隠しておきながら作業を始めた。

「ヒビキさん連絡致しました、私の名前も出しましたので直ぐに対応してくださいました。出走開始15分前から即時出動態勢を取って下さるそうです」

「有難うたづなちゃん。突然変なお願いしてごめんね」

「いえ、ヒビキさんのお言葉は全てのレースで徹底すべき事ですので向こうも真摯に対応してくださいました。気持ちが緩んでいたかもしれないから引き締め直すって」

トレセンの学園長秘書からの言葉というのものもあるだろうが、天皇賞はG1。注目度もダントツ、そこで何かあつたら大変な事になる——なってしまうのだ。そうだなって

からでは遅い……。

「あのヒビキさん、このような事を聞くは失礼かもしれませんが卑怯かもしれませんが……ですが教えてください、如何して何ですか？」

たづなとしてはヒビキの意見は分かる、そもそも状態でも問題がないレベルに徹底されている筈。それはウマ娘に関わるものならば分かる、だがそれでもヒビキは連絡を取って欲しいと頼んでいた。という事はつまり——ヒビキはそれを目の前で体験した事があるのではないかと思った。

「ヒビキさんは目の前で見た事があるんですか、レース中の大怪我を」

「——いや、ないよ」

「ですけど……」

「俺があるのは、起きた後だけどね、起きる前に俺の持ってた持ち物の金具が壊れたんだ……だから、それだけの理由だよ」

黙々と作業をし続けるヒビキの背中はどこか悲し気に見えた、そしてたづなの中で何が繋がった。未だにトレセンの中で根強く謎めいた話題、ヒビキの元カノについて……今の話を総合すると、元カノは怪我で引退を余儀なくされてしまったウマ娘なので……無粋だと分かっているてもそんな事を考えずにはいられない。

「終わった……」

如何しても気になってしまつて時間が掛かつてしまった、普段ならもつと早く終わらせる筈なのに……取り敢えず、数日は此処の壁には近づかないようにという看板を立てて仕事は完了した。早く動こうと思つた時——たづなが血相を変えた顔でやつて来た時、思わずヒビキは顔を青くした。

「ヒビキさん大変です!! スズカさんがレース中に!! 今病院に!!」

「たづなちゃん案内頼む、俺のバイクで行くぞ!!」

「はいっ!!」

その場に荷物を放り出して、たづなを連れて駆け出していた。

「如何してだ、如何して此処まで——状況が同じになる!!」?

第35話

天皇賞秋、最高の走りを見せる筈だったサイレンススズカに襲いかかった悲劇。左足の骨折、乱れた走りに会場中は騒然とした。第4コーナーへと差し掛かる前に、倒れこむように走る事を止めた。幸いとも言えるのが即座に救護班がスズカを病院へと搬送する事が出来たので的確かつ迅速な治療を行う事が出来たという事だろうか。

「皆っ」

「とつつあん……たづなさんも……」

病院に着いた時、待合室には酷く沈んだ面持ちでいたスピカの面々がいた。全員がスズカを心配している、唯々静かに彼女が目覚めるのを待っている、だがそれでも心配で堪らずに震えている。沖野も普段の飄々として顔ではなく、沈み青くなっていた。当然だろう、ヒビキは話を聞いただけで真っ青になった、実際に目の当たりにした身としては堪らないだろう。

「とつつあんが救護班を直ぐに出れるように言ってくれたんだっただな……有難う、だからこそスズカは直ぐに搬送されたし、倒れた時の怪我也直ぐに治療された。そっちは何ともないらしい……」

「そう……スぺちゃんは」

「スズカさんに付いて今病室に……」

「そうか……」

思わず握り込んだ拳、こんな時に何もしてやれない無力さが憎たらしい。代われる物ならば代わってやりたいと強く思っているとたづなが握り込んでいた手を開くように、と促すように触れて来た。気付くと金具を握り込んだ際の傷がまた開いたのか、血が流れていた。

「おじさん……スズカ、大丈夫だよね……?」

不安そうに尋ねてくるティオー、大丈夫かもしれないし駄目かもしれない。そんな不安が胸をいっぱい満ちてくる、決壊しそうなダムのように溜め込んだ感情が行き場所を失っているような状況になっている。それはこの場にいる全員が同じ気持ちでいる事だろう、だからこそ言葉が欲しい。大丈夫だと言って欲しい、たづなもそう言っただけで欲しいと言いたげな視線を送ってくる。答えるように——ティオーの頭を撫でる。

「大丈夫だよ。スズちゃんは強いだろう、彼女はこんな事でへこたれないし怪我だつてすぐに治すさ。それにさ直ぐに救護班が出勤して応急手当しつつ搬送してくれたんだ」

「そう、だよね……だとしたらおじさんはスズカの恩人だね……アハハッ」

「そうだと、良いんだけどね……俺は何もしてないから」

力の無い笑いに応えるように静かに笑う、確かな笑いが生まれた事で僅かだがその場の雰囲気柔らかくなった。沖野も幾分か気持ち楽になった、本当にヒビキが来てくれた事に感謝しなければ……と思っているとスベが走って来た。

「トレーナーさん、スズカさんが起きましたあ!!」

「本当か、そうか良かった……」

その言葉に生まれる活気、喜ぶの声で待合室が埋まる。きつと大丈夫だとは思っていたが、心配になって可笑しくなりそうだった。目を覚まして口を利けると分かる矢張り変わってくるというものだ。

「沖君行ってあげな、トレーナーとして」

「ああ勿論だ……とつつあんも来いよ、アンタが一言掛けてくれたからスズカは直ぐに病院まで来れたんだ。たづなさんも一緒に」

「……ああそうだね、んじや皆ちよつと行ってくる」

皆も一緒に行きたそうにするが、流石に目覚めたばかりなのに大勢で押し掛ける訳にも行かないと皆も分かっているらしく了承してくれた。長い廊下を渡っていくと辿り着いたサイレンススズカと書かれた病室へと入る。そこでは此方を見たスズカが身体を起こそうとしていた。

「スズちゃん、楽にして」

「ヒビキさん……たづなさんも」

「はいっ大丈夫そうで少しばかり安心しました。兎も角サイレンススズカさん、無理に身体を起こそうとしないでください。今、背凭れを出しますから」

たづなは手際よくベットに背もたれを作つてあげるとスズカはそこにゆつたりと体重を掛けた、倒れた際に少なからず脚以外にもダメージは来ている。出来る限り安静した方が良いのである。

「何にしろ、俺は安心したよ。お前の顔を見てな」

「ご心配おかけしました……ヒビキさんやたづなさんも来てくれるなんて……」

「この位なんでもないよ」

「はいっ私もです」

理事長に連絡せずに此方に来てしまったが、ヒビキがたづなと共に学園を出たという話を既に聞いて察したのか、たづなの分をカバーする処置を既に行っていた。故にたづなは何の心配もする必要はない。

「骨折、ですよね……また治つて走れますよね……!？」

「治せる。だがその後はお前次第だスズカ、その後走れるようになるのかどうかは全部お前の努力次第だ」

ウマ娘の骨折はかなり重い怪我に入る、例え治ったとしても今まで通りの100%の力で走れるようになるかは分からない。懸命なりハビリも必要だし当人の努力が必要不可欠になってくる。

「私頑張ります、絶対に走って見せます——スペちゃんと一緒に走るって約束も、守らないといけませんし」

「ズズガさああ〜ん……」

「夢が希望を与えてくれる、ですね」

たづなはいい顔をしていると思う、彼女自身何か思う所があるのか怪我をしたと聞いた時は顔を酷く青くしてしまった。だが、これなら大丈夫だと思っていると沖野がズズカに礼を言っておきなと言った。

「ズズカ、お前に応急処置をしてくれた救護班はとつつあんの言葉があつたからあんなに速く来てくれたんだ。だからとつつあんに良く感謝しとけよ」

「そ、そうなんですかヒビキさん」

「凄いヒビキさんはズズカさんの恩人ですね!!」

「大した事はしてない、むしろ当然のことを指摘しただけだよ」

「当然だからこそしてよかつたんだろ、胸を張れよとつつあん。アンタは俺の大切なチームメンバーを救ってくれたんだ」

そう言われても照れくさくなる、自分は本当に何もしていないのだから。連絡をしなくてもきつと運命は変わらなかつた、中央でのレースなのだからきつとそれは間違いないのだろう。自分の行いは蛇足だつた筈だ——それでも口を出さずにいられなかつたんだ。

「スズちゃん、君はきつと元通りに走れるよ。何だつたら骨折が治つてから俺がメニユーを作つてあげようか」

「はいつお願いしたいです」

「わあつスズカさん良かったですね!!ヒビキさんのなら間違いないですよ!!」

「おいスぺ、俺のメニユーじゃ不安みたいな言い方やめろよ」

「それならいきなりツイスターやらせるのを自重したらいいんじゃないですか?」

「たづなさんまで言うか……」

思わず生まれた笑いに背後の扉が突然開かれた、それと同時に雪崩のように他のスピカの面々が入つて来てしまった。如何やらスズカの事が心配で来てしまったらしい。だがそれを見てスズカは笑みを強めて、レースが終わつた後のような晴れやかな表情になつていた。

「いやあくにしてもおつちゃん、何であんな事言えたんだ」

「んっ……まあ、そうだね……経験した事があるからね、似たような事を」

その言葉に皆が驚いた、あれだけ自分の過去を語ろうとしなかったヒビキが自分から何かを示した。酷く断片的なそれだが——ヒビキは言葉を止めるつもりはなかったが、アキラがそれを止めた。

「——おじ様、良いの」

「皆気になるだろこんな状況じゃ、当事者なんだから聞かないと納得しない。それが筋さ」

「……おじ様が良いなら何も言わないよ」

そしてそのまま、ヒビキは語り出した。

「多分最初から話すべきなんだろうね。俺に元カノがいるって話あったじゃない、それが深く関係してる」

「ヒビキさんの彼女さん……どんな人だったのか凄い興味あるわ私……」

「俺も、とうかみんなその事で議論してたりするもんな」

「何、皆暇なの。おじさんの恋バナに興味あるとか」

「ヒビキさんはそれだけ皆さん大好きって事ですよ」

たづなの言葉に皆が頷いた。奇妙な感覚だが、まあそれだけ気になる立場だと言う事は分かった。

「んじゃ話そうかなって、皆たちばなで盗み聞きしてたから一部は知ってるか」

「き、気付いたのか……!?!」

「当たり前だよ。まあいいや、それならある意味都合がいい——俺が鬼になろうって決めたのは一人の幼馴染が決めた手だった。あいつの走る姿が好きだった、そんな彼女の支えになろう、相手にもなれるように頑張ろうと思って俺は鬼にもなつてトレーナーにもなつた。彼女の名前は——アシタノユメ。俺はアスムって呼んでた」

第36話

「アシタノユメ……それがとつつあんの元カノか」

「そゆこと」

「でも素敵な名前ですね、明日の夢なんて!!あつだからアスムなんですわね!」

漢字で書くと明日の夢、そこからアスムというニツクネームをヒビキが考えてそう呼んでいた。

「トレーナー聞いた事ある?」

「いや……とつつあんの事を考えると10年位前に活躍したウマ娘って事だろ、でも流石に覚えはねえな……」

「私は聞き覚えはあります、確かG1レースに出てた事もあつたと思いますけど……」

一応沖野もトレーナーとして多くのウマ娘の事を頭に入れていますが、アシタノユメというウマ娘に残念ながら覚えはなかった。たづなをしても聞き覚えがある程度で、中央で活躍したものではない程度の認識しか浮かべられない。そんな二人の反応にヒビキは笑っていた。

「そりやそうだよ、あいつは基本的にローカル・シリーズばかり出てたからね。でもま

あ幾つかはG1にも出場してたよ」

「へえつくそりやおつちゃんの相棒ならそんだけ凄かったって事だよな」
「まあね」

中央と地方でのレースでの認知度は歴然の差、中央が1軍での試合ならば地方は2軍扱い。故に地方はそこまでの人気はないが——中には中央を凌駕する走りを披露するウマ娘も潜んでいるので、侮れず根強い人気を博している。現在は中央トレセンに通っているオグリキャップも元々は地方トレセンに居た。

「んでまあ、そいつと幼馴染だったんだけど当時は俺達の周りにはあんまりウマ娘がいなかったんだよ」

「スぺみたいなものか？」

「スぺちゃんってそうなん？」

「はい、私は中央に来るまでは他のウマ娘に会った事は無かったです」

「あくマジか、じゃあそれに近いけど少なからずいたにはいた。学年に二人から四人ぐらいたったかな」

スぺもスぺでトレーニング施設が無いような田舎で育ち、同年代の子供いかなかったために友達出来なかった。だから彼女に近いが、彼女の地元よりは人もウマ娘もいた。

「まあ人数が居てもさ、やれる事って限られてくるじゃん。模擬レースにしても」

「そうね、面子が同じだと色々と飽きるし変な癖も付いちやうし」

「だから俺はアスムの相手になろうと思つてんだよね、それが鬼になろうと思つた始まり」

『えっ!?!』

思わず驚きが木霊した。アキラから雷電一家の鬼襲名についての話は簡単ではあるが、聞いていたがまさかそんな理由で鬼になろうとは思うまい。実際ヒビキが発だつた。

「おじさん鬼つて結局何なの？太鼓の達人みたいと考えてたんだけど」

「その言い方だとドドンカドンになつちやうな、まあ間違つてない。鬼つて言うのは簡単に言えば神の怒りを鎮める為に活躍した勇猛な戦士、地元じゃ勇士つて言うんだけどその最高峰を指すのさ。鬼になる為には既に鬼に至つた人に弟子入りして修行するんだよ、心と身体を鍛えて鬼へと至る。そんな勇士が認められると鬼となる。んでまあ……俺はほぼ独学でなつたな」

「あの、ヒビキさん今の言い方だと尋常じゃない位鍛える事になりますよね。しかも師弟制が一般的に聞こえますが……」

「だから俺は相当に異色な部類だね」

鬼に憧れた訳でも無いし、鬼となつている師に夢を重ねた訳でもない。たった一人の

ウマ娘の相手になる為に努力した、たったそれだけの理由だった。

「なんてロマンチック……一人のウマ娘の為だけに鍛え抜くなんて……冒険漫画カッパルの王道ね!!」

「そんな大層なもんじゃないよ。俺はあいつの走る姿が好きだったただだよ、その助けになればいいと思っただけ」

「良く言うよ、おっちゃん笑ってるぜ」

ウオツカに指摘させる程に、にこやかに笑っていた。一人の少女の為に、ウマ娘の練習相手になれるだけの存在へと至ったヒビキ。鬼を襲名し響鬼となつてからもその日々は続いていく。響鬼という絶好の相手を得たアスムは徐々に強さを増していった。

「んでトレーナーの資格を取ったのが大学の時だったかなあ……んでその時に正式にアスムのトレーナーやってた」

「だっ大学だあ!?!おいとつつあん、トレーナー養成校に行つてねえのかよ!?!」

「ンなもんに行く金が無かった。頭も鍛えまくっただけだよ」

「マジかよ……」

沖野は本当に驚いた、トレーナーの資格は簡単には取れない。某T大の受験よりも遙かに難しいとされている上に地方と中央では別のライセンスが必要になってくる、トレーナーの養成学校に通えば幾分か簡単な地方のライセンスは取れる、そのライセンス

を使って地方で数年活動すれば中央ライセンスを取得出来る制度もあるので其方で取る人間が多い。

「ねえねえたづなさん、つまりどういう事？」

「つまり響鬼さんは独学でライセンス受験に成功したスーパーエリートという事になります」

「えっマジで凄すぎね」

「凄いななんて言葉じゃ済ませられないわよ、身体と頭のどちらも最高峰のスーパーエリートよ!」

「流石おじ様、後確かそのライセンスって中央も地方も行ける奴でしたよね」

「ハアツ!?更に試験が難しいハイライセンスじゃねえかよ!!」

「行ける所まで鍛えましたから」

トレーナーになる為に色々と苦労した沖野からしたらそれだけの言葉で片づけて欲しくない、彼だつて養成校で色々と苦労して中央ライセンスを取得したエリートに区分される人間。だが、目の前で用務員のおじさんをやっているヒビキは専門校で勉強する事なく、一般の大学から受験して合格している。もう色んな意味で別次元の人間だと言わざるを得ない。

「まあ将来的に中央行くかも?」と思つて取つたんだよね、結局行かずにずっと地方

だったけど」

「それでもスゲエよとつつあん……たつた一人の女への愛でそこまでやれるって何だよ」

「あ、愛は偉大って奴なんですネ!!お母ちゃんも言っていました!!」
「合っつてんのかそれ」

色々と露呈し始めたヒビキの超人っぷり、身体だけではなく頭の方もそういう部類とは思わなかったが……だがならばと此処で疑問が起きる。そこまでののに何故別れたのかという事である。

「でもよおつちゃん、元カノって事は別れてんだろ、何でだ？」

「ゴルちゃんも好きねえ……まあ簡潔に言うとかあいつが走れなくなったからだよ」

「——何があつたんだ？」

「落蹄だよ、前を走つた子の蹄鉄が頭に直撃して盛大にコケたんだ」

落蹄、着けていた蹄鉄が外れてしまう事を指す。ウマ娘のレースにおいて度々起きるそれは事故に近い事、だがそれが頭に直撃するというのは最早一大事である。

「それはっ……なんとお言葉を掛けたらいいのか……」

「大丈夫マクちゃん、あいつも何とも思つてない。問題なのは頭に蹄鉄受けて、顔が血塗れになつても走り続けようとしたアスムの責任だから」

「おいおいおい随分とやべえことするな」

流石のゴルシも驚きながら呆れた、視界が血で染まっていきながらもレースを続行しようという精神力は認めるが、身体の事を考えれば止めるべきだった。それなのに走り続けようとしたアスムは——コーナーを曲がる事が出来ずに盛大に転倒し脚を骨折してしまった。

「俺が走る姿が好きだからって走ろうとしたんだってさ、健気だよねえ……でも流石に血塗れで走っても喜べないよ。寧ろ怖いと思うわ」

「だ、だよね……僕でも引くと思うよ流石に」

「そんな状況で走ろうなんて思えるなんて凄い精神力ですわ、私も見習うべきですわね」
「まあそこはそうかもしれないけど、実際そうなったらちやんと止まるだよ、それで大怪我したらその後が大変なんだから」

実際問題、あそこで走る事を止めていればあんな大怪我をする事は無かった。だがアスムはやめなかった……自分の走る姿が好きだと言ってくれたヒビキの為にやめなかったのだ。その結果、両脚を骨折してしまった。時速60キロ以上での転倒……そんな怪我也当たり前である。

「それで結局アスムはその怪我が原因で引退しなきゃいけなくなつた、もう走れないって言われてさ」

「走れない……!?!」

その場にいた全員が戦慄した事だろう、ウマ娘としての意識が強くなり始めているアキラも同様だった。走る事は彼女らにとっては本能だ、それが出来ない身体になるなんて想像も出来ない。どれだけ辛いのか想像する事も出来ない。

「だけどあいつは笑ってた、今度は鬼として俺の隣に立つって言いだしやがった。全く前向きっていうかさ、転換が上手いっていうか……」

「強い、ですぬ……」

スズカが思わず口にした言葉に皆が頷いていた。ウマ娘としての将来は絶たれてしまった、だが直に次の目標を見据えて前に進もうとしたのだ。なんて気丈で強い人なのかと。

「それで鬼になれる日まで、胸を張って会える日まで俺とは会わないとか言い出した。好き勝手に決めてくれたよ、鬼になれた時にまだ好きでいてくれたらまた付き合ってくださいってさ」

「なっ泣かせるじゃないの……なんて素敵な話なのかしらあ……」

「好きな殿方の為に、そこまで……なんて素晴らしい方なのかしら……」

「おいおい泣きすぎだよダイちゃんにマクちゃん」

ハンカチを差し出す、確かにこれだけの話を聞くとヒビキに相応しい相手だったとい

う事が分かるし彼ほどの男が何故別れたのかも分かった。彼女の意思を尊重した上でその覚悟に報いる為だったのかと沖野もたづなも納得した。

「つていう事は元カノじゃねえだろそれ」

「いや、形式的には別れてるから元カノで合ってるつという訳でおじさんの昔話は終わりつと。それじゃあこれ以上留まるのはスズちゃんの身体にも悪いだろうから俺は先に外出てるよ、たづなちゃん俺バイクで待つてるから」

— そう言い残して病室を出る。その時にウオツカがおつちゃんのバイク!?と反応していたが、扉を閉めたので聞こえなくなつた。そんな過去もあったのでスズカの事が本当に心配だつた、だが本当に良かったと思いつつながらも懐中時計で時間を確認する。その時に—— 懐中時計にあつた写真と目が合う。アスムと一緒に撮つたツーショット—— 彼女からの誕生日プレゼントだつた懐中時計に写真、お守りのような物だ。

「……語りも随分と騙つちやつたな……言葉に出来ない辺り、俺も随分と弱くなつたもんだ……悪いアスム、俺がお前の笑顔を奪つたのに」

第37話

『なあっ好い加減帰ってきたらどうだよ。アンタも鬼なんだぜ』

「ぶっちゃけ帰りたいけど忙しくて帰れないっていうのが素直な感じなのよ、俺の今月の給料言おうか。それ聞いたらどんだけトレセンが俺を離したくないかが伝わってくるよ——だよ俺の給料。一介の用務員にこんな金出すかい普通」

『……おい何の冗談だそれ』

「ハハハッこつち来る？ 歓迎されるよ」

『その給料は魅力的だけど遠慮するわ……』

電話の相手は旧知の間柄の関係にある友人、鬼ではないが自分の事を良く知っている。

『なあっあいつだって待ってる。だから戻って来いって』

「いや帰りたいけどさ……普通にマジで忙しいんだよ、君も体験してみる？ 東京ドーム十数個分もあるトレセンの敷地のメンテやら修繕にどれだけ労力掛かるかのチャレンジ、鬼の皆の鍛錬にもちようどいいと思うけど」

『ドンだけだよそれ……っつうかんな感想言えんのアンタだけだっつもの!!』

実際、僅か16歳にして鬼への襲名が認められた程に鍛えまくった響鬼。その鍛錬量は他の鬼の追随も許さない程なのは確か。実際独学でなろうとすればそれだけのものが必要になってくるのは明白ではあるのだが……やろうとする者は普通でない。

「ちよつと鍛え方が足りないじゃなくい？」

『ウザッ!!?何アンタくそウザいんだけど!!?』

「やっぱそう思う?最近凄い元気なパリピ系のウマ娘、ダイタクヘリオスのヘリちゃんから教わったんだけど」

『メタくそにアンタに合つてねえよ!!』

「ですよね〜」

自分でもあつてないと思うが、これはこれで不思議な楽しさがあるのである。偶にこんな喋り方をして遊ぶのも良いかもしれない、まあ相手は選ぶべきだろうが……ヘリオスオンリーにしておいた方が賢明かもしれないと心の中で思うのであった。

「この前なんて校舎の突き当りの壁が無くなつてたのを直してくれって言われて休日出勤だよ?」

『おい待ておい待ておい待て、アンタそれつてえ用務員の仕事じゃねえよドブラックじゃねえか中央』

「失敬な。ウマ娘達の元気は承知してるからこの位当然でしょ、特に俺はその身で味

わって来たから知ってる」

『ああうん……だな、よし俺が悪かった』

相手も相手でも不器用なりに自分の事を氣遣っている事は伺える。もう少し口の利き方に氣を付けたら色々ともてるのに勿体ない……。

「んで如何なのそっちは」

『田舎でそんなホイホイ変化があつてたまるかよ、あくでもまあ輝が通つてた学校が無駄に騒がしくなつてたな。横断幕掲げて輝の中央トレセン行きを祝つてるつて繕うとかふざけたことしてた、馬鹿にしやがつて錦山以外まともに輝を見なかつた癖してよつた……』

「良くも悪くも学校らしい対応といふかなんといふか……」

『イラついたから乗り込んで外せつて言つてやつたぜ』

「いや何してんの君」

輝は雷電一家に関わる色んな人に可愛がられていた、一家にウマ娘がいらないという訳ではないが大半の場合は走る事に興味がいく。輝のように鬼を継ぎたいと言つてくれるのは初めてのケースだったので余計に可愛がられていた。

『まあそんな感じだ。んで香須実から聞いたがマジで今年は帰つて来るんだらうな……？』

「ちゃんと帰るつもりだよ……一応その為の申請だつて通つてるし」

『そうか……あいつに良い報告出来そうだ』

「んじや、俺スズちゃんのお見舞いあるからこれで切るね」

『ああつてサイレンススズカ!?マジかおいサインとか』

「入院中の子にそんなお願い出来ません」

それを最後に通話を切る。そう言えば彼の推しウマ娘はサイレンススズカだったという事を思い出した。退院して復帰の目途が立ったらお願ひしてみようかなと思ひながらバイクから降りる。サイドカーに乗せてあつたお見舞いを持って病院へと入つていく。

「失礼するよスズちゃん」

「ヒビキさん、有難う御座います態々」

「この位なんの負担でもないよ」

病室へと入るとそこには元気そうなスズカの姿があつた、如何やらそこまで悲觀的にならずにいるようで一安心だと思ひつつお見舞いの品であるフルーツの盛り合わせを台へと置いておく。

「思つた以上に元気そうでよかつた、お見舞いもいっぱい来てくれてるみたいだね」

「はい、いろんな方が」

脚のギブスへと目を移せばそこにあるのは沢山のメッセージ。これだけ多くの人、ウマ娘に復帰を願われているスズカに少しばかり嫉妬してしまうかもしれない。自分がこうなったら誰か来てくれるだろうか、いやならないようにするのが一番だろうと言うのは分かるが……。

「あのつヒビキさん、スぺちゃんの事を見てあげてくれませんか？ 毎日来てくれるのは嬉しいんですけど、自分の事を疎かにしちゃうのは……」

「……ちよつとまずい傾向かもね」

強い憧れをスズカへと向けるスぺ、同室でもあったし助けて貰ってから自分に出来る事はしたいというのは分かるが……それで自分の事が疎かになるのは非常に不味い。特に彼女は今度のジャパンカップに出場するのだ、それに向けての調整もしなければいけないのでスズカの事ばかりに構ってられない。

「沖君にも言つとくかな、俺からも強めに言つとくよ。因みに今日も来たとか？」

「はい、ヒビキさんが来る少し前に帰りましたけど」

「入れ違いか……アスムみたいな事になつちやつてるなあ……」

思わず天井を仰ぐ。ウマ娘が担当するトレーナーに依存するという事は良くある話、ウマ娘である彼女らは闘争心が非常に強い。走るだけではなく何かに対して競う事が起きた場合にもそれが発揮されてしまい、トレーナーに酷く依存してしまうという事は

ある。実際アスムにもそれが起きてヒビキにかなり強い依存を示した事があった。

「アスムさんにも同じような事が……？」

「鬼になった影響でちよつと屋久島に行かなきゃいけない時にね、その時にアスムは事情で行けないのに一緒に行くつて聞かなくてさ……力いっぱい抱き着いて離れなくて……」

「可愛い所もある人なんですわね」

「可愛いのはいいけどお陰で肋骨に罅入ったから俺は笑えなかつたよ」

「すいませんでした」

鬼になった筈の身体が文字通り軋む力で抱き着き、いや締め上げられた結果肋骨に罅が入って病院で治療を受ける羽目になってしまった。そして完治したらアスムを連れて屋久島に行く羽目になってしまった。

「まあ何とかしてみるよ、スズちゃんを出しに使う事になるかもしれないけどいいかな」
「大丈夫です、スペちゃんの為になるなら」

第38話

「スぺちゃん、暫くスズちゃんのお見舞い行くの禁止ね」

「えっ——ええええええっつっつ!!?」

最早、チームスピカのサブトレーナー的な立ち位置になり始めているヒビキ。割と真面目にトレーナーへの復帰を検討し始めている今日のこの頃、練習に余り身が入らない状況が続いているスぺを沖野から預かったヒビキはまず最初に毎日行っているスズカへのお見舞いを禁止した。それに驚きの声を上げるスぺを軽く無視するように靴紐を結び直すヒビキに食って掛かるかのように慌てながらも問い質す。

「ど、如何してですか!？」

「だって君、最近まともに練習に身もが入ってないじゃない。沖君から君を預かったのもそういう意味があるからだよ」

「でもスズカさんのお世話とかしないと……」

「それは問題ない、俺が理事長経由で病院にお願いしたから」

素人が世話をするよりもそちらの道のプロである看護師がやって貰った方が良い、正論にたじろぎながらも何とか反論しようと材料を探そうとする。何とも自分を見てい

るような気分になる。

「スペちゃん、君の夢は何だい」

「私の夢ってそれは……今は」

「関係大ありだよ、君の夢は」

「日本一の、ウマ娘に……なる事です」

「君は自分の夢、目標に向かうべき立場でもある事を忘れない事」

立ち上がったヒビキは少々言葉を強くしながらスペに言う。

「だったらハッキリ言っただけよ、スズちゃんのお見舞いに行くなら好きにすればいい。その時は君は日本一になる事を諦めた方が良い」

「っ!？」

「他人に優しくするだけで叶えられるほど、その夢は甘くはない」

初めて聞くようなヒビキの言葉にスペは困惑しながらも重く押し掛かってくる言葉を感じる。自分は今何がしたいのか、如何してトレセンに来ているのか、スズカの看病をする為にトレセンに居るのかと強く問いかける。

「夢を叶えるって事はそういう事だ、他者の夢を、目標を踏み越えていけるものだけが自分の夢を叶えられる。日本一、つまりそれだけの多くの夢を乗り越えていく道はそんな甘いもんじゃない」

「そんなつ……でも、はい……」

「スズちゃん、の怪我は彼女の責任だ、君に責任がある訳でも無ければ君が助けなければいけない訳でもない。君には君のやるべき事がある、それをこなさなくて他人に優しくする事はない」

厳しい、強い言葉が襲いかかってくる。思わずジャーズを掴みながらも必死に耐えている。沖野には余り出来ない事かもしれない、これで自分がこれで嫌われたとしても構わない。その位は人生の先達として背負ってやるつもりでいる。

「ヒビキ、さんはつ……アスムさんの時は如何したんですか……」

「俺は偶に顔出してた程度だよ、しよつちゆう顔を出してたら治るものも治らない。入院なんて自分と向き合る時間と場所が与えられるようなもんだよ、それを如何生かすのかもスズちゃん次第だ」

「——分かりました、行くのやめます」

顔を上げた時、そこにあつたのは少々顔つきが鋭くなった少女の姿だった。

「でも週に一度は行かせてください、その時に私スズカさんに私が頑張つてますって事を伝えたいんです。だからスズカさんも頑張れって、それは許して下さい」

「週一位なら許すさ、というか毎日が異常なんだよ。あれじゃあスズちゃんが考え事する暇もないし、寧ろスズちゃんが君の心配をするぐらいだったよ」

本当に分かってくれたのかは些細な問題だ、問題なのは今の状況が可笑しいと少しでも理解する事。極端な話、スベの目標からしたら日本全てのウマ娘がライバルになってくる、当然その中にはスズカも含まれて来る。故障によつて鍛えられない期間が生まれてその間に差を詰める事を喜んだつていい、だがそれをせずに素直に心配し復帰を望む。それは彼女の美徳だ、だが目標からすればそれは足枷にもなる。

「やる事やらないで他人に優しくするなか……見事なブーメランだな。俺もいい加減、前に進まないダメか……アスム、俺は進んでいいんだよな。俺みたいな子を増やさないためにも……ちよつとだけ、脚を前に動かすか……」全くしようがないなあ……よしつ決めた!!」

「うわあつ!! 如何したんですかヒビキさん!!」

「スペちゃん、俺これからトレーナーに復帰するわ」

「へっ……?」

余りにも突然すぎる言葉にスペは困惑して言葉を失っていた。今まで断固としてトレーナーをやる事を拒絶していたヒビキがトレーナーをやると言う事を言い出したのだ、そりゃ困惑して当然の事である。

「つという訳で俺ちよつと理事長の所行つて来るわ、ちよつち待つててね」

「えっええええ!! あつあのヒビキさん!! え、ええツとえつと……トットトレーナー

さああん!!!」

取り敢えずどうしたらいいのか分からなくなってしまったのか、スペは沖野の下へと駆け出していったのである。そんな間に理事長室へと到達したヒビキはノックして、直ぐに許可が下りると理事長とたづなに話をした。

「突然すいません、でも速い方が良いと思ひまして」

「驚愕っ!!今まで拒否し続けて来たのに突然何故!?!」

「ちよつと、好い加減足踏みするのも飽きましたね。まあ用務員も辞めないで安心して下さいいっというか辞めたらやばいでしょ実際」

「そうですね、他の用務員さんに負担が一気に押し掛かる事になりますので……」

単純計算でヒビキが行っている仕事の量は、通常の用務員が十数人分。早朝のダートコースを均すローラーを転がすだけでもかなり負担を軽減している事にもなるのだが……それでも一気にそんな負担が押し掛かると流石に不味い。

「なので勝手ですけどスピカのサブトレって立場にお願い出来る?」

「快諾!!寧ろ光榮な申し出!!正直、トレーナーの人数不足は深刻……地方から人を引っ張りたいが、中央に来るとなると誰もが足踏みをしてしまい中々……」

「中央で活躍出来る人となると更に限定されますし、地方で名を上げている方ですと其方の力を中央が奪ってしまう事にも繋がってしまいますから慎重に成らざるを得なく

て……」

「あく……オグちゃんの一件もそれに近かったですもんね……まあ俺がその助けになればと思います」

「感謝!!」

トレーナーという資格の難しさもあるが、これは下手にハードルを下げる訳にはいかない。難しい問題なのである。既に有名な地方トレーナーの場合は担当ウマ娘からトレーナーを奪う事にも繋がりがかねないので更に慎重になるしかない。新人トレーナーは逆に中央のレベルについてこれずに引き抜けない、本当に大変な問題である。

「提案!!時々で構わないので他のウマ娘やチームにも参加してくれる事は可能か!」

「大丈夫ですよ、皆顔見知りだし。というか今まで顔出してくれつつ要求が多すぎてぶつちやけウザかった」

「アハハハ……そこはあれです、ヒビキさんの人気っていうか」

「喜んでいいのかなそれ……まあという事で用務員のおじさん、これからは兼任トレーナーに着任します」

「ウムツ承認!!書類は後日渡そう、では頼むぞヒビキトレーナー!!」

「つという訳で沖君、俺トレーナーになったから。手始めにスピカのサブトレに就任したから」

「いきなり何言いだしてんだとっつあん?!? スペがいきなりとっつあんがトレーナーが何だっって言いだしてこっちは結構大変だったんだぞ!」

「何よ今までトレーナーになれなれって一番煩かったくせに」

「だからっていきなり言われたって混乱するに決まってるだろうがあ!!?」

第39話

「ほらっспеちゃんフォーム崩れてる、もっと意識しつっ」

「はいっ!!」

ターフを駆け回るспеを見つめる一人のトレーナー、手元にあるストップウォッチを構えながらも温和そうな表情に鋭い瞳を作りながらもフォームの歪みを見逃さない。現在練習中のスペカの風景を一目見ようと多くのウマ娘、そしてトレーナーがそこにいる——が、問題なのはウマ娘に注目しているのではなくトレーナーに注目しているという点である。

「スペちゃんあと1週、はい全力全開で走り抜ける!!」

「はいっおおおおおおおおおおおおおおおおっつっ!!」

その声とともに爆発的な加速を見せながら一気に最高速度で駆け出して行く、コーナーも出来るだけ速度を落さず最高速度を直ぐに加速で取り戻せる圏内を維持したまま、そして直線で加速して維持するという事を繰り返しながらゴールを切った。

「よしっいいタイム。レコード更新まで0.931秒」

「ほっほぼ1秒……壁、厚すぎる……」

「まあ口で言うのは簡単だからねー秒」

倒れこみながらも息を荒げるスベ、次のレースに向けてタイムの更新を目指しているが中々上手く行かない。簡単に言ってしまったらそれはそれであれな気もするが、それでも徐々に更新に近づいている。今までの最高の走りに近い走りを常に出せるような状態になりつつあるので、後は上手く精神性を前に押し出せるように成れば更新は確実だろうとヒビキは思っている。

「にしても——凄いなえ見物人、そんなにスピカって注目集めてるんだね」

「いやヒビキさん、多分意味が違うから」

「おっちゃん見に来てんだよ、皆」

「何、暇なの？」

「いやそうじゃねえよとつつあん」

この態度がマジなのかそれとも天然なのか分かりにくいのが紛らわしい。まあ確かにたった一人のトレーナーが新しく入っただけでそれを見に来ると言うのは暇なのか、と疑いたくなる気持ちは分からなくはない。分からなくはないのだが——今回ばかりは許されるだろう、と思っているとリギルのハナがルドルフを連れて近づいてくる。「やってるわねヒビキ君。皆貴方が遂にトレーナーをやるって気になってしようがないのよ」

「だからって此処まで大騒ぎするかい、ハナちゃんもそうだけどき、何回でも言うけど皆暇なの」

「暇ではないよ、ヒビキさんがトレーナーをするというのはそれだけ皆にとつて衝撃的且つ魅力的な話題なんだよ」

「そんなもんかねえ……唯の用務員のおじさんが兼任してますってだけだよ」

そうは言うが、ヒビキはヒビキで唯一無二と言つても過言ではないトレーナーとしての特性を兼ね備えている、それは――

「んじやスぺちゃん、最後は坂路だね」

「はっはい……でも坂路つてきついですよね……」

「キツいけど足腰は鍛えられるし根性も付くよ、大丈夫俺も一緒に登るから」

「が、頑張ります……!!」

そう、ウマ娘と同じメニユーをこなすという点である。ウマ娘でないとあげられる重さの物、引つ張れない物、走れない距離など……それらを共に行う事が出来る身体能力が長所。比喩的な意味ではなくトレーナーと二人三脚で強くなるを地で行く事が出来るのがヒビキトレーナーなのである。

「おじさん僕も見てよ〜!!」

「スぺちゃんが休憩し終わるまでは取り敢えずそつちも見てあげるよ、テイちゃんは下

半身強化を中心かな。関節の柔らかさを活かす為にもガツチリとした筋肉が必要になって来るし」

「あくズルいって!!ヒビキさん私のメニューは!?!」

「そりやお前じゃねえか!!おつちやん俺は俺は!?!」

「あく分かった分かった順番に相手するからまずは坂路を終わらせてってば!」

絶えずウマ娘がヒビキの周囲を取り巻く、トレセン学園でヒビキの事を頼りにしているウマ娘は一人としていないと言っている程の信用を彼は勝ち取っている。数年間の誠実な対応と行い、彼の人格などの積み重ねとしか言いようがないだろう。

「所で、何時彼はリギルにも貸してくれるのかしら?」

「おいおいいきなりその話かよ」

めでたくトレーナー復帰をしたヒビキ、だが現在はサブトレーナーという立場に付いて錆取りをがてら今まで言われ続けて来た顔出しを各チームなどに行う予定でいる。その為にはその申請をしなければいけないのだが——その窓口となっているのは沖野なのである。

「つつうかなんで俺が窓口、とつつあんが自分でやりやいいじゃねえか」

「元々貴方が彼を最初に誘ったのよ、だったら貴方がやるのが筋でしょ」

「おいおい東条、抜け駆けするなよ」

「ええっ僕も是非お願いしたいんですから」

リギルに続くようにカノープスの南坂トレーナーに黒沼トレーナーもそれについての話をし始めた。

「僕としてもぜひ来てほしい所です、ナイスネイチャさんも喜んでくれると思いますので」

「ウチもブルボンも喜ぶしモチベーションも上がる、特におやつさんのトレーニングを詳しくやらせたい」

「何つうかまあ……あくその辺りは後日たづなさんと調整しとくわ」

余りこういった仕事はしたくないなあ……とぼやきつつもこれも自分がまいた種かと諦めてそれをこなす沖野。まあ財布にダメージが来ない分、マシだな……と知っている。

「それにしても——楽しそうだな、ヒビキさんは勿論だがスペシャルウィークも」

「はいラストお!!」

「ひいひいっぬおおおおおっ……」

「よし良く頑張ったねスペちゃん、今日のメニニュー終わりだよ」

「はっはいいいいいい……」

漸く坂路を登り切ったスペは倒れこみながらもヒビキの笑顔に向けて、疲れ切ってい

るが笑顔と共にVサインを示す。一緒にトレーニングを行えて笑顔で追える事が出来る、それが一番なのかもしれない。

「私も早くヒビキさんとは教わりたくないな」

「生徒会長にそこまで言わせるんだからホント流石とつつあんだよなあ……」

「俺の所にも新人でおやつさんに見て貰いたい奴がいる」

「そう言えば新メンバー迎えたって言ってたわね……何て名前だったかしら？」

「トロンベだ」

「ヒビキおじ様改めおじ様トレーナー!!私は何するべきでしょうか!!」

「何かやだなそれ、普段通りで頼むよ」

「何ですかあ!!?」

第40話

「貴殿がヒビキ殿か、お噂はかねがね……私の名はトロンベ、我が家の誇り高き最高のウマ娘の名を継承した者。是非覚えて頂こう」

「お、おう……こりやまた随分とキャラが濃いのが……」

基本、スピカのサブトレーナーとして働く事になっているヒビキだが他のチームにも派遣される事となり、真っ先に行く事になったのはくじ引きで決定した黒沼がトレーナーを務めるチームへと訪れたのだが……真っ先に自分を待っていたのは妙にキャラが濃い腰まで届く金髪に緑色の瞳にサングラスを掛けているウマ娘が堂々としながら挨拶をして来た。

「にしてもトロンベ……聞いた事無いな俺、ごめんね」

「いや当然、気を遣って頂き感謝する。ウマ娘と言ってもレースで名を残した訳ではなく初代当主と共に苦楽を共にし、生涯を初代の愛《font:ul40》馬《font:t》として捧げ、始祖となった偉大な方なのだから」

「成程そっちな」

自分の鬼に近い何かだろうか。まあ彼女の場合と自分の場合は事情が異なるだろう

からあまり考えないでおくことにしておく。

「ヒビキ用務員、本日は宜しくお願い致します。本日お会いできることを楽しみにしておりました、ステータス：嬉しさを検知しました」

「ブルちゃんも相変わらずだね、んじやまあ——始めるかい？」
「ああつ頼む」

そんなこんなで始まったサブトレーナー業務。ある意味今まであつて来たウマ娘の中でもぶつちぎりにキャラが濃い二人を抱えているチームの指導方針は精神は肉体を越えられるという黒沼トレーナーの考えが反映されているのか、所謂根性トレーニングに該当する坂路が多く分配されている。

「ブルボン、お前はあと2本。トロンベは1本だ」

「マスターの御命令通りに」

「承知した、行くぞトロンベっ!!」

「個性的だなあ……」

サイボーグのような言葉遣いで頭を下げるミホノブルボンとマックイーンよりもずっと貴族らしさを感じる自信に溢れながらも素直さを見せるトロンベ。中々にキラが濃いのが、その分と言わんばかりに両者の能力は極めて高い。

「誰が休んでいいと言った、お前らももう一遍行つてこい」

『はっはい!!』

「頑張つて、終わったら俺が持つてきたドリンク差し入れるから」

ヒビキの言葉を受けて泣き言を何とか引つ込めながら再度坂路トレーニングへと勤しみ始める他のウマ娘達も中々に基礎体力が高く侮れない。坂路を既に2本こなしているのにあれだけ声を出せる上に直ぐに動いている。かなり精神が鍛えられている証だ。

「つつうか2本つて……ブルちゃんもう2本やつてるのに」

「あいつなら出来る」

「相変わらずスパルタだねえ……坂路なんて好きこんでやるウマ娘は絶対に居ないって言われるぐらいに超キツイトレーニングなのに」

1本完走出来れば上等とも言われる程に超キツイ坂路トレーニング、それをブルボンは既に2本こなしているのに更に追加2本。普通ならばきつ過ぎてウマ娘が潰れてしまいかねないハードトレーニングだが、ブルボンはその苦しさや辛さを全て飲み込んで自分の力に変えている。

「ウマ娘の世界にはエリートか雑草しかいねえ、あいつらはそれを越えたいって言つて俺の下に来た。だったら俺は鍛えてやる事しか出来ねえ、下剋上——目指すのがそれだ」

「それならトロちゃんは何で此処に、なんか言い方して名家な感じするけど。さっきのもなんか言い聞かせてるって感じがする」

物言いからして相当なエリート一家の生まれのように感じられるトロンベ、雑草とは対極にあるエリートと言うべき存在なのではないかと思うが……何故黒沼の下へと訪れたのか。

「奴の家は普通に名家らしい、だが如何にも血統と才覚だけを重視しちまつてる。んで事情があつて出奔させられたらしい、それもあつて気に入らねえんだと。それであいつはそんな家をひっくり返すつもりらしい」

「そりや凄い意気込みだ。下剋上を目指す元名家の御令嬢……か」

「名を継いだトロンベつつうのも苦労続きのウマ娘だつたらしい、初代の愛《font: ui40》馬《font》トロンベの忘れ去られた崇高な理念を私が取り戻す、その為にチームに入れてくれて言ってきた。俺はそこが気に入った」

如何やら貴族然とした態度は自分が目指すべきものがあるらしい、確かに黒沼が好きそうなウマ娘だ。素質も中々な物に見える、あの坂路トレーニングに果敢と挑んで持ち前のパワーで坂を跳ぶように駆け抜ける。だが途中でスタミナ切れなのかかなり息が乱れる、しかしそこを根性で補うように歯を食いしばって駆けあがってゴールを決める。隣では平気そうな顔をしながら息を整えているブルボンがいるのを見てニヤリと

笑う。

「ハアハアハアハアハア……流石ブルボン、だが私の目標は君だ。何時か君のようにこの坂路を登り切つて見せよう……!!」

「トロンベ、貴方ならば必ず出来ると断言致します。待っています」

「フツ……ご期待に沿えるように努力しよう——」

如何やらブルボンとも中々に良い友人関係を築けているらしい、その言葉を受けて笑みを浮かべながらも精進する事を誓うのだが疲労からかどんどん前のめりになっていき、そのまま倒れこんでしまった。ヒビキが助け御越しに向かおうとするが、それを黒沼が止める。フラフラな腕と脚を動かして足掻くようにしながらも立ち上がろうとする。

「例え、無様だとしても、私は……何度でも立ち上がる、初代トロンベもそうやって、我が家を興したのだ……!!私は、その名と魂を受け継ぐ者だあ……!!」

顔が土で汚れようと、身体が泥で塗れようが、決して折れずに立ち上がってみせる。その逞しい根性がトロンベの持ち味だと黒沼は語る。ブルボンとは違った意味で優れた精神を宿している。

「根性……そあるがスタミナがまだまだだ、今はまだ短距離しか走らねえがあいつはブルボンをライバルとして見てる。故にあいつは長距離を目指してる」

「努力で埋めていくか……君らしいね。んじやこれも役に立つかな？」

そう言いながらヒビキは懐から一冊のノートを差し出す。

「俺の鍛錬メニュー基本編。まずはこっから始めさせるべきだね、毎朝の鍛錬にもトロちゃんも参加させてもいいよ」

「感謝するぜおやっさん、是非使わせて貰うしアンタからも扱いてやってくれ」
「程々にね」

「ヒビキ殿、失礼ながらカノーパスにも出向く事はありますかな」

「あるけどどつたの」

「あのチームには我が親友が在籍している、目立つ故に直ぐ解ると思う。奴も貴方による鍛錬を楽しみにしている」

「それはいいけど君の親友って聞くとなんか怖くなってきたのは気のせいかな」

「フツ褒めてもなにも出ませんが、精々フレンチのフルコース程度かな」

「凄いい出すじゃん」

第41話

「失礼、ヒビキトレーナーで違いないだろうか」

「ああそうですけど……ああ成程、君だねトロちゃんじゃなくてトロンベちゃんが言ってた親友っていうのは」

「如何にも」

カノープスのサブトレーナーとして仕事をする番が回ってきたので其方へと向かうとした時、不意に声を掛けられたのと振り向くとそこには酷く目立つウマ娘が立っていた。短く切り揃えられた銀髪、自分ほどではないが女性としてはかなりの高身長、ゴールドシツプよりも大きい180センチほどだろうか。そして、何よりもこの学園にいるどのウマ娘よりも圧倒的に漢らしさを感じさせる堂々たる立ち姿と腰に差されている一本の棒、それも相まってもう侍にしか見えなくなってきた。

「本日より我がチーム、カノープスのサブトレーナーになっていただけると聞き、案内人の役目を南坂トレーナーより拝命している」

「こりやどうもご丁寧……確かゼンガー……」

「否つ既にその名に非ず、我が名はっ——ダイツゼンガー!!!」

胸を張り、空気を震わせる裂帛の気迫のまま叫んだ自らの名前。近くにあったガラスはその声の音圧によってビリビリと震えており、近くにいたウマ娘達は其の咆哮に驚いてしまっており、中には余りのも大迫力の咆哮に腰を抜かしてしまっている生徒までいる。

「ダツダイゼンガー……!?!」

「左様。我が友より話を聞いておられると思うが、初代トロンベと我が初代は莫逆の友、そしてその初代と活躍した名前こそゼンガー。私はそれを継承した、だがそれでも足らぬ、私は初代を越える存在となる。更に巨大、いや強くなる。故に私は己をダイゼンガーと名付けたのだ」

「そりやまた凄い自信と気迫だね」

何とも凄まじくこちらもキャラが濃い、そしてなんてストレートなネーミングだろうか……初代を越える、つまり所初代よりも更に巨大な存在となる。だから自分の名前はダイゼンガーだ!!という事でダイを付けたらしい、安直と言うべきか単純明快というべきか……。

「あくあ……んもう騒がしいと思っただらやっぱりだったわあ……」

「ネイチャか、何用だ」

呆れたような諦めたような表情を浮かべて如何にもやれやれと言いたげな態度を

作っているのはナイスネイチャ、ヒビキと仲良く用務員室にやってきては駄弁ったりしたりする仲。下町の商店街の大人たちに囲まれていたからか、ヒビキのような大人と一緒にいる方が落ち着くからとの事。

「何用か、じゃないですよもう……迎えに行くつて言うから任せたら突然先輩のつかい声聞こえたから様子見に来たんですよ、そしたらまたこの有様……何処だろうと大声出すのはやめた方が良くってトレーナーにも言われてるじゃないですかあ」

「ムウツ……だが、ヒビキ殿には一度お会いして鍛錬を一緒にしたいと思つていた。その念願が叶い、そして名乗りを上げられるのだ。気合が入るのは当然だろう」

「まあ気合が入るのは良いと思いますよ、ネイチャさんも思います、ですけどせめてターフのだけにしたらどうですか？」

「済まぬ……」

如何やらネイチャの方が学年は下らしいが力関係はほぼ同じ、いやネイチャの方が強いように見える。

「ヒビキさんごめんね。先輩つてば気合が入りまくる侍系でさ、レースでも最後の直線で今みたいな雄叫び上げながらゴールするんだよ？」

「はあ……気合十分でいいんじゃない」

「うんまあね……その声の迫力あり過ぎるんだよね。ゴールした後も叫ぶんだけどさ、

歓声が一瞬なくなるレベルなんだよ。それをどこでも上げるのは勘弁してほしいけどね」

「それやばくね?」

「うん控えめに言って音響兵器」

バツの悪そうな顔をするゼンガー改めダイゼンガー、別段走っている最中に声を上げる事は問題は無し叫びながら走るウマ娘なんて大量にいる。が、その中でもダイゼンガーは特別に声がでかい。コース場が揺れる程の大声を自らの咆哮で鎮める程の大声な大声を上げる。そんな音響兵器は練習でも発揮される。

「推して参る——ぬおおおおおッ!!」

「いやあつ……凄い声だね南ちゃん」

「いやはや全くです……」

隣でタブレットでメニューを確認しながらも苦笑いをしているカノープスのトレーナーである南坂。若輩ながらもウマ娘達と確りと向き合って助け合い、時に助けられながらと言ったようなヒビキとはまた違った二人三脚で前へと進んでいくタイプのトレーナー。

「なんでも御実家で剣術指南を成されている方が示現流という剣術の使い手らしくて、その影響でトレーニングとかで腹の底から大声を出す事が習慣付いたとか……」

「示現流、成程あれは猿叫な訳か」

「ご存じなので？」

「まあね」

猿叫というのは分かりやすく言えば示現流特有の裂帛の気合を込めた掛け声の事。確かにあんな声を出せば一時的に身体のリミッターは外れる、その影響か彼女の走りは途轍もなく力強い。トロンベのそれは軽快で連続で跳ぶのような走り、が此方は一転して大地を確り踏み込んで駆け抜けていく走る。

「あれって事は何時も腰に差してる奴って……」

「マジモンの刀だよ、毎朝毎朝立木打ち立木を棒で連続して叩く示現流の稽古法、達人が行うと煙が立つと言われている。だったかな。そんな奴をやってるんだって、グラス先輩と演武もやったりしてるって」

「マジの武人じゃん」

確かにグラスワンダーとは仲良くなれそうな子だと、偶に薙刀を持っている稽古をしている彼女を見た事があるヒビキは思う。

「まあその影響もあつて彼女の走りは凄まじいです、持ち前のパワーで全てを抜き去つていく走りです。ゴールした後は必ず勝鬨として大声を上げるんですけど、何時の間にか定番になって固定のファンも付いていて辞めさせるわけにいかなくなつて」

「そうだろうなあ……見た目はクールビューティなのに実際は凄い漢氣溢れる武人だも
ん」

「いやあくこのネイチャさんよりも人気でちよつと嫉妬しちゃいますよ、唯一の欠点
はあの声のせいで並走トレーニングとかしたくないんですよね」

ネイチャの気持ちは分からなくはない、声量もあるがこの圧と迫力がとんでもないの
である。意図しなくても相手を威圧する事になる、あの隣で走れるのは余程強い心が無
いとかなり辛い事になる。

「というか先輩って本当にウマ娘なんですかねえ……ってレベルなんだよね、なんという
覚悟が極まりまくってるっていうの？」

「そうですね、その影響で何人かうちのチームを辞めちゃう子もいる位大迫力です」
「あららっ……」

一度、声について走行妨害になるのでは？という審議が起きたレベルでの巨大な雄叫
び。だが走り方は全く問題ない上に別に当人も邪魔の為に上げるのではなく、気合を入
れる為なので無問題とされている。が、本当の問題はそこではないのである。

その声を上げるのにも相当なエネルギーを使うのか、走り終わった後に度々ガス欠を
起こしてしまっている。そしてその疲労でウイニングライブに参加出来ないという珍
事も起こしている。

「つまり、改善すべきは……そこ？」

「そうなりますねえ……スタミナをつけるか大声を出させるのをやめるかになるんですけど……」

「でも声を出さないと先輩って本領発揮できないっばいだよねえ、声出さないと一気に走りのレベル下がるんだよ」

「すっごくい癖強いなあ……」

流石にキャラが濃すぎないか……と色々と思うヒビキ、そして取り敢えずダイゼンガーはこれから毎日ヒビキの朝練に参加する事が決定、そこでスタミナを付けながらも声に関しても何か対策を考える事になった。

「我が疾走に——走れぬ路無し……!!」

「というか、ウイニングライブにはちゃんと参加するのね」

「寧ろ積極的に参加してるよ、可愛い系の歌よりカッコいい系の歌の方が得意だけどね。よく私とカラオケに行つて練習とかもしてるよ」

「真面目ではあるんです、真面目で素質もあるし努力もするんですけど……」

「なんとまあ……」

復帰したトレーナー業務、それは色んな意味でインパクトが強くなるなあ……と半分思考を放棄するヒビキであった。

第42話

他のチームを巡りながらのサブトレーナー業務をこなすヒビキ、そんなヒビキをサブトレーナーとして望むチームは多い。それだけ彼がウマ娘達からの信頼を集めているという事になる、実際彼がサブトレーナーとして入ったチームは明確にウマ娘達のモチベーションが上がって練習効率が上がっていることがあげられる。それが顕著であるのはチームスピカだろう。

「よしいいいタイムだ……スベっ調子上がって来てるな!!」

「はいっ!!これならジャパンカップでもいい結果が出せそうです!!」

コースを走り抜けたスペは好タイムを残せたことに好感触を感じている、これならばスズカにも良い報告が出来そうだと思っていると大きなクーラーボックスを担いで来たヒビキが目に入ると其方へと駆け出して行く。

「ヒビキさん見てくださいいいいいタイムが出たんですよ!!」

「おおそりゃ凄い、んじやご褒美タイムと行きますか。皆、差し入れ持ってきたよ水分補給は忘れず」

「わっいおじさん頂戴頂戴っ!!」

そんな言葉と共に降ろされたクーラーボックスの中にはドリンクがたくさん詰まっていた。早速いただくようにティオーが手を伸ばして飲むと思わず吃驚したように声を出した。

「何これ美味しい!? ってこれもしかしてはちみーじゃん!?」

「あつそれ当たり。テイちゃんが好きだって言うはちみつドリンクに俺特製のニンジンジュースをブレンドしたスペシャル仕様」

「ニンジンはちみー!! そういう物もあるのか!! 凄い美味しいよこれ!!」

喜んで一心不乱に飲みだすティオーの姿を見て他のメンバーも我先にとドリンクへと手を伸ばしていく。

「プハアツ!! ニンジンじゃないけどこれ美味しく!! リンゴジュースね!!」

「こっちはスポーツドリンクっぽいけどバナナとオレンジっぽいね!!」

「これは豊かな甘みと爽やかな口当たり……仄かな塩も良いアクセントになっておりますわ」

「おつあつたりくはちみーだなこれ」

「ゴールドシップさん良いなく!! それじゃあ私はこれ!! ……あつ私もアタリ!!」

「よしそれじゃあこれだつ!!」

最後になったアキラがドリンクを掴んで一気に飲み干すのだが——一気に顔が青

なくなっていく。

「あれっ如何したんだアキラ」

「顔が青く……って今度は一気に緑になってる!？」

「アキラが引いたか、運が悪いなあ」

「何混ぜたんだよとつつあん!？」

「青汁風味のはちみー。栄養抜群で運動後には最適、いやあ作るの大変だったよ」

『青汁!?!何で作ったの!?!』

「アタリがあるんだったらハズレもあつた方が良いかなあって」

態々手の込んだハズレを作る辺り、ヒビキも中々のエンターテイナーである。幸いな
のが、口当たり自体は良いので口の中に苦味が残らなかつたりする事だろうか。それ
も苦いのが好きではないアキラにとつては普通に辛い水分補給タイムとなつてしま
つたので、口直しとしてニンジンのはちみードリンクを渡すのであつた。

「トレーナーさん、これなら私ジャパンカップ行けますよね!!」

「タイムも好調、スタミナもパワーも順調に付いてる。とつつあんの朝練の成果も出
来てるし筋肉量も順調、最高の仕上がりで行けるだろうな」

「こりやジャパンカップ、スベ先輩が頂きだな!」

「そう言うには早いと思うわよ。ジャパンカップにはエアグルーヴ先輩だつて出てくる

し、簡単にはいかないと思うわ」

ウオツカの言葉を御するようにダスカがそういう、実際問題ジャパンカップに出てくるのは強豪ばかり。同期で言えばエルコンドルパサーもでてくるし、これまで経験した事が無いような決戦が待っている。

「いやあく私のメイクデビューが終わったと思ったら今度はジャパンカップ、イベント盛り沢山ですね」

「そうだな、つつてもアキラはアキラで次のレースも控えてる。お前も確りと準備はしとくんだけ」

「は〜い」

アキラは先日メイクデビューを済ませた。結果はなんと2位と8 《font:ul4 0》馬《font》身を付けての圧勝だった。適性を見てダートに行くか芝で走るかはまだ検討中だが、本人的にはどっちでも走りたいとの事。

「まあ何とかなんじやね？おっちゃんのメニューもこなしてんだぞ」

「少々浅く考えすぎなきも致しますが、実際私たちは成長しております。故にどんどん前へと行けると思えますわ」

「そうそうっ!!今のスベならきつとジャパンカップでも勝てるって!!」

「皆さん……うんっ私頑張ります!!ヒビキさんもお願いしますね!!」

ですかあ!」

「俺里帰りしないといけないんだよ、鬼としての使命もあるし」

「里帰り!?! えっおじさんもしかして辞めちゃうの!?!」

「辞めないって……長期休暇で実家帰るようなもんだよ」

本当は年末などに帰るべきなのだろうが、鬼としての使命は絶対に外せないこの時期になる——まあ長期休暇と言つても1週間程度になつてしまふが……用務員も足りない状況下でそれを補うヒビキが不在。そうなると自然と他の用務員への負担が凄い事になるので、理事長から出来るだけ早く帰つて来て欲しいと懇願されている。まあ最悪、清めの儀式に参加出来れば良いので1週間処か行きと帰りを踏まえて2〜3日貰えれば十分。

「そんなあつ……ヒビキさんに見て欲しかったのに……」

明らかに落胆するスベ、申し訳ないが清めの儀式に不参加は許されない。それこそ入院したなどの事情が無い限りは、それに——清めの儀式以外にもしなければいけない事もある。

「行かないといけないんだ、アスムに挨拶もしないといけないし」

第43話

「久しぶりだけど、ホント田舎だよな此処」

外装には錆と傷が幾重にも乱れ、走る度に揺れと軋むような音が耳に伝わる古めの電車を降りて、これまた年季の入った精算機を通過した末に到達した景色に思わずそんな言葉を漏らしてしまうのは東京の景色に慣れきってしまったが故だろうか。穏やかな田舎の風景、良くも悪くも緩い空気は東京ではあり得ない。

「おっヒビちゃんじゃない、何帰って来たんかい」

「どうも清めの儀式の為にね。お姉さんこそ益々お美しくなっちゃってまあ……旦那さんがいなければ放っておかないのになあ」

「あらやだあお上手ねえ、でもお生憎、お言葉通りアタシヤ旦那に釘付けなんでね」

「ハハハツ変わらずラブラブだねえ」

深呼吸を一つ入れながら歩き出すと直ぐに声を掛けられる、顔なじみのタバコ屋のおばちゃん。子供の頃からおばちゃんだったから既にお婆ちゃんになっている、しかし女性というのは不思議な物で歳を取ればとる程に美しくなっていく人もいる。なので綺麗になったというのもあながちお世辞と言う訳でもない。

「お〜い響鬼さんっ帰って来たのか!!後で寄れよサービスすっぞ!!」

「あいよっ行かせて貰うよ」

「何だよ帰って来たのか?来なくても俺が代役してやんのに!!」

「無茶行つてると大蛇に喰われるぞ〜」

道行く人たちにヒビキは声を掛けられる、地元故に同年代の友人もいれば昔からの顔なじみの人も大勢いる。特に最年少で鬼となった為に地元ではちよつととした有名な状態。それが久しぶりに帰って来たのなら声が掛けられるのは当然と言うのも。実家までは歩いて少し掛かる、普通ならばバスを使うのが良いのだろうが久しぶりに歩きたくなったので歩く。

「やっぱり落ち着くなあ……」

少し歩けば田園風景が広がる田舎も田舎、この辺りが昔ながらの風景と自然との調和を目指し続けているというのものもあるが、それでもここで生まれ育った身としてはこの風景があり続けてくれているというのは嬉しい物がある。田へと水を引つ張る為の川の上に掛かっている石橋、そこから聞こえてくる清らかな川の水音も全てが懐かしく、思い出がある。

「やっぱり、此処は全部あるなあ……」

川で泳ぎたいなあと年甲斐もなく思ってしまう、もう季節も季節で寒いと分かっ

るがどうしてもやりたくなってしまう。久しぶりに帰って来たのだから、此処で少し鍛えるというのも悪くないかもしれない。まあ学園側からしたら早く帰って来てくれだろうが……折角の休みなのだから自由に過ごしたいのが本音である。

「響鬼さん……?」

振り向くとそこにはバイクに跨りながらヘルメットを外している若い青年が此方を見つめていた、甘いマスクとルックスは如何にも女性受けしそうだと思いつつも軽く声を掛ける。

「よっ伊吹、お久しぶり」

「久しぶりじゃないですよ、去年帰ってこないからこっちは結構大変だったんですよ!」
「それについては悪いとは思ってるけどさあ……こっちだつて仕事とかで超ごたごたしてたんだよ?それはこっちだつて納得してくれてたじゃん」

「いやそうですけど……そのせいで先代が出張ってきて儀式やったんですけど、俺達が弛んでるって言われて凄く猛特訓で……」

「——まあドンマイ!!」

「じゃすみませんよ……」

「ニコやかに誤魔化そうとするが、如何やらそれでは済まない程に鍛え直されたらしい。」

「でもさく先代が鍛え直すつて事は実際そうだったんでしょ、あの人厳しいけど嘘はつかないしそうじゃなきゃ鍛え直しなんてならないし」

「まあ……確かに実際仕事とかで中々鍛えの時間が取れなかったつて言うのはありましたが……響鬼さんだつて今年はそうなるかもしれないから覚悟してくださいよ」

「これでも毎日鍛えてるんだけどなあ〜俺」

歩く響鬼の隣でバイクを押しながら伊吹は近況報告を兼ねて去年、トレセンの仕事の関係で帰る事が出来なかつた時の事を話す。如何やら響鬼の先代に当たる鬼に扱かれたいらしい。

「具体的にはどの位鍛えてるですか」

「そうだな〜毎朝此処でやってたメニューに加えて？東京ドーム十数個分もあるトレセンの敷地のメンテやら修繕に夜の鍛錬も欠かしてないよ」

「……えっ嘘ですよね？」

「マジだけど、鬼の皆も職に困つたらこつち来なよ。良い給料出るよ？」

「いや、遠慮させて貰います……」

幾ら鬼だとしてもそれ程までに大変な仕事をしたとは思えない。というか何でそんな仕事を数年もやれるのだろうか……と思っていると雷電一家の家に到着してしまつた。バイクを止めてきますと去つていく息吹を見送ると軽トラの整備をしていた

と肩にタオルを引つ掛けていた少々強面な男が此方を見て笑顔を作った。

「おう響鬼、帰つて来たか」

「斬鬼さんお久しぶり。先代に扱かれたって伊吹言つてたけどマジ？」

「ああつ……情けない話だがな、俺も色々忙しくてな」

「あら意外」

少々不甲斐無さそうな顔を作っているのは伊吹と同じく鬼としての名前、斬鬼を背負つた男である財津原 蔵王丸。鬼としてのキャリアは響鬼には劣るが、それでも同じ鬼の中でも屈指の鍛え方をしている筈だが……それでも鍛え直されるというのは意外な話だった。

「俺の事よりお前は鈍つてないだろうな、今年は俺も徹底的に鍛え直してきた」

「多分大丈夫だとは思うんだけどなあ……毎日ウマ娘相手に仕事してるようなもんだし」

「成程、それは確かに気にする必要はないかもな」

汗を拭いながらも軽トラの整備に戻る蔵王丸、何やら隠しているようにも見える。

「実はな、俺も弟子を取つてそろそろそいつに斬鬼を継がせようと思ってるんだ」

「へえつ斬鬼さんがお弟子さんを。見込みは？」

「素質はまあまあだが、期待出来る。何より真面目な奴だ、鍛錬にも一切手を抜かん。ま

あそれはそれで不安だがな」

「上手い抜き方、教えてあげないと潰れかねないからなあ、斬鬼さんの鍛えつてキツいし」

「お前にだけは言われたくない——早く、挨拶してこい」

その言葉にヒビキは少しだけ、表情を変えながらも頷いた。荷物を置くと直ぐに発つた、そして——ついたのはアスムが居る場所、彼女の家。庭先を掃除していた一人の老年の女性は近づいてきた自分に気付いた。頭を下げるとニコやかな笑みを作つて歓迎してくれた。

「帰つて来たのね響鬼君。上がつて頂戴、直ぐにお茶を用意するわね」

「いえお構いなく……会つてもいいですかね」

「ええ勿論、喜ぶわ」

素直に歓迎してくれる事に感謝しつつも上がらせて貰う、少し深く呼吸をしながらも廊下を歩いて行くと直ぐに見えて来た部屋。襖を開けながらもそこにあつた笑顔を見て自分も笑みを作る、何処か気が抜けたのか肩から力を抜きながら前へと座る。

「悪いな去年は来れなくて、こつちも色々忙しくてさ……」

申し訳なさそうに語るヒビキ、本当は去年立つて帰リたかつたが泣く泣く断念したのだ。流石に理事長とたづなにあそこ迄頼まれたら振り切る訳にも行かなかつた。まあ

きつとその事については分かってくれているのだろうが、謝らないと自分の気が済まなかった。

「そうだ、俺トレーナーに復帰したんだよ。俺もいい加減進まないと……つて思つてさ、まあお前以外の子を教えるのは違和感が強いけど何とかやつてる……嫉妬とかしてくれている？」

帰つてこない返事、別段彼女は怒つている訳ではないのだ。ただ黙つて聞いている——という訳でもない。変わらず浮かべられている笑みに響鬼は……少しだけ口を紡ぎながら蝋燭に火を灯して線香を上げた。そして鈴を鳴らして手を合わせる。

「……今の俺をお前が見たらどう思う、なあアスム」

不安げな言葉の先にあるのは唯々、その瞬間を切り取った写真のみ。笑顔を浮かべているアシタノユメ、アスム。彼女はもうこの世にいない。それなのに、こんな風になるのは自分が弱いからなのだろうか……と疑問を抱いてしまった。

第44話

「おい親父何時まで——響鬼さん、アンタ来てたのか」

「久しぶり、ついさつき帰ってきてね。斬鬼さんに挨拶済ませとけって言われてきたよ、まあ言われなくても来てたけどね」

「……まあアンタならそうだろうな」

背後から現れたのは桐谷 京介——アシタノユメ、アスムの双子の兄。元々は彼も鬼を目指していたが如何せん体力がなく、鬼へと至る為の修行もまともにこなす事が出来ずにいたが、今では立派な青年へとなって役場の職員として働きながらも雷電一家の活動を手伝っている——が、今全く別の事も目指している。

「響鬼さん、俺トレーナーの資格がもう少しで取れそうなんだ」

「へえっ意外だね。トレーナーだけには絶対にならない、じゃなかったっけ」

京介はあまりトレーナーという物をよく思っていないかった、というのも自分が憧れていた鬼に僅か16で至った響鬼の存在があったからだ。鬼に憧れたのも妹と同じような目線で物事を見たかった、相手になりたかったという思いがあったからだ。だが、身体が弱い為鬼の継承は出来ず、それを担ったのは響鬼だった。

「……その事を引き合いに出すなよ」

「ごめんごめん」

鬼となつて、アスムと真正面から向き合つて共に前に進んでいく姿に醜い嫉妬を浮かべながら、今度はトレーナーとしての勉強を始めた。京介は勉強は相当に出来る、芸術方面や将棋など頭脳でも優秀な成績を残している優等生である上に英語やフランス語などの外国語もペラペラ。だから自分が妹をサポートしようと思つたが……響鬼もトレーナーの資格の勉強を始めた。

「あんときはどんだけ腹立つたか……アンタは俺から兄貴としての矜持を奪いそうな位に鍛えやがつたからな」

「鍛えることは俺のライフワークだからね、それは頭だろうが身体も同じだよ」

そこでも阻んだのが響鬼だ、同じように勉強を始めて同じ試験時期に試験を受けたが自分は落ちて響鬼は合格した。あの時ほど兄として、男としても敗北した思いを抱いた事はなかった。そしてこの時から自分は響鬼と呼ぶようになった。

「結局、あの時の俺はあいつを支える為だけだったからな……」

「それが今どうして」

「——アキラの目に、あいつと同じ光を見たんだよ」

京介が改めて資格を取りなおそうと思つた理由はアキラ。もう目指す事はないと

思っていたが、自分のやりたいことは全部やると決めたアキラが旅立つ時に見せたその瞳の中にアスムと同じ光を見た。その時に分かった——自分はある光の中に夢を見て、一緒に夢を見たいと思っただと。

「アンタに張り合ってたのは完全に意地だ。本当は夢を見たかったんだ、俺の夢と一緒に背負って走ってくれるあの光を」

「そっか、いいじゃない。俺もトレーナー復帰したしお揃いだな」

「ハッ……？響鬼さんあんた、トレーナー復帰したのか!!？」

「したけど？」

「何勝手に復帰してんだよ!!」

と思わず仏壇の前なのも構わずに大声で怒鳴ってしまった。響鬼はそれを受けながら神妙な顔になる。

「分かってるよ、アスムをしつかりと導いてやる事も出来なかった俺にトレーナーをやる資格は無いって事でしょ」

「あついや、そう……だよ!!アンタはこいつのトレーナーだ、それを譲らせる訳にはいかねえんだよ!!」

最初に思わず詰まってしまう、本心は違うのに言ってしまったと言いたげな言葉のまま吐き出してしまった。だが実際これは本音でもある、響鬼にはアスムの専属トレー

ナーであって欲しかったという思いがない訳ではない。

「アスムは言つてた、俺の好きなように生きてくれつて……だから俺もいい加減、自由になろうかと思つてき……」

「だからつて……」

「スズちゃんが怪我したつて聞いた時、如何してもあいつが頭に浮かんだ。身体中に包帯を巻いて、頭にも包帯巻いて……」

サイレンススズカ、彼女がレース中に怪我をしたと聞いてどうしてもアスムの事が頭を過つてしまった。あの時の酷く痛々しいアスムの姿は時折夢にも出るほど、一種のトラウマのように刻み付けられてしまつてゐる。そしてそれを目の当たりにしたからこそ決意したのだ、トレーナーに復帰すると。

「俺がちゃんと見てたら防げてたんじゃねえかな……つて思つてんだよ」

「くだらねえ結果論だろそれ、もしもなんて意味がないだろ」

「ああ、意味はない。でも今を見直す切つ掛けにはなる、俺は力を尽くす。アスムみたいな子を出さないためにも」

そう言われたら京介は何も言えなくなつてしまふ、兄としてもだが、トレーナーとしてもしつかりと務めるつもりでゐる彼を止める理由は存在しないのである。きつと自分が何を言つても止まらない、アスムへの後悔、それに未だに縛られ続けている響鬼。

いや、縛られるなというのが無理があるだろう。何せ……

「俺そろそろ行くよ、儀式の準備しないといけないし」

「あ、ああ……その響鬼さん、怒鳴って悪かった……そんなつもりじゃなかったんだ、俺は……もう気に病まなくていいって言おうとしたんだ」

「有難う。本当に優しいね君は……でも大丈夫、俺は今まで通りに鍛え続けるだけだから」

「（それが心配なんだろうがよ……）」

遠ざかっていく背中を見つめながら京介は胸に巢食った不安を見つめた、響鬼は妹アスムの為に鬼となった。そしてそれからずっと鬼としての力が衰えないようにずっと鍛え続けている。これは鬼としては異例中の異例、いや異常の域。伊吹や蔵王丸だつて常に鍛えているのではなく、定期的に衰えるのを防ぐ為に鍛え直す。だがそれをし続ける訳はない。それは過去の鬼を見てもいない。

「——アスム、響鬼さんは……本当にお前の望むように生きれるのか」

縋るような視線を仏壇へと投げる、笑顔の遺影の前にある一つの手紙を見た。そこにあるのは——アスムが残した響鬼への思いを綴った手紙、彼への思い、愛情、これまでの礼、積み重ねてきた時間の全てがそれに集約されている。そして——その最後に綴られていたのが

——響鬼さん、私のことは気にする事なく自由に生きてください。もう私に縛られずに自由に。それと……嘘を言っちゃってごめんさい、今まで愛してくれてありがとう。

「……クソ」

やりきれない思いを言葉にして、地面を蹴った。唯、じんわりとした痛みが足に伝わってきた。益々やりきれなくなってきた京介は溜息交じりに家の中へと戻っていった。

第45話

「応。帰ってきおつたな若造」

「お久しぶりです先代。相変わらず元気そうで」

「当たぼうよ、アキちゃんの花嫁姿を見るまで死ぬ気はねえぞ」

戻つて来た響鬼を出迎えたのは庭先で薪を割っている老人の姿だった。片手のみで軽々と斧を扱いながらまるで紙でも切るかのように薪を割っていく。老人故かやや身長は低めだが、それでも年の瀬に近いのに短パンにタンクトップのみで元気そうにしている辺り、流石は元鬼としか言いようがない。白髪ではあるが腰まで伸びているそれを風に靡かせながらもタンクトップから見えている筋肉は自重を知らない。先代響鬼――
――日々鬼、響鬼にとっては父方の祖父になる。

「若造、おめえ伊吹や蔵王丸みてえにサボつちやいねえだろうな。仕事があろうと鬼である限り、鍛錬を怠る事は許されねえ。一日一全、清めの儀式で最高の貢物を捧げる為になや全力で毎日を生きた上で鍛えなきやならねえ」

「これでも鍛えを欠かした事はないですよ。向こうでも毎日朝と夜に鍛えてました」

「ホウ……どれどれ」

そう言うのと近くに合った杖を手にする。杖など使わなくても歩くのには不自由して
いないが、持っているとか何かと便利なので携帯している杖——というよりもアキラか
らのプレゼントだから愛用している。それで身体を押しすように触れていく。

「フムツ……フムフム……」

「日々さんの杖押し……あれ結構痛いんですよ……」

「ああ、俺達の鍛えが甘かったのもあるが軽く痣になる程度の力で押すからな」

軽トラの整備の隣でバイクの整備を行う伊吹はややげんなりしつつも先代の行いを
見つめる。去年、鍛えが甘い!!と清めの儀式ギリギリまで鍛え直された事を思い出して
しまったらしい、それは蔵王丸も同じく。肉体に衰えが来てしまっていたとしてもそこ
は鬼の身体、並の人間以上、ウマ娘級の肉体であるのにも拘らず痣を作る程度の力とい
うのが本当に恐ろしい……さて、去年は仕事の影響で来れなかった響鬼は如何なのかと
二人も気になるのか見つめる。

「フムフムツ……へムへム……ホムホム……」

「いやなんすか先代それ」

「アキラが好きなアニメと一緒に見とったんじゃ、すっかり嵌ってしもうたわ」

「因みに誰派で？」

「無論、あんこちゃん派じゃ」

「それ杏子です」

「分かつとるわ」

案外響鬼もこの手のネタには詳しいのである。そして杖を収める、見極めが終わったのかと二人の鬼が喉を鳴らす中——先代は大きく笑いながら膝を叩いた。

「ヒイヒヤハハハハ!!こりや傑作じゃわい、若造、普段からどれだけ鍛えまくつとるんじゃ!!思わず、若い頃の先代を思い出してしもうたわ!!」

「それつて俺からしたら先々代つて事ですか……んじゃ合格点?」

「アホウ。逆にどんだけ鍛えまくつとるんじゃ、若干引くレベルじゃぞ」

先代にそこまで言わしめる響鬼の肉体のレベル。当然だろう、衰えた身体を鍛え直す為のメニューをこなし続けて来たのだから。

「まあ毎日鍛えたのもありますけど、トレセンの仕事つていい鍛錬になりますからね。そもそもがあそこの敷地が凄く広いですから」

「良い就職先に恵まれたな、もうその鬼二人」

「勘弁してくださいよ日々さん。こつちだつて好きで鍛えてなかつた訳じゃなかつたんですから」

「全くです」

「言い訳なんぞ要らんわい」

改めて薪のストックを増やす為に斧を振るう先代だが、実際その瞳にはなんて哀れなんだという感情を浮かべずにいられなかった。鬼というのは一つの終着点、人間という生き物が極限にまで鍛え抜いた肉体を更に鍛えた末に辿り着く境地なのだ。最早超人の領域とも言えるそれに踏み込んだ人間たちの総称だが——今の響鬼はその領域を越えている。

「まあ良い良い、2年ぶりのお前さんの清めの儀式。存分に聞かせて貰うぞい」

「はい、2年かけて熟成した俺の音を是非」

響鬼ほど鬼という生き方を体現する者はいないだろう、だがそれを望んでやったわけではない。目的を見失ったが故に至ってしまっている、ある種の無我の境地と言えるそれに日々鬼は何も言えなくなり煙管に火を灯す。

「今夜はご馳走じや。明日は遂に清めの儀式、良く喰うて英気を養え」

「分かりました、取り敢えず——俺は入ってます」

一度頭を下げてからヒビキは家の中へと入っていく。それを見届けてから煙を吐き出すと伊吹と蔵王丸が近づいてきた。

「そんなに可笑しいんですか、響鬼さんの身体」

「異常がある訳じゃない、だが異常なまでに鍛えられておるわい。大概鬼も超人扱いされるが……ありや最早魔人の領域に入っとるわい」

「魔人……あいつ、一体如何してそこまで……」

「アスムを失ったから、じやろうなあ……」

理由なんてそれしかない、そもそも鬼を志した理由自体がアスムの為だった。だが、今はやそれを捧げる対象を失ってしまった響鬼は道を完全に見失っている。どんな風に歩いていけば分からないしゴールをどこに設定すればいいのかも検討がつかない。

「気持ちには分からなくはないですけど……あれは響鬼さんのせいじゃ」

「んな事あこころ一带の全員が分かちよる、だとしてもお主は受け入れられるか？」

「俺は、無理ですね……」

「同じく……」

恋人を失った、単純な話ではない。彼にとつてアシタノユメ、アスムというのはそれ程までに愛していた存在だった。それを失ってしまった響鬼の苦痛は耐えがたい物だろう。

「アスムは響鬼の想いを受けて走った、自分の為にあれだけ尽くしてくれた男の為に応える為に走り続けた。文字通り走れなくなるまで……そして最後にアスムがヒビキに与えた物があれとは……痛ましい……」

「先代、響鬼はこのまま中央に行かせたままでいいので」

「思い出があり過ぎる此処に居るよりかは気が紛れるじやろうて」

「このまま忘れちまえば良いんだ、そうした方があいつの為だ」

ぶつきら棒に言い放った蔵王丸の言葉を誰も否定はしなかった、寧ろそうした方が響鬼の為にもなるだろうし新しい人生を歩む為には必須とも言える。

「響鬼はもう自分の為に生きて良い、もう十分に誰かの為に努力と苦勞を尽くした。それなのに、あれほどまで報われないなんてないだろう」

「戯言は此処までにしようや。飯、支度と行くかの。響鬼も来ると聞いてマグロと宮崎牛を仕入れたからな」

「手伝います」

「俺も手伝います」

響鬼の為にも美味しい夕食を作ろうと思いつた中、響鬼は荷物の整理をし終えて縁側に座りながらぼんやりと空を眺めていた。そして無意識に言葉が漏れる。

「……なあアスム、俺がお前に背負わせすぎちゃったのかな。だからお前は諦めちゃったのかな……なあアスム……」

酷く弱弱しい姿を晒す響鬼、だが誰もそれを見なかった。彼には許されるのだ、鬼に変じようとして人であり続ける彼には……そして執り行われる清めの儀式。

「よしっ……やるか」

大地に置かれた巨大な岩の上に鬼達がそれぞれが担う楽器を載せ、全てを込めて清め

の音を発する儀式が始まった。神への捧げもの、清めの音による大演奏。

「ハアツ!!タアツハアア!!」

響鬼が先陣を切る、力強く振るわれる腕によつて鳴らされる太鼓によつて巻き起こる清めの音は岩を通じて大地へと注がれていく。

「ダイヤアツ!!ハアツダアア!!」

斬鬼もそれに続く。彼が得意とするのは弦、弦は最も形を変えたと言つてもいい楽器。見た目は完全なギター、だが岩へと楽器を突き刺して重々しいが、酷く清らかな音色が奏でられていく。

「ヨツ……!!!」

そして最後に伊吹こと威吹鬼が続いた。管を得意とする彼が鳴らすのはトランペット型の楽器、高らかに鳴らされる清めの音。空へと向けて放ちながらも自らを經由させながら大地へもそれを注ぎ込んでいく。

『俺達も続くぞ!!』

『はい!!』

3人の鬼による始動、それに続くように残った鬼達はそれぞれが得意とする物で続いで行く。響鬼の打、斬鬼の弦、威吹鬼の管。雷電一家、1年に一度の鬼達の集結によつて奏でられる清めの供物。全身全霊を込めて行うそれは文字通りの命がけ、全てを賭し

て行われる儀式。周辺地域全てに伝播する清めの音。そしてそれをアスムの遺影を持ちながら見つめる京介の姿があつた。

「お前の為に至つた鬼の姿だ、確り見てやってくれ……せめてその位はしてくれ。でないと、あの人が浮かばれない——アスム、何でお前は逝つたんだ」

「タアツ!! ヤアアツハアアアアツハアアアツ!!」

第46話

無事、清めの儀式を終えた響鬼達、雷電一家たる鬼達。全身全霊を使い切った彼らはその後、家へと戻ると汗を流し、食事をとると直ぐに疲れが噴き出したかのように眠りについてしまった。清めの音は通常の音と異なり、正しく全身全霊を使って奏でられる、肉体だけではなく精神を極限まで擦り減らしての演奏になる為、速やかな回復が望まれる。確りとした食事も体力回復の為である。

既に昼頃になっていいる時間帯だが、まだ鬼達は眠り続けている。今は体力の回復の為に食欲に身体が睡眠を欲する時、蔵王丸は当然の事、伊吹もまだ夢の中に居続けている。そんな中、一つの影が太陽の下に出ていた。身体を伸ばしながらリュックを背負い直している男、響鬼であった。

「やつぱり皆は夢の中か……やつぱ俺って可笑しい？」

「当たり前だろ、何でもう動けんだよ」

そんな自分に呆れかえった瞳を向けている京介と同じように切り株を椅子にして煙管をふかしている先代がそこにいた。何方とも何故響鬼が動けるのかと完全に呆れている。

「動けちゃうんだからしょうがなくなる、というかみんな寝過ぎなだけっていう可能性は」

「ないわ阿呆。清めの儀式を行った鬼の回復には早くても数日は掛かると言われている、個人差こそあるが、蔵王丸達も起きるとしたら明後日。それなのに如何してお前は起きていられる、若造」

「毎日鍛え続けたから、ですかね」

「まあそれしかないわな……」

正直言つてそれしか説明する手段は存在しない。下がったレベルを戻す為の鍛錬を日常的に繰り返し続けた響鬼の肉体は鬼を越えている、人間の領域に留まっていた筈の鬼が魔人へと変貌している。たった一晩で此処までの回復を見せるのが良い証拠。

「んで響鬼さん、荷物持つてどうする気だ」

「帰るんだけど？清めの儀式は終わったし仕事も溜まつてて、他の用務員連中が悲鳴上げてる頃だろうからねえ」

「ンだよそれ……故郷より仕事の方が大事だったのか!!」

激情に近い感情をぶつけられてしまうが、京介の言い分も分かる。久しぶりに帰ってきた故郷、此処にある思い出にも浸らずにさっさと帰ってしまうと言うのかと責め立てられてしまうが、響鬼はそれを甘んじて受ける。

「……まあ本当はいるべきだと思う。でも俺が此処に居ても何も出来ない、唯自分の無力さを思い知るだけだよ。何も出来なくて、恋人の心を察する事も出来なかったから」

「いやだから、アンタのせいじゃ……!!」

「京の字、その位にしておけい」

「でも先代!!」

「響鬼に取っちゃそれが一番の薬、好きにさせるが吉よ」

先代の配慮に頭を下げた響鬼はそのまま出発してしまった。京介はそれを止める事も出来ずに見届ける事しか出来ず、その憤りを先代へとぶつける。

「如何して行かせるんですか!?!もつと此処に居てもいい筈でしょう!!」

「居たとしても、いたずらにあいつの傷を深めて拵げるだけよ」

「それだったらトレセンだって同じでしょうが!!」

トレーナーだって響鬼とアスムを強烈に結びつける要素だ、トレセンはその中央に位置するような場所だ。其処に居たとしてもそれは同じだろうと叫ぶが違う。

「此処にはある物が向こうにはない、そして向こうのウマ娘っ子はアスムとは無関係。寧ろ、そう言った連中と関わって自分を変えてくれる存在を待つ方が奴の為じゃろう

て」

「……現れなかったら」

「その時は——あいつがアスムの下に行くだけよ」

『疑問ツ折角の休暇なのにもう帰ってくると?!』

「用事も済みましたからね。まあぶっちゃけると残った仕事は不安でして、大丈夫なんですかそっち」

『無論ツ問題なし!!』と言いたい所なのだが……大丈夫ではない……』

「ああやっぱり……」

途中、電車を待つ間に公衆電話で理事長へと電話を掛けてこれから学園に戻ると連絡を入れるのだが……如何やら問題が起きているらしい。トレーナーよりかはマシとはいえ、それでも起きている人数不足問題。不足分を補っていた自分が居ない事で他の用務員に押し掛かっている、一部を簡略化したりしているが……それでも膨大な敷地のトレセンをカバーしきれずにいる。

『不覚……用務員の募集にもこれからはもっと力を入れなければ……』

「んでジャパンカップってどうなりました?俺、TVも全然見なかったんですけど」

『ウムツ実に拮抗!!スペシャルウィークは実に健闘していたぞ!!』

自分は一日中寝ただけで回復したが、眠っていた間にジャパンカップは行われてしまっていた。結果としては1位はチームリギルでスベの同期でもあるエルコンドルパ

サーだった、残念な結果だったがそれでもスペはなんとリギルのエアグルーヴに鼻差で上回り、2位をもぎ取る事に成功したのである。それでも彼女は悔し涙を流していたと理事長は語った。

「2位か……エアちゃん相手にそれなら上等すぎるな。エルちゃんだって相当に鍛え込んでた訳だし、勝負の世界に絶対はない」

『健闘、リギル相手に見事な走りであった。其方からも褒めてあげて欲しい』
「分かってますよ、俺が居なくても確りと走ったみたいですしね」

サブトレーナーとして彼女を褒めてあげなければと思いつつ、これはスペが気がするまでの食事かな?と内心で苦笑いを浮かべてしまった。

「んじやまあ直ぐ帰りますよ、お土産が良いですか?」

『ムッお土産……奈良と言ったら……シカや大仏、お寺か……?』

「あつやべ電車来ちゃった、んじや理事長。妥協案で耳かきって事で」

『驚愕?!何故選りに選って耳かき——』

最後まで聞く事なく、受話器を置いてホームへと飛び込んで電車へと乗り込む。程なくして扉が閉まって電車が動き出していく、流れていく景色の中に消えていく故郷。不思議とその光景に安堵を感じてしまう自分が居た。

「アスム、俺ってこんなに嫌な奴だったかな……お前が遠ざかっているのに」

第47話

予定よりも早く帰省から帰って来たヒビキを皆は好意的に迎えていた。特に用務員はそれが強かった。何故ならばヒビキの穴を補う為に普段よりも仕事が増えるのだから当然だろう。帰って来たヒビキが思ったのは一つ。

「……やっぱり俺って可笑しいのかなあ」

先代にも言われたが、矢張り自分は鬼という区分から離脱してしまった存在なのかもしれないという事を感じた。自分が離れていた間、ウマ娘達が利用する場などを集中的に仕事を行って他の部分は大分簡易化する事で、かなり無理こそあるが漸く回す事が出来ていたらしい。それを聞いてやっぱり自分は可笑しいのだろうか……という事を本格的に感じ始めた。

そして用務員職に集中しすぎる訳にも行かない、何故ならば今のヒビキはスピカのサブレナーなのだから。

「ヒビキさんっ私もつと速くなりたいつ!! スズカさんの代わりにジャパンカップで勝つて決めてたのに私負けちゃって……もつともつと、速くなりたいつ!! エルちゃんにも負けない位に!!」

「負けて悔しがってたって聞いたけどいい顔するようになったねスぺちゃん」
「もつと厳しくお願いします!!」

「うんっ超山盛りご飯の御茶碗を盛って無かったらもつと良かったな」

ヒビキは用務員としての仕事をこなしつつ、サブトレーナーとしても尽くす。奈良に帰った事で彼の中で何かが変わったのか、トレーナーとして仕事へ何処か積極性を持つようになってウマ娘達への指導も熱が入るようになってきた。それに関しては理事長を始め、良いニュースにもなり得た。

「とつつあん、里帰りしてなんかあったのか。何か変わった感じがすっけど」
「そうかい、何も変わってないような気がするけど」

ヒビキとしては里帰りで何か特別な事は無かった、あったとしても京介がトレーナーの資格をもう直ぐ取れるという話を聞いた程度しかない。だから何かあったかと言われても何ともコメントしがたいというのが素直な所。そんな風に日々が忙しくなっていく中でもヒビキはそれを平然のように受け止めていた。用務員としての役割を果たした後にトレーナー業務へと勤しむ。そんな姿を見せつつも季節は進み、新年へとなった。

「おっおっちゃんあけおめ〜ことよろ〜」

「ヒビキさん!!」

「おっちゃん明けましておめでとう〜!!」

そして新年、チームスピカの面々はスーパ―に集まっていた。これから新年会を行う為の食材の調達そして——入院していたスズカを待っていた。暫し待つと車椅子を押し出したスベがスズカを伴って到着した。

「みなさ〜んお待ちせしました〜!!そして……それっ!!」

「あっスベちゃん……!!」

皆の前へとやってきたスベは皆の前でスズカの脚に掛かっている毛布を取って皆に見せた。そこにはあつた筈のギプスが確かに外れているスズカの脚がそこにあつた。

「じゃあスズカ先輩もう走れるんですか!?!」

「これからリハビリだからもう少しだと思おうわ」

「よしそれじゃあ今回の新年会はスズカさんのギプス脱の記念を含めるって事でおじ様はどうですか?」

「それは賛成、後スベちゃん。スズちゃんが寒そうだから早く毛布返して上げなさい」

「あつすいませんスズカさん!!」

兎も角これでチームスピカの完全に復活の目途がついた、それは非常にめでたい事ではある。そのお祝いして今回の新年会は豪勢にやる事はやぶさかではない、なので沖野も張り切って準備のための買い出しに付き合うつもりでいたのだが——

「……とつつあん、悪い金貸してくれ……」

「あんだだけ大口叩いてたのに……」

「だって、5000円の海老とか牛肉とか遠慮なしに入れんだぜ……流石に予算オーバー……」

「分かった分かった、スズちゃんのをつて事で俺が出して上げるよ」

「マジですまねえ……」

スピカにはメジロ家のご令嬢であるマックイーンが居た事を完全に忘れていた。豪勢な食材を買う事は予想していたが、流石にウマ娘が8人もいればその腹を満たす為の食材は膨れ上がっていく。スぺほどではないがアキラもよく食べる、流石に万全の支度をしたつもりも沖野の財布も簡単に限界を越えていた。

「というか、何でとつつあんはそんなに金あんだよ」

「今まで特にこれと言ってお金が掛かるような高い買い物をした事が無いからね、最近の奴でも炊飯器を増やした位だと思っ。後自炊しているのがでかいかな」

「やっぱそこか」

例えばテイオーが好んで飲むはちみーことはちみつドリンクなども沖野は外にランニングに行く時には奢ってあげたりするが、あれで一杯1200円もするのである。それをチームメンバー分出していれば直ぐにお金もそこを尽きる。ヒビキの場合は基本

自炊で自分で作っている上、トレセンとは深い関わりにある近場の商店街や知り合いの農家さんから貰ったりしている分で賄ったりしているのでそこまで掛からない。

「んじやつウマ娘のお嬢様たちの為に仕込みとかやりますか」

「つとというかなんで用務員室でやんの？」

何故か新年会の会場として選ばれたのは用務員室だった。大きなこたつを置いてそこに皆入って丸くなっている。

「おじさくん、このジュース飲んでもいい〜？」

「いいよ〜独り占めしないでね、それっ商店街の蜂蜜店から貰った最高級蜂蜜を使ったはちみーなんだからね」

『最高級!!?!』

「なんかみんなの目が一気に鋭くなった!?!」

「おつちやあくん、このミカン喰っていい?」

「好きに食べていいよゴルちゃん。繋ぎ程度にしてね」

そんなやり取りをしながらも沖野と共にキッチンに立って食材を切り分けていくヒビキ、本当に何で此処なのかとも思ったが、まあ皆がくつろいでいるから良いかと肩を竦める。

「ああつ沖君、そつちは俺やるよ。野菜切って貰っていい」

「分かった。にしてもすげえ手際良いなとっつあん……」

「アスムにもこうして飯を作ってたからね、その延長で何年も自炊してたら上手くもなるよ」

矢張り其処も元カノさんに帰結するのかと沖野は思う、彼の大半はそのアスムに直結している。鬼になったのもトレーナーになったのもアスムの為。たった一人の女性の為に此処まで出来るのかと感心すらしてしまう。

「ああそうだ、今日夜に初詣に行くじゃん？俺神社で太鼓叩く事になったから」

「えっ何だそれ聞いてねえぞ!!」

「今初めて言ったもん」

「ちよつとおじ様私も初めて聞いたんですけど!!?私も叩きたいです!!」

「お前さんは未熟だからね、新年を祝うイベントとして頼まれたんだよ俺は」

あつという間に食材を捌き終えるとそのまま炬燵の上へと乗っている鍋へと次々と投入していく。後は煮込むだけ、沖野は寒そうに手をこすりながらも炬燵の中へと退避していく。それに続くように入りたいが……大きな炬燵と言っても流石に10人も入れば狭苦しい、それにおじさんが年頃の子と一緒に入っていいのだろうかとも思っているとなら隣を開ける。

「ヒビキさん此処どうぞ!!」

「おつ悪いねスぺちゃん、んじやまあ折角だから……」

炬燵へと入った時、暖かいと顔を柔らかくしたのは心地良さゆえなのかそれとも……何か別の何かなのか。

「そう言えばよ、偶におハナさんに聞かれただけどとつあんは何時か担当取る気あんのか？」

「そう言えばヒビキさんはサブトレーナーでしたわね、何時かチームとか担当を取る事になるのでしようか？」

マックイーンの言葉に素早く反応したのは矢張りスぺだった。

「それだったら私立候補します!!元々ヒビキさんにトレーナーさんをお願いしたかったですしー!」

「スぺ先輩、それだったら私だってヒビキさんに見て貰いたい!」

「もういつその事、スピカのトレーナーをおっちゃんにやって貰うっていうのは如何だ?」

「あつそれいいかも!!おじさんの方がそれっぽいし!!」

「おいおいそりやねえだろ」

笑い声が用務員室に木霊する中、スズカは微笑む中、視界の端で何とも言えない様な表情を浮かべているヒビキを見た。それは如何なんだろうなあという意味の物かと

思ったが……スズカは直ぐに違う物だと感じ取った。あれは……うまく隠しているが疑問と失望の表情だった。

「如何なんだろうねえ……担当やチームか、まあその時が来たら考えるよ」

第48話

「あゝ美味しかった〜……」

炬燵に入りながらの新年会の鍋、沖野が支払いに顔を青くするだけの食材を突っ込んだ甲斐もあつてその味は極上の一言であつた。流石に色々な食材を突っ込み過ぎると味がくどくなるが……その辺りはヒビキが上手く調整したのでご令嬢であるメックイーンも満足いく味に仕上げる事が出来た。そして其処で今年の抱負にも似たこれらを語つたのち——良い時間なので一同は出発する事にした。

「此処でヒビキさんは太鼓を叩くんですか!？」

「そつ。如何も此処の神主さんが雷電一家の事を知つてたらしくてね、邪な物を払いたい人の為に清めの音を如何かお一つ……!!」つて懇願されちゃつてねえ」

「ぐぬぬつ……そう言われたら私が出る訳にはいかない……!!」

「随分と聞き分けいいじゃねえかアキラ」

神社へと到着一同、そこではお祭りのように出店が構えられており多くの人がそれらを楽しんでいた。その中に居るヒビキの言葉にアキラは悔しそうにしつとも納得していた。それに不思議そうなゴルシにアキラは反論する。

「だって向こうは雷電一家の清めの音を望んでるんですよ、だったら私は不資格の未熟者……出る訳にはいきませんよ……本当はおじ様と叩きたいですけど、おじ様の清めの音を濁らせる訳にはいきません」

悔しそうにしているが、それはあくまでヒビキと一緒に叩く訳にはいかないと言うだけで理由については納得している。それだけ清めの音についての重要性は理解している。そこに自分が入ればそれは既に清めの音ではない、濁った雑音でしかない。

「まあんな事言っちゃまったら清めの音で邪な物を払うって考え方間違ってますけどね」
「あり、そうなんおっちゃん」

「元々神の怒りを鎮める為の演奏が清めの音だからね、別に邪悪を払うっていう意味合いいではないね」

まあそれでもやってくれと言われたら各かではない。この神社の一部を自分の鍛錬メニューに組み込んで使わせて貰ったりもした事があるので、その恩を返すという意味でもやらせて貰うつもりでいる。

「おじさん、甘酒買っていい!?!」

「いいよ、折角だからみんなの分も買っちゃおうか」

「やったー!!おじさん太っ腹ー!!」

「まあ実際は——」

ドンツと胸を叩くのではなく腹を力強く叩いてみせる、周囲からは大丈夫なのかと言った目が向けられるが全く平気そうな顔をしてドヤ顔で言う。

「腹筋バキバキのムキツ腹、鍛えてますからっシユツ」

「実際硬いもんね〜おじさんのお腹〜」

そんな茶番をやりながらも甘酒を人数分購入して皆に配っているとおみくじを引いて恐る恐る中を見るマツクイーンの姿があつた。そこにあつたのは——凶の一字。思わずシユンと気落ちしてしまっている彼女の下へと甘酒を持って参上する。

「ほらっマクちゃん甘酒」

「有難う御座います……はあっ新年の始まりから縁起が宜しくありませんわ……」

「いや凶を引けるって寧ろ幸運だよ」

「どういうことですか……?」

耳をピクリと動かしながらも何かを求めするような顔を向けてくる。

「メタ的だけど、こういう場所だと基本的に吉の数を増やして皆に気分良く新年を迎えて貰おうってする。という事は逆に凶を引く可能性は低くなる、その中でそれを引いたって事は新年から運を持っているって事だよ。ウマ娘にとって運を持っているという事が分かるっていうのは重要じゃないかい?」

「……フフツ物は言いようはこの事ですわね」

正しく物は言いようである。だがその様に前向きに捉える事こそが運を掴み取る原動力になるのも事実。

「それでは私に幸運を教えてください。くださった素敵なおじさま、私のエスコートをお願い出来ます事？」

「マックイーンお嬢様のご要望とあればこのヒビキ、喜んで御伴させて頂きます」

そんな寸劇のお陰もあつて先程まで凶を引いて凹んでいたマックイーンは普段の調子を取り戻していた、そして差し出されたヒビキの手を令嬢らしく取るとそのままその隣を確保しながら歩き出していく。その姿も執事とお嬢様という雰囲気が出ていて様になつてゐる。

「——有難う御座いますヒビキさん」

「何か言つたかい」

「いえ、何も……唯、ヒビキさんのような素敵な方のハートを射止めたアスムさん、そしてそんな人に尽くしたヒビキさんの関係が少々羨ましいと思つただけですわ」

「よせやい。照れるじゃないか」

お嬢様の傍につく事に徹しているヒビキ、そんな彼を見つめていたスズカは矢張りまた、同じような物を滲ませているような表情を隠しているのを感じ取つた。アスムとの事、本当の事を語っていない事があるのではないのだろうかと思いつつも賽銭箱へと到着

し、そこでそれぞれの想いや願いを込める。

『……』

静かに手を合わせ、それぞれが想いを捧げていく。例外なのはゴルシだけ、他の事なんて如何でもいいかのように次々と自分の願いを述べ続けていく。どれだけのお願いをするつもりなのか、それでも他の皆は自分の事に集中している。

「……さて皆確りと願ったかい」

「もつちろん!!おじさんは何を願ったの?」

「秘密くおじさんってば秘密大好きだから」

「ムツくズルいぞおじさん!!ずるっ子は嫌われ者なんだぞく!!」

「おじさんは嫌われ者じゃないから違うよ、さてと——そろそろ行ってくるわ」

ひらひらと手を振りながら去っていくヒビキ、間もなく清めの音の披露の時間だからだろう。

「でも清めの音って普通の音とどう違うのかしら」

「さあ……アキラ如何なんだ実際?」

と親族でありおじ様とヒビキを尊敬するアキラへと話を振って尋ねてみる。

「まあ百聞は一見に如かずって奴というのは簡単なんですけど、清めの音は鬼が放つ音です。普通の音と違ってこう……身体の内面へと浸透するような音っていったら良い

のかなあ……正しくそうとしか言いようがないです」

こればかりは流石のアキラでも説明不能、論理的に説明する物の類ではなく實際それを受けて感じて理解する感覚的な物なのである。兎も角演奏の場へと向かつて行く
と――

「うわあっおつきな太鼓!!」

立派な社に収められている巨大な太鼓、直径2メートル以上もある大太鼓。これをたつた一人で叩くのかという程の迫力を放つ巨大太鼓の前にヒビキが一人立っていた。そして上着を脱ぎ棄てた、女性から黄色い声上がるが、そこには肩から先が大胆に露出し鍛え抜かれた肉体が露わになる衣装に身を包んでいた。

「流石とつっあんの身体だなあ……すっげえなあれ、肉の鎧だ」

「す、すげえ……おっちゃんやっぱカッコいいなああれ……」

「でも、あの衣装って何なのかしら。この時期にあれって寒くないのかな」

男してあそこまで鍛えられた肉体には羨望の眼差しを向けてしまう沖野と純粹なカッコよさに憧れるウオッカ、そしてそれらに同意しつつも純粹にヒビキの意匠に目が行くスカレット。其処を透かさず説明しよう!とテンションを上げるアキラ。

「あれは腹掛つていう物です。元々は大工さんが使ってた作業着がルーツとされている祭り衣装です」

「へっくそんなのがあるんだ」

「にしてもおっちゃん筋肉が映えるな」

ゴルシの意見には皆が同意だった。肩だけではなく胸筋も見える形になっているので、余計に鍛えまくっているヒビキとは相性がいい。そしてその手に撥を握り込み、太鼓の前にへと立ちながら大きく白い息を吐く。そして――

「いよおっ!!!」

大きな掛け声とともに撥が振るわれ、太鼓を震わせる。その一撃で神社は更なる静寂へと包まれ、社の左右に置かれている松明の燃える音が周囲に木霊する。薪が音を立てると次の声あげられ更に太鼓が打ち鳴らされていく。

「ハアツ!!ヤアツ!!!」

声と共に鳴らされていく音色、周囲に太鼓の音色が響くがその音色は何処か違って皆に聞こえてくる。耳ではなく全身でそれを感じて聞き取り、心と魂を震わせる不思議な音色。それを聞く度に心と身体が研ぎ澄まされていくような感覚に包まれていく、これが清めの音なのかと思う中で――スピカの面々はある者を見た。太鼓を打ち鳴らすヒビキの姿が――全く違うモノに見えた。

『鬼……?』

炎の中に佇みながら清らかな音を奏で続ける一つの影、頭に角を携えている姿は正し

く鬼。力強くありながらも逞しく勇ましい、あれこそが神の怒りを鎮めた鬼だと言われぬんばかりの姿に魅了される。

「あれっ……」

だが、その中でも見えた者が居た。奏で続けている鬼の傍にいる一人の女性の姿、何処か薄く存在感が希薄にも見えるそれはヒビキへと執着しているように見えた。それは一体何なのか、それを見た者は何を思ったのか。何も分からぬまま――

「よおおおっ!!!」

最後の奏を行ったヒビキへと盛大な拍手が捧げられて行く。それらを受けながらヒビキは深い深い息を吐き出すと振り返って頭を下げた。

「あれって……ウマ娘……もしかして……」

第49話

「質問!!ヒビキトレーナー、この桐矢 京介が君の知り合いというのは事実だろうか!」
「まあそうつすね。昔馴染みというか幼馴染です」

新年から数日経過したある時、ヒビキは理事長に呼ばれて理事長室へと訪れていた。其処で待っていたのは京介の資料とそれに関する質問などであった。

「この桐矢さんがこの中央でトレーナーの研修をなさるの事になったんです、それでお電話でお話を伺った際にヒビキさんのお名前が出ましたので」

「その確認って事ですか」

「肯定、しかしそれだけではなく幼馴染という事ならば君が案内をするのが相応しいのでは!!」と思つた次第」

「え、あいつの案内を俺がやるんですか、一応俺トレーナー復帰勢なのに」

やる事に対して不満はないが、自分が適任なのかと言われた微妙と思つたのが素直な所なのである。それだつたらもつとトレーナーとして歴が長い先輩の方が適任だろうとも思うのだが……。

「でもヒビキさんは数年間用務員を続けてますから案内という意味ではこれ以上の適任

者はいないと思いますが……」

「それを言われたら痛いけど……あいつはトレーナーの研修で来る訳でしょ、それだったらトレーナーの先生役として相応しい奴が良いでしょ。ハナちゃんとか」

「ムムツ正論……選択、東条トレーナーにも話を通しておく、彼女の予定なども考慮するのでそれによつて改めてお願いするかもしれないという事でどうだろうか」

「まあそれで良いと思いますよ」

妥協案としてはそれなりのものだと思う、理事長の決定なら一般職員である自分が逆らうことに意味はないので黙つて受け入れるだけ。まあ京介としては自分でも良いかもしれないが、トレーナーをやりに来ているのであれば確りとした実績がある先輩トレーナーを望むだろう。それはその時になってみるまで何とも言えないが……。

「まあその時が来たら引き受けますよ、仕事として」

「ウムツ宜しく頼むぞ!!あとまたニンジンケーキが食べたくなってきたのだが」

「もう理事長」

「分かりました、明日辺りに持つてきますよ。勿論たづなちゃんの分もね」

ウィンクしながら君の分もあるからねつと合図すると頬を僅かに赤らめながらも感謝するたづな。それらを受けながらも理事長室を出る。

「あいつが来るのか……なんかそこはかとなく、ちよつと嫌な予感がするのは何でだろ

うねえ〜……」

帰った時と言われたが、京介は自分がトレーナー職に復帰する事を望んでいなかった。自分はアスム専属のトレーナーだと、勝手に復帰するのは許さないと。だけども、何もしないままというのも自分は許せる気がしなかった。

「担当、か……」

窓から空を見つつ思わず、新年会で言われた事を思い出してしまう。今は復帰した事もあつてサブトレーナー扱いとして仕事をしているが、それも何れ終わってトレーナーとして担当を持ったりチームを持つ事になるだろう。それはトレーナーとして当たり前前の事、復帰すると決めた時にそれは分かっていたし受け入れるつもりでいたのだが……改めて担当を持つ事を考えると途端に頭が真っ白になってしまう。

自分にとつての担当というのはアスムでしかないのか、それとももう自分には担当を持つ資格などはないという事なのかは分からない。だがその先の思考をする事が上手く出来ない、本当に担当していいのかと迷っている自分が居る事だけは分かる。

「儘ならないなあ……」

「おっ〜見つけたあ〜!!」

そんな事を想っていると誰かが此方へと走ってくる、トレセンの廊下は静かに走るならば走っても良いという事になっている。が、如何にも喧しく声を上げながら疾走して

くるウマ娘がいた。其方を見てみると納得の顔がそこにあった。まるで捕食者のようにジャンプしてヒビキへと突撃をかますのだが——肝心のヒビキはそれを上手く回転しながら受け止め、衝撃を殺しながら相手を着地させる。そして彼女は此方を元気に指差した。

「見つけたぞおっヒビキのおっちゃん!!」

「誰かと思つたらツインちゃんじゃない、どつたの」

やつて来たのは青髪のツインテールとオッドアイが特徴的なウマ娘のツインターボ。元気いっぱいウマ娘で自分に良く突撃をかましてくる子でもある、普通の人間なら吹き飛ばがそこは鍛えているヒビキ。何の問題もない。

「フフンツ聞いたよそろそろ担当を取るってね!!」

「何、それも噂になつてんの?」

「サブトレーナーの期間つて早くても1年位で終わるつて聞いてるからな、皆ヒビキのおっちゃんに照準を定めてるぞ!」

「喜んでいいのかなそれ」

ヒビキは極めて人気が高い。用務員時代から考えても人気だけでもワントップと言つてもいい状態だった、そこにトレーナー資格があるという話に加わり、今度は正式なトレーナーとして活動するので必然的に担当やチームを持つ事になるのでは!?!とい

う話に発展しているらしい。実際既にスペヤスカーレットなどからなつて欲しいという話を受けてしまつているので割かし洒落にならない。

「つという訳でヒビキのおっちゃん!!ターボのトレーナーになれ!!」

「お断りさせて頂きます」

「ウエエエエツゝ何でえええ!?!」

「だつてまだサブトレーナーだから、担当決めるに早すぎる」

「ムムムツ時期総称つて奴だな!!」

「時期尚早ね」

あれっ?と素直に首を傾げた、そんなツイスターボにアキラのような可愛さを感じて思わず頭を撫でてやつてしまう。

「ヒビキのおっちゃんが頭を撫でるとは、これはターボにメロメロという訳だな!」

「愛玩動物的な意味ではそうかもね」

「そうかそうか!!つてあれ、それなんかターボバカにされてない!?!」

「してないしてない」

素直に癒される感がある。それだけである。

「おっちゃんやヒビキのおっちゃん何やつとる」

「何だタマちゃんか。そつちこそどうしたのよ」

「これから昼って何で肩車してるん」

「フン如何だあくこれこそターボの究極系、ヒビキターボだあ!!」

「……なんやおっちゃん、何時から子守りのバイト始めたん？」

「いや別にそういう訳じゃないんだけど……」

何時の間にか肩へと登ったターボ、普段味わえない巨人の感覚を味わいつつもこのまま走ったらターボ最強なのでは!?と究極系と言っている。ターボの基本戦術は何も考えずに最初からのアクセル全開でぶっ飛ばす大逃げ。圧勝する時は見事なまでに圧勝するが、負ける時には逆噴射とも言われる程に失速して、盛大に負ける。なのでヒビキの体力と身長が加わると考えると確かに究極というのも理解出来る。まあ結局夢物語だが。

「お昼なら俺が作ろうか、昨日漬け込んだ紅茶豚が良い具合なんだよね」

「ええなそれ!!」

「ターボも食べたい!!」

「せやつオグリもええか、一緒に食べる約束してるだけど」

「いいよ」

「もう来てるぞタマ、早く行こう。お腹空いた」

「つてえ何時の間に来たんや!」

第50話

「ヒビキさんお代わりを頼む」

「あいよ」

「オグリ、もうちよつと遠慮つてもんをな……」

「いいよいいよタマちゃん、最近はスピカメンバー全員にご飯作る事も多かつたからね」
用務員室、普段其処にいるのはヒビキだけなのだが時折ウマ娘が尋ねては一緒に食事を取ったりしている。ウマ娘達は基本的にかんりの量を食べる、レースで時速60キロを突破する彼女らがその身体を維持してパフォーマンスを発揮するにはそれだけのエネルギーが必要、そんな料理を一介の用務員は普通は作らない。が、アスムというウマ娘に対して料理を作っていたヒビキにとってはその辺りにも理解がある。

「このお肉美味しいな〜!!柔らかいのに噛み応えあつておいしい〜!!」

「確かに、本当に美味しいなこれ……所々の硬いコリコリした部分も最高や……こんなの、
こんなの——米を我慢できるわけないやろお!!」

「米くいてー人」

『はい!!』

「でも痩せたーいってね、あいよお代わり増量ね」

ブロック肉で作った紅茶豚は柔らかいがコリコリとした歯応えと共に硬さも十分あるので食べ盛りなウマ娘達にも大好評、副菜として用意した大根サラダや卵スープもどんどん減っていく。栄養バランスも確りと管理しているのでカロリーの取り過ぎという事も無いようにしている。

「にしてもオグちゃんは本当によく食べるね、作り甲斐があるよ」

「オグリの喰いっぷり見てそんな事言えるのおちちゃんぐらいやで」

「そくそく。食堂の人が言ってたぞ、オグリが来ると特殊シフト? って奴が発動するって」

特殊シフト、簡単に言えば特に健康なウマ娘相手に発動される物。多くの料理人はそれに集中しつつ、他のメンバーはそれをサポートしつつも他のウマ娘の要望に応えていくという物。ある種混沌としている調理スタッフ、トレセン学園で退職率が一番高く、スタッフは常に募集中。職場の環境はホワイトなのだが……仕事内容が余りにもハード過ぎるのが理由。

「偶に俺が入る位忙しいからねえ……今年は特にスペちゃんも入っちゃったし」

「あ……スペシャルウィークも相当食べるさかい、オグリと一緒にタイミングは……ほんまに調理場の人には頭が下がるわ、ターボは違うやろな?」

「ターボは違うもん!!口に入れたら30回噛む、これが基本だぞ!!」

「おおっ分かつとるなあ、よく噛むと味が良く分かるし腹も膨れる……良い事尽くめやからな!!」

タマモクロスとツインターボの相性は思った以上に悪くはないらしい、というかタマと相性が悪いウマ娘自体が少ないだろう。面倒見がいい上にノリも良い、故に彼女は様々な意味で人気で人を集める。

「そうなのか、ではこれからは私もよく噛んだ方が良いのか?」

「当然や、飯をたくさん噛むと幸せになるんやで。味も良く分かって栄養が無駄なく摂取出来て満腹になりやすいんや」

「そうなのか……では私もそうしよう(モグモグモグモグモグモグモグ)これで良いのか?」

「えっもう30回噛んだんか!?顎が振動してた位にしか見えんかったで!?どういうスピード!」

「おおっ!!まるでターボの逃げみたいだったぞ!!」

結局の所、オグリの食べる量に変動はなく炊飯器4つをペロリと空にしてしまった。それを見てターボも負けじと頬張るが……早々に限界がきて、ヒビキの膝に頭を置いてKOされてしまった。

「うううっ……食べ過ぎた……」

「下手にオグリの真似せん方がええで……オグリの消化と代謝能力が相当に凄いから出来るんや」

「フムツ有難うヒビキさん、今度何かでお返しする」

「お粗末様、食後にタンポポ茶は如何？」

「タンポポの珈琲は聞いた事がある気はするが……」

そう言われて手に取って啜るオグリ、優しい味わいだが何方かと言えば珈琲に近いような味わいにも感じる。身体を起こしながらもヒビキの身体に寄り掛かりながらもターボも口にする。

「おっ結構飲みやすいなこれ」

「ううっ……ターボもこれは好き……」

「このお茶は身体に良いんだよ、デトックス効果もあるし美肌にも良い。新陳代謝の促進にも期待出来る」

「つまり——これ飲んだら身体にええ上に美人になつて事かおっちゃん!?!」

「いやそこまで極端って訳じゃ……って何がぶ飲みしてるのよ」

一気に飲み干すタマ、如何やら普段一緒にいるオグリが大食いなのに最近肌の艶などが良くなってきているらしい。確かに食べるメニューについて口出しをしたが、そんな

一氣に変わるのか……と思う程に彼女の消化と代謝は凄まじいらしい。それに触発されているのか、最近タマも色々試しているとの事。

「おっちゃんには分からんやろうなあ……普段、横で大食いしとる奴の肌がどんどん綺麗になっていくのを見る気分は!!ウチらはウマ娘でアスリートである前にうら若き乙女なんやで!?!肌やスタイルは気にするのにこんだけバカ食いしてて気にしてるウチよりも綺麗になつとるんやオグリの奴う!!」

「ムツ私はそんなに綺麗になつてるのか?」

傍から見たら暴飲暴食なのに、確りと綺麗になつていくオグりを傍で見ている身としては色々溜め込んでいる物があるのだろう……。

「それじゃあタンポポ茶分けてあげようか、食後に飲むだけでも随分変わつて来るから」
「流石おっちゃん話が分かるなあ!!乙女の味方やでホンマに!!」

この時、タマは知らなかった。オグリには劣るが、それでも十分早いペースで綺麗になつていく肌を見て周囲のウマ娘から様々な目を向けられる事を……。

「んで何でターポはおっちゃんに絡んどつたん?」

「担当トレーナーになつてくれ!!つてお願いしてた」

「あゝそんな噂が新しく回つてた」

「あれつタマモは興味ないのか?」

「ないっちゆう訳でも無いけど……」

新しく淹れて貰ったタンポポ茶を啜る、タマは用務員時代のヒビキには結構世話になって来たし自分の事を分かって貰えているという認識もある。相談にもよく乗って貰ったし自分も助けられているという自覚もある。

「でもまあ、その辺りはおっちゃんの内自由でええと思うで。今までトレーナーやらなかったのもなんか事情があるんやろ、ウチは野暮やないから首は突っ込まんけど」

「おおっなんかカツコいいぞタマ」

「フンせやろ？これが出来る女って奴や!!」

「私は素直に担当になって欲しいな、ヒビキさんのご飯は大好きだからな」

「それは最早トレーナーじゃなくて専属の料理人やないか!!」

冗談だ、と述べておくオグリだが食に関しては何処までがジョークなのはいまいち分
かり辛い。

「まああれや、用務員とは勝手とか違うしいぎとなつたら用務員に戻ればええと違う?」
「それはそうだね。辞めようとしたらそれはそれで大騒ぎになりそうだし……数日休み
取つたら結構混沌としてたし」

それと怪我は絶対にしないようにと心掛ける事にする。

「皆デザート食べるかい？バナナプリンあるんだけど」

「食べたい」

「ホンマに即答やな……あつウチも貰うで〜」

「ターボも！ターボも食べたいく!!」

第51話

「……フムツ成程な、確かに此奴は濃いな」

「濃いでしょ。もう慣れちゃってるけど」

「これに慣れるって相当だったろ」

「まあ結構時間かかったね」

テーブルを囲みながらも何やら話し込んでいる黒沼とヒビキ。基本的に親しい二人、時間があればトレーナーとして意見を交換したりしている——が、それ以外にも理由はある。

「おやつさんも誰か実力を示すのが一番だろ」

「殴れって事？」

「それも有りだな」

「何物騒な話をしてる」

と呆れた顔の東条トレーナーがやってきた、何やら内容が物騒なだったので忠告にやって来たのかそれとも別の理由があるのか分からないが、一先ずヒビキはお手製のスペシャルブレンドティーを差し出す。

「あらっ美味しいじゃない、かなり濃いけどこれもまたいいわね」

「ヒビキ特製のスペシャルブレンドだよ、日によって配合だけじゃなくて茶葉の状態も変わるから味の保証は出来ないけどね」

「此奴で占いもどきをするのも悪くないな。自分好みの味を引き当てられたら一日はツイてるのかな」

「それでそれは何のノート？」

「おやつさんの鍛錬メニューノートだ」

トロンベ用に新しいメニューを製作するに当たってヒビキの力を借りようと黒沼は普段やっているメニューを聞いていた所、そして改めて見てみると密度が相当に濃く設定されており、ウマ娘でもこれは相当に辛い部類に相当する。

「特に重りを下半身に付けて山を往復するなんて相当だな……確か往復で5キロあるだろ、しかも相当にアップダウンが激しい」

「だからこそ利くんだよ、自然そのままの道だからスタミナとパワーを付けるにはもってこい。あれに比べたら中山の坂なんてあつという間だよ」

「ウチでも試すべきかしら……？」

「やるんだつたらいきなり重りは無しね、芝とかと違ってコンクリだから走る感覚も違うから」

ブルボンと同じ長距離を目指しているトロンベ、しかし如何せん長距離を走り切るだけのスタミナはまだなく根性で如何にか完走出来る程度。ブルボンもスタミナの強化は重要な課題でもあるので、ヒビキが行っているそれを一部導入する予定だったのでこれを参考にするつもりらしい。

「重り、重りか……だが蹄鉄を付けさせる訳にはいかん。色々考えてみるか、有難うなおやつさん。このメニューの礼は必ずさせて貰う」

「いいよいよ別に。それだったら用務員室でまた飲み会でもやるかい？」

「それがいいな、酒は俺が用意する」

そう言いながら黒沼は去っていく、それを見送ったヒビキに対して東条が隣に座る。

「んで其方の本題は？」

「トレーナー研修の件よ、悪いけどその日は私予定が入ってるから無理って事を伝えに来たわ。調整すれば出来なくもないけど」

「いや、ハナちゃんにそこまでさせるのは悪いから俺がやるよ」

如何やら京介の案内を何方がするかという話だった。ハナの方がスケジュールを確認してみたが、如何やらレースの日取りらしく外す事が出来ない。出走を考えているレースを変更するなどすれば行けるが流石にそこまでしたくはないと素直に伝えに来た。

「それで如何して私かヒビキ君なのか、聞いても良いかしら」

「単純。来るのが俺の幼馴染だから」

「成程ね、此方側として馴染みの配慮と実力確かな案内の配慮って所？」

「全部正解」

矢張り彼女は頭の回転が速い、こういう時ばかりは会話が楽だと素直に安心する。

「それにしても態々中央に来るのはどつちなのかしらね——中央が目的か貴方が目的か」

「野郎が野郎を目的にするかな」

「状況によってはすると思うわよ、ヒビキ君っていい意味で人誑しだし」

「人聞きが悪いなあ……」

まあ実際問題、京介が中央に来るなんて理由はある意味分かっているような物でしかない。何故復帰したのか、何がそうさせたのか……様々な物を見極めるつもりなのだろう。

「面倒にならないといいけど」

「問題児って事か」

「いや、本音隠さずズバズバ言うタイプだから好き嫌いが超別れる系」

「そつち系か」

良くも悪くも自分に素直な為には相手の事を考えずにズバズバ言ってしまうタイプ、理性的で向上心が強いウマ娘との相性はいいだろう、それでも好みは分かれるトレーナーになる事は確実。黒沼とは別方向で厳しい。

「ウチのメンバーも朝練に参加させたいけど、人数的に難しい？」

「だって今でさえ10人位面倒見てるんだよ、しかも交代交代で。そこにリギルのメンバー突っ込んだら必然的にレベル上げないといけないから他の子がついて行けないよ」

ヒビキの朝練に参加しているのは基本的にスピカメンバーにトロンベにダイゼンガー、ブルボン。最近ではオグリキャップやビワハヤヒデも参加している、流石にこれ以上は面倒を見切れないしそれぞれに適したメニューを組むのも大変なのである。

「リギルはリギルで俺のメニューそのまま適応させるだけで楽だけどき、それだと他が絶対ついてこれないよ」

「そう……つてちよつと待つて、リギルならやれるメニューを今までずつとやつてきた貴方つて何なの」

「鍛え続けてるトレーナー兼任の用務員のおじさんです」

「もうツツコむのも疲れて来たわね……」

皆も成長して来ているが、流石に全開の自分のメニューにはついてこれない。ゼンガーとトロンベ辺りはそれを聞いてさらに闘志を燃やし、必ずその域へと達して見せる

と言っていたが……。

「朝練の後つて大体俺の所でみんなご飯食べるのよ。流石にこれくじで決めてるけど」
「あらっそれは普通に羨ましいわね。ヒビキ君の料理は美味しいから大人気でしょうね」

「くじによつては本当に作るの大変だけどね……オグちゃんとスペちゃんが一緒の時なんてもう地獄絵図よ。業務用の炊飯器新しく買い足した位だもん」

「それは、御愁傷様」

其処にリギルメンバー迄来ると言う事は更にその争いが過熱する事にもなる。

「後、ナリちゃん来るとなると肉以外どうやって食わせたろかって考えないと」

「それは、確かに……ハヤヒデ辺りに相談するしかないかな」

「カレーに入れてる玉ねぎは確り溶かしてるつて事は聞いたんだけどなあ……」

ヒビキの苦労は続く、が、何処か楽しそうに見えるのは彼自身がウマ娘と関わる事が好きなのか、それとも指導するのが好きなのか……何方なのだろうか。

「——中央、色々と楽しみにさせて貰うぞ……なあつ響鬼さん」

第52話

春。出会いの季節、トレセン学園にも新しい生徒などもやってくる。そしてそれは教員職員やトレーナーも同じなのである。また今年も辞めていく職員もいればやって来るトレーナーもいる。

「ヒビキさんおはようございま〜す!!」

「はいおはよう」

用務員ヒビキは今日もとて自らの仕事に励んでいた。最近ではトレーナーとしての役職に従事している感が出てしまっているが、それでも自分の本業は用務員のは何も変わっていない。というか用務員を辞める事は出来ないという実情である。

「ヒビキお兄さんおっは〜!!」

「おはよう〜でもお兄さんじゃなくていいからね〜」

「若い癖に〜」

「そんな俺により若い子が何言ってるの〜」

何の躊躇もなく声を掛けたり、頭を撫でたりするヒビキ。それ位に信頼され切つていると言ってもいい、新入生辺りはまだ慣れないだろうが、それもトレセンで過ごしてい

く内に慣れていく事だろうと思つている中——一仕事終えたように立ちあがつて身体を伸ばしていると背後から迫ってくる影が見えた。

「やあつ来たかい」

「来たけどよ、普通こういう時は仕事はしないもんだろ」

「甘いね、俺がこの学園の何%の仕事を請け負つてると思つてるんだい？」

「……やつぱり此処つてそんなブラックなのか」

やつて来たのはスーツに身を包んだ桐矢 京介。今日から彼はこの中央トレセンにて研修生として過ごす事になる、アスムと同じ光を瞳を宿すウマ娘と共に夢を見たいと思つたから。

「まあブラックというかね、良くも悪くも本当に此処の仕事はきついから。その分保証やらお給金は良いから安心していいよ」

「それは知つてるけど……アンタはアンタで身体休めてんだらうなあ」

「ちゃんと休んでるよ。休日出勤要請には確実に出てるだけで」

「それを休んでると言わねえだろ!!」

思わず大声でツツコミを入れてしまうが、これについては京介の方が正しい。確りとした休日もあるが、それ以上に対応しきれないヘルプが起きたら確実に自分にお鉢が回ってくる。しかもそれらはウマ娘のトレーニングスケジュールなどを乱す物なので、

トレセンとしては素早い復旧が望まれる。故にヒビキが選出される。

「先代にアンタの事を報告しろとか言われてんのに、なんて言えばいいんだよ……」

「そのままでもいいんじゃない？先代だって仕事があるうと鬼である限り、鍛錬を怠る事は許されないって言ってたし。仕事がそのまま鍛錬になるなら」

「それならそれで、アンタはアンタで何で更に鍛えてんだよ」

「習慣。後いうじゃない、備えあれば患いなし。鍛えておけば患いなし」

「……もう呆れて、言葉が出ねえ」

そんなこんなで始まったトレセンの案内、アスムの兄としても響鬼の様子を見に来たのだが……矢張り異常としか言いようがない。

「おやつヒビキさんじゃないか。珍しいなこんな所で会うとは」

「やつほシンちゃん、そっちこそどったのよ」

「皇帝……!?!」

廊下で偶然出くわしたルドルフに思わず京介は戸惑う。ウマ娘に関わる者として相應の知識はあるし、彼だってレースは見ている。何なら彼はスズカのファンである位には嗜んでいる。そして無敗の三冠《font:ul40》馬《font》の皇帝、シンボリルドルフが目の前にいると思えば自然と緊張するのも当然。

「私は書類の提出をしてきて所さ、ヒビキさんに言われたように最近は休みを確りと取

るようになっているよ」

「そりや結構。いい仕事の秘訣は徹夜をしない事だからね、後美容にも良くない」

「フフフッ確かに私にとつては重要だな」

「んで何で固まつてるん？」

「いやおまつ……!!?」

「ああつシンちゃん、こつちはトレーナー研修に来てる桐矢 京介。俺の昔馴染み」

「シンちゃん!?!」

あの皇帝をちゃん付け、加えてニックネームである。スズカファンではあるが、流石にあの三冠《font:ul40》馬《font》が居たら流石に緊張する。

「改めまして初めましてだね。生徒会長のシンボリルドルフだ、と言つても君の反応からして私の事は良く知つてくれているようだがね」

「そ、そりや当然……!!寧ろアンタを知らない奴なんてありえないだろ……つつうか響鬼さんなんで皇帝をちゃん付けで呼んでんだよ、如何言う神経してんだ!!」

「そこまで言うかい? だつて俺からしたら10個も年下の年頃の乙女ちゃんだよ、それに畏まられるのが慣れてるんだから、こういう時ぐらい年相応に扱つてあげないとシンちゃんだつて参つちゃうよ」

良くも悪くも顔と名前、そして名声が知られ過ぎているルドルフはトレセンの外に出

れば張り込みをしているカメラマンや告げ口要因のバイトによつて直ぐに追跡される。そうでなくても大スターなのだから直ぐにサインやらを強請られる、だからこそ、こういった場所は年頃の女の子扱いしてあげるのが優しさなのだと言ると、ルドルフも微笑みながら頷いた。

「素直に言わせて貰うと、ヒビキさんには助かつているんだよ私も。この人の前だと肩が凝らずに済む処か気が頗る楽になる」

「そういうもん、いや確かにそうか……この人の気質はトレセンで役に立つんだな」
「なんか随分と棘があるね」

ローカルシリーズで活躍していたアスムも地方ではそれなりに有名だったが、そこまです騒がれるという事は無かった。商店街のアイドルの延長線……といった印象を強く受ける。だがトウインクルシリーズは文字通り桁が違う、スター女優クラスの扱いを受ける。そのように騒がれるからこそ、何事もなく平然と接してくれるヒビキのような存在は有難いのだろう。

「桐矢 京介、これから今日から此処で研修する準トレーナーだ。まあ俺がなんかする事はないだろうが、なんかあったら宜しく」

「此方こそ頼むよトレーナー君。一気に碎けてくれたようで助けるよ」

「響鬼さんのやり取りを見て、素の俺でよきそうと思つたからな」

「素は素でキッツいからある程度は繕いな、君は青酢並にきついから」

「いや青酢つてなんだ、黒じゃなくて青て」

ジト目をしながらもツツコミを入れる京介をルドルフは少しばかり愉快そうな目で見た、基本的に包容力があつて頼れる大人という印象のあるヒビキのこういう姿を見れるのは個人的に嬉しいと思つたらしい。

「んじゃ次行くかい、というかどこを案内すれば良いんだろうね」

「考えろよ案内役」

「えつゝじゃあコースでも見に行くかい、そこにスピカの皆もいるだろうし」

「——ああそれがいい」

そのままヒビキと京介と分かれる事になるのだが……僅かな不安というか疑念のよ
うな物を感じた。

「何故、彼は今怒りを感じたんだろうか……いや、何に對してだ……？」

第53話

桐矢 京介がまず思った事、それはヒビキの慕われ具合の凄さだった。

「ヒビキさんどうもこの前はハンモックありがとね」

「セイちゃん、寝る子は育つけど頭の中も育てた方が良いんじゃない？」

「あくその辺りはセイちゃんのペースで行きますんで」

少々眠そうにしていた娘には気軽に声を掛けられ、何時でも用務員裏のハンモックを使っているといいと返し

「おじちゃんこれお土産!!」

「これはっ……鯉!？」

「また高知で走ってきたきに!」

「ああ成程」

体操服を着て大きな荷物を背負っていた少女からはお土産としてが荒々しい波から飛び出すような人形を渡され

「おっちゃんこの前は紅茶豚有難うなく。今度はウチがうんまいたこ焼き作つたるわ」

「タマちゃんの粉もんは美味いからなく楽しみにさせて貰うよ」

「おう任せとき!!」

関西出身と思われるウマ娘とは今度たこ焼きパーティーの約束をあつという間に取り付ける。他にも壁を壊してしまった事へのお詫びとして紅茶の葉を持って来る、一緒に筋トレをする約束を取り付ける、新薬の実験体になつてくれと言われる——案内をする間に様々なウマ娘達に接触され、話を持ち掛けられていく。そして特徴的だったのが、彼女らのほぼ全てが笑顔であつた事。

「こつちでも相変わらず愛想、振りまいてるのか」

「人聞きが悪いな、君みたいに仏頂面が出来ないから真摯に対応しただけだよ」

「大きなお世話だ」

「それはこつちの台詞」

容姿が良い上に温和な性格と歳不相応な程に落ち着いた態度故に地元では響鬼は人氣が高かった。それは男性も女性も問わず、男性からはあんな風になりたいと思わせるような尊敬を。女性からはその優しさと笑顔から好意を。二重の意味での人誑しとしか言いようがない。

「あつおじさ〜ん!」

案内をしていると背後から走ってくる音がする、普通に走ってくるような音に聞こえる。振り向いてみるとそこにはジャージを身に纏っていたテイオーが此方へと走り込

んできていた。

「やあつテイちゃん」

「これからコースに行くの、それなら一緒に行こうよ!!」

「ああいいよ」

「それで、隣の人って誰？」

テイオーはヒビキを盾にするかのようにしながら身を隠し、見慣れない男を訝しげに見ていた。

「トレーナー研修に来た俺の昔馴染みだよ」

「えっくおじさんの知り合いなの!?!なんか、凄い悪そうだし凄いな感じなの!?!」

「悪そうな感じで悪かったなガキ。俺は桐矢 京介って名前がある、よく覚えとけ」

その言葉にムツとしたテイオーを見てヒビキはあくあ……と言いたげな顔をする。

「ガキじゃないよ!!僕は無敗の三冠ウマ娘なるトウカイテイオーだ、そつちこそ覚えてよね!!」

「お前が無敗の三冠? 皇帝の真似事なら身の程を弁えてからするんだな、皇帝のようになるなんて並大抵の事じゃねえ」

「僕はカイチョーと約束したんだ、絶対になるって!!その為におじさんに色々鍛えて貰ってるんだから!!」

「———そうか、じゃあお前が……」

その時、京介の眼の色が変わり雰囲気も変わって一気に鋭くなる。それを敏感に察したようにヒビキの後ろへと隠れてしまう。

「そう言う所だよ、だから誤解されるんだよ」

「———……知らんな、先に俺を悪く言ったのはそっちだ」

「君ねえ……全く変わらないんだから、ごめんねテイちゃん」

「う、ううん……でも僕、なんか苦手」

「先に行つててみんなに伝えて来て貰つてもいいかい？」

上手くテイオーをこの場から離すが、テイオーは京介に対して警戒心を抱いてしまったのか、それとも純粹に嫌つたのか僅かに嫌な顔をしながらもそのまま去っていく。それを追いかける京介の眼は何処か鋭く色が違っていた、故にヒビキが軽く殴つてそれを直す。

「つてえ?!?!なにすんだよ!!」

「こつちの台詞、それが大人の対応かい。少しは大人になつてると思つたけど俺の勘違いだったみたいだわ、なんも変わつてない」

自分の能力に自信があるが故に態度がでかく口を開けば嫌味を言う、昔つから損な性格ゆえに友人も少なかった。それがあつた程度解消されていると思つたが、如何やらあま

り変わってないらしい。これで本当にトレーナーとしてやっていけるのだろうか……。」「トレーナーに必要なのは愛嬌や人付き合いの上手さじゃない、究極的に言えばどう相手を導いてやれるかだろ」

「ビジネスライク的にやっていくつてのかい？それでよくまあアスムと同じ光を持つ子と前に進むなんて目標を語ってくれるよね」

「……煩い、初対面であんな事を言うあのガキにも問題があるだろ」
「そこを上手く許容して上げるのが大人でしょう」

まあテイオーにも非はあるだろうがそれでも大人としてはその辺りは上手く対応するべきだろう、まあこの男にそれを要求するのは難易度が高い部類に入ってしまうだろうが……。紛いなりにも自分と同じ三十路なのだから努力してほしい。

「ハアツ……スピカ連れてって良いのか不安になって来るよ」

「連れてけ、俺はそこに行かなきゃならない」

「……問題起こさないでよ」

若干無理だろうなあという予感と共に歩きだすヒビキ、自分の中に確信的な予感がある。出来る事ならば当たらずにいてくれると有難いのだが……恐らく無理な願いだろうなあと軽い諦めの境地にいたのであった。そして練習中のスピカの居るコースまで到着すると此方へと沖野が手を振る。

「よおつとつつあん、そつちがテイオーが言つてたもう一人さんか？」

「ああつそうだよ。こつちはスピカのメイントレーナーの沖野君」

「桐矢、桐矢 京介だ」

「おう宜しく、とつつあんから聞いてるぜ。幼馴染だつてつつう事はあれか、アスムさんとも親しかつたりしたのか？」

その言葉を聞いた時、京介は思わず——拳を握りしめていた。

第54話

「ああ沖君、親しい所じやねえから。これアスムの兄貴だから」

「——これ、つておいこれつて何だこれつて!？」

「えっマジで!? ああこりや失礼した」

「別に気にしちやいな……」

そつぽを向く様にする京介に沖野も流石に不味かつたかなあ……と思う、だがその辺りは上手くヒビキが受け止める。

「……沖野さん、とか言つたな。此処で研修する事になつた桐矢 京介だ、世話になりませう」

「ああ、此方こそ。なんていうか、気易くて悪かつた。とつつあんの事はあんまり知らないもんでさ、このとつつあんの奴あんまりにも自分の事語らねえから」

「いい大人は自分の過去を安売りしないものさ」

その言葉でいくらか京介は察する事が出来た、何処までを話しているのかを。本来話すべき物ではないそれは話していかない……アスムが大怪我をした位だろうと察する事が出来た。恐らく、以前スズカが怪我をしたという時に話したのだろう。

「……ああそうだよ、そのアスムの兄貴だったく……響鬼さん、アンタもいい加減にしろ。お前はあいつ専属だろうがってんだ」

「（おやつ……成程、そう来たか）そういう約束もあるんでねえ、俺は待つだけだよ」

「おい沖野さん、このおっさん人誑しだからウマ娘の人氣も高いだろ」

「まあとつつあんだから滅茶苦茶高いな、とつつあんがトレーナー資格あるって話が出回ったら担当してください!!って殺到する位には」

「だと思っただけ……」

あきれ顔で溜息を吐く京介に響鬼はある種の成長を見て感激した、沖野からの話を聞きつつも自分の怒りを巧みに抑えながらもそれを別の方向性に向けて自分を誘導させるようとしている。ある種の外堀埋め、アスムの担当トレーナーだと言う事を広めさせるつもりなのだろう。執着してくれる……とため息が出る。

「そもそもこの人はあいつ以外のトレーナーには向かねえ、何せ誰にもでも外面は良いからな」

「誰にでも外面が悪い君に言われると猶更深いね」

「ハハハッまあ年頃のウマ娘にはとつつあんの方が好まれるだろうな」

ほらね、と冗談めいた目線をやると誰かに好かれたいわけじゃない、とそっぽを向く京介のやり取りに沖野はヒビキの自分の知らない一面を見たような気がした。言葉が

というよりも態度が柔らかい気がする、数年の付き合いはある筈だが矢張り昔馴染みという領域には遠く及ばないという事だろう。

「ちよつと待つててくれるか、丁度良いから他の連中にも挨拶させよう」

そう言いながらコースを走っている皆へと声を掛ける為に歩いて行く沖野を見送りながらも、ヒビキは軽く京介を睨みつける。

「早まった行動だけはしないでくれるかな、せめてその拳を俺に向けるのは許すけど」
「俺程度が殴つてもアンタは何ともならんだろ」

「まあね——手を出そうとしたら俺は君を止めるから」

其方がそう出るのなら此方だつてそうすると前置きしておく。

「……いるつて事だな、アンタに復帰させるきつかけを作つた奴が」

「ああいるよ、その子に手を出そうとするなら——潰すよ」

一瞬だけ見せた怒りの姿に鬼を垣間見るが、それにも強い違和感を持つ。鬼とは怒りを鎮める為の猛き戦士、猛士の事だ。だが何故それが怒りによつて鬼となるのか、矢張り鍛え続けた末の結果なのかと舌打ちをしてしまう——尚の事、響鬼を此処に居続きさせる訳にはいかない。

「桐矢さん、此奴らが俺ととつつかんで面倒見てるチームスピカだ。テイオーとはもう会つてるんだよな」

「ああ、さつきは悪かったなガキ」

「ムウツ!!だからガキじゃないってば!!僕はトウカイテイオーだ!!」

「ハイハイ分かったよ、ガキっこテイオー」

悪かったと言いつつも謝る気が全然ない京介は改めて抗議するが、全く受け入れられないのでヒビキを盾にする戦法に切り替えるのであった。

「うえくんおじさんこの人酷いよ!!」

「この位軽いジャブみたいなものだろ……三冠になるって事はお前はバツシングとかも受ける事になるって事だ、だったらこの位軽くないなせるようになってこそだろ」

「ううっ……でも僕は嫌い!!僕を認めさせたいなら認めさせてみる!!」

「面倒せえな此奴……」

流石に京介も先程のそれは酷過ぎたと思っっているが幾分か軟化させる、が、もうテイオーからは根本的に嫌われてしまっている。そんな所にアキラが間に入る。

「まあまあ……京さんお久です」

「よおつアキラ」

「相変わらず口が悪そうで何よりです」

「相変わらずちっこいようすで何よりだ」

「何をおおおお!!!??」

そんな中で一気に表情を軟化させる京介。此方を弄ろうとするアキラに同じく弄り返す、京介は全く反応しないがアキラは凄いい勢いで反応して京介に向かって殴り掛かるうとする勢いで向かって行きそうなのをスカーレット、ウオツカの二人が掛かりで抑えつける。

「誰の胸が山肌でコケまくって抉れたですってえええ!!?」

「誰もそんな事言っていないでしょうが!!」

「ええいつポインちゃんなスカーレットちゃんには分かりませんよつとつか貴方こそ何なんですかその男が好きになりそうな要素盛りまくりなスタイルと性格!! 少しでも私に寄こしやがりませよコンチキシヨオオオオオ!!」

「うっさ!! 取り敢えず大人しくしてくださいよつて!!」

「離してくださいウオツカちゃん! 貴方だつてこのたわわが先にゴール通過したからこつちが1位だつて言われたら腹立つでしょ!」

「……俺が悪かつた!! スカーレットお前が悪だ!!」

「なんで!!?」

「おい、スピカつてのは何時もこんな調子なのか」

「まあ普段から賑やかなのは認める」

「つとつかこれに至つては君のせいだから」

「私、スペシャルウィークです!!ヒビキさんには凄いい世話になって、ヒビキさんにトレーナーさんになって欲しい位に尊敬してます!!」

「……」

「あ、あののかなさいました……?」

京介の中に何か生まれてしまった、そして同時に何かを理解してしまったと同時に感じた。彼女の目の中に自分が求めていた光があると言う事と——彼女が響鬼を再びトレーナーへとした存在という事を直感した。似ているのだ、アスムと。

「——いや、悪いがあの人はお前のトレーナーにはならない。アスムのトレーナーだからな」

「それは分かっています。でも私ヒビキさんの事をなんていうか、尊敬とかじゃなくなんかお父ちゃんって思っちゃって、だからですかね——一緒に居たいって気持ちがあつて」

——響鬼さんって不思議だね、なんかもう一人にお父ちゃんみたいで。

それを聞いて一瞬間が沸騰しそうになった、アスムも同じことを言っていた。まるでもう一人の父親のようだと言っていた……それが如何しても被る、だからなのかと思う中で思わず拳を握りしめて何かに耐えた。

「そうか」

そう、
眩くのが精一杯だった。

第55話

「じゃね〜ヒビキさん〜!!ご飯ありがとおお!!」

「それではヒビキさん、御馳走様でした」

「……んじゃ」

「ええよええよ〜授業頑張つといで〜」

今日も今日とて朝練を終えたヒビキは抽選で選ばれたウマ娘達を食卓を囲んでいた。本日は珍しくスピカのメンバーは抽選に引つかからず、スpegが涙目になつていたのを置き去りにしながら席に着いたのはメジロライアン、グラスワンダー、そしてBNWとも呼ばれる三人のウマ娘達。ビワハヤヒデ、ナリタタイシン、ウイニングチケットの5人だった。前述の二人が先に戻つた後、ゆつくりとタンポポ茶を啜つた後に3人も去つていく。タンポポ茶目当てで来る子も少なくはない。

「ンでいつまで寝てんのよ、少しは身体強くなつたつて聞いてたのに……全然じゃん」

「ア、アンタと一緒にすんじゃねえ……」

「だから普通のコースにするのかつて聞いたのに」

未だに沈黙し続けている京介、全身で呼吸をしているような事がまだ続いている。ま

あ普通の人の身でウマ娘達用に調整したメニユーに根性でついてくる辺り体力は昔よりはついていてると思つていいだろう。だがそれでも流石に無理だろうと思つたので沖野を巻き込む用のメニユーにしようと言つたのだが――

「余計な氣遣いだ、俺があれからもずっと鍛えてた事をアンタが知らないだけだ」

と自信満々に言い切つたのでウマ娘達と同じメニユーをやつたのだが……結局こうなつた。まあまともについてこれただけでも褒めるべきなのだろうが……。

「こんなのを、ずっと続けてるのか……狂つてるぞマジで……」

「それだと今日付き合つてくれる子達まで狂つてる事になるから止めてくんない？俺だけの場合はもつと濃くしてるから」

「――やっぱ狂つてるじゃねえか」

「褒め言葉として受け取つとく」

人外を見るような言葉を受け取りながらも京介の朝ご飯の準備へと掛かる響鬼。先代への報告を兼ねてメニユーに参加したが……やっぱりウマ娘達について行こうとするのは無謀だつたと思ひ知つた。それでも昔に比べたら随分と鍛え込んで、鬼ほどではないが常人以上になつたつもりなのだが……。

「言わせて貰うぜ、アンタは壊れてる。アスムが居なくなつたあの日からずっとだ」

「――知つてるよそんな事」

取り繕つてもきつと届かないと思ひ放つた言葉は想像以上に軽く、そしてあっさりとして受け止められてしまつていた。

「俺だつてわかつてるさ、今が異常だつて事ぐらい——それでお前はそれを止めに来たんだろ。トレーナーになつて夢を追いたい云々も嘘じやないだろうけど方便に近い」

「……そこまで分かつてるなら自分を止めるよ!!」

「なんかさ、納得出来ないんだよ俺」

炊飯器の周りに茶碗を置きながら、響鬼はそう言つた。

「俺は本当にアスムを支えられてたのか、俺はあいつの傍にいてよかつたのか、俺があいつを追ひ詰めちやつたのか、俺の存在が重みになつて無かつたか。そんな事を考えなかつた事はない」

「あいつはつ——アンタに感謝してる筈だ、それ以外無いに決まつてる」

「うんっそれは分かつてただけだよ……離れないんだよね……あいつの涙で濡れた顔が」

——ごめんヒビキさん……私、走れなくなつちやつた……。

生前、最後の最後にあつたアスムは悲しみと絶望の中に居た。怪我による複雑骨折、

もう走れない事に対して自分に深く侘びてきたあの表情が如何しても……忘れられない。そして——それが最後に見た、アスムの生きた姿となつてしまった。

「……だからつてそれがアンタが鍛え続ける事には繋がらねえだろ」

「アハハツ」

「笑い事じゃねえだろ!!」

思わず声を荒げるが、肝心の男は全く態度を変えない。何も変わらない態度のまま、自分の食べる分の食事を用意してくれていた。

「実は何度も考えたんだよ、もうやめようかなつて……でも、それやつちやうと俺とあいつを結びつけるものが一つなくなる、そう思うと——出来なくてさ。それで鍛錬終えて一日が終わるのを実感すると、ああつ……今日も繋がつていられたつて安心するんだ」
「よ」

「……」

余りに痛々しい姿に見ていられなくなってきた。たつたそれだけの為に、この男は鍛え続けているのか。アスムと響鬼を繋げている物なんてそれこそ無数にある、それなのに……たつた一つの為にそこまでの事をし続けている。

「恋人作れ、あいつだつて何時までも未練がましいアンタを見たくない筈だ」

それは京介の本音だつたのか、それとも本当に自由にやりたいならその位の事をして

初めて自由になれるという意味だったのかは分からない。それでも専属だと言いつける彼の口からは出ないと思われような言葉に、響鬼は少し驚く。

「恋人か……俺を好きになつてくれる子が居たら考えるよ、こんな未練タラタラの男さ。んじやちゃんとご飯食べてよ、食器は水に浸けといってくれるだけで良いから」

作業用ベルトを付けるとそのまま歩き出していく背中を無言で見送る。本当の意味で響鬼が前に進む為にはアスムの事を振り払わせる必要がある、だがそれは恋人であつた者には辛い選択になってしまう。だがそうさせるしかない、自分の中である種の決意をしながらも響鬼の料理に手を付ける——が

「あのおっさん……やっぱり根に持つてるだろ」

そこにあつたのは椎茸ご飯に椎茸の御吸物、椎茸の味噌マヨ焼き、椎茸の肉詰め。嫌いではないが、苦手意識がある椎茸料理ばかりだつた。今でこそ食べれるが、子供の頃、酷く不味い椎茸を食べたせいで成人を迎えるまで椎茸には強い苦手意識があつた。

「くそつ……美味しいけど、美味しいけど……クソオオオ!!」

一応食べられるが、箸が止まりがちになる。過去の軽いトラウマが美味を濁らせる。それをわざとチョイスする辺り、響鬼も割かし良い性格をしている。

「あつヒビキさん、丁度良かった。これから朝食なんですけどご一緒はどうですか?」「おっいいねえ、たづなちゃん。実は皆のご飯ばかり作つてたから食べる暇なくて」

「あらあら、理事長みたいな事をしないで自分の事も優先しないとダメですよ」
「はくい気を付けます」

第56話

「調子は如何だいスズちゃん」

「はいっだいぶ良くなりました、ヒビキさんのメニューも少しずつこなせる量も増えて来てます」

「そりや良かった良かった」

漸く退院出来たスズカは少しずつ元へと戻る為にリハビリを続けていた。まだサポーターは取れず、走る事は出来ないが歩く事に關しては不自由も無くなつて来た。それは同室であるスぺの介助も影響しているだろう。

「もう走れるようになってるんです。流石にレースで走るような速度じゃありませんけど……」

「それでも大分進歩だよ、それが出来たらかなり前に進めてるって事だからね」

経過も順調、リハビリにも積極的に取り組み続けている。その姿勢が回復にも良好な方向に向いている、そんな彼女に助けになればとヒビキもスズカ専用のメニューを作成している。

「スぺちゃんにも色々助けられています、最近是我的事も良くなってきたからか漸く自分

の事も意識を向けられるようになって」

「同室だからねえ……スズちゃんの容態には一番敏感になっちゃうだろうししようがないだろうけど」

思った以上に自分が掛けた言葉は利いていたらしい。他人に優しくするだけで叶えられるような夢などではない、そしてスペの意識は少しずつ変わり始めている。憧れからライバルのような物へと変質し始めているのかもしれない。日本一を目指す時に明確な敵として立ちはだかるのがスズ力でもあるから——そしてそれはもう一つの夢、スズ力と走るという夢の実現にも繋がる。

「まあいい傾向だよ、自分の事へ目を向けられる。それこそが成長の第一歩、あの子は誰かを育てる立場じゃないんだから」

「そうですね、スぺちゃんは宝塚記念に出ますしそこに向けて良い調整をしてくれたら私も嬉しいですよ」

「そうさせる為に導くのがトレーナーの仕事だからね。そうだよ、へばってる研修生の桐矢君」

「う、うるせえ……」

ベンチに腰掛ける形で疲弊している京介、所謂中央の洗礼を受けたという奴だろう。デスクワーク関連は順調にやれているしメニューの構築や課題として出されたウマ娘

のデータから評価などはほぼ満点に近い。だが……ある種、トレーナーというのは肉体系も少なからず優先される事がある。それを用務員でもあるヒビキが教えていたのだが——彼のペースは一般人からしたら超ハイペース。それについて行くのがやっとだったらしい。

「蹄鉄のチエックや設備の状況確認は当たり前でしょ、何かあつたらすぐに俺達に連絡して貰えるように連携の確認もしなきゃいけないんだから」

「だからってあんなハイペースはないだろ……」

「だって君に合わせたんだもん、出来たでしょ？」

「やっぱ根に持つてるだろ……」

「もつてないもつてない」

今朝の椎茸尽くしの朝食を考えると他意がある様にしか思えない。笑顔のポーカーフェイスでその本質が一切読み解けないのもヒビキの厄介な所でもある。これも鍛錬によつて培われてしまった物だと考えると本当に不憫に思える。

「いやあ遅れました〜!!」

そんな事を想っていると大慌てのアキラが走つて来た。そう言えば姿が見えないと思つていたら遅刻して来ていたらしい。

「何やってんだアキラ、遅刻するなんて」

「いやあ面目ありません……実は他チームのトレーナーさんから引き抜き喰らってました」

「あれま、ヘッドハンティングって奴かい？」

「多分そうです」

「詳しく聞かせてくれないか」

其処に入つて来たのはスピカのメイントレーナーの沖野、自分のチームのメンバーが引き抜かれそうになったと聞かされたら黙っている訳にはいかない。と言つてもアキラは相手にもしなかつたらしいが、如何にも相手がムカつく事が言つてきたのはご機嫌は斜めらしい。

「次の皐月賞は絶対に勝てない、とか言い出して勝ちたいなら俺のチームに入れとか言い出したんですよ。沖野の奴はウマ娘の可能性を無碍にして、才能を伸ばす事もなく殺してるって、何なんですか他人を貶める事しか出来ない人は」

「あく……あの人か、まあ言いそうだわ」

「沖野は放任主義っていうかウマ娘達の自主性を第一に考えるからねえ、まあだからと言つて放逐しっぱなしじゃないし確りとしたメニューも組んでるけど」

「随分と本質を見ねえ奴だな、そんな奴もいるのか中央には」

いない、とも言い切れない。沖野や黒沼を見れば分かりやすいだろうがトレーナーに

は良くも悪くも癖が強い人物が多い、精神は肉体を凌駕すると精神面を鍛えることに重点を置くトレーナーもいればデータを重視し、ウマ娘の得意を封じてまでもスタイルを変えろトレーナーもいる。だから口が悪いトレーナーもいる事にいる。

「んで如何やって逃げようかなあ、隙を見て殴れないかなあつて思ってたんですよ」

「おい待てアキラ、お前の一撃は普通に岩貫通すんだぞ。2年前に神社近くの大岩に拳の跡を付けまくってただろ、妖怪の仕業じゃないかって自治体に不安が寄せられてたぞ」

「ゲツそんな事態に!? そう言えばそんな噂があつたような……」

「ア〜キ〜ラ〜?」

「あつちよ待つておじ様これはそうです若気の至りという奴で確りとバンテージなんかは付けて拳の保護は——」

「そういう問題じゃないだろ」

「ぎにやああああああああああああああああああああああああああああ!!!」
「?」

身長圧縮の刑に処されるアキラ。大騒ぎしながら身長がああ!! ナイスバディへの夢がああ!! と叫んでいる姿に如何しようもない懐かしさを覚える。

「んで如何したんだよ」

「ううっ……黒沼トレーナーさんが助けてくれました、随分と面白そうな話をしてる

なあ……つてヤクザ顔負けの声色と迫力出しながら肩に手を回して……」

「そりやこええわ……とつつぁんと同じ位鍛えてるんだろ？」

「いや鍛えては無いらしいよ、生きている事がトレーニンングだつて。ある意味ウマ娘相手にしてるからこそ言える台詞だと思っ」

「だったら鍛えてるヒビキさんは何なんだよ……」

兎も角、その場を抑えてくれたのは黒沼。そのまま自分に任せて早く行けと言つてくれたので此処へとやつて来たらしい、因みに言つてきたトレーナーはそのまま黒沼に肩を組まれたまま何処かへと連れていかれたらしい。

「錦先生の親友さんつて聞いてましたけど流石の迫力でした、錦先生も凄いんですよ。私が間違つてド突いちやつた事あったんですけど、その時も直ぐに立ち上がつていいパUNCHだ!!つて爽やかに返してくれました」

「その錦先生つてのも大概タフだなおい……」

「いや沖野さん、ウマ娘に蹴られてるアンタは人の事言えねえ」

「アキラ、もう少し詳しく話を聞かせて貰おうか……？」

「ひいつ!!おじさまの顔が怖い!!こ、此処は——全力疾走で逃げるううう!!」

「逃がすかあ!!」

アキラの夢の生存を掛けた鬼ごっこが始まったのであった。流石にウマ娘であり、三

冠も目指せると沖野の御墨付きを得ているアキラが逃げ切ると思われたのだが……10分後、アキラを確保したヒビキが戻ってきた。

「さて俺の可愛い可愛い姪っ子のアキラちゃん、ちよつと俺と鍛え直そうか……精神面を♡」

「え、えつとおじ様の指導なんてまだ未熟な私めには勿体ないかと……」

「遠慮しない遠慮しない——来い」

「京さん助けてええええ!!!」

「……なあ、とつつあんって実はウマ娘の血が入って半分ウマ娘でしたみたいなおチはないよな?」

「いや無い筈……だとしたら純粋な鍛錬でウマ娘確保するのもやばいか余計に……」

「だな……」

——ギニャアアアアアアアアアアアアアアアア!!!

第57話

「はい理事長、ご所望のニンジン盛沢山のケーキ」

「おおっ感謝!!待っていたぞヒビキ用務員!!」

その日、理事長室へと姿を見せていたヒビキ。目的は当然、理事長への差し入れ。

「もう、理事長またヒビキさんに無理を言っ……ヒビキさんだつて暇どころかお忙しい立場なんですから無理を言っっちゃ駄目ですって」

「いいっていいって。良い気晴らしにもなるし、それに心配しなくてもたづなちゃんの方もちゃんとあるよ?」

「まあっ本当ですか!?!つてんもう私が食いしん坊みたいな言い方しないでくださいってば!!」

「ごめんごめん、でも毎回俺のが差し入れ持つて行くとき、自分の分あるかな、あるかなって顔してるから」

アキラが目指す大人の女性、たづなは何処か少女のように頬を膨らませて抗議するがそんな物なんてヒビキにとつては幼い子供の癩癩も同然。あっさりと受け流しながらもカウンターを叩きこむと赤面しながら言葉を失うのであった。

「良きかな良きかな。提案、折角だヒビキ用務員も一緒に食べていくのは如何だろうか!!此方としては多くの仕事を押し付けてしまっている、故に理事長権限で休息を命ずる!!」

「あれま、そういう言い方されちゃったら従業員の俺は逆らえませぬええくたづなちゃんも一緒に食べよう」

「……はい、ヒビキさんが私をどんな目で見てるのか少しわかった気がします」

「可愛くて綺麗な美人ちゃん」

「そういう事をハッキリ言わないでください!!」

そんなやり取りをしながらも行われる事になったお茶会。理事長としても少々疲れしているので休みを入れたかったらしく、丁度良いタイミングでニンジンケーキがやって来て嬉しい限り。

「美味っ!!矢張りヒビキ用務員の作るケーキは絶品!!」

「本当に美味しいです、生地に練り込まれたニンジンとホイップに混ぜられてるニンジンの味が全然喧嘩してませんし、これ味も微妙に変えてます?」

「勿論。同じ味だと飽きるでしょ、生地には甘みが少し弱いけど味が強いのを、クリームには甘みが強いのを使ってる」

「なんと、実に手が込んでる!!」

来客用のソファに腰掛けながらも紅茶をお供にしながらもケーキに舌鼓する理事長とたづな、今回ばかりは何時でも理事長の帽子の上に居る猫も降りてきており、ヒビキの膝の上で作って来たチュールを舐めている。

「ヒビキ用務員、仕事は如何かな。此方としては有難い限りだが、既に忙しい身である筈なのに新たに仕事を押し付けてしまったが故に負い目しかない」

「今まではヘルプ待ちの待機時間持て余してたから、俺としては良いかなって思ってますよ」

今までだって基本的に用務員としての仕事は直ぐに終わらせてしまつて、その後は基本的に待機し続けていた身。鍛錬をするか、偶にご飯を食べに来るウマ娘達の為の仕込みをしておくか、晩酌用のおつまみを用意する位しかなかったのである種充実している。

「まあなんというか、声を掛けられる事は増えたねえ。担当やつて下さい！つて子が多い、ツインちゃんとか毎回毎回言ってますし」

「ああツインターボさんですね、何だか挨拶みたいになつてますもんね」

「そのつもりなんだと思うよ、なんというかああいう邪気が無いとちよつと気が緩んじやうだよねえ」

この前だつてテイオーとその同室であるマヤノトップガンに絡まれてヒビキ号遊び

をしたりしていた、存外自分は子供の相手の方が得意なのだろうかと思つたが、そりや10も年下のウマ娘達を相手にしているのだから当然だろうと思つたりもした。

「提案、ヒビキ用務員、サブトレーナーを務めて半年以上は経過しているが如何かね。メイントレーナーとして誰か一人を担当してみる気はないかな？」

「あゝ……やっぱ来ますよね、そういう話……」

紅茶を啜っていた時にやってきた話に思わず困つたような顔をする。復帰する時に分かつていたが、如何にもしっくりこない……というか、素直にどうしたらいいのかわからない。

「学園としてはこのままサブトレーナーのままでも構いはしない。だが、トレーナーの数が少ない現状をどうにか解決したいとも思っている」

「やっぱり資格が難しい上に、人格などに問題なしという制約がありますからね……ですけど、ヒビキさんには既に担当が居りますし、ねっ？」

何処か悪戯つ子っぽく微笑むたづなに苦笑すると理事長は自分の知らない話をして「いるのだ？」と首を傾げつつも既に担当が居るといふのはどういふことかと尋ねる。

「初耳、ヒビキトレーナーに既に担当が。誰かな？」

「担当つというのはヒビキさんの元カノさんらしいんです、アシタノユメという方なんですよ」

「ほほう、彼女か!!まさか彼女だったとは……驚愕」

「あれっ理事長ご存じ?」

まさか理事長が知っているのは予想外だったのか、素直に聞き返す。

「当然。ローカルシリーズで活躍していた彼女の事は良く知っていると、彼女の走りは酷く頑強で崩す事が難しいと話題にも上がっていた。指導役として中央に招こうとも考えていた」

「あいつを……そうですか、喜びますよ」

アスムは自分が思っていた以上に評価されていた、トウインクルシリーズに出る事は叶わなかったがそれでも懸命に走り続けた彼女の記録は誰かの記憶になっている。そう思うと如何しようもなく嬉しくなってしまった。

「しかし、アシタノユメとは驚き……いや、素晴らしい恋人!!話が無ければヒビキトレーナーのパートナーに立候補しようと思っていたのだが、これは入り込めそうにないな」
「ちよつと理事長そんな事考えていたんですか!？」

「無論!!今時、彼ほどにウマ娘達の幸せと笑顔を願ひ、力を尽くしてくれるような人格者はそうはいない!!」

「ハハツそう言つて頂けて嬉しいねえ」

「どうかね、今からでも」

「理事長!？」

「フフフツ冗談が過ぎますぜやよいちゃん」

軽く額を小突くと理事長はたはつと笑いだす、たづなは話を聞いているので少々焦ったがお互いに完全に冗談だと分かり切っていた故のやり取りだとホツと胸をなでおろす。だが目の前で堂々とこんな発言をされたら焦るのは自明の理だろう、そして紅茶を飲み切るとヒビキは膝の猫をやよいの膝の上へと移してやりながら立ち上がる。

「さてと、んじゃそろそろ仕事に戻りますわ。ウマ娘達の幸せと笑顔の為に」

「ウムツ!!」

「御馳走様でしたヒビキさん」

「お粗末様」

そう言つて部屋から出ていくのを確認してからたづなはやよいへと抗議の声を向けるのであった。スズカの一件で過去を話しを聞いているが故に口を出さずにはいられなかつたのだろう。

「理事長、流石に先程のは冗談でも不味いです。ヒビキさんは元カノって言つてましたけど復縁する気満々なんですから」

「たづなは話を聞いているのかアシタノユメ、アスムの事について」

「はい、以前サイレンススズカさんのお見舞いに行つた時に」

「そうか……彼女は幸せ者だな」

「ええ、そうですね」

自分にもあんな素敵な人が出来たらいいんですけどね、と笑っているたづなを見つてもそれには同意しながらある事を告げた。

「たづな、彼女の推薦があつたからこそ私は彼を雇つたのだ」

「えっそうなんですか!？」

「ウムツ。スカウトしに行つた時に自分よりも彼の方が優れていると逆に推薦されてな、その時には既に彼女は怪我をしていたのだが……彼の話をするときには酷く明るくなつていた事はよく覚えている。まあ結局用務員としてならつという事になつたが」

自分の知らなかつた話に驚いた、ヒビキがこの中央にやって来たのにそんな経緯があつたなんて……。

「酷く思い合っているのが良く分かつた、その時は酷く恥ずかしがつてどんな関係かは語つてくれなかつたのだが……まさか恋人関係だつたとは……」

「ウフフツお似合いの御二人ですね」

——もう、私の事なんて忘れて……響鬼さん、ごめんなさい。

「アスム、俺つてばどうしても忘れたいだわ」

第58話

今日も今日とて仕事を行っているヒビキ、ヒビキが入る前までは日によっては施設のメンテナンスの為にグラウンドなどの進入禁止が出されたりしていたらしいが、ヒビキが来てからは基本的にそれが出される事はなくなつた。何故ならばヒビキが修繕するから。良くも悪くもヒビキ頼みになつてしまいがちになつていたので理事長は用務員募集にも力を入れているのだが……充実にはまだ時間が掛かりそうである。

「はい、これで終わりつと。練習できるよ〜」

今日も芝の手入れを手早く済ませておく、最も消耗するのが芝コース。ダートに比べてもその消耗率は圧倒的、それだけウマ娘のレースの主流は芝という事になる。ヒビキとしてはダートのレースも好きなのだが……というか、アスムもダートの方の方に出ている比率の方が高かつた。

「悪いわねヒビキ君、緊急で出しちゃつて」

「いいのいいの、そういう時の為に用務員がいんだから」

「それで助けられてるのは事実なのよ、だから受け取りなさい」

「ハナちゃんつてばシリアスだよねえ〜もつとフランクで良いのに」

緊急の修繕要請を出したのはリギルのハナであった。教職員としても勤務する彼女としては出来る限り万全な状態で走らせて調整や向上を図りたいというのがある、勿論無ければ許容は当然するのだが……流石にそれを越えていたので出したらしい。

「んっく……いやあさすがにちよつと本気出したから肩が凝ったな」

「珍しいわね、貴方がそんな事言うなんて」

「昨日本気出してアキラを追いかけたからねえ、あいつパルクールで攻めるからちよつと昔を思い出してね」

先日の話はトレーナー全員の耳に届いている、ヒビキが期待の新星のライデンアキラがガチ逃げしたのにそれを確保したと。しかも、相手の行動を読むとかじゃなくて純粹な走力で追いついて確保したと聞いた時には流石に誇張させているだろうと思ったのだが……

「先日のあれは正しく驚天動地、ヒビキさんの力とは日々の切磋琢磨によつて紡がれた力なのだと分かりました。ですが、流石にウマ娘の全力に追いつくというのは驚きましたけど」

「そりゃ鍛えてますからっシユツ」

「いや、その一言で済ませるのは絶対に可笑いわよ貴方」

パルクールなのだから様々な障害を越えながら、故に全速力で常に逃げられた訳では

ないと思うが……それでも時速60キロを超えるウマ娘に追いつく時点で常識外れ。ルドルフから事実だと言われた時、思わず手にしていたペンを落してしまう程の衝撃だった。

「やつぱりそんだけ凄いなよ、アタシとタイマンしようぜヒビキさん」

「おいおいこれでもこつちは今少し草臥れてるんだけどねえ？」

「その位に疲れる奴には思えないけどな」

「いうねえナリちゃん」

リギルのヒシアマゾン、そして三冠ウマ娘の一角でもあるナリタブライアンに軽く煽られる。好戦的というか、強い相手と走る事に対してかなり情熱を燃やす二人としては自分の存在というのは一応それなりに気持ち昂ると言う事なのだろうか。それはそれで光栄のような気もしなくはないが……。

「とうかこつちはまだ仕事残ってるんだけどねえ……」

「アンタなら走った後でも十分終わらせられるだろ」

「ええつく……んじゃ今度、並走トレーニングに付き合っただけで事どうだい」

「よっしゃそれで手を打ってやるよ」

「最初からそれが目的だったなあ？」

僅かに笑いながらもひらひらと手を振って去っていく二人を見送るが、如何にも嵌め

られた感がしなくもないが……まあこの位ならばいいだろうと思う隣で溜息をつくハナ。

「悪いわね、話を聞いて走ってみたいって聞かないのよ」

「あの二人ならば当然だろう。当然至極、私も走ってみたいがね」

「皇帝のシンちゃんにまでそう言われるなんて俺もまだまだ捨てたもんじゃないね。肩が凝ったなんておじさんムーブしてる場合でもないか……」

少々疲れがたまっているような気もしなくもないが、病は気からという言葉もあるのだから気持ち強く保てばそんな物は消え去っていくのが世の理。実際問題この程度自分にとつて疲れには入らない、というか入ってたら鍛錬を毎日やってられない。

「あんまり無理はしない事ね、こっちの都合であなたが故障でもしたらトレセンのヘイトが一斉にリギルに向くわ」

「既に向いてるようなもんでしょ。客観的に見てもこのチームの面子可笑しいからね、何この面子ってレベル」

「褒め言葉として受け取って置くよ、それにそんな事を言うならばヒビキさんがリギルを越えるチームを作ってしまえばいいのでは？」

「おっと藪蛇だったかな」

ルドルフに言葉におどけつつも反応する彼に対して、ハナも続く。

「まあ実際問題、貴方がチームを起こしたら入るって子は多いと思うわよ。ウチからも付いて行くっていう子も出るかもしれないからトレーナーの個人的な意見としてはやめて欲しいって感じかしら」

「そんな子いんの」

「1番人気はブライアン、2番人気はヒシアマゾンと言った所かしら」

「ああ……何だろう、超分かる」

その選出には何とも言えない言葉を出すしかない、マジでありそうだから困るという人気予想に溜息しか出ない。

「私も誘いをかけて貰ったら千思万考すると思うよヒビキさん。今の内から勧誘してみるかいい？」

「おいおいおい勘弁してくれよシンちゃん、んな事したらハナちゃんに恨まれるってレベルじゃないよ」

「そうね、少なくとも叩き潰そうとはするわね」

「おは」

実際そんな事になる事はないし、ヒビキもチームを起こすなんて気はさらさらない。だが理事長の悩みでもあるトレーナー不足問題に関わらないというのも少々不義理のような気もしない事もないので何か考えて置かなければならない。

「取り敢えず——並走トレーニングに向けてちよつと本気で鍛え直すかな」
「いや上げるなら分かるけど直すってどういう事」

第59話

「ヨオツ!!」

「随分と気合入ってるなあおっちゃん」

「そうね、なんかヒビキさんだけ私より密度が高いって言うか……」

早朝の朝練、ヒビキのこなすメニューだがそれに付き合うウマ娘達よりも密度が濃くなっていった。というよりも今までやっていた物に戻しつつ、一部に修正を加えた物。相
当に熱が入っており、普段のヒビキとは思えない程に熱くなっている。

「ハアツ!!」

「おおっ……なんか、紅に入る時の修行みたいに気合入ってる」

「紅、って何だ? スカーレットになんのか?」

「いやそういう意味じゃねっすよゴル姉さん」

アキラ曰く、清めの儀式は基本的に特定の時期に行われるのだが、時折夏などの季節に行われる時がある。しかし、その時には更なる強い清めの音を発さなければならぬので鬼達は普段以上に自らの鍛錬を行わなければ儀式にもならない。そしてその為の修行を終えた時の気迫は正しく夏のような紅き闘志を身に宿す事から通称紅と呼ばれ

る。

「でもあそこまで鍛え直す必要あるのかなあ……おじ様、毎日鍛え続けてるみたいなの……というか何で紅に……」

「単純ツやるからには徹底的に!!」

「いや、今度は私達に走りて勝負するつもりですか。既に私に勝ってるのに」

そんな事を言われつつもヒビキは鍛錬を続ける、しかしそんな事を続けていたら――

「おい響鬼さんアンタ何やってんだよ!!」

当然京介が噛みついてくる。

「何って鍛え直してんだけど」

「鍛え直す程衰えても無いし寧ろ鍛え過ぎなのになんでだよ!!」

「鍛えてんのは精神の方、ちよつと生ぬるくなつちやつてるかなあと思つてさ」

用務員のガレージ、そこに組まれた石を脚の力だけで持ち上げていく響鬼に大声で京介が意見する。現状で既に鍛え過ぎの領域に入るのに何をやってるんだと言いたくなる鬼側の人間である京介。

「紅になつてどうする気だよ……」

「いやあ並走トレーニング頼まれちやつてさあ、そう言えばアスムと並走トレーニング

するときは何時も紅の気持ちでやってたなあって事を思い出したから、どうせならそこまで持つて行こうかなって」

「いや、肉体のレベルは既に紅の域だろ……それを越えてるかもしれないのに」

「だから精神テンションを戻してんのよ、我武者羅に鍛えて……鬼になって、あいつを支えようとしてた時に……!!」

如何足掻いても彼の中にはアスムが居る。彼にとつては今も彼女が自分の中心にいて、それに準えるかのような行動をとり続けてしまっている。自由に生きて欲しいと遺書に掛かれていたのに関わらず、自由が全くない生き方を貫き続ける。彼にとつて鬼とは彼女の為であり、鬼とは彼女を支えるための手段の一つでしかなかった。

「……響鬼さん、好い加減に誰か良い人見つけろ。そうじゃねえと行き遅れるぞ」

「え、誰がいるつてのよこんな鍛錬オタクを好きになる人つて」

「たづなさんがいるだろ」

「いやアスムの事の知ってるのに？」

「俺から説明する」

これは無理にでも女性を宛がうしかない、ヒビキを再度人間の領域へと戻すにはもうその手段しかないのだと京介の中で確信した。たづなには知られているらしいがどうせ詳しい部分なんて話していない筈だ。上手くこちらか伝えておけばいいだけの事だ。

「相手、相手か……なんか、もういいやってなっちゃったかな」

「下らねえこと言つてねえ見つけろ、孫位確り見せてやれ」

「うへえ……」

腑抜けた溜息を漏らしているが、この位は確り言わないと伝わる事はない。兎に角これで本当にハッキリしたのだから先代にも報告はしないといけない。

「いい人位いんだろ、何年ここで仕事やってんだよ」

「基本此処の職員と農家さんと商店街、後はそうだな……此処の生徒の御実家位かな」

「超名門含まれてませんかそれ」

「偶に居酒屋で飲むぐらいの仲だよ」

「何やってんだマジで」

曰く、気楽に飲める相手が欲しかったと言われる事が大半だったり学園内では家の子が頑張り過ぎないように見えてあげて欲しいなどの事ばかり。結局自分のプライベートルに關わるような事は一切無い。なので京介が望んでいるような事は皆無なのである。

「もうこの際、生徒でもいいから相手作れよ」

「犯罪になりそうだから遠慮したいよそれ」

「安心しろ、ウマ娘に關してそれ關連の法は緩い」

「うわ……全然嬉しくない情報ありがとさん」

そう言いながらも脚で持ち上げていた石を蹴り上げる、立ちあがりながらも石を受け止めながらそれを静かに置く。その行動は宛らもう十二分に鍛え尽くしたと言わんばかりのオーラを放ちながら。

「よしっ……漸く戻れたな、後はこれを忘れないだけだな……駄目だな、やつぱりあいつを何処か忘れようとしてたのか」

「——っ」

「大丈夫だよ京介、俺はずっとあいつと一緒にいる。だから心配すんな」

そんな風に笑い掛けながら、至った物と同じ色のジャージを身に纏いながらも響鬼は歩き出していく。それを見つめながらも京介は違うと否定する、だが言葉に出来なかった。変えなければいけないのに、魔人の領域の彼を、アスムが愛した人へと。だが……今の響鬼が如何しようもなく幸せそうな顔をしているのを見てしまい、言い出せなかった。

「クソツ……絶対に何とかしねえと……」

「よっナリちゃんにアマちゃん、約束果たしに来たよ」

「待ってた、随分と気合入ってるみたいじゃないか」

「そりやもう鍛え直したからね。何ならナリちゃんを抜いちやうかもよ？」

「——それはそれで面白い」

「アタシが居る事を忘れるなよヒビキさん、この場はそれぞれがそれぞれと戦うタイムだからな。負けないぞ」

「並走トレーニングだよねこれ、まあそれを望むなら——俺は臨もうかな？」

第60話

「——っ……」

「理事長、秋川理事長？」

その日、理事長である秋川 やよいは職務に励んでいた。元よりウマ娘の為ならば自腹を切つて設備の増強や機材購入などを積極的に行う彼女にとつて学園の運営という仕事はハッキリ言つて苦痛などではない。寧ろ使命感やこれこそ生き甲斐というレベルの物である為、基本的に仕事は一切滞る事が無い、勿論部下に仕事を押し付ける事なんて事もあり得ない理想の上司の鑑——なのだが、この日、たづなは初めてと言つても良いかもしれない程の光景を見た。仕事の手を止めてある資料に釘付けになつてた。

「理事長、如何なさつたんですか？」

「……っお、おう何かなたづな。謝罪、つい見入つてしまつていた」

「いえ、ヒビキさんから修繕箇所の見積もりが終了したのでその書類をお持ちしました」
「ウツウムツご苦労!!ヒビキ用務員にも確りと休んでもらうように言つておいてくれ!!」

「多分、無駄だと思いますよ。ヒビキさんったら他の用務員さんのお手伝いに行っちゃいましたから」

本当に助かりますよね、と問いかけてくるそれにやよいは何処かぎこちなく答える事しか出来なかった。たづなも普段ならば快活にウムツ!!と返すであろう理事長にしては反応が悪いと首を傾げてしまう。

「理事長、如何かなさったんですか。その資料を見てから如何にもご様子が……」

「……」

「り、理事長……!?!血がっ……!」

血が滲み出る程に手を握り締める、爪が皮膚を突き破って肉に食い込んでいくのを構う事もなく握り続ける理事長の手を強引に開かせながらもたづなは救急箱から薬や包帯を使って応急手当てをする。がそんな痛みなんて痛くもなかった、自分が行ってしまっていた行いに比べたら……無言のまま、たづなへと一部が血に染まってしまった資料を進める。

「あの、これは……」

「……アシタノユメ、彼女に関する事だ。桐矢研修生が提出してくれたものだ……」

京介はアシタノユメ、アスムの兄。だが何故今なのかとそれを見た時……言葉を決つてしまった、何故ならば……そこにあつたのはアスムが既にこの世に居ない事を示す

データが並べられていたからである。

「だって、ヒビキさんは……」

「……言える訳もないのも道理、やり切れる訳が無い……彼がトレーナーを辞退し続けた訳も分かる……それなのに……押し付けてしまった……」

自分を許せないように拳を振り下ろす、それにつられるように言葉を失い……それを落してしまった。自分達は何故、ヒビキがトレーナーをしたくないという事の理由に目を向けなかったのか、人が良く優しい彼が指導という立場に上がらなかつたのかも全て理解出来た。そしてどうして京介が中央に来たのかさえも……。

「沖野、トレーナーにお伝えしますか……?」

「今から伝えた所で、何が変わるのだろうか、いやだがこのままにも……」

「でも……」

「たづな、手始めに彼のスケジュールを見直す。いや、用務員だけではなく全職員のスケジュールをだ!!やれる事を全てやるぞ!!」

「はい、お付き合います!!」

「ヒビキさん有難う御座いました!!」

「ええよええよく何時でも相談しにきな」

ひらひらと手を振りながら相談しに来たウマ娘を見送るヒビキ、相談の内容は遠距離恋愛中の彼氏へのプレゼントの相談だった。何でも相手は大学生らしく、大人っぽくてカッコいい物を送って喜ばせてあげたいという事で大人の男である自分に相談に来たとの事。後、交際経験もあると聞いたから頼るになると思ったらしい。

「やれやれ、俺が言える事なんて何にもないんだけどあれで良いのかねえ」

まともなアドバイスなんて出来ずにボロボロだった様な気がするのだが……一先ず、年齢の割に童顔で大人っぽい物に憧れていると聞いたので自分が使っている持ち物を幾つかピックアップしてあげたら、目を輝かせてくれたが……あんなので良いのだろうかと不安しかない。

「俺にそんな事を言う資格なんざあないのにさ……」

「何の話か知りませんが、私個人としてはヒビキさんは素晴らしい人だと思いますよ」

「あらま、お世辞かい南ちゃん」

振り返るとニコニコとした温和な笑顔を浮かべた南坂トレーナーがそこにいた。何やら自分に用があるのだろうか。

「実はヒビキさんに折言ってお願ひがあるんですが宜しいですか？」

「南ちゃんがそんな事を言うなんて珍しいねえ……何だい」

「実はゼンガーさんの事にだったり、後個人的に少々お力添えしていただきたいんです。

これからお時間頂けますか」

「この後はスピカの皆の所に行っちゃうけど、それまでなら」

「其方でしたら沖野さんから許可をいただいてます、偶には休めですって」

「あらま、手が早い事」

それじゃあ断れないなあと思いつつも恐らく京介が手を回したんだろなあと思感する。どうせ、この前の紅の一件もあるから少しでも自分を休ませてやろうという魂胆があるのだろう。

「そこまで御膳立てされてたら、断れないねえ」

「それじゃあ行きましようか。最近美味しい居酒屋さんを見つけたんですよ、しかもお値段もお手頃ですし」

「いいね、偶には誰かの作ったご飯もいいよね、自炊してるとしみじみ思うよ」

「お話聞いて貰う立場ですし奢りますよ」

「そりゃ悪いよ、自分の分は出すよ？」

そう言いながらもヒビキは久方ぶりにトレセン学園の外へと南坂と共に出掛けて行く。そこでチーム運営の苦労話やら年頃の娘さん相手だから緊張するやらの愚痴やゼンガの事に関して相談を受けるのであった。

「(さて、これで良いとして……理事長は何を話すんでしょうか……僕がこの役なのも意

味があると言う事だとは思いますが……まあ、今はそれに徹しましょう（それでこの前なんてゼンガーさんの大声の影響で有望だと思つてスカウトした子がまた辞めちやいまして……）」

「あつちやあつ……そりや深刻だ……」

「はい……私としてもそこが彼女の長所で伸ばすべき所だという所は理解しているんですが……」

「何やら役割があつたとの事だが、途中から完全に愚痴になつていたのは言うまでもない。」

「——分かりました理事長、こうなつたのも俺がとつつあんを誘つたせいです。全力で協力させて貰います」

「当然私も。見過ごせないわ」

「俺もだ、おやつさんの為だ」

「感謝!!」

招集された沖野、東条、黒沼の三名はやよいとたづな、そして京介からある話を聞かされた。様々な反応を見せつつも全ては一つの方向へと収束していった。

「だけどマジか……そんな事になつちまつてたなんて……すまん全部俺のせいだ!!」

「いや、思う所はあるけどあのおつさんのせいだ。何時までも一人で抱え過ぎてるから

こうなつた」

「でもこれは……抱えるな、という方が無理よ」

「だな……最早トラウマなんだろうな」

今回ばかりは大きく頭を下げた沖野をフォローする兩名、京介自身もそれは分かっているのか沖野については言いたい事もあるがそれを飲み込む。響鬼はその肉体と同じように極めて堅牢な要塞のような精神状態にあるがその実は酷く脆い。それが崩れる前に何とかするというのが話の趣旨。

「とつつあん……アンタ、マジで壊れるぞ」

瞳を落した先にある渡された資料、そこにあるのはアシタノユメの全てがあつた。どんな人生を送つて、どんな風に絆を響鬼と深めたかさえも詳細——そしてその最後に ついても……アスムは唯亡くなつた訳などではない——アスムは……自ら命を絶つたのだ。

第61話

「とつつあん、合コンいかね」

「何よ急に。行くなら行くでまずはセクハラ癖を直すところからスタートだね」

「グフツ……」

唐突に合コンの誘いを掛けられるヒビキだが、それを一蹴しつつ逆にカウンターを仕掛けて沖野の胸を抉るのであった。

「いやよ、知り合いの付き合いで行く事になったんだけど欠員が出てよ。だれが代わりいないかって言われてさ」

「それ俺って訳かい、合コンなら若い子でしょ。南ちゃん辺り誘えばいいじゃない」

「用事あるつてもう断られてんだよ」

「そりゃ残念、勿論俺も断るから」

「えっ」

何処か未練がましく此方を見つめながら行こうと誘つて来るのを受け流しておく。

「いいじゃねえか、とつつあんだつて見た目は若いしイケメンだから人気になるぜ？」

「別に俺は人気になりたいなんて思った事無いし、女性陣がワイワイやりたいなら裏方

に徹する方が好きなんだよね。という訳で行きたきや別の人とどうぞ〜」

そう言いながらさつきと立ち去って行ってしまうヒビキを見送る事しか出来ずに思わず舌打ちと共に指を鳴らす。先日、理事長に呼び出された際に協力を求められたそれに沖野は積極的に協力するつもりでいる。元々自分がトレーナーにもつとも誘っていたのだから、自分が何とかしなければいけないというのもあったのかもしれない。

「つつてもなあ……如何すりやいいんだよ……」

ウマ娘の指導以上に難しい案件だと言わざるを得ない。自分以外にもリギルの東条に黒沼、そして南坂も協力してくれる事になっているのだが……如何すれば良いのか今の所検討すらつかない、それなのに時間も余り残されていないのもあった。

「んで如何だった」

「梨の礫だ、やんわり否定されるついでにディスプレイされたわ」

「だったら少しは直しなさい」

夜、行きつけのバーで酒を飲みながらも進捗状況などを報告しながらも作戦会議のよいうな物をしている沖野、東条、黒沼。南坂には相談という名目でヒビキを飲み連れ出して夜の鍛錬をさせないようにして貰っている。

「実際さ、とつつあんの気持ちは俺も分からなくねえと思うんだ。トレーナーとウマ娘がそういう関係になるってのはぶっちゃけ其処迄珍しくはないだろ」

「まあそうね、特に担当とマンツーマンの場合はそれが多いというのも聞くわ」
「年頃の娘相手だからな、そうなくても可笑しくはないからな」

実際、トレーナーの数が深刻というのもその辺りの事が問題だったりもするのである。ウマ娘達側からすれば3年という自分にとつてかけがえのない時間の間の中で自分の為に力を尽くしてくれたトレーナーには並々ならぬ思いを抱く子は多い。そして競争心や闘争心が強いので、それらと結びついて他の子には渡さないという考えに及ぶものも多い。

「とつつあんの場合は幼馴染な上にずっと一緒に頑張つて来た訳だろ、それがさ……大怪我した上で……」

「辛かった、なんて言葉じゃ語り切れないわねきつと」

トレセン学園のそれとは比較にならない程に時間による積み重ね、絆がそこにあった筈。それが突然失われてしまったのだ、残された者が狂ってしまったとしても可笑しくはないとさえ思える。

「だからこそ……とつつあんに新しい相手を宛がうとかムリゲーだろって思う」

「俺はずつとあいつと一緒にいる、か……おやつさんらしい言葉だ」

「女としては一度でいいから言つて貰いたい言葉ね」

これ程までに思われ、思い合った関係であるヒビキとアスム。最高のトレーナーと最

高のウマ娘の關係性の事を指す人《font:ul40》馬《font》 一体の言葉に正しく相応しい。

「だが如何する、ハッキリ言つて俺達がどうだ言つて聞き入れるとは思へん」

「そうよね……聞き入れるなら、桐矢君の話でどうにかなる筈」

「———いっその事、強引にやらせてみるつてのは如何だ」

強引という言葉に沖野と東条は黒沼の方を見る。強い酒をグイッと飲み干しながらもお代わりを注文しながら、その心中を語る。

「正直此処まで来ちまつたらもう実力行使か強引な手しかない、だったらもういっその事———しかないだろ」

「だけどうやんだよ」

「幸いな事に、おやつさんはウマ娘の名家とも繋がりがある。メジロやシンボリ、ナリタやエアつていうデカい家にも顔が利く。そこらに協力を仰ぐのは如何だ」

かなり大体な発案だが、悪くはない案だと東条は思う。多少強引にも話を持って行かないと死者にしか目を向けない彼の認識を覆す事なんて到底無理だろう。

「だけど協力してくれんのかつて事もあんだろ」

「大丈夫でしょ、少なくともヒビキ君はメジロ家の御当主様とはお茶するぐらいの仲よ」
「とつつあんどんだけ」

以前聞いた話では、メジロライアンのトレーニングに付き合っていた流れでマツクイーン、ドーベル、パーマー、アルダン、ブライトといったウマ娘達とも仲良くなっている気はないかとも言われた事があるとか。今でも時折メジロ家には顔を出すらしい。

「俺からも桐生院に話を通しておく、あいつもあいつでおやつさんには世話になってるらしいからな」

「よし、何とかやってみつか……大変そうだけど」

「三冠ウマ娘を育てるより難しいわね」

「だな、まあこれも一つの経験で人助けって奴だ」

そんな事を言いながら最後にお代わりを皆で注文して乾杯するのであった。

第62話

「よし今日はこのあたりにしておこうか」

「はい分かりました」

「スズカさんお疲れさまでした!!」

ヒビキの下で彼お手製のメニユーに取り組んでいる二人のウマ娘、サイレンススズカとスペシャルウィーク。一方は自分専用に残んでもらったりハビリメニユー、もともと走りを取り戻す為にスズカは真剣、真面目にこなし続けている。そしてスズカは同室としてスズカの付き添いとしてヒビキのもとへと来ながらも、次のレースに向けて厳しいメニユーをこなし続けていた。

「スズちゃんの足も大分回復してきてる、これなら近い内に復帰戦の目途も立つだろうな」

「本当ですか?! 良かったですわねスズカさん!!」

「ええ、ありがとうスズちゃん」

同室であり憧れの存在でもあるスズカの回復が極めて良好だとわかるとそれを我が事のように喜ぶスズペに思わずニコやかな笑みを零してしまう。それに釣られるように

ヒビキも笑みを零すのであった。

「さてと……お昼の時間か、俺が作ってあげよっか」

「お願いします!!」

「もうスペちゃん……すいません、ヒビキさんご迷惑でなければ宜しくお願いします」

「この位なんて事ないよ」

用務員室へと二人を上げつつも前以て仕込みをしていた物を仕上げていく、本日のメインはウマ娘達に大人気のニンジンハンバーグ。副菜にサラダにニンジンポタージュなども完備している。既に香ばしく食欲をダイレクトに刺激し続ける香りに涎が溢れ出て、腹の虫がまだまだかど騒ぎ立てている始末。そんなスペにスズカは苦笑しつつも抑える。

「もうちよつと待ってねえ、ハンバーグって美味しいけど焼きあがるまで時間がかかるのだけが難点だよな」

「で、でもそれを待った末の味が格別なんですよね……!!」

「分かっているねえ、スペちゃん。今ニンジンの方も煮込んでから待つてね」

現在、ニンジンハンバーグのニンジンの部分も同時並行で仕上げている。ウマ娘向けに品種改良されたニンジンが無塩バターを溶かした鍋に塩コショウを加えてニンジンに弱火で煮込んで柔らかくする。これで丁度ハンバーグが焼きあがる寸前に箸で割る

事が出来るほどに柔らかくなのである。

「あのヒビキさん、実はお聞きしたい事があるんです」

「んっ何スズちゃん。お代わり可能かってこと?」

「あつ私気になります!!」

「い、いえそういう事じゃなくて……」

平常運航な食いしん坊なスベを諫めつつも以前からずつと聞きたかった事を尋ねる。

「ヒビキさんは如何して、こんなにもリハビリにも精通してるんですか。やつぱりトレーナーさんの資格を取ったから、ですか?」

「それもあるけど、まあ俺が一番怖かったのが怪我だからかな」

「ヒビキさんが怖かった、ですか?」

アスムのトレーナーとしてだけではなくヒビキ個人としても怪我というものは怖かった。それが一番の理由だった。

「俺自身、ウマ娘を幼馴染として持った身だし色んな場面に出くわしたりもした訳よ。目の前で怪我するのも見たけど、やつぱり自分自身で怪我した時にアスムの顔が真っ青になって大慌てしたんだよ。だから怪我っていうのは自分だけじゃなくて周りも心配させるんだなって事を凄く実感したんだよ」

まだ幼い頃、鬼を襲名する前にアスムと共に出かけている頃の事。ヒビキは自転車で

走るアスムに着いて行っていたのだが……流石に限界もありかなり置いて行かれる事になった。それを無理に追い付こうとスピードを出した結果、バイクと接触事故を起こしそうになって転倒、膝を負傷してしまった。

「ええっ?!大丈夫だったんですか?!」

「今もその痕が残る位の怪我だったけど、直ぐに治ったよ。それよりもずっと心配して、自分のせいだつて泣くアスムの顔の方が辛かったかなあ……だから思ったのさ、怪我をしないようにしよう、もししてしまった時の為に備えようつてさ。アスムの奴もオーバーワークしがちだったからそう思ったのは正解だったねえ……」

自分の行いから来た事だが結果的にそれは良い教訓にもなった、それから体調管理などにも気を配るようにもなった。それはアスムのトレーニングにも大いに生かされた、文字通りに手痛い出費ではあったが良い結果に結びついた。

「へえっ……だからスズカさんが骨折した時も直ぐに来てくれたんですね」

「まあそういう事、それもあるけどレース中の怪我つて聞いて如何しても重ねちゃつてねえ……」

「あと一つ……あの、何か私達に隠してませんかヒビキさん」

「っ——!!」

余りにも唐突な質問に目が点になる、それはどういった意図を込めての物なのか、何

について言っているのかと一瞬考えるが直ぐにお道化たように笑って見せる。

「うゝんまあ正直色々隠してるね、おじさんのプライベートはトツプシークレットレアだから」

「いえそういう事ではなく……その実は神社の時に私見たんです、その……」

「もしかして、あのスズカさんそれってウマ娘じゃありませんでしたか」

「スぺちゃんも、見たの」

どう言語化したものかと迷っていたスズカに同調するかのようにスぺもそのことに言及した。自分が見た炎の中で鬼へと変じた響鬼、その傍に居続けていた一つの影のように薄く、だが確りと傍に寄り添い続けていた存在。明言出来なかったが、その言葉も聞いてあれは間違いなくウマ娘だと理解した。

「ヒビキさんの隣で何ていうか……ちよつと寂しそうな顔をしてたっていうか、それでも嬉しそうっていうか……そんな感じでした」

「……」

「ヒビキさん、そのもしかしてなんですけど……アスムさんって——」

「ああ、もういない」

自分でも驚いてしまうほどに滑らかに言葉が出てしまった、その言葉を吐き出してしまった意図が自分でも理解できない。だが、それを聞いてスぺは言葉を失いながらもこ

ちらを見据え、スズカは凜とした表情で見続けてくる。アスムに似た姿をしていたウマ娘とアスムと同じような状況に陥ってしまったウマ娘——中々如何して不思議な巡り合わせをしていると思わざるを得ない。

「話さなかったのは悪いとは思ってる、だけどあそこで話すのもって思ってた……」

「あの、こんなことをいうのもどうかと思いますけど、聞かせてもらえませんか。今のヒビキさん凄く辛そうです、無理をしているって感じがすごくて……」

「無理をしている、か……あいつが居なくなってから、無理してない時なんてあったかなあ……」

遠い目をしている、まるで今この世界に彼の魂はないような有様にスペとスズカは酷い寒気を覚えた。彼の魂は今どこにあるのか、黄泉にあるのではないかと思えるほどに遠く、虚ろな瞳をしまっている。

「……ごめん、気にしないで……なんて無理か。おじさんの昔語りになっちゃうけどいいかい、面白味なんてないよ」

「聞かせてください、ヒビキさん」

「私もです」

「……俺が鬼になったのはあいつを支える為だった、だから努力して鬼になった。でも、もうその理由がない。だけどそれで捨てられるほど鬼は軽いものじゃない……俺に

とつて鬼は——アスムと俺を繋ぐ物だから」

第63話

—— ねえねえっ一緒に走ろ!!

—— はいはい全く、他のウマ娘と逃げればいいのになんで俺誘うかな。

—— だって皆直ぐにもう走れないっていうんだもん。

最初は酷く当たり前の関係だった。当たり前の幼馴染の友人、家が近かったなんてそんな理由で遊ぶようになった当たり前の子供だった。良くも悪くも田舎だったから子供の数はそこまで多くなかったので必然的に距離は近くなった。そして——アスムは誰よりも走る事を楽しんでいた。

「走る事を、ですか?」

「ああ、先頭でいる事に拘るスズちゃんは今思えば似てたな。でも単純に走る事を誰よりも楽しむ奴だった」

確かにスズカとも似ている、先頭の景色を譲らないという思いを抱きある種の執着を見せるスズカと走ると言う事に対して至上の喜びを見出して走り続ける事を望むアスムは似ていた。

「あいつ程、走るのを楽しそうにするウマ娘を俺は見た事無いな……」

「そんなに……私も走るの大好きですよ、それ以上って……」

「前にオーバーワーク云々は話したと思うけど、それは詰まる所それなのさ。食事時と寝る時以外は走ってるような娘だったよ」

「それは、凄いですね」

単純に走る事が好きだった。その欲求は誰よりも強かった、恐らく今活躍ウマ娘の中よりもずっと……それ故に傍にいた数少ないウマ娘達もアスムの走るペースに追いつけずに徐々に離れていった。スピードこそ平均だが異常なのはその運動量、平気で数十キロを走るようなウマ娘に並走出来る存在なんていない——ただ一人を除いて。

「流石に俺は自転車だったけど、それでも辛かった。それでももう気合でついていったね、それで一回神戸に行った時はもうね……マジかって思ったよ」

「あの、それどつちに驚いたらいいんですか？アスムさんの方ですか、それともついていったヒビキさんの方ですか？」

「私もスベちゃんと同じ事思いました」

「両方じゃね、今思うとながら何やってんだって思うもん」

走る事が好きだった、そして——自分はそのようなアスムの走る姿が好きだった。なんて楽しそうに、嬉しそうに走るんだと思った。嬉しそうな笑顔が好きだった、共には

知ってくれると知った時の笑顔が好きだった、走り終えても一緒にいる自分に向ける笑みが好きだった。だから決意した。誰も彼女に共に走れないのであれば自分が共に居よう。

「本当に単純だった。おっと笑うのは勘弁ね、俺だつて子供みたいな理由だつたつて思つてる」

「でも、その理由だけでヒビキさんは鬼になつたんですよね」

「雷電一家に語り継がれる存在の鬼、それは人間を越えてウマ娘にも匹敵するかもしれない人たちの事だった。だからそれを目指そうつて思つたんだ、鬼になればアスムを支えられる、一緒に居られるつて……てね」

本当に子供のような理由だと、スベとスズカは思つた。極めて単純で短絡的な理論だ、子供でなければ出来ないすら思えないそれ。だが普通ならば出来る訳もない、唯の人間がウマ娘と同じ土俵に立つなんて到底無理な話だからだ。正しく荒唐無稽な絵空事。

「でも虚仮の一念つて奴かな、俺は周りの子供処か周囲の大人よりかは根性があつたから必死に鍛え続けた。毎日毎日、アスムと一緒に走りながら鍛えまくつた。鍛えて鍛えて、鍛えまくつて16の時に俺は——鬼として認められるまでになつてたんだ」

夢中になつていた、ずっと抱き続けて来た夢の中に居続けた。そして、青年になつた

頃の事、夢は唐突に現実になっていた。家族から言われた。お前は鬼に相応しくなった、鬼を継ぐかと——そして過去の自分（響）は今の姿（鬼）へと変じていた。

「でも、鬼になるのって凄い大変なこと、なんですすよね……？」

「そうだね。なろうと思ってもそう簡単にはなれるもんじゃない。基本的には確りとした師について、指導を受けて、道を間違えながらも前に進んで漸くなれる存在が鬼」

「ヒビキさんはそれになった……独学で、しかも16歳で」

「全く以て若さって奴は恐ろしいよ、辛くなかったんだ。アスムの為について考えてたら、もしかしたらその時から俺はあいつに恋をしたのかもね」

愛は全てを凌駕するとしても言いたいのか、照れくさそうに語るヒビキ。確かにそうかもしれないが、ヒビキがアスムへと向ける想いは純粹で強く、大きな物だったのだろう。「鬼として認められても、俺の毎日は変わらなかつたよ。アスムに付き合つて毎日毎日、あいつが満足するまで走つて、あいつが俺の鍛錬に付き合つたり……今思うと世間様が思うような青春とは随分とかけ離れていた日々だった、でも凄く楽しかつたよ」

過去の思い出を語るヒビキの表情は、凄く晴れやかで嬉しそうだった。自分達も見た事が無いような笑みを浮かべる姿に言葉が見つからない、彼にとつては今よりも過去の方が余程幸せだったのだと思ひ知らされたような気分になつてしまつた。

「それからは、本格的にあいつを支える事を考えるようになった。あいつは次第にレ-

スでも走ってみたいって思うようになった、理由は単純でレースで走る姿だつて俺が好きだつて言つてたから。どんな場所でもあいつの笑顔が好きだつたからね」

「それでトレーナーの資格の勉強を……？」

「そゆこと」

トレーナーを目指す、言葉以上に難しいが身体を鍛える事も頭脳を鍛える事も同じだと言わんばかりに響鬼は知識を蓄え、どんどん大きくなつていた。それこそ、実の兄である京介が焦りや嫉妬を覚える程に。そして大学、遂に念願の資格を取得して本格的に彼女を支えた。ローカルシリーズでの出走ばかりが続くが、それでもアスムの走る姿に魅了され続けていた。アスムも魅了される自分を見て満足そうだった。

「中トゥインクル央ローカルだの地方なんて如何でもいい、唯走ればいいつというスタンスだったから」

「ちよつと分かるかも……」

「それはスズカさんだからと思います……」

「それには同意」

そうして響鬼とアスムは走り続けた。あの時こそが一番の幸せの絶頂だったのだらう、トレーナーと担当という関係になつて直ぐに恋人としての関係にもなつていた。当然かもしれない、彼女を最も理解して傍に居続けたのは家族ではなく、自分だったのだから。正しく究極的な相棒を得たアスムは水を得た魚。更に走りへと没頭するように

なっていた。

「本当に、お互いがお互いを引き出す関係だったのかもね……俺はアスムの走る姿が好き、アスムは自分を見る俺が好きだったんだ。だからずっと一緒にいた」

幼い頃に思った事、傍に居続け支える。それを叶える事が出来ていた、そう語るヒビキの表情は酷く自罰的な物だった。客観的に見ればこの関係は酷い共依存の関係にあつた、互いに支え合っていたのではない、互いが互いを支えなければ立つ事も出来ない状態に等しかった。だがそれに気付けぬまま、二人は走り続けた。終わる時まで終わらぬと、そんな事を何処かで想いながら——だが、それはあつけなく崩壊したのだ。「でも今は違うつて事で察する事は出来るよね。唐突に来たんだ——終わりつて奴が」

余りにも突然に来た。レース中に起きた落蹄、それがアスムの頭へと激突した。奇跡的に頭蓋骨などに罅は入らなかつたが、それでも多量の出血をしていた。視界が全て真っ赤に染まり何も見えないと言つても過言ではない状況で、彼女は走り続けようとしてしまった。理由など一つしかない——

——響鬼さんに私の走る姿を見て欲しい……!!

そんな理由で走ろうとした。だが……走り続ける事が出来る訳もない。何も見えな
い状況でコーナーを曲がり切れる訳もなく、アスムは投げ捨てられた玩具のように転げ
回りながら転倒してしまった。

第64話

「あの日、俺は家の用事で外せなくてアスムのレースに同行出来なかった。一緒に居れたら……いや、何も変わっちゃいないだろうけど……」

如何しても外す事が出来ない用事があった、雷電一家としての役目もあったのでレースには行けなかった。その時に舞い込んできた凶報に頭が真っ白になった、アスムが運ばれた、頭に蹄鉄を受けた、その後には勝手に横転したなどの情報を伝えられるがうまく処理できずにいた。そんな時に、自分を殴って正気に戻してくれたのが斬鬼こと蔵王丸だった。

「確りしろ響鬼!!お前は早く病院に行け、俺達の事は気にするな」

「えっあつ……」

「恋人に寄り添え」

その言葉を受けて、響鬼は直ぐに病院へと向かった。焦る気持ちを抑えつけながら、病院へ飛び込んだ。そして、案内された病室に居たのは……全身傷だらけになった身体を包帯で隠しながら静かに眠っているアスムの姿だった。

「アスムッ……」

「響鬼、さん……如何して……」

思わず口にした言葉に反応するように、目を覚まして此方を見つめて来たアスム。彼女は信じられない物を見るような顔を作っていた、それに安心させようと出来る限りの笑みを作りながら椅子に腰掛けながらその手を取った。

「お前の事なんだ、俺が来ないなんて事がある訳ないだろ」

「……うんそうだな」

視線を逸らすようにしながら頷いた。逢いたかった、逢いたくなかった、そんな複雑な心境にあつたアスムは素直に顔を見る事も出来ないような精神状態だった。

「悪かった、やっぱり無理してでもお前の傍に居るべきだったよ」

「無茶、言っちゃだめだよ……鬼としての事もあるんだから……」

「そうだな」

「それに——響鬼さんが居ても、何も変わらなかったよ」

「……」

何処か、鋭い言葉に何も言えなくなつた。あの場に自分が居て何か変わっただろうか、いや何も変わらなかつた筈だ。不幸な巡り合わせとしか言いようがない事故を如何やって響鬼の力で回避しろというのだろうか、出来ない事を言うなど言いたげなそれに僅かに胸が痛くなつた。

「聞いた時、心臓止まるかと思った。何で止まらなかった」

「……走りたかったから、それだけ」

「嘘つけ」

「ホントだよ」

そっぽを向いたまま、走りたかった走ったと応えるそれを嘘だと一蹴する。いや、本当ではあるのかもしれないが恐らく違う、きつと自分の為に走ろうとしたんだという事は分かっている。何年も一緒に居るのだ、この位分らない訳が無い。

「寝かせて」

「寝ていいよ」

「一人にして」

「俺が居ちや邪魔か」

「邪魔」

嘗てないほどに荒れている。当然か……と思わず視線を落とす、その先にあるのは入念に処置が成されて動かないようにされている両脚がある。両脚共に粉碎骨折、両脚へのダメージは尋常ではなく日常生活は送る事は出来るが……走る事は絶望的だと言う話を此処に来る前に担当医師から聞かされた。

『走る事が絶望的って……』

『単純に走る事が出来ません、ウマ娘としての走りではなく我々のような一般的な人間の走りさえも……出来て早歩き位でしょうか……』

其処まで酷いのか、それじゃあもうアスムは走れないじゃないか、何より好きだった走るといふ行いそのものを剥奪されてしまったという事じゃないかと放心状態になってしまった。そしてそれはアスムも当然分かつている事……あんな事になったのだ、自分の身体がどんな状況になってしまったなんて分かり切っている。

「分かった、アスム今日の所は帰るよ。今は良く休むんだぞ」

気持ちの整理も必要だろう、何時の時代も心の傷を癒す事が出来るのは時間と決まっている。家族や恋人というのは切つ掛けに過ぎない、今の自分はそれになれない事は唯分かった。故に立ち去ろうとした時——上着の袖を摘まむようにしてアスムが止めた。彼女を見ると……くしゃくしゃになった顔のまま、涙を流したまま無理矢理で作った笑みで問いかけてくる。

「私、響鬼さんみたいになるから——鬼になるから、だから……」

今、此処で離れたらもう会えなくなると思っている。だから必死に言葉を紡いでいる、隣に居たい、そんな思いを形にして必死に問いかける中で——猛烈な自己嫌悪に襲われながらアスムは手を放して……

「ごめん響鬼さん……私、走れなくなっちゃった……」

「——心配するな、だから……今は確りと休むんだ。いいな」

子供に言い聞かせるように、頭を撫でてやりながら響鬼は額にキスを落とす。そしてアスムにまた今度、見舞いに来ると言い残してその場を去った。兎に角、彼女には心の整理を付ける時間が必要だと思った。幸いにも入院なのだからそんな時間はある、だから今はその流れに乗せてやろうと思った。

「——さいてえだ……私って……」

残されたアスムは唯一人残された病室の中で涙を流し続けていた。自分は先程なんて言った、鬼になる？ふざけるなそんな軽々しく言っていない言葉なんかじゃない、あの人に邪魔だと言っておきながらその次に出た言葉がそれかと、次々と自分を自分で責め立てていく。

「もう走れない……もう響鬼さんと一緒に走れない……響鬼さんの好きだった、アタシになれない……アハハッだからあんな事を言ったの……」

涙に紛れながらの言葉は酷く、重く、冷たく、自分の心を抉っていった。ウマ娘としての全てを失い、愛する人の好きだった自分にも戻れない、それでいながら愛する人が至った鬼という物すら侮辱した……何て愚かで卑しくて、寂しい事をしてしまったんだろう……。その時から、アスムの世界から色が消える。そして同時にまだ無事であった筈の両腕にも痺れを感じるようになってきた。

「滑稽ね……走ればいいって思ってた結果がこれなんて……そんな私が——あれ、今なんて思つて、あれ……えっ……如何、いう事……？」

何かを失つた、今そんな実感があつた。記憶が収められたページ、その一部が欠けたかのような感覚に陥つた。身体が奥底から冷えていく感触を味わつた直後、何を忘れていたかを思い出した。鬼、鬼とは何を指すのかを今……忘れていた。

「いや……私が、私じゃ無くなつてく……？」

絶望は連鎖していった。頭部に蹄鉄を受けた直後に転倒した事によつてアスムはセカンドインパクト症候群脳震盪を起こし、回復しないままもう一度脳震盪を起こす事で起きる症状。に陥つていた。身体の痺れや記憶障害がその身に起き始めていた。そして記憶障害はアスムのこれまでの人生を奪い始めていった。

「アハ……響鬼さんを忘れるなんて、絶対に嫌……絶対に……」

既に彼女の精神はボロボロになつていた。正常な思考力も殆ど失いかけていた、何時、記憶が消えるかも分からない状況がこの先も続くのかという事がアスムの精神を一気に破壊していく。そして彼女は——

「私の事は、忘れて……自由に生きてください」

自ら命を絶つた。愛する人の事を唯只管に思える自分のままで。

第65話

「——それが俺とアスムの最後だった。次に会った時はあいつはこの世にはいなかった」

それが話せなかった響鬼の真実だった。最愛の恋人はレースで負った症状によって記憶障害までも併発していた、唯ウマ娘としての生命を絶たれただけではなく恋人としての自分すら失いそうになっていた事に耐えきれなかった。故にその前に自ら命を絶ったのだ。

「そんな……」

「あ、あのえつと……」

言葉が出ない、決して軽はずみな気持ちで聞いた訳などではなかった。彼女たちなりに確りとした気持ちを作って問いを投げかけたつもりだった。だが……これは余りにも予想していたよりも重い内容だった。もしかして事故か何かで……という事ぐらいしか思っていないなかった、それよりもずっと……。

「あの時、あいつを一人にしちゃったのが俺の失敗……だったのかな。寄り添ってやってれば、違った結果だったかもしれない……」

意味の無いIFを思わず口にする、それはレースという勝負の舞台に上がっているスズカとスベが良く分かつている事だ。あの時、仕掛けるのが遅かったのかでは。もっと早く仕掛けていれば……大外枠でなければ……そんな考えが無い訳じゃないが、それを覆して行くのが自らの鍛錬、そしてそれを受け止めるのがアスリート。

「じゃあ、如何して、ヒビキさんは今も鍛えてるんですか……だってもう、鍛える意味なんて……」

「スベちゃん……でも、うん私もそう思います」

酷く言いにくそうだが、スベは意を決してそう問い質した。正直言ってもう鍛える意味なんてもうないのだ、最低限、鬼としての衰えを見せない程度の鍛えだけをするだけで事足りる。それなのにずっと鍛え続けている、改めて自分達ウマ娘と同じ領域に立っているヒビキが異常に映るのだ。

「ないね正直な話。鍛えるのも辞めようって思った事もあったんだけどさ……何もしてない時の……如何しようもない虚無感と、なんていうのかな……足元が崩れて奈落に落ちていくような感覚があるんだ。俺の人生は本当にアスムと一緒にあった……だからだろうね」

響鬼のにとって鬼とはアスムと共に居る為のもの、それを失うという事は彼女との思い出を否定して唯の響になる事を意味する。唯響くだけで何もならず消えていく、それ

だけの存在に成り果ててしまう。

「鍛えてるとき、あいつと一緒に居る気がすんだよね。ずっと一緒に居たら……もう、あいつをそういう所にしか感じられない。薄情だよ、こんな俺って」

薄情とは違う、そんな別れ方をしているのなら何かで自分を埋めようとするのは当たり前だしその人を感じられるものがあるのなら当然のものとも言えるだろう。誰よりもその人を想っていたからこそ、ヒビキは鍛えているんだと分かる。それが歪であるという事も、二人には何となくだが分かる。

「薄情なんかじゃないですよ!!だって、ずっと想い続けてあげてるんじゃないですか、私分かりますもん。私も私を産んでくれたお母ちゃん、見てくれてるって思ってますもん」

「お母ちゃん」

「スペちゃんにはお二人のお母さまが入るんですよ、ヒビキさん」

スペシャルウィークには自分を産んでくれた母と育ててくれた母が居る。彼女には生みの親である母の思い出はない、だがそれでも二人の母を心から想っているし感謝している。そんな母の為に日本一のウマ娘になるという夢を叶えるために毎日を生きている、そんな自分の毎日を見てくれていると彼女は強く思っている。

「そうか、立派だなスペちゃんは……」

「ヒビキさん、後ヒビキさんの考えてちよつと失礼だと思ひます!!」

「——えつ失礼?」

「だって、アスムさんとヒビキさんを結ぶものつて鍛える事だけだったんですか? 他にもいっぱいあつたと私思ひます、ご飯食べたりとか、一緒に出掛けたりとか」

自分が母と一緒にした事を踏まえながらその事を伝えていく。彼女には母が居た、立派なウマ娘にする為に何だつてしてくれた立派な母が。そんな母との日々の中でももう一人のお母ちゃん存在は感じられていた。ずっと傍に居ると思う、だがヒビキは違う。鍛錬の中でしか感じられないと語り、そこにしかないという。彼女との思ひ出はそれしかないと言つているような物だと言われて、思わず惚けたように口を開けた。

「一緒に歩いたり、一緒に学校行つたり、一緒に遊んだり、一緒にご飯食べたりとか色々あつたでしょ。じゃあ鍛錬の時だつて事はない筈ですよ。だつて——じゃなきやヒビキさんが演奏した時にだつていない筈ですもん」

「——」

その言葉は、胸に染みこむようだった。不思議とジインツ……と胸にしみわたるかのように入り込んでくると、視界が全く違う物へと変貌していた。真つ白な世界の中に此方へと微笑みかけてくる一つの影があつた。

「アス、ム……?」

自分の言葉に微笑みで返しながら頷くのはウマ娘だった。身長は自分に及ばないがそれでも高身長、肩まで伸ばされた鹿毛に少しだけタレた目、走り続ける事でそれに最適化されたかのような他のウマ娘よりも何処かガツチリとしつつも長い脚。そう、アシタノユメがそこにいた。如何してそれが居るのか、何も分からない。

『ヒビキさん』

聞き馴染んだ声が聞こえる。手を伸ばそうとするが――

「あの、ヒビキさん？」

「ツ――あ、ああ……ごめんちよつと、ね」

不意に呼び掛けられて世界が戻る、スズカの少し強めの言葉で正気に戻った。夢なのか、という思いがある中で何処か不意に胸が軽くなったような気がした。何かが変わったのか、何も分からない。だが変化が訪れようとしている事だけが明確に感じ取る事が出来た。

「アスムを感じようとして、俺は……アスムを……フフツ……同じこと、か」
「はえ？」

アスムも後悔したのだろう、軽々しく鬼になると言う事を。そして自分も分かった、鍛錬の中にしかアスムを感じないなんて……それは何て愚かしい事だったのかと。なんだか、気が楽になったというか、少しだけ、前向きになれたような気がする。思いつ

きり頬を叩く。

「よしつ有難う二人とも、それとごめんねこんな話をしちやつて」

「いえ、寧ろ私達が強引に聞いてしまったような……」

「わ、私だつてヒビキさんのやつてきた事をその、無駄みたいな言い方」

「いや実際そうだったのかも、一緒か……そうだよ。俺が良い顔して笑つて、幸せそうにしてないとあいつも不安がるか……」

立ち上がつて鍋へと向かう、丁度ニンジンが良い頃合に煮えた頃だったのでタイマーを止めて最後の仕上げに掛かる。

「さあ、スぺちゃんにスズちゃん。今日は食べ放題だ、好きなかだけ食べて良いからね。今日はお祝いって事にさせてくれ、俺も今日は食べて飲むぞく!!」

「なんだかよく分からないけどやつたく!!」

「はい、お酌しますね」

第66話

「ほらほらもつと頑張る頑張る〜!!特にスぺちゃんには宝塚記念が近いんだからもつと頑張る〜!!」

「は、はいっ〜!!」

「スズちゃんも今日は少しペースアップしていいからね〜」

「はいっ!!」

スピカにとつては何時もの時間、ヒビキによる監修トレーニングの時間がやって来たのだが……如何やら普段とは少しばかり様子が異なっている。彼のメニューがキツイのは何時もの事なのだが……何やらそれらを取り纏めるヒビキ自身に何らかの変化が起きているのか、妙に気合が入っているように見えるのである。

「き、きついでよお〜……!!」

「ホラホラツテイちゃんも気合入れる〜!!無敗の三冠ウマ娘になるならこの位でヘタレたら憧れの会長にがっかりされるぞ〜」

「それはやだよお〜!!でもきついのも本当だよお〜!!」

「なんか、凄いヒビキさん生き生きしてない?」

「だよな……なんかあったのか？」

休憩中のスカーレットとウオツカは指導しているヒビキの態度の変化に目敏く気付く、何時もの優しさを帯びた笑顔なのは変わらないし言葉も変わらない。だが雰囲気というか何処か明るいような印象を受ける。特に見ている範囲がかなり広く、反対側を走っているスペとスズカの微細の変化にも気づいて口を出せている。

「も、もう無理いゝ……」

「よしよし、よく頑張ったねテイちゃん。はいご褒美のニンジンほちみー」

「や、やったあゝ……」

何とか走り終わったテイオーは思わず倒れこんだ。下半身強化を目的とした走り込み、しかも普段よりも重い蹄鉄を付けた上で腿を普段よりも高く上げる事を意識しての物。何時もなら楽勝で走り切れるが、ヒビキが例として実演した高さまで脚が上がっていないと直ぐに注意が飛んできて強制的に上げさせられるのである。

「休憩の後はジャンピングスクワットね」

「えつゝあれえ!?あれすつごい大変なのにな!？」

「だからやる価値があるんだよ、シンちゃんだつてこれは結構やつてるんだよ」

「か、会長も!?!じゃ、じゃあやるもん——もうちよつと休憩してから……」

「だから休憩の後で言ってるじゃない」

やる気を見せた直後にへなへなになって座り込むテイオーの頭を優しく撫でる。そんな所に戻って来たアキラは全身で息しながらの帰還。

「ゼエゼエゼエ……お、おじ様戻りましたあ……」

「お帰りアキラ、思ってたより遅かったね」

「む、無茶言わないでください……」

そう言いながら倒れこむアキラの背中からゴロンとリュックが地面へと落ちるのだが、それはドスン!!という大きな音と共に軽く地面に沈み込んでしまった。一体何キロになるのだろうかと思えるような重量の物を背負ったまま、ヒビキが良く鍛錬で使っている神社までランニングと参道をジャンプで往復して戻ってくるというメニュー。これも中々にきつく、体力根性おぼけのアキラでも根を上げる程。

「おっちゃんアキラが音を上げるってどんだけの重り持たせたんだよ……」

「普通の重りじゃないわよね……」

「そりやそうだよ、俺が今まで使ってた重りだからね」

よつ、そんな軽い声と共にリュックを持ち上げて危なくないように退かすヒビキだが、アキラの様子からとんでもない重さである事だけは伺えたが怖くて内容を聞く事は出来ない二人であった。

「ほれほれっダイちゃんとウオちゃんもそれ以上休むと毒だよ。君達は並走トレーニン

グだよ、但し勝ったら特製のドリンク」

「おっいいじゃん！おっちゃんのドリンク美味いもんな!!」

「あれ、でも負けたら?」

「これ」

そう言いながら出されたのは透明なコップに注がれる赤い液体、ニンジンジュースな
どよりもかなり鮮やかな色で一瞬美味しそうに見える——が、流れ込んでいく液体が
異常に粘度が高く、餡かけのようにゆつくりと降りていきコップへと溜まっていく様は
スライムを連想させる。しかも匂い自体はニンジンの強い旨味のそれなのが質が悪い。
思わず二人はそれに引いてしまう。

「な、何よそれえ!!?」

「匂いは美味そうだけど絶対に飲みたくねえ!!?」

「ゲエツおじ様それってまさかあ!!?」

「知ってるの(か)アキラ!?!」

それを見て悲鳴染みた声を上げて後退ったアキラに思わず声を掛けた、解説はよ!!と
言わんばかりにアキラは喜んで解説しよう!!と言いだしそうなものだが、今回ばかりは
引き撃った表情のまま語り出した。

「あ、あれは雷電一家に伝わる鬼育成において出される栄養補給飲料、だがしかしその実

は不甲斐無い鬼へと対して出され、栄養補給を済ませた後に更に厳しい修行を齎す最悪のお茶……名付けて——ペナル茶^{ティ}!!」

「ペナルティー!?!」

簡単に言えば、駄目な弟子に対して出されるお茶である。そしてそのお茶を飲むのが嫌ならもつと励め、でないとあれを飲ませてもつとキツイ修行だぞという警告を齎すと共に一番厳しい罰を意味するお茶。以前、伊吹と蔵王丸はこれを飲まされた上で先代に修行を付けさせられた。

「大丈夫、飲める味だし栄養は満点だから」

「そう言う問題じゃないわよおお?!?!?!」

「絶対飲みたくねえええ!!?!」

「それじゃあ並走トレーニングスタート」

「絶対に嫌だああああ!!?!」

と降ろされた手に共に駆け出して行く二人を見送りながらヒビキはペナル茶を一気に飲み干した、それにアキラは信じられない……と言いたげな顔をした。

「うそでしょ……おじ様、何でそれ飲めるんですか」

「^{オリジナル}原液のままな訳ないでしょ、確りとアレンジはしてるよ。じやなきやニンジンの香りなんてしないよ」

「あつそう言えば……という事は普通に美味しい!?」

「試してみる?」

「お断りします」

何処かで見たAAのような変なポーズを取ったまま、距離を取るアキラ。そんなに嫌なのか、鬼になる時にこれには世話になったのだが……味については自分だって大嫌いだ、これは改良品なので大分マシである。

「ヒビキさん、アンタ……何があつた」

「何よ、そんなに駄目かいペナル茶れ持ち出したの」

「いやそれもそうだけだよ……」

其処へやってきた京介はややげんなりした顔のまま物を尋ねて来た、内容は勿論——響鬼の変わりようだ。ハッキリとわかる程に変化がある、パツと見は分らない、それ程までに外面を整えるのは上手いのが響鬼だが……今の彼は全く違う。雰囲気や纏っている物が和らいでいるように見える。

「張り詰めてた風船みてえだったのに……何やった」

「別に……強いて言えばそうだね……」

「言えば何だよ」

「ちよつと余裕を持つ事にしたのさ」

余裕を持つ、それは結構な事だがそれだけでこれだけ変貌する物だろうか。唯只管に自分を虐めるといふ名の鍛錬の渦に居た男が、穏やかな川の中に立ったような変貌を如何やって遂げる。足を踏み外せば、少しでも流れに身体を持っていかれたら文字通りの魔性の存在となつてしまふ所だったのに……。

「アスムの事を考える事、それに余裕を持ったのさ」

「……俺には意味分からねえぞ。あいつの事で余裕を持ったら何でそうなる」

「フフフツ誰かを愛して愛された事が無い君には分からない事もね」

そう言いながら改めて声を出してトレーニングに精を入れるように言う姿を見ながらもグシャグシャと頭を掻く。

「わっけ分かんねえな……」

「まあ京さんは見た目良いのにモテませんから、言動があれすぎて」

「うるせえぞツルペタ幼女」

「カツチイイイイイン!!!野郎ブツ殺してやるうう!!!」

第67話

「とつつあん最近なんか調子いいみたいだな」

「まあね。年頃の娘さんを指導する立場が沈んでると教わる側にも伝染する恐れあるじゃん、だからちよつち元氣出してんの」

「なんかちよいちよいマルゼンスキーの影響出てるよな」

「ちよつちね、ちよつち」

ヒビキのこれからについて色々と手助けをするつもりで連携を取っている沖野、最近
は明るくなってきた様子を見て少しは影響が出てきたのかと思いたいところだが、
京介曰く、外面を保つのが得意なので油断は出来ないとのこと。故にこれから如何する
か、上手い事相手を見つけてさせる作戦についてはこれからもちよくちよく婚活パーティー
に誘ったり合コンに誘うつもりではいる。まあ来てくれるかは謎だが。

「んでとつつあんは今何やってんだよ」

「理事長からチーム結成の誘いを受けちゃってねえ、結成はしなくていいから俺の目線
で有望なウマ娘を纏めてくれとか言われちゃってねえ……別に担当希望の子でもいい
とは言われたけど」

「あくあれか、俺も出された事あんな。まあ俺はそれ言われてから直ぐにスピカ立ち上げただけ」

これもトレーナーが少ない現状故の致し方ない処置ともいえる。新人ならともかく、担当経験があるトレーナーにはチームを作ってもらって一人でも多くのウマ娘を見てもらうように学園は計らいをしている。現状でも担当トレーナーはいない、が名義だけを借りてレースに出るウマ娘というのは多い。

名義貸しというのは担当トレーナーやチームには入れていないウマ娘にとっての最後の砦でしかない。出来ればそれをさせずに確りとしたトレーナーにトレーニングを受けてほしいというのが理事長であるやよいの願いなのである。流石にヒビキにこれを渡すのは気が引けていたらしいが……なので決まりだから渡しておくで前置きされた。

「んじやとつつあんもチーム持つのか？」

「まあ何時かそれもありがたもねえ……乗り気ではないけど、というか持つなってハナちゃんに言われた」

「そりやまたなんで」

「リギルから脱退者出るかもって、一番人気ナリちゃん、二番人気はアマちゃん」

「あく……なんか、分かるなそりや」

他にも名乗りを上げるとしたら色々と考えつく、というかスピカからだって着いて行きそうなメンバーは普通にいる。主にスペとかが大本命だろう。

「んでとつつあん一押し of 奴とかいんのか」

「そうだねえ……色んな子が居るから一口には言えないかな」

「んじやこういう奴を育ててみたいっつうのはねえのか？ 天才型とかスピード型とか
キ」

そう言われると何だろうか、過去のアスムの事を踏まえて何とも言えない。彼女は日常的に超長距離を走り続けてきた典型的なステイヤータイプ、その経験が応用できると考えれば体力型のステイヤー、それとも別の馬娘を育てるといふのも気持ち的には悪くはないと思っている。

「……癖がある子がいいかな」

「癖ってどういう」

「直線勝負だとピカイチだけどコーナーが全然とか、その逆とか、スピードはあるけどスタミナが全然とか。そういう子を見たいかな、チームを持つなら」

「何っつうか、随分と変化球だな」

トレーナーとしては育てやすいウマ娘とか才能に溢れた逸材他にも精神性が優れていたりなどを望む筈だがヒビキのそれはどうにも同意しにくい物だった。トレセ

ン一の曲者を預かっている身としてもなんとも言えない。

「癖っていうのはマイナスに考える人も多いけどさ、やっぱり生まれ持って才覚だと俺は思うんだよね。元々持つてるから本人的にもそれに従わせてあげると身体も精神も自然についていく、だからその癖を生かすようにしたいかな」

「癖、癖か……ある種、スズカの先頭への執着も似たようなものか」

「そうだね、スズちゃんの場合の癖は正しくそれだね。だから彼女の場合はその癖を尊重してあげたのほうがいい」

癖は才覚、そういわれると納得する。癖を短所ではなく長所に変える、生涯のパートナーとして決めていたウマ娘が生粋のランナーだったからこそ言えるセリフかもしれない。兎に角走ればいい、故に走り続けていたアスムは尋常ではない体力に物を言わせて長距離ではラストの勝負所までは常に70〜80%の力で走り続けていたらしい。

「それでよく持ったな……」

「レースで走る何年も何十キロも嬉々として走り続ける疾走狂だよ、そのぐらい楽勝だよ」

「おい、恋人にんな事言っていないのかよ」

「いいのいいの。事実だしあいつも自覚してたから、アタシってばランナーズハイ所じゃないですよ〜って」

此処まで来ると本当にスズカに似ていたんだなと思わせる。スズカは中距離を短距離並みのスピードで走り続ける、アスムは長距離を中距離並みの速度で走り続けている。一応先行ではあったらしいが、結果的に先行になっただけで本質的には脚質なんて存在しない。好きに走らせていただけというのが真実。

「チームか、ちよつと真剣に考えようかな。ハナちゃんには嫌な顔されそうだけど」
「俺だつて嫌な顔するぞ、今スピカからスペとかに抜けられたらまたメンバー探しに苦心する羽目に何だから」

「そこはトレーナーの才覚と性格の問題じゃん、取り合えず腿を触る癖をなくせば少しは来ると思うよ」

トレーナーとしての才覚は強い方なのだから、放任主義と悪癖さえ少し自重すれば何とかなるだろう。放任主義というのは相手を選ぶ主義、教わる側の主張が強ければ上手く噛み合うが、弱い場合はとことん噛み合わない。スピカのメンバーが少ないのはまさしくそれが原因なのだから。

「俺が今気になる子としたら……この辺りかな、仲いいし」

「ライスシャワーにハルウララ……確かに癖あるといえはあるか……つてベーオ、ウルフ？」

「ああ、最近見つけた有望株つて奴。直線勝負なら負けなしだけどコーナー苦手な上に

調子の上下が激しいタイプ、面白そうじゃない？」

「いや面白そうだけだよ……とつつあんってあれか、ギャンブルで大穴かけるタイプ？」

「マジの賭け事はやったことないけど、基本大穴狙いかな」

「ある意味納得だわ」

第68話

「何故……」

やよいは困惑しながら資料を見つめていた、そこには以前トレーナーへと発行したチーム結成についての資料があり、チーム結成の意志があるか前向きに検討する者が記されているのだが……その中にヒビキの名前があった事に極めて困惑している。

「何故、ヒビキトレーナーの名前がある……いや、確かに以前からそう言った事への話としてはいたが……だが……」

用務員時代からトレーナーが少ない事への愚痴やら対策法の相談にも乗って貰っていたし、資格があると周知の事実になってからも如何かな、という感じで進めていたが……まさかチーム結成への意欲があるとされるなんて思っても見なかった。

「これは、良い兆候なのでしょうか……ヒビキさんもアスムさんの事で何とか前に進もうとしているとか……」

「ムムツ……何とも言えない、後程桐矢研修生に尋ねてみるとしよう」

最近ヒビキは明るくなったという話はある、だがそれは沖野トレーナー達による行動による物ではない。まだ具体的な事も起こせていない状況で何が起きているのか、理事

長達は慎重に行動する事を一先ず決めるのであった。

「ヒビキさんなら入つても大丈夫だと思うが、一応規定だからここまで。お手数をかけてしまつてすみませんね」

「まあこの位はいいさね、んじや後お願いね」

「ああ、この御礼は後日必ず」

「相変わらず確りしてんね〜」

そんなやり取りをしながらも此方を見つめてくるフジキセキに手を振つて立ち去る。ウマ娘達の寮には基本的に男性は入つてはならないしトレーナーだからと言っても許されない。それはヒビキも当然の事なのだが、長年の事である種の諦めにも近い信用があるのか寮に入つても大丈夫だろという認識を持たれている。

「まあそれはそれで複雑だけど」

男として見られていないという奴だろうか、それとも家族として見られているという事なのだろうか。後者は嬉しい事この上ないが、前者は前者で微妙に複雑な気がする。そんな思いを引きずりながらも今日も今日とて用務員のお仕事へと向かう。

「後は……コース整備だな、ダートは朝っぱら均したから大丈夫、だから芝優先だな」

そんな事を呟きながら到着した芝コース、この時間は皆授業を受けているので熱い対決が行われるコースとしては静かで穏やかな時間となっている——筈なのだが、そん

なコースを一人黙々と走り続けているウマ娘が一人いた。

「んっあれって……」

「これならば——!!」

長身且つ肩まで伸びた栗毛、その中に混ざりながらも自らの存在の象徴だと言わんばかりに圧倒的な存在感を發揮する真紅の前髪。酷く冷静な雰囲気を纏いながらもその表情には熱い感情が現れている。そんなウマ娘は内ラチを抉るようなコーナー攻めを行いながら、疾走していくが——入りこそ良かったが次の瞬間には自らの加速に振り回されるかのようにどんどん外側へと膨らんでいつている。最終的にはターフのど真ん中を走っていた。

「矢張り、踏み込みが甘いか……」

「いやいやいやいい走りだったよ、ベーちゃん」

不満げに自分の走りを分析しながらも溜息をついていた彼女にヒビキは声を掛ける事にした。其処で漸く自分に気付いたのか、姿勢を正しながら頭を下げて来た。

「ヒビキさん、見られていたんですか」

「コース整備にね、誰もいない内にやっちゃおうと思ったんだけど先客がいるのは意外だったよ。というか授業は？」

「本日の授業は終わっています、教師の方が家庭の事情でお休みしているので」
「ああ成程、その関係か」

彼女こそヒビキが発掘して良いなあと思っているウマ娘のベーオウルフ。感情をあまり表に出さないが、良くも悪くも真面目な性格の持ち主で静かに燃える熱血屋。

「自主練とは感心だね」

「いえ、自分の弱点の克服にはまだまだです」

「コーナーリング、かい？」

それに頷くウルフ。ベーオウルフの持ち味はなんと言っても直線での異常な加速力、他のウマ娘が最大速度まで到達するよりも早い段階で最大速度に達する。その速度は他の追隨を許さない——が、逆にそれが彼女の弱点でもある。

即座に最高速度に達する事が出来るのだが、その速度を制御する事が出来ずにコーナーではそれを維持したまま曲がる事が出来ずに大きく外へと膨らんでしまう。無理に曲がろうとすれば転倒、なので速度を落すしかないのだが……コーナーが大苦手という本人の資質も相まって一気に減速し、得意の加速でも取り返せない程に抜かれるのである。

「まだメイクデビューもしていない身ですが、こんな事ではそれも危うい……如何すれば……」

極めて真面目故に自分の欠点を強く意識して何とか直そうと練習に励んでいる、せめてコーナーが苦手というだけでも直せばかなり好転するのだが……並大抵の苦手では済ませられない程のレベルなので中々直せないのである。

「う〜ん……ベーチャンつてさ、スタミナには自信ある系女子?」

「ある系……まあ、走り込みは良くしますので自信はあります」

生まれはアメリカな影響もあつてアメリカの広大な土地を走り回つていたという過去を持つベーチャン、流石にアキラ程ではないがそれでも十二分な程にスタミナは蓄えているつもりではいる。それを聞いてヒビキはある事を思いつく。

「話を聞いてみる気、あるかい? ちよつち良い事思い付いた」

「何か、妙案が」

「でもこれはかなりリスキーだと思う、これならベーチャンの資質は活かせるって自信はあるけど同時に凄い博打でもあるよ」

彼女の資質を活かす案としてはあり、だがウマ娘の定石としては普通にならないという事になる。それ程までにリスキーな選択をさせる訳にも……と言葉を詰まらせるヒビキだが、肝心のベーチャンはその名に相応しい程に獰猛且つ好戦的、そして嬉しそうな笑みを浮かべながら言った。

「乗った。私の全てが活かせるというのであれば乗らない手などない」

「文字通りの大穴狙いだよ、勝てば君の武器になるけど、負けたら君は終わりかねない。それでも迷いもないのかい」

「無論。それに——分の悪い賭けは嫌いじゃない」

第69話

「どんな距離だろうと——突き放すのみ!!」

そんな言葉と共に一気に加速して最高速度へと到達した、持ち味でそれを十二分に生かした最高の加速によって到達した最高速度。その速度はサイレンススズカにも匹敵するかもしれない程のスピードでターフを駆け抜けていく。クールな表情の下からは熱い闘志が獰猛な笑みを零し続けている。そしてゴール地点を過ぎたところでストツプウオツチが切られる。

「最高記録更新、まさか此処まで大博打が上手く行くとは……」

そんな言葉を呟きながら記録されたタイムを見ながら頭を掻く。これまでのデータは勤勉さ故か全て記録されている、それらと比較しても数段優れている。いや、これが自分の全てを発揮出来る戦術を確立した彼女の走りなのだろうと実感出来る。

「お疲れ様、ほいっおじさん特製ドリンク」

「有難う御座います、んっ……美味しい」

顔に掛かった髪を退けながら受け取ったドリンクを飲み、小さく感想を言うのは見事な疾走を見せたベーオウルフ。ヒビキは心から、彼女に行ったアドバイスが此処まで

ピッタリと合致するとは思ひもしなかつた。

「いやあ……こんな誰もやらない様な大博打が上手く行くとは……」

「言つたでしよう、分の悪い賭けは嫌いじゃないと。人生はギャンブルです、ここぞという時にやらなければ意味はない」

「だからつて他のウマ娘とかトレーナーは絶対に勧めないよこれ」

そんなレベルの戦術、それを提案してしまつたヒビキもヒビキだがそれが恐ろしい迄にウルフには合致していた。足りていなかったパズルのピースに欠けていた穴を塞いでベーオウルフというウマ娘の走行スタイルを完成させたのであつた。だが、このスタイルには大きなメリツトもある——何せ、彼女の独走は約束されたような物なのだから。

「もう一周行つてきます」

「おう、行つてきな行つてきな」

そう言つて準備に入るウルフにスタートの準備をし始める、そんな所に二つの影が迫つて来た。

「何だどつつあん、先来てたのかよ」

「珍しいわね、ヒビキ君が先に來てるなんて」

「こつちこそ珍しいじゃん、沖君とハナちゃんが一緒なんて」

やって来たのは沖野と東条であった。何やら話し合っていたが、自分の姿を見ると直ぐに話を止めて此方へと声を掛けて来た。

「何、リギルとスピカが模擬レースでもすんの？」

「しないわよ、単純にスズカの事を聞いてただけよ」

「俺も暇だったから話してただけ」

「ああそういう事」

実際はヒビキの事で話し合っていたのだが……悪いとは思ったが、スズカには身代わりのような事をさせて貰った。そんな事をしている間に準備が終わったのか、スタートと同時に走り出すウルフが目の前を疾走していく。

「ありや前にとつつあんが目を付けたって言ってたベーオウルフか？」

「直線での加速は素晴らしいけどコーナーが致命的って聞いたわね、実際どうなのかしら」

「みてれば分かるよ」

そう言いながらヒビキが目を付けたというウマ娘の走る姿に目を向ける、前評判通りに直線での速度の伸びは現在活躍するウマ娘でもそうはいない程に素晴らしい。そして問題のコーナー……そのままの速度では流石に無理、故に速度を落して行くと思いきや——全く速度が落ちない。いや、寧ろ逆に速度が上がっている。

「つておいおい何やってんだ？」

「まさか、そういう手を取るの？」

素直に二人からも困惑の声を勝ち取ったウルフの走り。ヒビキ発案の戦術とは極めて単純、基本コーナーでは内を挟るように走るのが当然。だがそれが苦手なら自分の得意な分野で勝負できるようにすればいいだけの事、つまり——外ラチを使って曲がりやすい角度で曲がりながら更に加速を掛けると言う事。

「コーナーが致命的に苦手だつて言うからさ、だったらそうしちやおうつて。体力に自信あるつて言うからやらせてみたらこれが大当たりだったのよ」

「いや、まあ確かに理屈は分かるが……普通に誰もやらねえだろそれ」

「普通で考えれば他のウマ娘よりも更に長距離を走る事になって体力を消費する、絶対に取らない戦法だわ。でも……このスピードは」

沖野と東条が危惧する通り、普通ならばやらない。スタミナを無駄に消費するだけのようないだが、そこは彼女の恵まれた体躯に蓄えられた体力がカバーする。そして外ラチを満遍なく使つて加速したウルフはもう誰にも留められない。誰かにブロックされるなんて余計なストレスもなく全速で走り切る事が出来る。そして一切減速する事もなくゴールする。

「よしよし、タイムもいい感じ。これからはスタミナを付けるのを優先、後は出来る限り

やっぱりウチに迫れた方が良いからコーナー練習は継続した方が良いだろうね」

「見極めですね、分かりました。今日はありがとうございました」

「お疲れ〜」

今日の分のメニューも終わったのでウルフは二人にも頭を下げながら帰っていく。そんな後姿を見ながらも二人から様々な視線が注がれる。

「良くもまあんな戦法思いつくなあ……」

「だって本当にコーナー苦手なんだよベーちゃん。だったらあれしかないでしょ」

「でも本当に凄い博打ね、でも確かにあのスピードを維持出来るなら唯一無二の武器にはなるわね……」

「妨害どころか圧を掛ける事も出来ないからなあ……」

態々外ラチへと向かい、そこで走る彼女を邪魔する者なんている訳がない。余程スタミナに自身が無ければ同じルートに入る事は出来ないし、外へと向かう前に前を塞ぐ位しか出来ないのがこの戦術のポイント。誰にも邪魔されずに逃げ切る戦術、コーナーが致命的なまでに苦手ではあるが直線での感覚に近い状態で走れるというのはウルフにとってはこちら上もない程に最上の策であった。

「それで、あの子の担当にもなるのかしら？」

「いや全然考えてないけど」

「うおい。その気もないのにアドバイスしてたのかよ」

「まあ流れで」

「どういう流れよ」

第70話

仕事を普段通り順調に片づける事が出来たヒビキ、トレーナー業務に入る前に一時の休息を楽しもうとお茶を淹れようとしていた。今までなら直ぐにトレーナー業務に入るか、別の事をして過ごしているのだが……最近は確りと休みを淹れるように心掛けている。こんな風に穏やかな時間の中で過ごすのも悪くはないと最近はずいぶん思えるようになった。自分は変わってきていると思える。

「少しはいい顔する、いやしないかな……」

今まで自分の鍛錬のし過ぎを注意してきた京介もこれなら多少はいい顔をするのではないかと思うが、まああの京介だから絶対にしないだろうなという自信がある。

「まあいいか」

ぶつちやけ京介が何とか何であまり関係はない、一先ず自分を貫き通そうと思つた頃にお湯が沸いた。一先ず火を止めた時に用務員室の扉を規則正しいリズムでノックする音と共に鈴のような清らかな綺麗な且つ気品のある声で語り掛けて来た。

「あのヒビキさん、御在宅でしょうか？」

「んっこの声……うんいるよ〜今開ける」

在宅している、というのもおかしな話だが基本的に此処で寝泊まりしているからか家には滅多に帰らない。なので此処が家と言えば家だから間違っていないな、と一人で笑いながらも来てくれた子を出迎える。

「こんにちわヒビキさん、突然の御訪問申し訳ございません」

「いやいや気にしなくていいよ、別に知らないって訳じゃないし」

「フフフツそうですわね、ヒビキさんは私にとつてはとても頼りになってお優しいおじさまです」

美しさと可憐さが見事に同居しながらもそこに気品がある、こう言つてはマッククイーンには悪いと思うがこういう所は誰もが認める御令嬢といった姿だろう。メジロアルダン。儚く、優しく、思慮深く、そして高貴な深窓の令嬢。メジロ家とは何かと交流が深いヒビキとしては知り合いのお嬢さんという認識が強い。

「折角だから入っていきなよ、丁度お茶を淹れる所だったから」

「はい、それで失礼いたします」

丁寧に頭を下げながらも用務員室へと入っていくアルダン、所作の一つ一つが美しく気品がある。矢張りマッククイーンよりも遥かに御令嬢という言葉が似合うお嬢様だと言わざるを得ない。

「はい、前のお茶会の時にアサマさんから貰った茶葉。お茶うけにこっちのケーキもど

うぞ」

「有難う御座います、ヒビキさんの御作りになるお菓子には私共も大好きです。もちろんお婆様もお好きなようで……この前のお茶会はヒビキさんのケーキで行ったのですが、その時にお婆様はとても表情を柔らかくなさってました」

「そりや嬉しいね、また作って持って行かないとね」

口元を隠しながら静かに笑うアルダンに少しばかりの笑みを浮かべる。そんな笑みを見つめながらもお茶を啜る、矢張り高級な茶葉だけあって味が全く違うなと思いつつもこんな物を貰っていいのだろうかという思いも出て来た。

「それでアルちゃんは今回は如何したんだい？」

「はい、お婆様から此方をお預かりしましたのでお届けに参りました」

懐から一枚の封筒を取り出して手渡してきた、中を覗いてみるとそこにあつたのはお茶会のお誘いだつた。

「お茶会のお誘いか、態々アルちゃんに渡させなくても電話一本くれたらいいのに」

「このようなお誘いも趣があつて宜しいと思えますよ」

「それもそつか、これって御返事書いた方が良い感じ？」

「それこそご自由で宜しいかと」

「んじや後日御返事出すよ」

アルダンもニコやかに了承する、彼女としてもヒビキが誘いを断るとは一切思っていないのだろう。実際問題として断るつもりはない、ガッツリと参加させて貰う。

「行くのはいいんだけど、毎回毎回勧誘受けるのだけがネックなんだよな……アルちゃんからもアサマさんに何とか言ってくれない？」

「きつと聞き入れて下さないと思いますよ、お婆様はヒビキさんの事を酷く気に入っておりますので。お婆様も受け入れてくださるまで続けると思いますよ」

「おいおい俺にトレセン辞めろって事かい？冗談キツいよ」

「フフフツこれは失礼を」

アルダンの言葉をやんわりと拒絶しておく、如何にも彼女には強く言えない。好い加減御当主様も諦めてくれればいいのに、というかトレセンの事もあるのでそう簡単にやめるわけにもいかないという切実な事もある。主に理事長が思っている事だが。

「アルちゃんは最近足の具合は如何だい」

「はい、最近は調子が良いんです。お時間が合いましたので他の方と一緒に走ったのですが、痛みもなく健康そのものでした」

「そりゃ良かったね」

はい、と機嫌良さそうに笑う彼女にひとまず胸を撫で下ろす。アルダンは幼い頃から身体が弱く、特に脚はガラスのように繊細とまで言われるまでにウマ娘としては不利な

身体で生を受けた。当人はその事に関して悲観的に思つてはいない、そんな彼女に心打たれたのはヒビキもそうであり、可能な限り支援をする事を決めている。

「それではヒビキさん、私はそろそろ失礼させて頂きます。是非お茶会にいらつしやつてください、私も歓迎いたしますので」

「元々断るつもりなんて皆無だから気にしなくていいよアルちゃん、後メニユーが欲しかったら何時でも良いな。身体に負担をかけすぎないようにトレーニング手段は幾らでもあるから」

「はいっまたお願いに参ります、それでは」

少し膝を曲げながらの礼をして静かに用務員室から出ていくアルダン。残った用務員室でお茶を啜りながら思わずある事を想う。

「俺つてもしかして、アスムを思い出すような子に弱いのかな……アルちゃん多分脚の事だろうし、スペちゃんとスズちゃんもそうだし……」

そうなのかもしれないと思いつつもお茶を喉の奥へと流し込むと、一先ず貰つてお誘いの返事を書く事を始める事にした。ペンを取るのではなく筆を取り、墨を含ませて返事を書き始めるのであった。

「マクちゃん、これアサマさんにこれ渡して貰つてもいいかな。お茶会のお誘い貰つたからこれお返事」

「はい、承りました。しかし、ヒビキさんにお手紙を出すとき毎回筆でお書きになりますのは何故ですか？」

「なんか墨と筆で書くとなんか気持ちが悪くなるから」

第71話

宝塚記念がいよいよ間近に近づいて来た頃、出走予定のスペは追い込みを掛けていた。ダービーと同じくG1レースである宝塚記念、それに参加するウマ娘も当然強豪揃い、その中でも最も身近な強敵となるであろうのがリギルのグラスワンダーであった。紛れもなく強敵のライバルに勝つ為にスペは何時も以上に気合を入れてトレーニングに励み続けている。

「ホラホラッもうペースが乱れてる!!余計な事を考えずに走り続ける!!」
「はい!!」

ターフを走り続けるスペに檄を飛ばすヒビキ、宝塚記念に挑む彼女に応える為に彼も気合が入っている。それは周囲で倒れこんで荒い息を吐き続けているスピカの面々からも察する事が出来る。

「も、もう無理いゝ……」

「ス、スペ先輩に合わせたのは失敗だったか……?」

「おじさん超厳しい……」

もう動けないと言わんばかりの五体投地に沖野も呆れているが、それはその隣で同じ

く倒れこんでいる長距離を走るステイヤータイプのメンバーもバテている事からその激しさが伺える。何せ、ヒビキと共に鍛え続けたというアキラですら根を上げているのだから。これには京介も正直に驚いている。

「流石に、応えますわね……」

「きつちいい……」

「ふええええ……おじさま、一段と、激しくて、もうらめえ……」

「人聞きの悪い事言ってるじゃねえよアキラ……ほれドリンク」

そんなメンバーに京介がドリンクを差し出しながらも残っている最後のスぺの走りをスズカと共に見る。スズカの脚は順調に回復中であと少しすれば走るようになる。すると医者からも太鼓判を押されている、寧ろ回復が予想よりも早いと驚かれるレベル。

「とつつあん、スぺは今どんな感じだ」

「悪くはないかな。でもまだまだ意識がブレてる、相手を強く意識するのは良いけど向けるべきは完全にゴールだ」

「意識はするけど意識をブラさない……？」

スぺには近くに敵がいる事を強く意識するように言っている、自分を追い抜くには最適な位置に居て何時自分を追い抜くかも分からない最高の仕上がり。グラスワンダーがそこで自分を仕留めようとしている、そしてそれを自覚しながらもそれに意識を取ら

れず、唯々ゴールだけを目指すように走れと。

「おいおいおいとつつあん、それかなり難しくねえか？言つちまえば敵がいるって自覚しながら前だけを見ろって相当にキツイし精神的にもやばいだろ」

「まあね。でもグラちゃん強みは徹底したマーク戦法。それに対抗するには理解しながらもぶらさずに行くしかない」

「それ、簡単に出来る事じゃねえだろ」

正しくその通り。それには強い精神力がいる、だがやるしかない。日本一になると言う事は他者から常にマークされているに等しい状況に陥る、ならばそれに強い自分を作り上げるしかない。プレッシャーに強くなる、プレッシャーに慣れる、プレッシャーを感じるに強く意識が切り替わる自分を作るといのがこの訓練の主な目的である。

「ペースを乱されるって事が走っている最中で一番怖い事だからね。乱れればそれだけ体力は削られるしスピードも落ちる、それを立て直すのも体力を使う。だから芯が通った走りっていうのが俺は最高だと思ってるよ」

「芯の通った走り……」

「スズちゃんもそうだね、スズちゃんも基本的に先頭を走ってるけどぶつちやけ周囲とか如何でも良いって思ってるでしょ？」

それにスズ力は頷いた。確かに誰かが来た、程度には思っているがそれが誰で如何

来ようが唯走るだけ。そしてその走りで先頭を貫き通すという自己完結が出来ている。だが揺さぶりを掛けようともブレない、これも一つの最強の形。

「アスムもそうだった、だからそれを求めてんのか」

「んな訳ないでしょ俺をなんだと思ってるんのか」

無粋だとは思わが思わず聞いた京介にヒビキはあからさまなまでに嫌な顔を作った。お前は自分をなんだと思ってるんだと言わんばかりの歪んだの表情だ。

「あいつの強い部分、唯走ればいい。ある種向上心もない異端児だけど他者に揺さぶりを掛けられても揺れないっていうのは強みだった、だからスペちゃんにはそれを手に入れて欲しいと思ってるだけって最後の一周気合入れて!!」

「はいっ!!」

正しく自分との戦いだ、背後にピツタリとくっついて離れないグラスワンダーの幻影も結局自分の生み出した幻でしかない。だがその幻が自分を追い詰めてくる、何があっても自分を追い抜く最強の相手にたった一人で戦い続ける。少しでも妥協すれば勝てる、だがそれをしない。常に負けるという危機感を感じつつも、それらに振り回れないように唯々ゴールへと向けて走り続けていく。

「スズちゃん、折角だからゴールフラッグ振って貰ってもいいかな」

「はい分かりました、その位なら大丈夫です」

そう言いながら離れていくスズカ、余り彼女には聞かせてもいい話かもしれないが……まあ大丈夫だろう。

「京介、お前もう余計な事しなくていいから」

「——っ!!」

久しく呼ばれる事が無かった名前に思わずヒビキの顔を見た、あの日から自分の名を滅多に呼ぶ事が無くなった響鬼。自分の名前すらアスムを想起されてしまうのかもしれないと容認していた、寧ろ接する事すらやめようと思っていたほどだ。ヒビキは変わらなかった——今、変化を迎えようとしていた。

「沖君、君もだよ」

「とつつあん、もしかして……分かってたのか?」

「京介の事を踏まえてだろうなとは思ってたさ、話したんだろ——アスムの事」

「……ああ、悪いかよ」

ぶつきら棒に答える京介に何でそんな言い方しか出来ないのかと肩を竦める。

「鍛錬の中でしかあいつを感じられないと思つてた俺が間違つてた、あいつは常に俺と居る——つて気付けたかもね」

「かまかよ、まだ振り切れてねえじゃねえか」

「そう簡単に出来る訳ないでしょう?か、ンでまあ……ちよつち試してみたい事がある」

「何をやる気だよとつつあん」

問いを投げかけたヒビキはゴールを切ったスペを見据えてからある言葉を口にした。
「オカルトっぽい手だけどね、呆れるほど有効な手かもしれない手袋さ」

第72話

「……」

その日、ヒビキはトレーナーとしての休みを貰っていた。用務員としての仕事を終わらせるのと直ぐに部屋へと戻り座禅を組んでいた。これから起きるであろうそれに対しての絶対的な備え、いや礼儀や作法と言つてもいいだろうか。万全の構えを取る為に不動の構えを取っている。唯々、没入していく。一切の雑音は無く、人がいるとは思えない程に無音に満ちている。

「……」

外の風の音すら木霊する程の完璧な無音の状態、命の気配すら感じ取れない程に静寂に包まれているそこは命がある筈の世界とは思えない程に異質な空間へとなっていた。異常なまでの集中、いやそれすらせずに無我の境地へと至っているヒビキ。時を待ち続ける、待つという感覚すらないのに唯そこに居続ける、生き物として根本的に可笑しい。

「——時間か」

その言葉との直後用務員の扉がノックされた。時間を認識した訳ではない、気配を察知した。待つていた人が来た。立ち上がりながら扉を開けるとそこには待つていた

ウマ娘がそこにいた。

「やあつ悪いね呼び出して」

「いえ、私も確りとお話を聞きたいと思つていましたので」

其処に居たのは長い黒髪と金色の瞳をしたウマ娘、マンハツタンカフェ。態々呼び出してしまった事への負い目もあるが、彼女も彼女で自分には一度しつかりとした話をしたいと思つていたらしい。彼女を部屋へと上げながらも珈琲を淹れる。

「俺のスペシャルブレンドでいいかい？ その都度味が変わるから保証は出来ないけどね」

「お願いします、ヒビキさんの珈琲にハズレはありませんから」

「どうも」

彼女は席に着きながらも此方をジツと見つめてくる、何処か鋭く真つ直ぐとした瞳による視線は不思議と重く感じられるがヒビキは何ともない。そんな彼女に出す為の珈琲の香りが用務員室に充満する。そしてカップを二つ持つて、彼女の下へと出す。

「はいヒビキさんスペシャルブレンド」

「有難う御座います、彼女も感謝しています」

「どういたしまして」

不自然に彼女の下へと置かれた二つのカップ、一つはカフェの分だがもう一つは彼女

の友人の分。飲めるかは分からないが来てくれるならば出すのが礼儀だと思っている。そして自分の分の珈琲を啜る。豊かな酸味と深いコクと濃厚な甘みが口いっぱい広がる、如何やら今回はコストリカの豆を中心にブレンドしたらしい。

「うん、悪くないね」

「とてもおいしいです」

「お気に召したようでは、お友達もどうもね」

肩が叩かれる感触がある、背後に誰かが居るといふ確かに気配もあるがそこに姿はない。透明な誰かが居ると言つた感覚に近いが、これはカフェといふ時には必ず起きると言つてもいいそれだ。彼女には友人がいる、それは一般的には幽霊などに区分される存在らしく彼女には靈感やそれに似た能力がある。時折虚空を見つめては会話しているが、その存在と話しているとの事だが、周囲から完全に不気味な光景にしか映らない。

「それで如何だいカフェちゃん——分かるかい？」

早速本題へと入つた。彼女を呼んだのはその能力に頼る為である、あの時、スベとスズカにアスムの事を話した際に見たアスムの姿。それが自分と共に居続けたアスムの姿ならばカフェならば知覚出来ると思つたからだ。そしてその言葉にカフェは確りと頷いた。

「はい、ハッキリと見えます」

初めて会った時にもカフエはヒビキに何かが居ると言う事を知覚していた、だがそれは自分の知る友達とは違ってハッキリと認識出来なかつた。取り憑いている、というよりも最早ヒビキと一体化しているに等しい状態のそれがそこにいたのである。カフエでも理解出来ず、そして何を言っているのかも分からない程に。

「フクちゃんの占い通りだったか」

「矢張りご相談を」

「うん、力借りたよ素直にね」

座禅を行うに当たってあるウマ娘の力も借りている、それは占いが大好きなウマ娘のマチカネフクキタル。彼女は占いだけではなくシラオキ様という神様……で良いのだろうか、それを熱心に祈りを捧げている。その力を借りて占いをして貰った所——

『ヒビキさんつ貴方は一度死に近づかなければなりません、死ぬ気で死へと近づく事が貴方のやろうとしている事への吉!!!』

という占い結果を頂いている。死に近づけと言うのも可笑しな話だが……今ならその意味が良く理解出来る。

「極限を越えた集中の末の無我の境地、それにとつて僅かな間だけヒビキさんは周囲の環境と一つになった、生物として限りなく死に近づいた。だからこそ一体化していたその方、アスムさんは姿を見せてくれました」

「フクちゃんのおいって本当に凄いな、今度お礼しに行かなきゃね」

アスムは確かにいる、それ所かほぼ完璧にヒビキと融合していたらしい。それ程までにアスムはヒビキの事を愛していた、そしてヒビキもそれは同じであり強い想いが共鳴して共にあり続けた。正しく人《font:ul40》馬《font》一体である。

「にしても……マジで一緒に居たのか——アスム」

「照れてます」

「どうせあれでしょ、耳ごと頭を押さえるような感じでそっぽ向いてんでしょ」

「アタリです……見えてます?」

「20年以上一緒に居たんだよ、その位分かるさ。まあ見えてないけどそうされてるって言われたらそうやるだろうなってのぐらいは分かるよ」

カフエの目にはヒビキの右後ろ辺りでその通りのポーズで悶絶している姿が見えている、此処まで分かっているのかと驚く。20年、一口に言ってしまう事だがそれだけ長い時間を共にして絆と思ひ出を築いてきた証明でもある。

「にしても……本当に一緒に居たんだな、鍛錬の中でしかお前を感じられなかったなんて、俺は何をやってたんだらうなあ……」

「いえ、でもこれは分からないと思います……文字通りの一心同体でしたから……」

言うなれば身体の中に生まれた異常に自覚症状もない状態で自力で気付けというよ

うな物だ。幾らなんでもそんな事は出来ない、だから分からなくて当然なのだ。

「ヒビキさん、直接アスムさんと……お話してみます……?」

「——出来るの、かい?」

その言葉の直後、お友達へと出した珈琲のカップが酷く揺れ始めた。誰が見てもカフェへの発言への抗議のように見える、だが彼女はそれを諫める。

「少し疲れるけど、ヒビキさんにはお世話になつてるから……ね?」

そう言われると少しずつ揺れが静まつていく、渋々だが納得してくれたらしい。カフェは一旦深呼吸してから瞳を閉じた、そのまま数分の時間が立つ。静寂の中にある用務員室に彼女の呼吸音が木霊する中で訪れた。突然呼吸音が変わる。瞳を開けた時、僅かだが瞳の色が変わっているように見えた。そして——

「響鬼さん……お久しぶり、こんな風に話すなんて思わなかつたけど……中央つて凄いい子がいるんだね」

「そうだな、カフェちゃんは本当に凄いなと思うよ——俺もこうして話すとは思わなかつたよ、アスム」

「うん——アタシもだよ、響鬼さん」

声色が変化して口調もカフェの物とは異なっていた、それはもう彼女ではない。ヒビキの目には一人のウマ娘に変化していた。アシタノユメ……自分が愛したウマ娘が確

かにそこにいた。

第73話

もう二度と会う事はない、自分が死ぬまではと思つていたがこうして目の前に現れてくれるなんて夢にも思わなかつたと響鬼は酷く満たされていた。例えそれがマンハツタンカフエの身体を一時的に借りた憑依に近い形であろうとも言葉を交わせるだけでもありがたい事だつた。

「一緒に居たとは思わなかつたよ、比喩表現じゃなくてガチでね」

「アハハ……まあ普通は自覚する事も出来ない筈だからね、まあなんていうか……一緒に居ました、はい」

何処か気まずそうな笑みを作りながらも片耳を抑えながらも珈琲を啜る、彼女としてもこうして話せる事は嬉しいだろうが酷く気まずいのは確かだろう。

「元氣だつたか、なんて聞くのは可笑しいか。可笑しいな、お前に会えて俺は凄く嬉しいさ。もしも会えたら……なんて考えて色々考えてたのに、何にもでてこねえや……フッフツ……」

何処か自虐的な笑いを浮かべながらも瞳から一筋の涙が零れた、響鬼からすればどんな形であろうと目の前に恋人が居てそれが自分と会話してくれている。それだけでど

れだけ嬉しくて有難い事なのか……望外の喜び、積み重ねた幻想の山の言葉の一つすら出てこない程に込み上げてくる物がある。本当に——嬉しい……。

「そうか、そうか……」

唯々喜んでいる。何の濁りもない純粹な歡喜を浮かべ続けている彼に対して彼女は氣まづくように、顔を背けてしまっている——当然だ、彼女は自らの命を絶つたのだ。望んだのだ、死ぬ事を。

「……聞かない、だね……どうして私が……」

「聞いて欲しいのかアスムは、態々辛い事を思い出す事はない」

全て分かつている、彼女が自分に宛てた遺書に彼女の気持ちは全て乗っていた。走れなかつた事への絶望、好きだと言ってくれた姿をもう見せれない事への失望、記憶が失われていく恐怖……それが自分の中で渦巻いていた。そんな状態で響鬼と共に生きるのではなく自分が自分のままで居られる間に自分として死にたいと……。

「私は響鬼さんの想いを裏切つたような物なんだよ……響鬼さんは絶対私と一緒に生きてくれるって分かつてた……でも……!!」

「分かっているよ、俺はきつとそうした。お前を全力で支えた、例えお前が俺の事を忘れても俺は絶対にお前を忘れずに傍に居続ける、何度でも俺だと刻むって言ったと思うよ」
「それじゃあ、嫌だった……それはもう、私じゃない、別の私なんだよ……今の私じゃな

「い」

それは響鬼との絆を新しく一から築き上げた自分であって、生を受けてから共に歩み続けたアスムではない。それを彼女は拒んだのだ、今の自分が居なくなるならもう死んでいるのと同義だと、それが何度も何度も繰り返されていく。なら響鬼はどうなるんだ、朝目が覚めたらまた死んだ自分に笑いかけて一からやり直すのか、愛する人に自分の死を何度も見せるのか!?

「それだけは嫌だった……響鬼さんにそんな事はさせられない……だから、私は……」
「ああ、分かっている。俺の事を想ってくれたんだろ」

きつと響鬼は支え続けるだろう、幾度も記憶が無くなるうとも何度も同じ時間を歩んでいく事を繰り返す。記憶という花が吹き飛ばされようとも、また新しい花を植えて水をやるだろう。何度も、何度も……。

「私のエゴだつて事も分かつて……でもき、私はそれだけはさせたくなかった」
「それで自殺か……俺の事を想ってくれるのは嬉しいけどさ、あの時も俺は凄く辛かった」

あの時ほど、後悔をした日はない、あの日ほど、無理に酒を飲んで酔おうとして日も無かった。目が覚めれば全てが夢だったと思いたかった。だが違った、現実だった。アスムは死んだ、自殺したのだ。

「んで、もう全てを投げ出そうとした時だったかな、やよいちゃんから用務員のお誘いが来たんだっただかな」

「理事長、良い人だよ。私の話を熱心に聞いてくれてさ、元々私をコーチとしてスカウトしに来てくれたんだけど、もう心を決めちゃってる時でさ……だから響鬼さんを推したの」

そんな時に理事長こと秋川 やよいから誘いを受けたのだ、アスムから推薦を受けたと。それを聞いて、アスムが自分の事を忘れてくれと遺書にあったのを見て察した。きつとそういう事なのだろう、彼女が望むならばそれを叶えるのもいいだろう……と用務員として勤務を始めたのだ。

「ねえっ響鬼さん、今って幸せ？」

「如何だろうな……そう言われてはいそうですねって言えない状況だったのは、お前さんも分かっているんだろ」

「まあずつと一緒でしたから、清めの音を鳴らしてる時位かな離れる事が出来たのは」

彼女曰く、響鬼の持つ想いと自分の中にある想いが重なり合った事でアスムは響鬼に憑依してしまつたに近い状態だったらしい。響鬼自身を触媒にして現世に留まつていくといつても過言ではない状況が続いている。清めの音には邪悪な物、魔に属する物にも効き目があるらしく、本気の演奏をされた時には剥がれていたとの事。

「鍛錬してる時位しか、お前を感じられずにそれ以外は何か……俺は多分死んでたんだと思う。スペちゃんんとスズちゃんに言われて分かった、でもお前と一緒に居れてるって言われてさなんか……今、幸せだなんて思えるようにはなつたかな」

「——そう、ねえ響鬼さん」

アスムは笑っていた。自分の知っている大好きな笑顔を浮かべた。

「アタシ、幸せだったよ。響鬼さんとの日々全部、大好きだった。貴方が私にくれた幸せ全部。だからさつ——今度は響鬼さんがアタシに見せてね、貴方の幸せを、貴方自身の幸せを」

「言ってくれるな、今俺は幸せだけど」

「違うよ、分かってるんでしょ?」

何処か儚げに笑っているアスムの姿は何処か、寂しそうだが決意に溢れているような印象を受けた。それで響鬼も何となく分かったのだろう……それに力強く頷いだ。

「ああ分かった、有難うな……俺の愛したウマ娘」

「うん、有難うね。私が愛した人」

それが二人の最後の言葉となった、直後に彼女は目を閉じた。そして再び目を開けた時、そこにいたのはマンハッタンカフェ自身だった。何処か疲労感を漂わせながらも周囲を見渡し、最後にヒビキを見た時に彼女は言いにくそうに言いだした。

「あの、アスムさんですけど……」

「分かっているよカフエちゃん、そっか……あの日から身体がずっと重いつて思つて慣れたと思つたらそう言う事だったんだな。お前の重さだったんだ……そっか、これが俺の身体か……軽いなあ……ああ、軽いよ……」

拳を握りながら何かを確かめようとするヒビキは虚空を見上げながら、何かを確信しながら涙を流した。そう言う事なんだな……それを自覚しながら、零れそうな涙を拭いながらカフエへと笑顔を向ける。

「有難うカフエちゃん、改めて生き返つた気分だよ」

「良かったんですか」

「ああ、それがあいつの願いだったみたいだから」

あんな事を言われてしまったら、こんな所で立ち止まっている事なんて出来ない。掴み取るまで走つてみるでしょう。

「俺の幸せか、探してみるかな」

第74話

「やあつヒビキさん、歓迎させて貰うよ」

「やつほく差し入れに来たよ」

生徒会室へと訪れたヒビキ、その手には差し入れとして様々な物を持って来ていた。それを見てルドルフは普段通りに凛々しい表情の中に感謝と嬉しさを混ぜていた。

「エアちゃんとナリちゃんも一息入れな、お弁当作って来たから。どうせお昼まだなんでしょ?」

「やれやれお見通しか、先見之明だなヒビキさんは」

「何時もの事だから分かるだけだよ、前美味しいって言ってくれたニンジンポタージュもあるよ」

「ああ、あれか。私が居なかつた時に飲んでた奴か」

ジト目を作るブライアンだが、彼女がサボっていなかった時の話なので自業自得とも言える。結局その時はエアグルーヴが罰としてポタージュを飲ませなかつたらしい、その事で一悶着起きたらしい……因みにそのポタージュはもう一人の三冠ウマ娘が頂いて、ちよくちよく飲ませて欲しいと訪ねてくるようになった。

「まあまあまあ、今回はちゃんと飲めるから良いじゃん。ほらっナリちゃん専用についた弁当だよ、お肉たっぷりだけどカロリー計算もバッチリな一品」

「流石だな、アンタは姉貴と違って無理に野菜を食わせようとしなから助かる」

「俺としては偏食はいけないと思うけど無理に食べさせるのもなくって甘やかしに近いから、ハヤちゃんには怒られるけどね」

重箱のような弁当を受け取って中身を見てみると肉が大好物であるブライアンの為のような中身が広がっている。見事な肉尽くしだが、色合いにも確りと心配りがされており見ている分にも美味しそうに見える。そして副菜として特製のニンジンポタージュ、完璧すぎる布陣だとブライアンは早速食べ始めた。

「おいブライアンお前は少しは……全く……」

「まあまあまあ、はいエアちゃんにも。卵多めにしといたから、はいシンちゃんにも」

「有難うヒビキさん。エアグループ、此処で休憩にしよう。折角の差し入れだ」

「分かりました、有難う御座います」

感謝しながら受け取る二人は自分達の弁当を見て同じように目を輝かせた、ブライアンに比べて控えめだが喜んでくれているのが分かるというのは作った身としては嬉しい限りである。

「このカツ……美味しいな、肉厚だが噛み応えと柔らかさが良い。だが妙にコクが強い」

「おじさん特製カツ、普通のカツよりタンパク質は多いからウマ娘には最適だよ。ナリちゃんなら気に入ると思うたから多めにしときました」

「……アンタがチーム作つたらすぐに教える、移籍する。そして毎日作つてくれ」
「飯目的かい。ハナちゃんに怒られるから勘弁してくれる？」

チームリギルで占領されている今の生徒会室、そして三冠ウマ娘の一角であるナリタブライアン。食事一つでチーム変更まで考えるのは安いというべきなのか、それともそれだけの価値があると考えるべきなのか……。

「ブライアンそんな事で安易に移籍を考えるな!!そもそも東条トレーナーが許すと思っ
ているか!？」

「知るか」

「お、お前という奴は……!会長も何か言つてやつてください」

「落ち着け、彼女がそういう性格だという事は分かり切っているだろう。それに私だつてヒビキさんがチームを作つたら移籍を検討するだけすると思うから強く言えん」

「会長!？」

「フフフツ冗談だよ、考えるだけさ」

まあ飯に今、自分がリギル入る前でヒビキがチームを起こしたらそのチームに入るだろうと思うのであながち冗談ではない。そんな事を想いながらも大胆にカットしてス

テーキ風に焼かれているエンジンを口に運びその味に感心しながらも、ヒビキ自身へと目を向けるルドルフ。

「ヒビキさん、何かあったのかな。初めて会ってから今日ほど貴方が嬉しそうな姿を見るのは初めてのようない感じがするが」

「ん〜そう見えるかな」

「見えるとも。良い事でもあったか?」

先日的一件があつてから、ヒビキは大きく変わったといつてもいいだろう。何か憑き物が落ちたかのように明るくなったというか、雰囲気が悪くなった。温和で優しい大人の男性だったのがより魅力的になったと語るウマ娘も多いしルドルフもそれは同意する。今までのそれに何か加わっている気がする。

「そうだね、何かあったといえどあったかな——余裕が持てるようになったって事かな」

「余裕、解せないが……私から見たら貴方は常に余裕を持っている人に見えたが」

「装つてただけだよ、上っ面の笑みで一步引いてたからそう見えただけ」

「では、今は心からの笑みだと?」

何処か心外だな、と思つているルドルフ。今まで自分達が見て来たヒビキの笑みが上っ面だと言われて少しショックな気もするが、今の笑みを確かに今までののは軽い笑み

だったと分かる。今のは心からの笑みだ、楽しそうに嬉しそうにしている。

「何時か教えてあげるよ、シンちゃんの目標である全てのウマ娘を幸せにするっていう第一段階、自分の幸せを見つけられた時に、ね♪」

「———つ全く貴方という人は……ああ、その時が来たら是非教えて貰うよ」

「ああ、それじゃあ俺は行くよ。弁当箱は後で取りに来るよ」

「確りと洗って後で用務員室に届けさせてもらうよ」

そんなやり取りをしてから立ち去っていく後姿を見送ってからポタージユを口にす
る、優しい味わいに強く深いコクに安堵の息が漏れる。

「フフフツ意地でも教えて貰うよヒビキさん」

「ブライアン、移籍は本気じゃないだろうな。本気の場合、私はトレーナーに言わなければいけないんだが」

「本気も本気だが」

「たわけ!!」

「お〜おっちゃん!!ターボのトレーナーになれ!!」

「やつほツインちゃん。う〜ん……如何しようかな」

「おおっ何か今までと違ってなんか感触良いぞ!？」

「いやチーム作ろうかなってちよつと本気で考えてるから」
「ターボ入る!!絶対に入る!!」

第75話

「アスムと話した……って何言つてんだよアンタ」

「意外と考え付かないんだね、まだこの中央に慣れてない証拠かな？」

宝塚記念当日、相変わらず用務員として忙しそうにしているヒビキは直接応援に行けない事を酷く残念がりながらも今自分に出来る事に集中していた。そんな様子を眺めながら京介にある事を語ると彼は信じられないような物を見る目で此方を見てくる。

「マンハッタンカフェちゃんとマチカネフクキタルちゃんの力を借りたのさ、名前だけなら知ってるでしょ？」

「一応知ってるが……あの不思議系と占い狂いだろ」

「占い狂いってアンタね……仮にもフクちゃんのお陰であいつと話せたんだから悪くいう事は許さんよ。次言ったら全力で顔面ストレートね」

「死ぬわ!!」

半分本気の冗談はさておき……詳しく話す事にする。マチカネフクキタル占いの助言を頼りにしながら全力で瞑想を行つて生物としての死に近づいた事でアスムとの対話が可能になった事、その為にマンハッタンカフェが仲介をしてくれた事や直接話す為

に態々自分の身体を貸してくれた事も。それらを聞いて行く京介は信じられないと言いたげな表情でそれを聞き続けた。

「嘘だろ……じゃあ、マジでアスムと……」

「ああ、話した。本当に……夢みたいな時間だったよ」

作業の手を一切止める事もなく、話す表情は何処まで晴れやかだった。京介はあの日、アスムが亡くなつて以来見る事が絶対にはないと思つていた笑みがそこにあつた事に愕然としながらも本当に話したんだという事を漸く受け入れる事が出来た。

「——なんて言つてた」

「幸せだったつてさ。俺がくれた幸せ全部が、だから今度は俺が幸せな所を自分に見せてくれたとさ」

「……あいつらしい言葉、だな……」

思わず涙を流した京介、口が悪く態度も悪い彼だがそれでも決して悪い人間ではない。妹は特に大切に思つていたし、支えようと必死になる位にはシスコンだった。だからこそその言葉が紛れもなく妹の言葉だと分かると本当に涙があふれてしまった。

「俺の幸せって奴がまだ正直わかんないけどさ、あいつがそれを望むならそれを探してみるさ。鍛える以外の時間の使い方、考えないとなく」

「アンタに出来んのかよ鍛錬狂い」

「何それ口癖にでもしたの、一先ずそうだな……休日は募集を募って山に行ってお弁当を食べるっていうのは？」

「悪くないと思うけど……手段は」

「そりゃ走りだよ、勿論山も登る」

「却下だバカ野郎!!」

えつゝ駄目なの？と言葉を漏らす響鬼に別の意味で頭が痛くなってきた京介、いやまあ確かに数年間ずつと今まで鍛える事ばかりして来た響鬼が突然普通の事をしようとしても難しいのは確かだろう。別の意味で面倒な事になって来たかもしれない……。

「ハアツ……少しは鍛錬から切り離せよ、そこはせめて電車で行くとかロープウェイ使うとかあるだろ」

「えゝ山つて自分の脚で登ってこそ楽しいんじゃない」

「いや否定しねえけどよ、この脳筋如何したらいいんだよ」

「それ呼ばわりは酷くね？」

流石に脳筋は心外である。別に何事も力で解決しようなんて思っていない、単純に鍛える事がライフワークのような物であるだけである。

「ハアツ……勝手に自分で解決しやがって、俺が何の為に理事長に話通したと思ってるんだ」

「やっぱり勝手に話してたのか、野暮ったいなあお前は」

「喧しい。あの時のアンタはその位可笑しかったって事だ自覚しろ、先代だって下手すりゃアンタがアスムの所に行くだけだって言ってた位なんだぞ」

「実際はアスムが俺と一緒に居たんだから驚きだよねえ」

笑っているがこちらは本気で心配したのに……まあ兎に角、立ち直ったようである。時間こそかかったが、これでアスムも安らかに眠る事が出来るだろう。

「ンでチーム作りに積極的だって聞いたが、あれマジか？」

「割かし本気で取り組もうと思う程度にはねえ、好い加減トレーナー連中の疲れた顔をスルーするのも悪い気がしてね」

「アンタ一人入った所で変わらねえと思うが」

「共有しているのを見て見ぬふりをしている奴とは印象が違うもんさ」

言っている事は分からないでもないが……それでも響鬼がチームのトレーナーを務めるとするのは良くも悪くも想像出来ない。それ程までにアスムとの関係は完璧すぎた。それが他のウマ娘を率いる……なんともイメージ出来ない。

「そのチームには是非入らせて貰いたいんだな、これが」

突然聞こえてきた声に顔を上げてみると、そこにはクセツ毛あるの赤髪と紫色の瞳のタレ目特徴的で人懐っこい笑みを浮かべたウマ娘が此方を見据えていた。それを見

て京介はあからさまに顔を歪めながら距離を取る。

「ちよつとちよつとその反応は酷いんじゃない、こんな見目麗しいウマ娘を前にして、ンもう失礼しちゃうわん」

マルゼンスキー辺りが使いそうな胸を強調するようなポーズを取りながらも京介に抗議の言葉を飛ばすウマ娘、彼女はソウルセイヴァー。ペーオウルフのライバルでもあり、負けず劣らずの実力を持ちレース中には冷徹な表情と口調になる——のだが、平時は酷く楽天家で三枚目な性格なのが玉に瑕。

「ウマ娘は大抵見目麗しいんだよ、お前なんか下の下だ」

「酷いわっ!!あの日、雨の降る日に私の冷え切った身体を優しく自分の体温で温めてくれた貴方は偽りだったのね!!」

「ほほう?」

「人聞きの悪い事言ってるじゃねえ!!俺のジャケット貸してやっただけじゃねえか!!」
「んもうノリが悪いわね〜ヒビキさんだってそう思わなあくい?」

とよよつ……とワザとらしく泣き崩れるフリをしながらも助けを求めてくる。

「何だ、そういう関係だったら面白いって思ったのに……ちよつとは乗りなさいよ」

「なんでだよ、俺はこいつに会う度にかかわれてんだぞ真つ平ご免だ」

「だって面白いんだも〜ん」

「このくそ女……!!」

と怒りを露わにしようとするのだが、これを相手にそんな事をしても無駄だと思いきりながらも深呼吸をして気持ちを落ち着ける。

「俺はもう行くぞ、お前に構ってる暇はない。やらなきや行けない事があるんでな」
「では一つ私が激励を込めた応援をば……ごほん、京介さんがんばってねえん♡」

自分の魅力の引き出し方を知っているのか、角度、笑顔、手の位置、ポーズなどなどを尽くして最高の笑顔と言葉で京介にエールを送る。普通に魅力的且つ元気が出そうなものなのだが……

「気持ち悪い、地獄に落ちろ」

「ひでえ」

生憎、ぶりっ子大嫌いな京介にそれは通じずに一蹴されてしまい普通に凹むのであった。

第76話

宝塚記念。G1レースの一つのレースであるそれに挑んだスペシャルウィーク、最高のコンディションと状態で挑んだそれは正しく彼女の全てを出し切ったと言わんばかりの物だった。

『スペシャルウィークとグラスワンダー!!最早勝者はこの二人のウマ娘の一騎打ち!!』
今日まで打ち込んできた全てを出し切ると思いながら望んだそれ、そして自分を倒す為だけに集中したかのような途轍もない集中力を見せたグラスワンダー。最早この二人の一騎打ちと言っても過言ではないレースであった。鬼気迫る迫力のグラスワンダーによる徹底的マーク戦法を受けながらも、自分の走りを貫き通す。だがそれだけで勝てるほど甘くはない。最終局面——日本ダービーの時のエルコンドルパサーと同じように真横に付けられる。

「私は、私は——日本一のウマ娘になるんだからあ!!」

このまま抜かれる、誰もがそう思った。誰もがグラスワンダーの勝ちを確信したような瞬間に彼女は底力を発揮した、母と約束した夢を叶えるために、今日までの自分に応える為に、自分と一緒に走ってくれている友人に恥じない走りを見せる為に——何よ

り、ヒビキの特訓に応える為に駆け抜けた。何も考えずにゴールを目指して出し尽くした走り、ゴールを過ぎてもし少しの間走り続けてしまう程度には彼女は集中しきつていた。

「け、結果は……!?!」

息も絶え絶えになりながらもはるか後方でグラスワンダーが荒い呼吸をしているのが見えた、ゴールラインをかなり超えていた。それでも見えた表示には——ハナ差での自分の一着。ギリギリで宝塚記念の勝利をスペシャルウィークは勝ち取った。心からの歓喜を浮き彫りにさせながら、彼女はインタビューでこの勝利を誰に報告したいかと言われて素直に答えた。

「お母ちゃんとトレーナーさん、ヒビキさんです!!」

「ンでこれか……やれやれとつつあんも大変だぜこれから」

拡げた新聞にはデカデカと宝塚記念でのスペシャルウィークの勝利が掲載されている。誰もが魅了される程のデッドヒート、完全に他のウマ娘を突き放してでの一騎打ち、これに心が踊らない奴なんていない訳が無いのだ。その果てに勝利したスペがインタビューで話した事も世間を熱狂させる一石になってしまった。

母やトレーナーに報告したいというのは良く分かる、だが其処に混ざるヒビキの名前

にインタビューは覚えが無かったのだ。そこで一緒にインタビューを受けていた自分がサブトレーナーである事を明かすつも何故この場にいないのかという質問にも応えた。その結果――

『チームスピカのサブトレーナー、ヒビキトレーナーとは?!?』

という見出しが出来てしまった。あそこで下手に嘘を吐く訳にはいかないし確りとした事を言わないと直ぐに世論は敵に回る、だがマスコミはそれを面白おかしく掻き立てた。用務員を兼任するトレーナーとは一体どんな存在なのか、何故この場に来ないのかという質問も来たが、他の仕事が忙しいとしか言いようがない。

「随分と派手に書かれたわね」

「ああ、俺としては下手打ったかなあ……って後悔してるわ」

「あの場での受け答えとしては上々よ。だけど記者の興味を引くには十分過ぎただけよ、非はないわよ。ヒビキ君だって気にしてないって言ってくれてるんでしょ」

「まあそうだけだよ……」

元々トレセンには取材の申し込みが多い、が最近は特に多い。当然話題の用務員トレーナーの記事を作ろうと必死になっているのである。用務員などにトレーナーが出来る訳がない、何故用務員兼任なのかとそれを追求しようとする流れもある。

「とつつあんは理事長にこれを利用して、中央の人手不足を打ち出して人を集めるよう

にすべきって進言したらしいわ。なんか言つて来ても自分が対応するって」

「彼らしいわね……アスムさんの一件が無くなつたと思つたら次はこれ、話題に事欠かないわね」

「全くだ」

そう言いながら珈琲を啜る。ヒビキから貰つて来たスペシャルブレンド、今回はハワイコナを大目にしてみたといつていたが……これはこれで悪くない。だが自分はコスタリカの方が好きだな、と僅かながら苦笑する。

「ほらほらっスペちゃん集中力キレてるよ、グラスちゃんに勝つたからって気を抜かないいー!」

「はっはい〜!」

ターフを駆け抜けていくスペ、宝塚記念を無事に終えて次へと備える為にトレーニングを開始する。宝塚記念のお祝いの直後だというのに彼女のモチベーションは極めて高く積極的にトレーニングに望んでいる。まるで以前のヒビキの鍛錬癖が彼女に移つたかのような感じがする。

「スペ先輩つてば凄い気合……まだ宝塚記念が終わつたばかりなのに」

「もう次のレース見据えてんのか……?」

「知っちゃったって奴ですぬ〜私にも覚えがありまするで候」

「何ですのその口調」

メニューをこなすスペを見つめながらまた何かに影響されたらしいアキラが語り出した。

「鍛錬をする度に自分が更新されているのを自覚しちゃうと簡単にやめられない、しかもあんな大舞台で」

「つまりあれか、ゲームでレベルアップして今まで倒せなかった相手を倒せた時の感動的なあれか？」

「正解ですゴル姉さん。しかも——グラスさんはもつと伸びて猛追してくるライバル、最高過ぎる環境が揃っちゃってます」

納得してしまった。自分の成長をあんな大舞台で実感して、更にそれに負けないと同じように努力するライバルが直ぐ近くに居る。なんて羨ましいまでの環境だろうか、だからこそ鍛錬に熱が入る。今日の自分が昨日の自分を越える為に、そしてそれを一番強く実感出来る場で全力で走りたいと思わせる。アスリートとしては最高の精神状態かもしれない。

「んで、おっちゃんの指導もあるから余計につてか」

「良いと思うよ僕は、スペちゃん楽しそうだし。よしそれなら〜おじさん僕も指導して

よ〜!!」

そう言いながら駆け出して行くテイオー、彼女も彼女で最近ヒビキに言われてやり続けている下半身強化の成果が出始めているのか今まで以上に走りに磨きが掛かってきている。三冠ウマ娘になるための下地も順調に構築出来ている、ならばそれを更にブーストさせるのみとテイオーは駆け寄っていく。

「それなら全員でレースやるかい、宝塚記念制覇のスペシャルウィーク対チームスピカ」
「面白そう!!」

「ちよつと待つてくださいいヒビキさん!?!私一人で皆さん全員とやるんですか!?!」

「勝者っていうのはそういうもんだよ、後ろからどんどん挑戦者が迫ってくるだから張りな〜」

「ヒィ〜!」

次々と位置について行くチームメンバーに軽い悲鳴を上げながらも自分も位置へと付いて行くのを見送りながら、フラッグの用意をしようとした所にスピカが旗を持って現れる。

「私がやりますね」

「ああ、頼むよスピカちゃん」

そして行われるスピカでの模擬レース、何処か軽くじゃれ合いに近く見えるが全員が

真劍になりながらターフを駆ける。